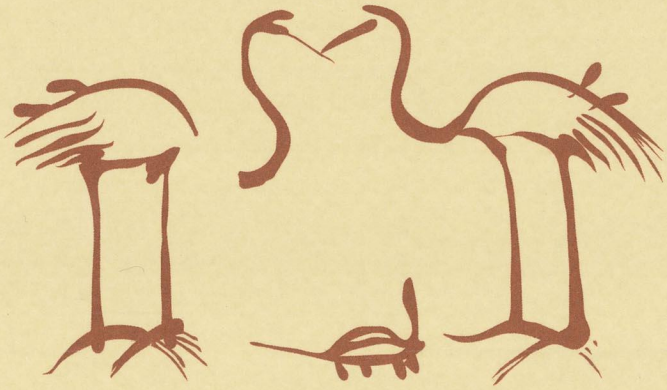
兵庫県文化財調査報告　第311冊

豊岡市

宮内堀脇遺跡 II

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（此隅山城城下遺跡の発掘調査報告）



２００７年３月

兵庫県教育委員会

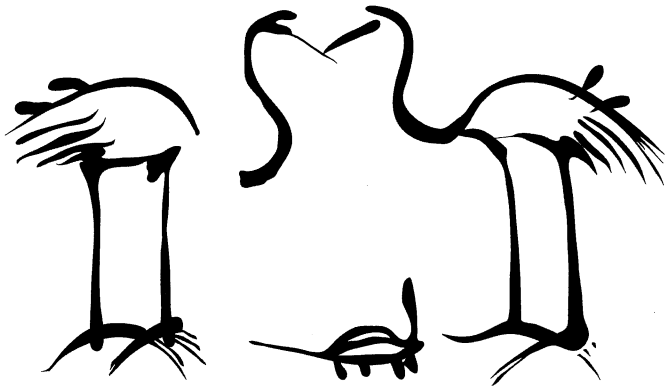
兵庫県文化財調査報告　第311冊

豊岡市

宮内堀脇遺跡 II

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（此隅山城城下遺跡の発掘調査報告）



２００７年３月

兵庫県教育委員会

遺跡および此隅山城遠景（南西から）

遺跡遠景（北から）

平成10年度　Ａ地区　全景（北から）

平成11年度　Ａ地区　ＳＸ０１出土遺物

平成10年度　A地区出土　漆器皿

平成10年度　A地区出土　漆器椀

例　言

1．本書は兵庫県豊岡市出石町宮内に所在する、宮内堀脇遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は一般県道町分久美浜線道路改良事業に伴うものである。兵庫県豊岡土木事務所（当時）の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成７年度から平成11年度まで本発掘調査を実施した。本書ではこのうち平成10年度と平成11年度の発掘調査成果についての報告を行う。

3．遺構実測は調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測、製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。

4．写真撮影は、遺跡と遺構の空中写真を㈱サンヨーに委託し、その他の遺構は調査員が撮影した。遺物の撮影は㈱タニグチフォトと㈱アコードに委託した。

5．木製品と金属器の保存処理は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

6．本書の第１図「遺跡の位置」は、国土地理院発行の200,000分の１地勢図（「鳥取」）を使用し、第２図「周辺の遺跡」は豊岡市発行の10,000分の１地形図を使用した。

7．本書で使用した標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。

8．本書の執筆は本文目次に記したとおり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の中川 渉、深江英憲、鈴木敬二が分担し、本書の編集は尾鷲都美子の補助を得て鈴木敬二が行った。

9．木製品の樹種同定については京都大学の伊東隆夫名誉教授、漆器の分析についてはくらしき作陽大学の北野信彦助教授にそれぞれ依頼し玉稿を賜った。

10．発掘調査と整理作業で得られた遺物、写真、実測図などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

11．なお発掘調査および報告書の作成にあたっては、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所（旧兵庫県豊岡土木事務所）ならびに豊岡市出石支所教育委員会分室（旧出石町教育委員会）から多大なる御協力を賜った。また特に下記の方からご指導ご助言を頂いた。記して感謝の意を表する。

青木哲哉（立命館大学）、小寺　誠（豊岡市出石支所教育委員会分室）、小林基伸（大手前大学）

目　次

第１章　調査の経過 ……（鈴木敬二）　1
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査体制

第２章　遺跡をとりまく環境 ……（鈴木）　5

第３章　発掘調査の成果
　第１節　平成10年度の調査
　　1　概要 ……（鈴木）　9
　　2　遺構 ……（鈴木）　9
　　3　遺物
　　(1) 土器・陶磁器 ……（鈴木）　12
　　(2) 石製品 ……（鈴木）　18
　　(3) 木製品 ……（鈴木）　18
　　(4) 金属器 ……（鈴木）　21
　第２節　平成11年度の調査
　　1　概要 ……（深江英憲）　22
　　2　遺構 ……（深江）　24
　　3　遺物
　　(1) 土器・陶磁器 ……（鈴木）　28
　　(2) 石製品 ……（中川 渉）　34
　　(3) 木製品 ……（深江）　35
　　(4) 金属器 ……（中川）　43

第４章　分析・鑑定
　第１節　宮内堀脇遺跡Ⅱから出土した木製品の樹種 ……（伊東隆夫　*1）　54
　第２節　宮内堀脇遺跡出土漆器の材質・技法に関する調査 ……（北野信彦　*2）　61

第５章　まとめ
　第１節　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土の土師器皿について ……（鈴木）　68
　第２節　土器・陶磁器と遺構の年代について ……（鈴木）　73
　第３節　まとめ ……（中川）　78

*1　京都大学名誉教授
*2　くらしき作陽大学助教授

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 3
第２図　周辺の遺跡 …… 8
第３図　平成10年度　Ｂ地区　全体図および土層図 …… 11
第４図　SX01出土土師器皿の法量分布 …… 29
第５図　土師器皿全体の法量分布 …… 29
第６図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品の顕微鏡写真（１） …… 59
第７図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品の顕微鏡写真（２） …… 60
第８図　代表的な樹種同定写真 …… 62
第９図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法 …… 64
第10図　漆塗り構造の分類 …… 64
第11図　赤色系漆の断面観察写真 …… 65
第12図　蛍光Ｘ線分析結果 …… 66
第13図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土土師器皿の分類図 …… 68
第14図　土師器皿の型式ごとの法量分布 …… 69
第15図　土師器皿の型式ごとのスス付着状況 …… 70
第16図　土師器皿の法量ごとのスス付着状況 …… 70
第17図　スス付着状況〔SX01出土遺物(163)〕 …… 71
第18図　スス付着状況〔包含層出土遺物(064)〕 …… 71
第19図　宮内堀脇遺跡Ⅱ土器・陶磁器の共伴関係 …… 74

表　目次

表１　土器・陶磁器他一覧表 …… 44
表２　木製品一覧表 …… 48
表３　金属器一覧表 …… 52
表４　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品　樹種同定一覧 …… 56
表５　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品　器種別樹種一覧 …… 58
表６　漆器の分析結果一覧表 …… 63
表７　ろくろ挽き物の用材分類表 …… 67

図版目次

図版１　調査区配置図

図版２　確認調査トレンチ配置図

【平成10年度の調査】

図版３　Ａ地区全体図

図版４　Ａ地区西壁土層図

図版５　Ａ地区遺構配置図

図版６　Ａ地区　遺構土層図

図版７　Ａ地区　遺構出土土器・陶磁器

図版８　Ａ地区　包含層出土土器・陶磁器

図版９　Ａ地区　包含層出土土器・陶磁器

　　Ｂ地区　出土土器

図版10　Ａ地区　遺構出土木製品

図版11　Ａ地区　包含層出土木製品

図版12　Ａ地区　下層出土木製品

図版13　Ａ地区　下層出土木製品

図版14　Ａ地区　下層出土木製品

図版15　Ａ地区　下層出土木製品

図版16　Ａ地区　下層出土木製品

　　Ｂ地区　出土木製品

【平成11年度の調査】

図版17　Ａ，Ｇ地区　全体図

図版18　Ａ地区西壁土層図

図版19　Ｇ地区東壁土層図

図版20　Ｂ地区全体図　西壁土層図

図版21　Ｃ地区全体図　西壁土層図

図版22　Ｄ地区全体図　西壁土層図

　　Ｅ地区西壁土層図

図版23　Ｆ地区全体図　西壁土層図

図版24　土坑　平面図・土層断面図

図版25　土坑　平面図・土層断面図

図版26　溝　土層断面図（Ａ，Ｇ地区）

図版27　溝　土層断面図（Ｂ，Ｆ地区）

図版28　Ａ，Ｇ地区出土　土器・陶磁器

図版29　Ａ地区　ＳＸ０１出土　土器・石製品

図版30　Ｂ～Ｆ地区出土　土器･陶磁器･石製品

図版31　Ａ，Ｇ地区　遺構出土木製品

図版32　Ａ，Ｇ地区　遺構出土木製品

図版33　Ａ，Ｇ地区　遺構、包含層出土木製品

図版34　Ａ，Ｇ地区　包含層出土木製品

図版35　Ｂ地区　遺構出土木製品

図版36　Ｂ地区　遺構出土木製品

図版37　Ｂ地区　遺構出土木製品

図版38　Ｂ地区　遺構出土木製品

図版39　Ｂ地区　包含層出土木製品

図版40　Ｂ地区　下層出土木製品

図版41　Ｃ～Ｆ地区　出土木製品

【平成10、11年度の調査】

図版42　金属器

巻頭写真図版

巻頭写真図版１
　遺跡および此隅山城遠景（南西から）
　遺跡遠景（北から）
巻頭写真図版２
　平成10年度　Ａ地区　全景（北から）
　平成11年度　Ａ地区　ＳＸ０１出土遺物
巻頭写真図版３
　平成10年度　Ａ地区出土　漆器皿
　平成10年度　Ａ地区出土　漆器椀

カラー写真図版

カラー写真図版１
　平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器
　平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器
カラー写真図版２
　平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器（外面）
　平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器（内面）
カラー写真図版３
　平成10年度　Ａ地区出土　磁器（青磁、白磁）
カラー写真図版４
　平成10年度　Ａ地区出土　漆器
　平成10年度　Ａ地区出土　金属器
カラー写真図版５
　平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（外面）
　平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（内面）
カラー写真図版６
　平成11年度　Ａ、Ｇ地区出土　陶磁器
　平成11年度　Ｂ、Ｄ地区出土　陶磁器
カラー写真図版７
　平成11年度　Ｇ地区出土　染付磁器（外面）
　平成11年度　Ｇ地区出土　染付磁器（内面）
カラー写真図版８
　平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（外面）
　平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（内面）
カラー写真図版９
　平成11年度　Ａ地区出土　漆器椀
カラー写真図版10
　平成11年度　Ｂ地区出土　木製箱

写真図版

【平成10年度の調査】
写真図版１
　Ａ地区全景（南から）
　Ａ地区全景（北から）
　Ａ地区 SD206（北から）
写真図版２
　Ａ地区断ち割り部全景（北から）
　Ａ地区断ち割り状況（北から）
　Ｂ地区全景（南から）
写真図版３
Ａ地区 SD206杭列検出状況（西から）
Ａ地区 SD206断面（西から）
Ａ地区 SD202断面（西から）
写真図版４
　Ａ地区 P201断面（北から）
　Ａ地区 P202断面（北から）
　Ａ地区 P206断面（南から）
　Ａ地区 P205断面（南から）

A地区 P204断面（北から）
A地区 P207断面（南から）
写真図版5
A地区 SD201木製品および銅製品出土状況（西から）
A地区 SD204鎌出土状況（南から）
A地区 SD204曲物出土状況（西から）
写真図版6
A地区　溝、旧河道出土　土器・陶磁器
写真図版7
A地区　旧河道、包含層出土　土器・陶磁器
写真図版8
A地区　包含層出土　土器・陶磁器
写真図版9
A地区　包含層出土　土器・陶磁器
写真図版10
A，B地区　包含層出土　土器・石製品
写真図版11
A地区　溝出土　木製品
写真図版12
A地区　溝出土　木製品
写真図版13
A地区　包含層出土　木製品
写真図版14
A地区　包含層出土　木製品
写真図版15
A地区　下層出土　木製品
写真図版16
A地区　下層出土　木製品
写真図版17
A地区　下層出土　木製品
写真図版18
A地区　下層出土　木製品
B地区　出土木製品
【平成11年度の調査】
写真図版19
A地区　中世面全景（南から）
A地区　SD06,07,08（南西から）
A地区　SD07（西から）
A地区　SX01検出状況（東から）
A地区　SD07断面（東から）
A地区　SD10断面（東から）
写真図版20
G地区　礎石建物検出状況（北から）
G地区　柱材断割状況①
G地区　柱材断割状況②
G地区　中世面全景（南から）
G地区　SD07遺物出土状況
G地区　SD07遺物出土状況（羽子板）
A地区、G地区　下層全景（南から）
写真図版21
B地区　中世面全景（南から）
B地区　中世面全景（北から）
B地区　SK01遺物出土状況（西から）
B地区　SD01（西から）
B地区　SD01遺物出土状況
B地区　包含層中　曲物出土状況（西から）
写真図版22
B地区　下層全景（南から）
B地区　板材検出状況（南東から）
C地区　中世面全景（南から）
C地区　SK08断面（東から）
写真図版23
C地区　下層全景（南から）
C地区　SK08付近　壁面断面状況（東から）
D地区　全景（北から）
D地区　南側断割断面状況（東から）
写真図版24
E地区全景（北から）
F地区全景（北から）
F地区　SK13断面（西から）
写真図版25
A，G地区出土　土器・陶磁器
写真図版26
A，G地区出土　土器・陶磁器

写真図版27
　Ａ地区　SX01出土　土師器皿
写真図版28
　Ａ地区　SX01出土　石製品
写真図版29
　Ｂ地区出土　土器・陶磁器
写真図版30
　B,C,E,F地区出土　土器・陶磁器・石製品
写真図版31
　Ａ，Ｇ地区出土　木製品
写真図版32
　Ａ，Ｇ地区出土　木製品
写真図版33
　Ａ，Ｇ地区出土　木製品
写真図版34
　Ａ，Ｇ地区出土　木製品
写真図版35
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版36
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版37
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版38
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版39
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版40
　Ｂ地区出土　木製品
写真図版41
　Ａ，Ｂ地区出土　木製品
写真図版42
　Ｃ，Ｅ，Ｆ地区出土　木製品
写真図版43
　木製品（漆器椀、長方形曲物、付け木、箸）
写真図版44
　木製品（漆器椀、竪杵、曲物　他）
【平成10,11年度の調査】
写真図版45
　金属器
写真図版46
　金属器

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

宮内堀脇遺跡は、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所が計画する（一）町分久美浜線の工事着手に先行して発掘調査を実施した。町分久美浜線は出石町北部の口小野、袴狭集落から出石市街地へ向かう生活道路であり通学路としても利用されているが、宮内地区については人家が軒を並べており幅員が狭く、自動車などのすれ違いが困難な箇所がある。また田多地地区への電機メーカーの工場の進出、口小野地区の神美トンネルの開通に伴いより交通量の増大が見込まれることから、幅員の確保や自転車歩行者道の設置など道路の改良が望まれていた。近隣地域では、国土交通省豊岡工事事務所が計画する小野川放水路事業が実施されており、放水路事業の計画に併せ全長１㎞のバイパス方式による当該道路の改良が計画された。

平成６年12月12日から14日、兵庫県教育委員会は兵庫県豊岡土木事務所（当時）の依頼を受け、計画路線上の埋蔵文化財確認調査を行った。確認調査では21箇所の試掘トレンチを掘削し、遺構、遺物の有無の確認を行った。その結果、出石神社と鳥居橋を結ぶ町道一宮線より北側で中世遺跡（宮内堀脇遺跡）の遺構、遺物を確認した。その結果を受け、平成７年度から平成11年度にかけて兵庫県教育委員会は兵庫県豊岡土木事務所より依頼を受け、宮内堀脇遺跡の本発掘調査を実施した。この埋蔵文化財調査のうち、この報告書で報告するのは平成10年度および平成11年度に実施した発掘調査成果についてである。平成７年度から平成９年度にかけての発掘調査成果については別途報告書を作成する。（図版１）

出土遺物などの整理作業は、発掘調査時に監督員詰所における土器の洗浄作業から開始した。平成13年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において本格的な整理作業を開始し、平成18年度の報告書刊行に至った。

第２節　調査体制

１．確認調査

遺構および遺物の有無を確認する確認調査を、平成６年度に下記の体制により実施した。

遺跡調査番号：940274

調査期間：平成６年12月12日～12月14日

調査第３班　主　　任：山田 清朝

事務職員：高井 治巳

研 修 員：三原 慎吾

２．本発掘調査

平成６年度に実施した確認調査により遺構および遺物の所在が確認された範囲については、平成７年度から本発掘調査を実施した。本報告書は平成10,11年度の調査結果についての報告書であるが、平成10,11年度については以下の体制で本発掘調査を実施した。

(1)　平成10年度

遺跡調査番号：980165

調査期間：平成10年10月28日～平成11年３月２日

調査第３班　技術職員：鈴木 敬二

技術職員：牛谷 好伸（臨時的任用）

(2)　平成11年度

遺跡調査番号：990219

調査期間：平成11年10月６日～平成11年12月22日

調査第３班　主　　査：中川　 渉

技術職員：深江 英憲

３．整理作業

兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所からの依頼に基づき、平成13～18年度にわたり整理作業を行った。平成10年度の調査成果については鈴木敬二、平成11年度分は中川渉、深江英憲が担当し、担当者の指示の下、非常勤嘱託員が作業を行った。なお整理作業を担当した主な非常勤嘱託員は以下のとおりである。

尾鷲 都美子、柏原 美音、津田 友子、喜多山好子、眞子ふさ恵、早川 亜紀子、中田 明美、前田 千栄子、小寺 恵美子、岡井 とし子、前田 恭子

整理作業工程は以下のとおりである。

平成13年度：水洗い、ネーミング、接合・補強

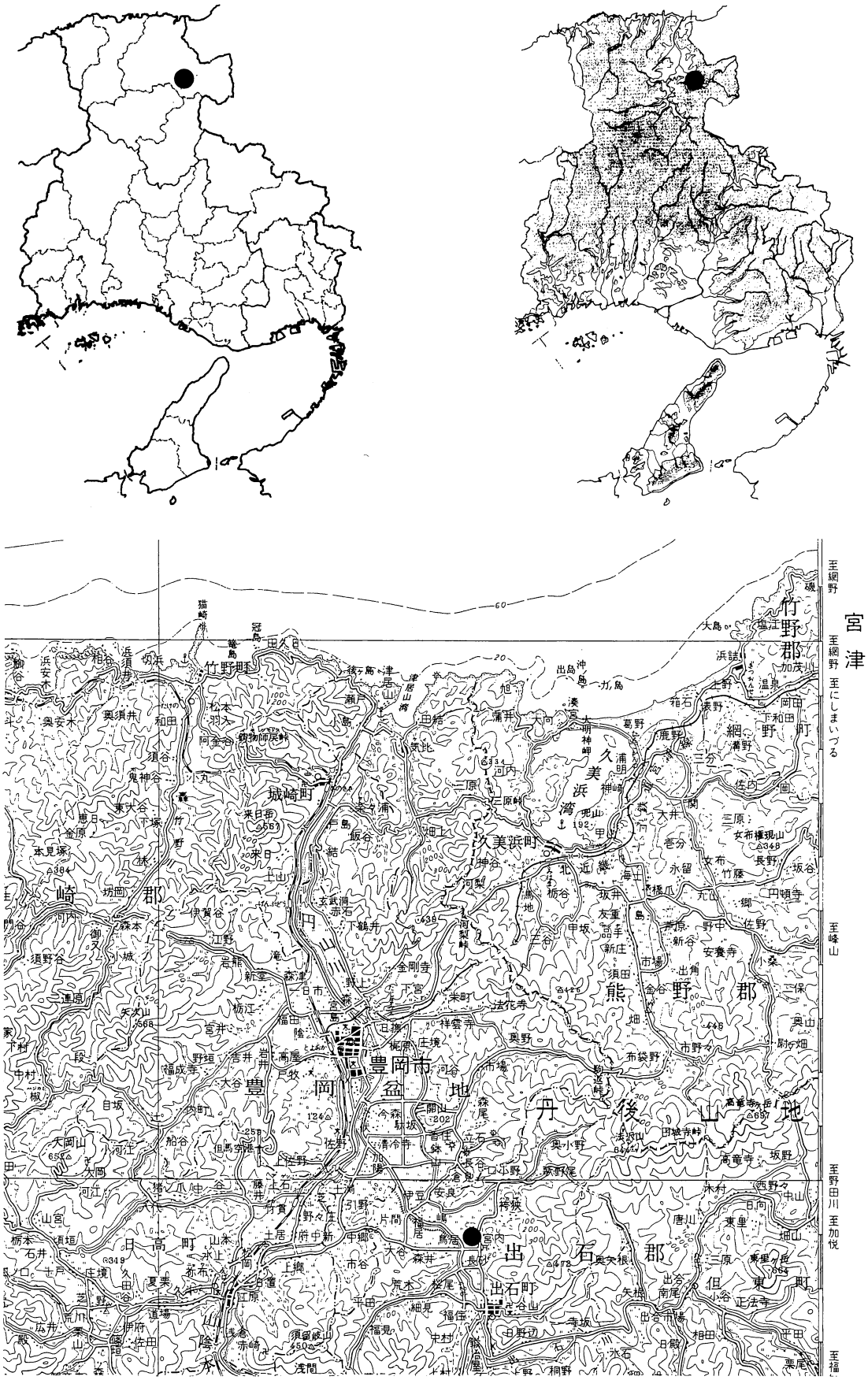
平成14年度：実測

平成15年度：復元、分析鑑定

平成16年度：木製品保存処理

平成17年度：実測、写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、金属器保存処理

平成18年度：レイアウト、報告書印刷


宮津
竹野郡
網野町
久美浜町
城崎町
豊岡市
出石町
但東町
日高町
豊岡盆地
丹後山地
至網野
至にしまいづる
至峰山
至野田川
至加悦
至福

第１図　遺跡の位置

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

宮内堀脇遺跡は兵庫県の北東部、但馬地方の豊岡市出石町宮内に所在する。豊岡市は平成17年４月１日、兵庫県北東部に位置する１市５町（出石町、豊岡市、但東町、城崎町、竹野町、日高町）が合併して発足した。北は日本海、東は京都府京丹後市に接し、中央部を円山川が貫流する。調査地は合併前の行政区分では、兵庫県出石郡出石町宮内に相当する。出石町は円山川支流である出石川流域に発展した町で、その市街地は出石城の城下町として栄え、現在も小京都の趣を持つことから多くの観光客を集めている。

宮内堀脇遺跡は出石の市街地からは約2.5km北に所在する。円山川河口の海岸線から約20kmさかのぼった地域にもかかわらず、標高約５ｍと低く、周囲には低湿な平野が広がっている。遺跡のすぐ北側を出石川の支流である入佐川が東から西方向に流れている。出石川と入佐川はつい近年までしばしば洪水を起こし、それにより運ばれた粘土、シルト、砂により周辺は肥沃な平野が形成され、良好な稲作地帯と成っている。入佐川流域およびその北側を西に流れる２本の小河川、袴狭川と小野川（六方川）について国土交通省による河川改修工事が実施された。これに伴う事前の埋蔵文化財調査により、奈良・平安時代を中心とする時期の官衙関連遺跡（袴狭遺跡群）が発見され注目を集めた。

遺跡の立地する平野の周囲には、風化の進行した花崗岩から成り立つ丘陵が連なり、この尾根上や斜面に多くの古墳群、横穴が築かれている。この丘陵を形成する花崗岩は現代では建材（真砂土）として需要があり、盛んに土取りが行われている。遺跡の北東側には、このような花崗岩により形成された標高約140ｍの子盗山（此隅山）という名の丘陵が所在し、ここには室町から戦国期の但馬守護、山名氏の本拠地である此隅山城が置かれた。

第２節　歴史的環境

１．旧石器時代から縄文時代

旧石器時代については、旧出石町域では今のところこの時期の明瞭な遺構や遺物群に恵まれていない。縄文時代の遺跡としては宮内堀脇遺跡から約2.5km北にある長谷貝塚や中谷貝塚が知られている。中谷貝塚は現在でも堆積状況が確認できる貴重な遺跡である。

２．弥生時代

出石町近辺では弥生時代を通じて集落の存在は確認されておらずその概要は不明であるが、各所で土器の出土が確認されていることが弥生集落の存在を示唆している。

出石神社のほど近くに所在する宮内黒田遺跡では弥生時代前期の甕、壺などの土器が出土している。弥生時代中期では、出石神社遺跡で土器、石斧、石槍、上坂遺跡で石斧が出土している。小野小学校裏山では底部に穿孔のある把手付壺が出土しており近くに墳墓が存在する可能性がある。また入佐川遺跡では完形の壺が出土しているが、遺構は検出されていない。袴狭遺跡では土坑などが検出されている。弥生時代後期では、出石神社遺跡、宮内遺跡、鳥居遺跡で遺物が出土している。出石神社遺跡は弥生時

代中期から古墳時代初頭および奈良・平安時代の複合遺跡で、中心となるのは弥生時代後期である。旧河道内で土器と木器が堆積しており、木器では特に梯子などの建築部材が目立っている。

弥生時代の墳墓には御屋敷遺跡、田多地引谷墳墓群、入佐山墳墓群などがある。此隅山（子盗山）の南に派生する丘陵の一つには弥生時代の墳墓である御屋敷遺跡が存在する。1985年に発掘調査が行われ、弥生時代後期末の木棺墓群が尾根上で複数基検出されている。田多地引谷墳墓群からは五銖銭が、入佐山墳墓群からは多量のガラス玉が副葬されており注目される。またカヤガ谷墳墓群の南側斜面では、弥生時代の木棺直葬墓が確認されている。

3．古墳時代

旧豊岡市東部から旧出石町北部にかけて、円山川の支流である小野川流域を中心とした地域は、1957年以前は出石郡神美村という行政単位を形成しており、地域的なまとまりを見せていた。宮内堀脇遺跡も旧神美村の南端に含まれていた。神美地域を代表する古墳は、宮内堀脇遺跡から約３km北に位置する森尾古墳である。尾根上に位置する方墳で３基の竪穴式石室が築かれ、「□始元年」の紀年銘を持つ鏡が出土しており、４世紀前半の古墳と考えられる。近年の分析によって、中国の新王朝期の方格規矩四神鏡と確認された。他にも三角縁四神四獣鏡などが出土している。

森尾古墳以外にも、神美地域には多数の墳墓・古墳が存在するが、その多くは墳丘を築かず丘陵上を階段状に造成し、石室を設けることなく複数の木棺・石棺を直接埋納している。旧出石町域の北端では、小野川右岸に下安良城山古墳、安良古墳群などの古墳群が存在する。下安良城山古墳では３基の組み合わせ式箱形木棺を検出、変形四獣鏡などが出土した。さらに小野川上流域では、田多地古墳群、田多地小谷古墳群、田多地引谷墳墓群、カヤガ谷古墳群、カヤガ谷墳墓群、カヤガ谷横穴、篠谷２号墳などが存在する。田多地古墳群は５世紀前半を中心とする４基の多体埋葬する古墳から成り、カヤガ谷古墳群は横穴式石室と木棺直葬墳が混在する。カヤガ谷墳墓群は尾根を３段にカットした平坦面に、箱形石棺または木棺を５～11基埋葬している。カヤガ谷横穴は小野川に面して開口しており装飾太刀などが出土している。篠谷２号墳は全長約６ｍの横穴式石室を持つ。

口小野集落をはさんで対岸に迫る丘陵上には岩谷古墳群、新宮谷古墳群などが知られるほか、小野小学校の造成の際にも古墳時代の遺物が出土しており、周辺に古墳の存在が推定される。此隅山城から南に伸びる丘陵の付け根には、下坂横穴群が存在する。７世紀前葉ごろから築造を開始された横穴墓である。此隅山城の西に伸びる尾根の北側斜面には大谷墳墓群が、尾根筋から南側斜面には坪井遺跡が存在する。いずれも５世紀の墳墓である。

出石市街地の南側には、砂鉄や「君宜高官」銘のある四獣鏡などが埋納された入佐山３号墳や、茶臼山古墳、鶏塚古墳など埴輪を有する古墳があり、また出石の中心部では長持形石棺も見つかっており、古墳時代における出石川流域の勢力分布の中心をこの付近に求めるのが妥当と考えられる。

4．古代

宮内堀脇遺跡が所在する地域は、律令期の郡郷のうち出石郡出石郷に所在する。出石郷内には但馬一宮であり渡来神であるアメノヒボコを祭神とする出石神社が所在する。また官衙関連遺跡として大規模な調査が行われた袴狭遺跡群（袴狭遺跡、砂入遺跡、入佐川遺跡等）も近隣に位置するなど、古代には但馬の中でも中心的な位置を占めた地域である。

袴狭遺跡群は、旧出石町北部の平野に位置し、北側から順に砂入遺跡、荒木遺跡、袴狭遺跡、入佐川遺跡などより成る。袴狭遺跡東端の内田地区および荒木遺跡において官衙と考えられる７世紀末から９世紀に至る建物遺構が発見され、木簡や墨書土器などの文字資料、石帯や帯金具など官人が着用する装身具、人形や斎串などの木製祭祀具が出土したことなどから何らかの官衙的な施設が存在すると判明した。さらに内田地区の建物遺構は木簡、墨書土器などの文字資料から、出石郡衙関連施設であると考えられている。また但馬国府は「日本後紀」には延暦23年（804）に気多郡高田郷に遷すとあることから、それ以前を第１次国府、遷された以降を第２次国府とする考え方もある。日高町では第２次国府が確認されているが、第１次国府はまだ確定しておらず、袴狭遺跡群もその候補の一つとする説もある。

５．中世

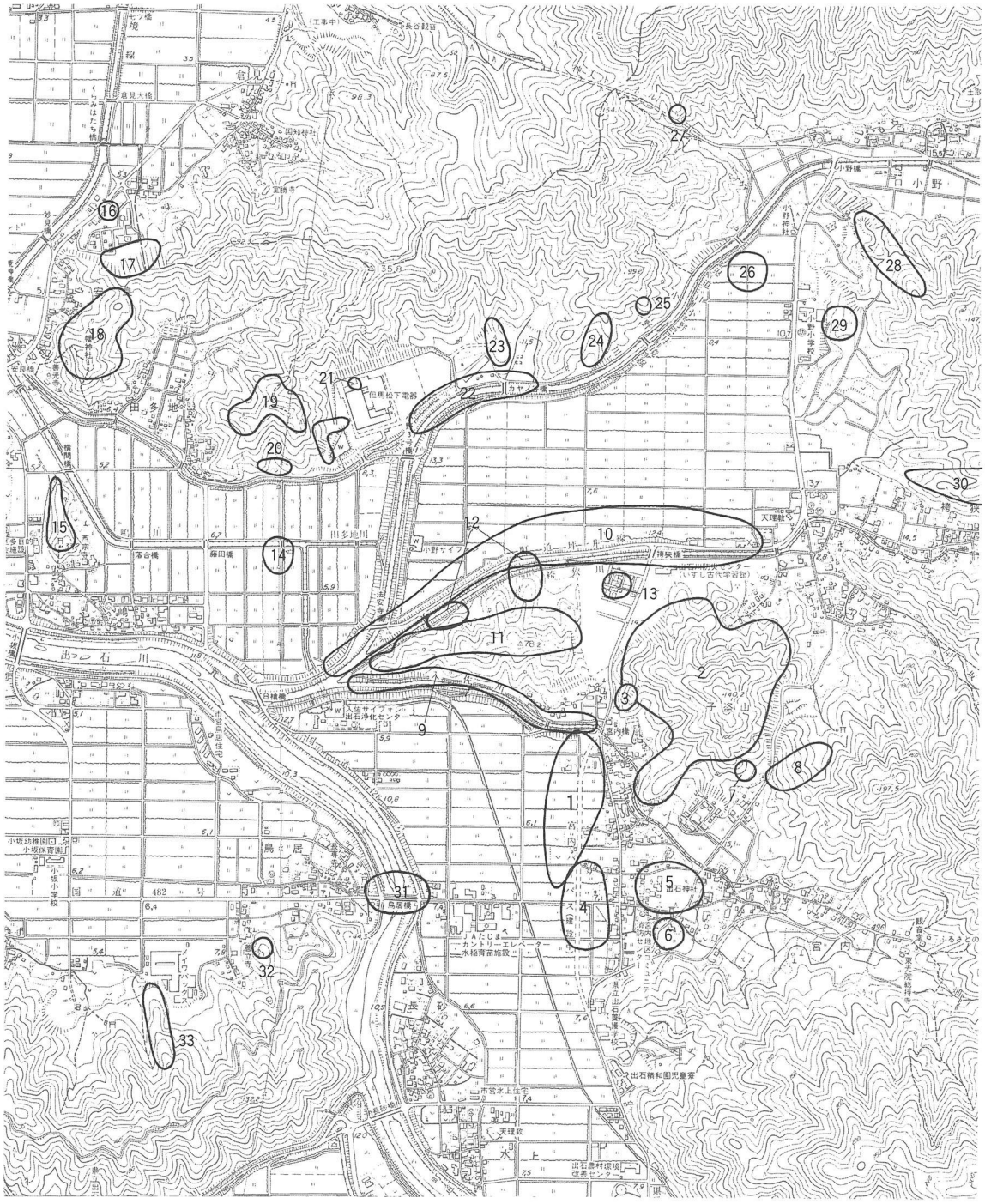
宮内堀脇遺跡の北東に位置する子盗山（此隅山）には、中世の山城である此隅山城が置かれた。城は、出石の町の南側に築かれた有子山城跡とともに「山名氏城跡」として、平成８年11月に国史跡に指定された。史跡に指定された範囲は県道町分久美浜線より東側の地域であるが、「出石有子山城・此隅山城の保存を進める会」による縄張り調査では、県道より西側の尾根にも曲輪が広がると報告している。

此隅山城は室町幕府において四職家の一つとして隆盛を極めた山名氏が築いた城で、標高約140ｍの山頂に主郭を設け、これを中心に四方に伸びる尾根上に多数の曲輪が残っており、山頂から広がる全ての尾根に曲輪を設ける「放射状連郭式」と呼ばれる曲輪の配置を採っている。14世紀後半、山名時義の但馬守護時代に築城されたと伝えられ、室町から戦国期を通して山名氏の本拠地であった。永禄12年（1569）羽柴秀吉の但馬侵攻よって落城し、天正２年（1574）、山名祐豊が、落城した此隅山城に変わり有子山城を築城。その有子山城も天正８年（1580）の信長軍による第２次但馬侵攻でも落城したと伝えられる。

此隅山城の西側山麓には「御屋敷」「宗鏡寺」などの字名が残ることから、山城の麓に城下の遺構が存在した可能性が高いと考えられていた。遺跡の北隣を東西方向に流れる入佐川改修に伴う埋蔵文化財調査（入佐川遺跡）を平成７年度に兵庫県教育委員会が実施しているが、その結果、此隅山城に近い箇所で、城下の整地層および堀と土塁を検出した。堀と土塁は南北方向に築かれ、その内側に真砂土をベースとする整地土を敷き延べて整地している。実質的に宮内堀脇遺跡の最初の発掘調査である。

同じく平成７年度から平成９年度、その南側に隣接した箇所を県道町分久美浜線のバイパス工事に伴い、宮内堀脇遺跡の埋蔵文化財調査を実施し、15世紀後半から17世紀初頭にかけての武家屋敷の遺構を検出した。入佐川遺跡の調査時と同様、堀と土塁により区画され真砂土によって整地された敷地に武家屋敷は建てられていた。出土遺物は中国製磁器、越前焼などの国産陶器、兜の鍬形台、真鍮の灰匙、鉄砲玉、将棋の駒などが豊富に出土している。火災によって焼けていた整地層から出土した永禄12年の紀年銘木簡は、此隅山落城を物語る資料としても貴重である。なお平成７年度から平成９年度の埋蔵文化財調査は別途報告書を作成している。（平成20年度刊行予定）

今回の報告は武家屋敷の遺構が見つかった調査区の、さらに南隣の調査区で行った埋蔵文化財調査の報告を行うものである。主な遺構は何らかの区画溝（堀）を検出している。遺物は中国産の磁器、国産の陶器、土師器皿が出土しているほか、木製の日常生活用具も多く出土している。



1．宮内堀脇遺跡　2．此隅山城跡　3．御屋敷遺跡　4．宮内黒田遺跡　5．出石神社
6．宮内遺跡　7．上坂遺跡　8．上坂古墳群　9．入佐川遺跡　10．袴狭遺跡
11．坪井遺跡　12．大谷墳墓群　13．下坂横穴群　14．嶋遺跡　15．虫生山遺跡
16．下安良城山古墳　17．安良古墳群　18．田多地古墳群　19．田多地小谷古墳群　20．田多地小谷遺跡
21．田多地引谷墳墓群　22．砂入遺跡　23．カヤガ谷古墳群　24．カヤガ谷墳墓群　25．カヤガ谷横穴
26．荒木遺跡　27．篠谷２号墳　28．岩谷古墳群　29．小野小学校裏山遺跡　30．新宮谷古墳群
31．鳥居遺跡　32．東谷遺跡　33．小坂古墳群

第２図　周辺の遺跡

第３章　発掘調査の成果

第１節　平成10年度の調査

１．概要

(1)　Ａ地区

Ａ地区においては人工的に整地されたと考えられる層を一層確認した。整地はシルトの地盤の上に細かな砂礫を薄く積んだものである。整地に用いられた砂礫は、北側の調査区（平成７～９年度調査実施）においては黄褐色を呈しており、近隣の丘陵を形成する花崗岩が起源のものと推測される。今回の調査区においては前年度までに検出されたものほど明瞭な黄褐色の砂礫は認められず、砂礫の混じったシルト層として何とか検出し得た程度である。包含層内で出土した陶磁器などの年代から、整地が行われたのは16世紀後半頃と考えられる。この面では遺構は溝、ピットの他、調査区の東端を南北方向に走る旧河道を検出した。また、側溝掘削時、遺構面の下層において加工痕のある板材を検出したため、遺構面の調査終了後にさらに下層の掘削を行い、土器、木製品を中心とした遺物の取り上げに努めた。

(2)　Ｂ地区

Ｂ地区は調査区の中央を南北方向に水道管が埋設されていたため、全面を掘削することができず、水道管を避けて東西両側を掘削したに留まったが、Ａ地区と同様の砂混じりシルトの整地層を確認した。

整地土検出時に瓦質土器火鉢および擂鉢、備前焼甕、木製下駄、曲物などが出土しており、Ａ地区と同様整地層の年代は16世紀後半頃と考えられる。

２．遺構

(1) Ａ地区

①溝

SD201

調査区の中央部を南北方向に直線的に伸びる溝である。幅約1.5m、深さ30cm以内の平底の溝である。埋土は主としてシルトで、底に植物遺体、板材、木製品を多量に含むシルトが堆積している。このような層は、溝への廃棄物の投棄、流入した痕跡と考えられる。17世紀後半の肥前系と考えられる輪花の青磁皿が出土しており、他の遺構がより若干時期が新しくなる可能性がある。

SD202

調査区の南側部分を東西方向に直線的に伸びる溝である。幅は最大約1.8m、最小0.2mで、深さは約30cmの丸底の溝である。埋土は砂を含んだシルトが約７層にわたって堆積し、表層、中間と底に植物遺体を含んだシルト層が３層存在する。出土遺物は土器類では土師器皿と染付碗、木製品では漆器椀、漆器皿、長方形曲物、桶、箸などがある。

SD203

調査区の南側、西端部分を東西方向に伸びる溝である。幅約30cm、深さ約10cmで、砂混じりシルトが

堆積している。

SD204

調査区中央部を東西方向に伸びる溝である。最大幅約1.2m、深さ約20cmで、砂混じりシルトが堆積し、底部に植物遺体を含むシルト層が堆積している。出土遺物は土器類では土師器皿と染付碗、木製品では下駄、楕円形曲物などがある。

SD205

調査区の南側を東西方向に伸びる溝で、最大幅0.8m、深さ約30cmの溝である。溝の南側の肩付近で、直径約５cm の丸杭による杭列を検出している。出土遺物は土師器皿、銅銭（祥符元寶）がある。

SD206

調査区の中央部を東西方向に伸びる溝で、最大幅約1.5m、深さ約90cmである。埋土は主として砂混じりのシルトであるが、３層程度にわたり植物遺体や木片を含む層が存在することから、常に１m弱の深さを維持していたのではなく、埋没しながら３段階程度の底面を形成していた可能性がある。最上層付近で、直径約５cmの丸杭による杭列を検出している。最も新しい時期の床面に伴うものと考えられる。出土遺物は土器類では土師器皿と建窯産と考えられる天目、染付碗、白磁碗、越前焼擂鉢、木製品では下駄、漆器椀、曲物、長方形曲物、桶やその他の部材などがある。

SD208

SD202の南に接するように検出した溝で、幅約0.9m、深さ約15cmである。埋土は主に粗砂で、２層にわたり植物遺体層を検出した。染付碗が出土している。

②旧河道

調査区東端を南北方向に伸びる河道である。肩の部分のみを検出し、底は調査区外に位置するため確認していない。表層から約１m黄褐色の粗砂が堆積し、下層は砂混じりシルトが堆積している。出土遺物は土師器皿と、染付小杯、染付碗、白磁皿、青磁皿、越前焼擂鉢、備前焼壺、瓦質土器擂鉢、瓦質土器火鉢、木製下駄などがある。

③ピット

P.201

SD206とSD204の中間付近に位置する。直径約25cm、深さ約45cmの柱穴で、内部に直径約12cmの柱材を検出した。

P.202

SD206とSD204の中間付近に位置する。直径約25cm、深さ約55cmの柱穴で、柱痕は確認されなかったが、柱の沈下防止用と考えられる板状の石を柱穴の底で確認した。青磁皿が出土している。

P.204

SD206とSD204の中間付近に位置する。直径約25cm、深さ約60cmの柱穴で、柱痕を確認した。

P.205

SD204の北側で検出した直径約35cm、深さ約70cmの柱穴で、柱痕を確認した。

P.206

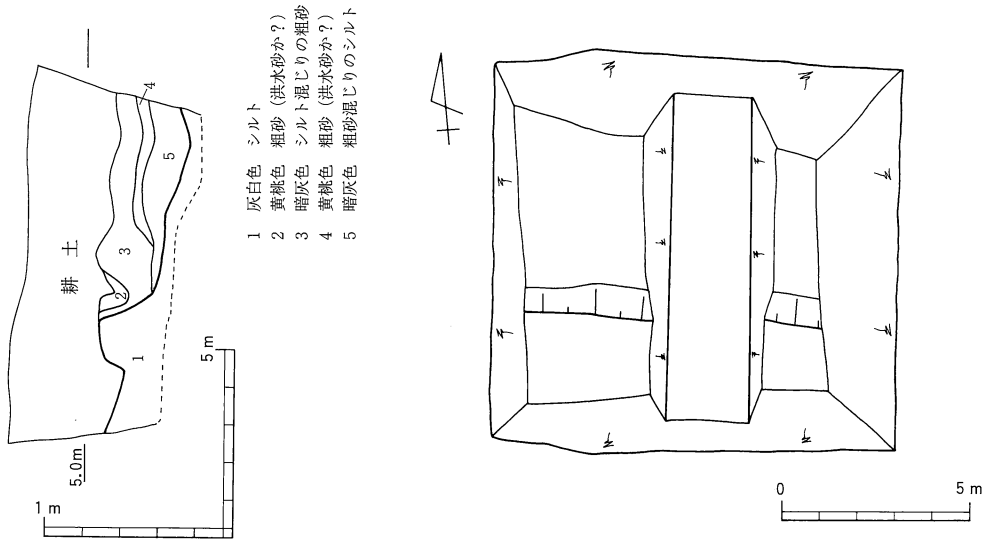
SD204の北側で検出した直径約30cm、深さ約40cmの柱穴で、柱材が残っており、さらに柱の沈下防止用の石材を確認した。

P.207

SD204の北側で検出した直径30cm、深さ70cmの柱穴で、柱痕を確認した。土師器皿が出土している。

P.209

SD206の南側で確認した直径約30cmの柱穴で、柱材を確認した。土師器皿と染付皿が出土した。



第３図　平成10年度　Ｂ地区　全体図および土層図

2．遺物

(1)　土器・陶磁器

①A地区

SD202出土遺物

土師器皿(001～003)と染付碗(004)が出土している。

今回の調査で出土した土師器皿はすべて手づくね成形されており、ロクロの使用は認められない。SD202出土の土師器皿はいずれも口縁部をやや摘み上げるように成形している。調整はどれも底部内面を一定方向に横ナデし、体部にも横ナデを施した後ナデ上げている。またいずれも表面にススが付着していることから灯明皿として用いられたと考えられる。今回の調査で出土した土師器皿の約７割にススの付着が認められる。

(004)は染付碗である。口縁部外面には簡略化した波濤文帯が巡り、体部には芭蕉葉文を描いている。文様の輪郭線はやや太めで、絵付けも雑である。胎土はやや暗く灰色がかった磁器質で、他の磁器よりも粗製である。漳州窯系の染付磁器で16世紀後半のものと考えられる。

SD204出土遺物

土師器皿(005～007)と染付碗(008)が出土している。

土師器皿(005～007)はどれも口縁部をつまみ上げるように成形している。底部内面の仕上げナデの後、体部を横ナデしている。(007)はススの付着が著しく、内外面とも黒褐色に変色している。

染付碗(008)の体部の形状は内側に湾曲しており、口縁は直立気味に仕上げている。表面の釉調は他の染付磁器と比べて明るい白で、体部外面に線刻（暗花）により唐草文を描いている。景徳鎮窯系の染付磁器で、小野正敏氏の分類では碗Ｅ群に相当する。

SD206出土遺物

土師器皿(009～020)と天目椀(021)、染付碗(022)、白磁皿(023)、無釉陶器〈越前〉擂鉢(024)が出土している。

土師器皿は(010)(013)(016)が口縁端部をつまみ上げ成形し、その他(009)(011)(012)(014)(015)(017～020)は口縁部を横ナデすることにより丸く仕上げている。調整は底部をナデで仕上げた後、体部に横ナデを施している。(017)はススの付着が著しく、内面が暗褐色に変色しており、外面は油が垂下した痕跡と見られる染みが認められる。

天目椀(021)は底部を欠損している。体部の輪郭は直線的であるが、口縁部の下でいったん直立し、さらに口縁端部は外反している。体部は強い回転ナデが施され、ナデ調整の単位の境に稜線を形成している。火災など二次焼成を受けたためか、器表面にかけられた鉄釉の各所が黒く変色し、小さな気泡が無数にできている。土見せの部分に化粧土が施されていない点から16世紀後半の建窯産の天目と考えられる。

染付碗(022)の体部下半部はやや丸味を帯びるが、体部上半部から口縁部にかけては直線的である。釉調は青味がかっており、口縁部外面には淡い波濤文帯、内面には１条の圏線が巡る。景徳鎮窯系の染付磁器で碗Ｃ群にあたるが、絵付けは雑で呉須の発色は極めて淡い。碗Ｃ類の最終段階と考えられる。

白磁皿(023)は底部の破片である。全面的に釉掛けされているが畳付は内外面から削られ、尖った形

状に仕上げられる。主として高台内部に砂が付着している。森田分類の白磁E群に属し16世紀代の白磁と考えられる。

無釉陶器(024)は 越前焼擂鉢の底部の破片である。外面は横ナデで仕上げている。内面には1単位7本の擂り目が櫛状の工具により付けられており、その間隔は底部付近で3㎝である。底部付近の内面には横方向の擦痕が無数に残っており、調理などに頻繁に用いられたことを物語っている。表面の色調は明るい橙褐色である。

SD201出土遺物

青磁皿(025)が出土している。ロクロで成形された後ヘラ状工具により輪花形に成形している。体部内外面とも型打ちにより花弁を表現している。型打ちにより凹んだ箇所は釉が厚く溜まって深い緑に発色し、器体の盛り上がった箇所の緑は白に近い。高台の断面形は台形で、畳付の削りは幅1～1.5㎜である。器体は約1.5㎜と薄く仕上げられ、釉の厚みは厚いところで1㎜に達している。釉の色調は深い青味がかった緑であるが、高台内は青磁釉が掛けられず白く発色しており、17世紀代の肥前磁器と考えられる。SD201に平行して試掘トレンチを先行して掘削しており、その際に混入した可能性がある。膠または漆などによる接合修復痕が認められる。

SD205出土遺物

土師器皿(026)が出土している。口径7.6㎝の小型品で、口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。

SD208出土遺物

染付碗(027)が出土している。釉調はやや青味がかっており、口縁部の外面には波濤文、内面には1条の圏線が巡らされる。景徳鎮窯系染付磁器の碗C群で、時期は16世紀後葉と考えられる。

旧河道、洪水砂内出土遺物

土師器皿(028～033)と、染付小杯(034)、染付碗(035)、白磁皿(036)(038)(039)、青磁皿(037)、無釉陶器〈越前〉擂鉢(040)(042)、無釉陶器〈備前〉壺(043)、瓦質土器擂鉢(041)、瓦質土器火鉢(044)が出土している。

土師器皿(028)(029)(031)は口縁端部をつまみ上げるように成形し、(030)(032)は口縁部を横ナデにより丸く仕上げている。(028)(031)(032)に著しいススの付着が認められる。(028)(031)は口縁部付近にススの付着が特に多い。(032)は内面全体が炭化して黒色に変化している。(033)は形態や法量、色調などが他の土師器皿と異なっている。形態は口縁部をやや厚く成形し、口縁端部をなでることにより、水平な端面を形成している。色調は橙褐色系である。ちなみに他の土師器皿の色調は白色系が主流である。また口径が約15㎝と他より大きい点などから、他の土師器皿と別系統のものと考えられる。なお他の白色系の土師器皿は全体の7割以上にススの付着が見られ、基本的には灯明皿として使用されたのに対し、(033)はススの付着が認められず、灯明以外の別用途のために生産されたのであろう。

(034)は染付の小杯である。体部の輪郭は直線的である。釉調はやや青味がかっており、体部外面に飛馬が描かれる。口縁直下の外面には1条の圏線が巡らされる。釉の発色は薄い。(035)は染付碗の底部の破片である。見込みの部分が緩やかに盛り上がっており、蓮弁文帯の内部に仙人らしき人物文を描

いている。人物文は細い線で輪郭を描き、呉須で輪郭内を塗り潰している。底裏の高台内には二重圏線の内側に「富貴長命」の字款を書く。高台は内側に傾いており、畳付のヘラ削り幅は狭い。景徳鎮窯系染付磁器の碗E群で、時期は16世紀中葉と考えられる。

(036)(038)(039)は白磁皿である。(036)は底部と体部の傾斜変換部に高台が貼り付けられる。高台はやや内側に傾斜しており、畳付の削り幅は約3㎜と大きい。釉の色調は乳白色である。(038)は端反りの皿である。釉調はやや暗く畳付から高台内にかけては無釉である。焼成は甘い。(039)はやや小型の白磁皿である。丸みを帯びた体部を持ち口縁部は外反する。高台は削り出し成形され、畳付から高台内部にかけては施釉されない。焼成は甘く、釉の色調は灰色に近い白である。いずれも森田分類の白磁E群に属し16世紀代の中国製白磁と考えられる。

(037)は青磁皿である。口縁部を輪花形に成形している。体部外面は花弁の境を細線により描き、内面はヘラ彫りにより花弁をより表現しているが、ヘラ彫りの位置が口縁部の波形の単位に対応しておらず、輪花皿としては簡略化した手法が用いられている。器体の厚みは3㎜で、SD201で出土した青磁皿(025)の皿と比べると倍近い厚さがある。釉の色調は白に近いくすんだ緑である。16世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。

無釉陶器(040)(042)は越前焼擂鉢である。いずれも器の表面は内外面とも横方向のナデにより調整される。(040)は口縁端部を内外両側から強くナデて端部を尖り気味に整形し、(042)はそのため口縁端部に端面を形成している。またいずれの擂鉢も口縁端部から1段下がった箇所の内面側を強くナデて、浅い凹線を形成している。擂り目の単位はいずれも1単位9本である。使用痕と見られる横方向の擦痕がいずれの擂鉢にも認められる。色調は明るい橙褐色である。

無釉陶器(043)は備前焼壺の底部の破片である。器の表面調整は、外面は指ナデにより平滑に仕上げているが、内面は成形時の痕跡がそのまま残されている。色調は紫がかった赤褐色である。

(041)は瓦質土器擂鉢である。体部から口縁部は一続きに成形されており、直線的な外観を呈している。表面調整は、口縁部外面は横ナデを施し、口縁部がわずかに外反するように見える。体部外面はナデにより仕上げられるがその方向は一定ではない。内面はすべて横ナデにより調整され、1単位7本の擂り目を櫛状工具により付けている。器の表面は黒であるが、内面は調理に用いられたためか磨り減っており、胎土の白色が露出している。

(044)は瓦質土器火鉢である。平底に丸味のある体部が付く。高台は貼付高台でわずかに外側に開き気味である。体部の内外面と底部内面は隙間無く磨きが施され、黒味がかった器体が艶を放っている。

P.207出土遺物

土師器皿(045)が出土している。口縁端部は横ナデにより丸く仕上げている。色調は橙褐色である。

P.202出土遺物

青磁皿(046)が出土している。口縁部を波形に成形し輪花形を呈している。体部内面は花弁を押し型により表現している。型の位置は口縁部の波形の単位に対応しているが、体部外面は花弁の境を細線により表現していることから、輪花の皿としては簡略化された手法が用いられたと言える。釉の色調はくすんだ緑である。16世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。

P.209出土遺物

土師器皿(047)、染付皿(048)が出土している。

土師器皿(047)は口縁端部を横ナデにより丸く仕上げている。器高が比較的高く丸底である点が他の皿と比べて特異であるように思われる。(048)は染付皿である。高台は貼り付けられず、底部中央部を窪ませ、その周囲は無釉であり、いわゆる碁笥底風に仕上げられている。やや深く丸みを持つ皿で、見込みには木の枝に留まる鳥の図が2重圏線の中に描かれる。内面の口縁部は細い2重圏線が巡る。外面には崩れた波濤文帯の下に芭蕉葉文が描かれている。景徳鎮窯系の染付磁器で皿C群に相当し、時期は16世紀中葉以前と考えられる。

包含層出土遺物

土師器皿(057～065)(067～070)、白磁碗(049～051)、白磁皿(066)(080～081)、青磁碗(056)(082～083)、染付皿(052)、染付碗(071～074)(076～079)、染付小杯(075)、施釉陶器鉢(053)、施釉陶器椀(054)、天目椀(055)、瓦質土器火鉢脚部(084)、土師器短頸壺(085)、瓦質土器短頸壺(086)、瓦質土器擂鉢(087～091)、土師器甕(092～098)(100～102)、須恵器杯(099)、砥石(103)(104)などが出土している。

土師器皿(058～060)(062～064)と(067～070)は口縁端部をつまみ上げるように成形し、(057)(061)(065)は口縁端部を横ナデにより丸く仕上げている。(068)以外はすべてススが付着しており、灯明皿として用いられたと言える。特に(058)(059)(064)は口縁部にススが濃く付着しており、その部位のみ黒く変色している。(068)は底裏に墨書の痕跡が認められる。

白磁碗(049～051)はいずれも丸みのある体部の下部に径の小さな削り出し高台が付く碗である。(049)(051)は(050)と比べて器壁が薄く、高台は高く幅が狭い。釉の発色は鮮やかな乳白色である。焼成は堅緻で胎土も白く精良である。畳付の削りの幅はほぼ1㎜以下と狭く仕上げられている。(050)は特に底部が厚く、釉の発色は青味を帯びている。焼成は甘く胎土は灰色に近い。高台は幅広で、畳付の削りの幅も2㎜近い箇所があり、比較的雑に削られているようである。

白磁皿(066)はやや内湾した体部を持つ皿である。釉の色調はややくすんだ乳白色で、外面体部下半は露胎である。(080)は白磁皿の底部の破片である。平底に丸みのある体部が付く。高台は断面形が三角形で、畳付の削り幅は広く端部に砂が付着している。釉調はやや暗い乳白色である。(081)の白磁皿の体部は丸みを持ち、口縁部は外反している。釉調はやや黄味を帯びた乳白色である。いずれも16世紀代の中国製白磁と考えられる。

青磁碗(056)は黄味がかった濃い緑の釉が全面に施されるが底裏の高台内部の釉を輪状に削り取っている。高台の高さは約1.8㎝で直立し、厚みは中程で7㎜ある。高台の外面中央に縦線文様が5～15㎜間隔で刻まれている。体部外面下半部に縦方向の線刻が多く認められるが、線刻により蓮弁文を描いていると考えられる。また見込みには草花文のスタンプが押されている。龍泉窯系青磁で上田秀夫氏の分類のB－Ⅳ－b類に相当し、15世紀後半に生産されたものが16世紀代まで伝世したものと考えられる。青磁碗(082)は丸味のある体部に直線的な高台が付く。釉の色調は薄い水色に近く、外面高台を除く全面に施している。釉の掛からない高台の色調はやや赤みがかった褐色で、酸化焔による焼成を受けている。青磁釉の下に部分的ながら赤褐色の胎土が透けて見え、やや深みのある緑色を呈する箇所もあり、全面に細かな貫入が施された点も考慮すると、南宋官窯の青磁碗を模倣した可能性がある。青磁碗(083)は口縁部外面に雷文帯が巡らされている。黄味がかった薄い緑の釉が内外面とも施される。内外面とも

粗い貫入が全面に見られる。また高温で焼成されたためか、細かな気泡が器表面の全面に認められる。龍泉窯青磁でC－Ⅱ類に相当する。(056)とともに15世紀代の龍泉窯系青磁が伝世したものと考えられる。

染付皿(052)は全体にやや青味がかった釉が掛けられる。内面底部には重ね焼きの跡が残る。高台径は約4㎝であり他の染付皿と比較してやや小さい。高台の幅いやや厚めで、畳付は幅約2㎜の端面を形成しており、砂が付着している。17世紀中旬の初期伊万里の皿と考えられる。

(071～074)(076～079)は染付碗の破片である。

(071～074)は染付碗の口縁部の破片で、いずれも16世紀後半の景徳鎮窯系の染付磁器と考えられる。(071)(073)(074)は輪郭が直線的であるのに対し、(072)は口縁端部がやや内側に湾曲している。また(071)は底部が残存しており、底部が高台内に凹む器形となっている。文様表現は(071)は口縁部外面に波濤文の文様帯を巡らせ体部外面に草花文を描き、口縁部内面に幅広の圏線を1条巡らせ、見込みには法螺貝文を描く。(072)は口縁部外面に波濤文の文様帯を巡らせ、体部外面に芭蕉葉文を描く。内面は口縁部に幅広の圏線を巡らせる。(073)は波濤文帯の下に文様が描かれる。内面口縁部には2重圏線が巡らされる。(074)も波濤文帯の下に草花文が描かれる。内面口縁部には1条の圏線が巡らされる。いずれも景徳鎮窯系の染付磁器の碗C群である。主文様や文様帯の絵付けの乱れが少ないことから、時期は16世紀中葉以前と考えられる。

(076～079)は染付碗の底部の破片である。(076)(079)は見込みの部分がやや盛り上がっており、畳付の削りは(077)などと比べて幅が狭い。(076)は見込みに菊花文を描き、底裏の高台内部に「大明年造」の銘款が書く。菊花文は細い線で輪郭を描いた後、内部を呉須で塗っている。(079)も(076)と同様の文様構成を持つものと考えられる。景徳鎮窯系染付磁器の碗E群に相当する。(077)(078)は内面底部から体部にかけて凹む器形となっている。(078)は体部外面に草花文、見込みに法螺貝文が描かれ(071)と文様構成が類似している。釉調はやや青味がかっており、底裏も含め全面に施釉されるが、底部と高台の境目の一部に釉薬が行きわたっていない箇所がある。また底裏に砂が付着している点、器壁が他の碗と比較してやや厚い点、畳付の釉が削り落とされた箇所が、酸化焔を受けたせいか橙褐色を呈している点が、他の染付碗と比べて異質である。同様の染付碗は、当遺跡では平成11年度調査区のG地区包含層出土の(134)がある。(078)は景徳鎮窯系染付磁器の碗C群の特徴を持つものの、他の染付碗と比べて粗製であることから、生産時期がやや遅れるものと考えられる。

染付小杯(075)は平底で口縁部は外反する。見込みには2重圏線の内側に寿山福海、外面に草花文を描き、底裏の高台内部には「福」の銘を入れている。16世紀代の景徳鎮窯系染付磁器と考えられる。

施釉陶器鉢(053)は底部の破片である。平底に直立する体部が付き、底裏に脚が付くことから香炉の可能性もある。緑がかった黄褐色の灰釉が全面に施され、16世紀代の瀬戸美濃焼と考えられる。

施釉陶器(054)は瀬戸美濃焼の椀と考えられる。体部下半は丸味を持ち、径の小さな高台を削りだしている。高台を除いて全面に鉄釉が掛けられている。胎土は明るい灰褐色である。

施釉陶器(055)は瀬戸美濃焼の天目椀である。表面に掛けられた鉄釉は黒地に褐色が溶け込むように発色している。体部外面の下半部には、釉下にヘラ削りの跡が認められる。胎土は白みがかった明黄褐色の細かい土である。

(084)は瓦質土器火鉢の脚部と考えられる。円筒形の台脚で、器壁は約1㎝である。体部は縦方向に細かいナデ調整を行うため表面は滑らかに仕上がっている。

(085)は土師器の短頸壺である。背丈が低く膨らみのある体部の上に、短く直立するようにつまみ上げた口縁が付く。体部、口縁部の裏表とも、表面は横ナデにより調整しているが、体部外面はナデの後に斜め方向のハケにより最終の表面調整を行っている。底は平底で裏面は調整を行わない。(086)は瓦質土器の短頸壺である。背丈が低く膨らみのある体部を持つ。口縁部を直立するようにつまみ上げるが、体部との境目付近を強くなで、凹線状のへこみを形成しており、外観上は一見すると玉縁状の口縁部のように見える。表面調整は内外面とも横ナデである。

(087～091)は瓦質土器の擂鉢である。(087)は底部付近の破片である。体部外面は板ナデにより調整している。擂り目は1単位8本の櫛状工具により、放射状に付けている。焼成は悪く還元状態に至っていないため、胎土の色調は褐色で、その上に薄く炭素が吸着している。(088)は体部から口縁部にかけてひと続きに成形している。体部内面と口縁端部を横ナデ、体部外面は板ナデにより調整する。板ナデの方向は、体部の上半部は横方向、下半部は縦方向である。擂り目は1単位8本で、口縁部側で約3㎝間隔で付けている。(089)は片口部が残っている擂鉢の破片である。(088)と同様の成形、調整を行った後、口縁部の1箇所で指ナデにより片口を設けている。(090)も直線的な体部を持つが、体部中央付近がわずかながら外側へ湾曲気味である。口縁部付近は内面を強く横方向になで、口縁部はやや直立気味に成形されるとともに、口縁部内面に緩い段を形成している。器表面の調整は、口縁部および体部内面は横ナデ、体部外面は板ナデによる。体部内面の擂り目は1単位7本の櫛状工具により、口縁部側で4～5㎝間隔で付けている。体部内面は調理の痕跡と思われる横方向の擦痕が顕著である。なお炭素の吸着が少なく、器表面の色調は灰色がかった淡い褐色を呈している。(091)は他よりも口径がやや大きい瓦質擂鉢である。体部はわずかに内側に湾曲気味で、口縁部は横ナデにより外側へ開くよう成形している。口縁部内面は指ナデ成形時に稜線を形成している。表面調整は口縁部内外面と体部内面は横ナデを施し、体部外面は不定方向の弱いナデを行うのみで、他の擂鉢のような板ナデは行われない。

(092～098)は土師器の甕である。いずれも口縁部付近の破片で、(096)は口縁部が直立気味であるが、その他は横ナデにより外反させている。(095)は口縁先端付近の外面に狭い面を持つよう成形している。調整は基本的に外面は縦ハケ、内面は横方向の板ナデまたは削りである。すべて器表面にススが付着しているため、煮炊用に用いられたと考えられる。

(099)は須恵器の杯である。かえりの部分は短く、内側に傾いている。

(100～102)は下層の5世紀代の土師器壺である。いずれも複合口縁壺で、肩部は丸味を帯びており、頸部は緩やかに外反している。頸部は一旦屈曲し、その上の2段目の口縁部も外反している。口縁端部は横ナデにより端面を整えている。

②B地区

包含層出土遺物

瓦質土器火鉢(105)、瓦質土器擂鉢(106)、備前焼甕(107)などが出土している。

(105)は瓦質土器火鉢の台脚と考えられる。円筒形の台脚で器壁は約1㎝である。体部は縦方向に細かいナデ調整を行うため表面は滑らかに仕上がっている。(106)は瓦質土器擂鉢である。擂り目は底部に付けた後、体部に1単位7本のものを施している。(107)は無釉陶器で備前焼甕の底部付近の破片である。器表面は板ナデにより仕上げている。

(2) 石製品

①A地区

包含層出土遺物

砥石(103)(104)が出土している。(103)は淡い褐色の気泡の多い火成岩質である。石材を縦に4分割してできた平坦面2面を利用しているが、その内の1面は後に横から斜め上に向けて穿孔している。(104)は直方体に成形し、3面を利用している。

(3) 木製品

①A地区

SD206出土遺物

下駄(W001)、漆器椀(W003～W005)、曲物(W007)、長方形曲物(W002)、桶(W011)、円形木製品(W006)(W008)、楕円形木製品(W009)、部材(W012)、用途不明品(W010)などが出土している。

下駄(W001)の平面形は側辺が直線的で、前端と後端が半円形を呈している。前穴を左右いずれかに片寄せ、後穴を後歯の前にあけている。歯は台とほぼ同じ幅で、縦断面が方形である。

漆器椀(W003)は丸味を帯びた体部の外面は黒地に朱で鶴が描かれ、内面は朱で塗られる。高台は2cmと高めで、高台の内側も削られ、黒漆が塗られる。漆碗(W004)(W005)も丸味を帯びた体部外面は黒地に朱で施文され、内面は朱で塗られる。(W004)には4箇所の高台の高さは約1cmで、高台内部も削られて黒漆が塗られる。

曲物(W007)は直径10cm以下の小型品で、側板との固定に用いられた釘穴が2箇所残されている。長方形曲物(W002)は一辺約17cmの正方形で、角を切り落としており、八角形を呈している。各辺の中央部に側板を樺皮で留めるための穴が2つずつ設けられている。

桶(W011)は、板を並べてタガをはめて胴を作った結桶の破片である。本報告書で「桶」と称する遺物は原則として結桶のことを称する。下端の幅が6mm、上端の幅が8mmで口縁に近づくほど厚めに作られている。側面にタガで留められた圧痕が残されている。表面は黒漆が塗られた痕跡があり、また火災などで二次焼成を受けた痕跡も認められる。

円形木製品(W006)(W008)、楕円形木製品(W009)は出土時に曲物と認識していたが、側板を留めるための釘穴、樺皮を通す穴、側板の圧痕が認められないため、円形または楕円形曲物とした。

部材(W012)は、断面形が長方形の角材で、端付近にホゾ穴と考えられる長方形の穴があけられている。火鑽臼(W010)は厚さ1cm以下の板材で、火起こし時に生じた直径約5mmの円形の穴が8箇所認められる。

SD204出土遺物

下駄(W013)、楕円形曲物(W014)が出土している。

下駄(W013)の平面形は側辺が直線的で、前端と後端が半円形を呈している。前穴を右に片寄せ、後穴を後歯の前にあけている。歯は台と同じ幅で、縦断面が方形の歯を作っている。

楕円形曲物(W014)の平面形は側辺が直線的で、前端と後端が半円形を呈している。各辺の中央部に側板を樺皮で留めるための穴が2箇所ずつあけられている。

SD202出土遺物

漆器椀(W015)、漆器皿(W016)、長方形曲物(W017)、桶(W018)、箸(W021)などが出土している。

漆器椀(W015)は丸味を帯びた体部の外面は黒地に朱で鶴亀と竹の文様が描かれ、内面は朱で塗られる。高台は1cmと高めで、高台の内側も削られ、黒漆が塗られる。漆器皿(W016)は口縁が端反り気味に成形され、表面は内外面とも朱で塗られ、削り出し成形された高台内部は黒漆が塗られる。

SD201出土遺物

用途不明品(W019)が出土している。幅約2cmに対し厚さ約1cmの扁平な木材で、稜線は面取りされている。先端と末尾がやや細く成形されている。先端から5cm下がった箇所が、他所よりやや細くなるように削られ、その部位の両側に穴をあけている。穴は側面から見て斜めにあけている。

旧河道出土遺物

下駄(W030)が出土している。

下駄(W030)は平面形は側辺が直線的で、前端と後端が半円形を呈している。前穴を台の中央にあけ、後穴を歯の内側にあけている。歯はほとんど磨り減っている。

包含層出土遺物

下駄(W027～W030)、漆器椀(W023)(W031～W034)、漆器皿(W035～W037)、曲物(W025)(W038)(W040)(W041)、円板形木製品(W024)(W039)、長方形曲物(W042)、箸(W022)、羽子板(W020)、用途不明品(W026)などが出土している。

下駄(W027)の平面形は小判形である。歯はほとんど摩耗している。下駄(W028)の平面形は小判形で、穴は前穴を台の中央にあけ、後穴を歯の内側にあけている。歯は台の両側から少し内寄りから歯をつくり、前・後歯とも側面からみて外開きに作り出すとともに、歯の下辺幅は台の幅よりも広く成形している。また歯の四隅の角をおとして平面形を隅丸方形にしている。下駄(W029)の平面形は側辺がまっすぐで、前端と後端が半円形を呈している。後穴を後歯の前にあけている。歯の下辺幅を台の幅よりも広く成形している。

漆器椀(W023)は高台の破片である。高台の高さは約2.5cmであるが、底裏を約5mmの深さで削っている。側面と底裏に黒漆を塗っている。(W031)(W032)は漆器椀の口縁部から体部の破片である。いずれも体部は丸味を帯び、口縁部の形状は直線的である。外面は黒漆を塗り、朱漆で絵付けを行う。(W031)は鶴亀、(W032)は枝の文様を描いている。内面はいずれも朱一色である。(W033)は漆器椀の高台の破片である。高台の高さは約2cmで、底裏は約5mmの深さで削っている。外面と底裏は黒漆、見込みは朱漆を塗っている。(W034)も漆器椀の高台付近の破片である。他の漆器椀と異なり高台底裏の削りを施さない。器表面は体部外面から底裏にかけて黒漆、内面は朱漆を塗っている。

漆器皿(W035)は端反の口縁を持つ点と、内外面とも朱漆が塗られる点とが特徴である。底裏は黒漆が塗られ中央に朱漆で銘款が書かれる。(W036)(W037)は口縁部の形態や漆の塗り分け方などが他の椀と同様であるが、器高が相対的に低いことから皿とした。(W036)は外面に黒漆で木の葉を描いている。

曲物(W025)はむしろ楕円形に近い形状を呈している。樺皮で側板を留めるための穴が2箇所あけられている。(W038)は直径約30cmの円版形木製品であるが、縁辺付近に側板の圧痕が認められることから曲

物と判断した。釘穴および樺皮を通すための穴はこの破片には認められない。(W040)は直径約８cmで、側板をとめる釘穴らしい痕跡が２箇所に認められた。(W041)も直径約８cmで、縁辺とも中央とも離れた箇所に２箇所穿孔し、樺皮を巻いている。(W024)(W039)は大きさ、厚さとも曲物と共通しているが、側板を留めた何らかの痕跡が認められないため、円板形木製品とした。

(W042)は長方形曲物である。一辺約10cmで、樺皮により側板を留めるための穿孔が認められる。

箸(W022)は細い棒状の材を削りだして成形している。片方の端部が欠損している。

羽子板(W020)は柾目取りされた材から成形している。持ち手の部分は下端より本体に近付くほど細く仕上げられ、また本体の下端は丸味を帯びず直線的に成形される。表面は刃物等により付けられた直線的な傷跡が無数に残り、また表裏両面と側面に、漆と考えられる赤色顔料が部分的に残存している。

用途不明品(W026)は隅丸方形の板材で、側辺に沿って約５cmおきに穴が開けられる。

下層出土遺物

アカ取り(W043)(W044)、盤(W045)、斎串(W046)、剣形木製品(W047)、田下駄(W052～W071)、部材(W048～W051)(W072)(W073)(W075～W077)、矢板(W074)などが出土している。

アカ取りは(W043)(W044)とも一木を削り出して成形している。(W043)は本体が馬蹄形に近く、柄は棒状でやや上に反っている。(W044)は本体が方形で、柄は直線的な棒状である。盤(W045)は刳物で、楕円形の舟形を呈している。

斎串(W046)はほぼ完形である。上端はやや丸味のある形状に仕上げ、下端は尖らせている。両側辺の切り込みは見られない。(W047)は剣の形を模した祭祀具と考えられる。束の部分の破片で刃先は欠損している。鎬は明瞭に整形されていない。

田下駄(W052～W060)(W067～W071)は足を固定するための紐を通す切り欠きを両側辺に２箇所ずつ、計４箇所設けている。いずれも他に穿孔や切り欠きが認められず、枠などを用いずに使用されたものと考えられる。田下駄(W061)(W062)も同様に用いたものと思われるが、側辺に切り込みを設けるのではなく、弓状に抉っている。(W061)は下端に横方向の圧痕があるため、枠を用いた可能性が考えられる。(W063)は足を固定するために穴を４箇所あけている。(W064)も同じ型式の田下駄の破片である。いずれも枠を固定した痕跡は認められない。

田下駄(W065)(W066)は田下駄の台状枠である。いずれも下部の両端に支柱を通すための四角い穴が２箇所あけられている。(W065)は更に上部に２箇所の穿孔があり、ここを用いて田下駄本体を固定したと考えられる。(W066)の上半分は欠損している。

以下の遺物(W048～W051)(W072)(W073)(W075～W077)は何らかの部材と判断している。

(W048)は図上の左側に四角い穴をあけ、右側の穴は側辺まで通じている。右側の穴の周囲はやや凹んでおり、圧迫を受けたように見受けられる。右側部分を他の部材のホゾ穴などに差し込み、常に組み合わされていたものと考えられる。(W049)は長方形であるが、両側の短側辺が半分ずつ、四角く切り取られた板材である。直径約３～４mmの穴が８箇所あけられ、側辺には側板を留めるための釘穴が８箇所確認されている。箱形の製品の底板と考えられる。(W050)は長方形の本体の上に、断面方形の短い柄が付いている。農具などの未製品の可能性がある。(W051)は側辺に切り込みのある板材である。

(W072)は四角い棒状の木製品である。上端部よりに１箇所、切り込みを設けている。(W073)は片方の側辺に弓形に抉っている。(W075)は長方形の板材の両側に四角い突起が設けられ、それぞれの突起に直

径５㎜以下の穴があけられている。(W076)は全長約25cmの棒に四角いホゾ穴を１箇所あけている。ホゾ穴と反対側の端は、やや尖らせ気味に仕上げている。(W077)はやや反りのある長方形の板材の先端付近に切り込みを設け、その対面に四角い穴をあけている。

(W074)は５角形の板材であるが、先端を削って仕上げており、矢板と考えられる。

②Ｂ地区

下駄(W078)(W079)と曲物(W080)が出土している。

下駄はいずれも歯の部分の破片である。板目取りした台形の板材に、一辺約１cmのホゾを設けている。(W080)は曲物で、側辺付近に側板を樺皮留めするための穴をあけている。火災などにより二次焼成を受けた痕跡が認められる。

(4)　金属器

①Ａ地区

銅製の刀子柄(M001)(M002)、飾り金具(M003)(M004)、銅銭(M005～M007)、鉄製板(M011)、鎌(M012)、釘(M014～M017)などが出土している。

刀子柄はいずれも遺構面精査時に出土した。刀子柄(M001)は２枚の長方形の銅板よりなる。一枚はコの字形の断面形で、もう一枚は平たい銅板である。２枚の銅板を両側辺で接合しているが、接合手法は不明である。表面は金銅装で、柄尻は別の銅板で蓋をしている。刀子(M002)は１枚の銅板を折り曲げ、一側辺で接合している。接合技法は不明である。表面は金銅装である。

ボタン形の飾り金具(M003)はSD202で出土した。銅製で、カップ形の本体に別の円形の銅板で蓋をし、その上から格子文様のある鋲を打って装飾効果を得ている。飾り金具(M004)はSD201で出土した。銅板を組み立てた箱形を呈しており、一面は宝珠形に成形されている。この面と向かい合う２面に、１箇所ずつ釘穴があけられている。角材の端に取り付けるための金具と考えられる。

銅銭は(M006)がSD205で出土し、その他はいずれも包含層内で出土している。(M005)は祥符通寶、(M006)は祥符元寶、(M007)は紹聖元寶の文字が認められる。この種の銅銭は元々はいずれも北宋銭で祥符通寶と祥符元寶の初鋳は1008年で紹聖元寶は1094年である。

(M011)は板状の鉄製品で、包含層内で出土した。厚さ2.5㎜の鍛造品と考えられ、両端が突出した形状である。(M012)は鉄製の鎌である。SD204で出土した。刃の長さは約17cm、柄は約６cmで、柄の先端に木柄を装着するための釘穴があけられている。

鉄釘(M014～M017)はいずれも包含層内で出土した。いずれも断面方形で、全長は約10cmである。末端はやや広く成形した箇所を折り曲げている。(M014)は釘17本の束である。

（参考文献）

１．森田　勉　1982年「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会
２．上田　秀夫　1982年「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会
３．小野　正敏　1982年「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

第２節　平成11年度の調査

１．概要

(1)　Ａ，Ｇ地区

Ａ，Ｇ地区は、調査区の最も北側にあり、農道を挟んで並列位置に設定され、平成10年度調査Ｂ地区の南端に隣接する。両地区は、遺構等の状況から一体のもと考えられるので、合わせて記述する。なお、本地区から南側へ続くＢ～Ｆ地区は、水道管等の埋設物が存在しているため、農道から東側を調査範囲から除外している。

遺構面は、人工的に整地された層等、２面確認した。整地は、シルト地盤上に黄褐色の細かな砂礫を薄く積み、北側の隣接地区(平成10年度調査)と同様、その由来は近隣の丘陵を形成する花崗岩バイラン土と推測される。ただし、遺構検出段階では、遺構面として斉一的に把握するのが困難であったため、やや掘り下げた形で検出を行っている。

２面の遺構面上では、５条の溝、８基の柱穴、１基の土師器埋納遺構を検出した。

第１遺構面(中世面１)では、東西方向の溝４条(SD07～10)を検出した。この内、SD07・08・10の埋土中には、土師器皿、瓦質土器擂鉢、瓦質土器短頸壺、瀬戸美濃天目、白磁、染付、網枠、蓋、漆器椀、箸、横槌、人形、斎串、下駄、円板形木製品、羽子板、鍬、桶、曲物等が出土した。また、Ｇ地区の北端では、SD10を埋戻した後の整地面上から南北方向の溝SD09を検出し、埋土中より土師器皿、漆器椀、羽子板、箸、下駄等が出土した。SD09と同一面上では、SD09の掘り方に沿う形で、礎石及び掘立柱を８基検出し、柱の部材等も検出した。

Ａ地区では、多量の土師器小皿の集積下に墨書で文字を付記した石製品が埋設された土師器埋納遺構(SX01)を検出した。

１層下の第２遺構面(中世面２)では、SD06を検出した。

また、包含層等からは、土師器皿、瓦質土器擂鉢、白磁、染付、田下駄、曲物、馬形、つけ木等が出土した。

(2)　Ｂ地区

Ａ地区南側に設定した調査区である。盛土下では、部分的に黄灰白色の整地土が残り、２面の遺構面を検出した。

第１遺構面(中世面１)の遺構面上では、東西の溝を５条(SD01～05)検出し、埋土中に土師器皿、瀬戸美濃天目・皿、瓦質土器擂鉢・火鉢、土師器坩堝、染付、箸、漆器椀、曲物、箱、下駄、柄杓の柄、切匙、網枠、つけ木等が出土した。ただし、SD05は１層下の堆積層を遺構面としており、第２遺構面(中世面２)となると考えられる。その他、遺構面上では、円形土坑を２基(SK01・02)検出し、埋土中より土師器皿、染付、箸、漆器椀、切匙、桶、箱、曲物、下駄、茶筅、将棋の駒、銅銭等が出土した。

第２面以下では、水田畦畔上に敷いたと考えられる、東西方向にわたる板材を検出した。

また、包含層からは、土師器皿、染付、曲物、桶、箱、斎串、田下駄等が出土した。

なお本地区では、土層断面において、地層にずれが生じている箇所があり、地震に起因する可能性が考えられ、中世の遺構面に影響が及んでいないことから、平安時代～戦国時代に限定されるようである。

(3)　C地区

B地区南側に設定した調査区である。立地が調査区の中でも谷の中央部に当たり、断面観察からも、度々洪水に見舞われた状況が窺え、中世の遺構面についても砂層上面で検出した。

遺構面上では、溝、土坑、柱穴を検出し、図化した土坑5基(SK04・05、07～09)の内、SK07・08では、土師器皿、漆器椀等が出土した。柱穴は、3～4基ずつの並びを1単位として、数箇所で認められ、掘立柱建物の可能性が考えられるが、調査区幅が狭いため、建物の復元をするには至らなかった。

また、包含層からは、漆器椀、切匙等が出土した。

(4)　D地区

C地区の南側に設定した調査区である。遺構は耕土直下の砂層上面で、時期不明の柱穴3基を検出したのみである。調査区幅が狭く、面的な調査が困難であったため、部分的に断割り、下層の堆積状況を確認した。

耕土下で検出した面以下は、洪水砂が繰り返し堆積しており、谷中央部の流路であったと思われる。流路の堆積は中世以降も幾度にも渡ったものとみられ、断割りの砂中から土師器皿、最も下層からでも白磁皿等が出土した。

(5)　E地区

D地区の南側に設定した調査区である。現状では、中世の包含層、及び遺構面は削平による影響を受け、遺構面は検出されなかった。

包含層からは、下駄、板材、建築部材、つけ木の他、下層の堆積より、弥生土器の長頸壺・甕、石斧、木鏃等が出土した。

(6)　F地区

E地区の南側に設定した調査区で、本発掘調査の最も南側の地区である。現状では、中世の包含層、及び遺構面は削平による影響を受けており、僅かに土坑1基(SK13)、溝1条(SD14)を検出したのみで、埋土中から土師器皿、箸等が出土した。

また、包含層からは、箸、曲物の他、下層の堆積より弥生土器の甕・鉢等が出土した。

２．遺構

(1)　A，G地区

①溝

SD06

第２遺構面(中世面２)で検出した。調査区南側(SD07の南側)を東西方向に直線的に伸びる。最大幅約0.8m、最小幅0.4m、深さ約65cmを測る、断面逆台形の溝である。埋土は灰色シルトを主とする３層の堆積で、上層では杭状の部材等があり、中間層で若干腐植質土が混入している。出土遺物は土師器皿を図化している。

SD07

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区南側(SD06の北側)を東西方向に直線的に伸びる。最大幅約3.4m、最小幅約0.7m、深さ約140cmを測る、断面が漏斗状の細くて深い溝である。埋土は極粗砂～細礫を含んだ黒褐色シルトが３層に渡って堆積し、最下層で植物遺体を含む。出土遺物は、土器等では土師器皿、瓦質土器短頸壺、無釉陶器擂鉢、木製品では横槌、斎串、羽子板、下駄、曲物、漆器椀、有孔円板形木製品、桶、建築部材等がある。

SD08

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区中央(SD07の北側)を東西方向に直線的に伸びる。最大幅約3.0mを測り、非常に浅い溝である。出土遺物は、土師器皿を図化している。

SD09

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区北側から中央にかけて、東壁側を南北方向にやや蛇行しながら直線的に伸びる。調査区壁付近の検出であったため、西側で明確な掘り方を検出できた以外は、その方向等、全容の把握が困難である。検出幅約1.7m、深さ90cmで、断面が丸みのある逆台形状を呈し、やや段を持つ。埋土は灰色～黒褐色の細砂～細礫までが混じるシルトを主体とする５層の堆積で、中間層以下は植物遺体が混入する。出土遺物は、土師器皿等がある。

SD10

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区北側を東西方向に直線的に伸びる溝で、SD09、礎石及び掘立柱列の下層で検出された。最大幅約3.3m、最小幅約0.9m、深さ約120cmを測る、断面が漏斗状の細くて深い溝である。埋土は極細砂～細砂及びシルトブロックを含む３層、それ以下の３層と、６層に渡り堆積し、埋土上面には整地層が堆積する。上部の３層は埋め立てたものと考えられ、その直下の２層には植物遺体が含まれる。出土遺物は、土器等では土師器皿、白磁皿、瀬戸美濃皿、木製品では網枠、蓋、漆器椀、箸、人形等がある。

なお、遺構埋土上には、後述するＧ地区でピット（礎石及び掘立柱列）の一部が存在し、Ａ地区でも礎石と考えられる石材が検出されており、柱列が伸びることが想定される。

②土師器埋納遺構

SX01

第１遺構面(中世面１)で検出した。Ａ地区北側のやや中央寄りで検出された遺構である。上層は30枚程度の土師器の皿が集積し、その下層からは自然石に墨書を施した石製品が出土した。調査では遺物の取り上げを一括で行ったため、埋納状況の詳細は不明であるが、検出時には土師器皿が約60×40cmの範囲で長方形状に集積し、その上に繊維状の物が見られたことから、長方形の箱状容器等に納め、筵のようなもので上から覆った可能性も考えられる。また、石製品に書された墨書には、明確に判読できるものとして「三界」の文字が認められ、何かの供養など、仏事に係る遺構であることが想定される。出土遺物は土師器皿、墨書石製品がある。

③ピット

Ｇ地区の北側から中央にかけて２箇所、南側において１箇所で検出した、南北方向を軸とする礎石及び掘立柱列である。特に、北側から中央で検出したものは、SD09に沿うように配置されており、その関連が窺えるが、調査区が狭小であるため、建物として復元するには至っていない。また、２箇所のピットからは柱材が検出され、最も依存状態の良好なP.04出土の柱材を図化した。なお、Ａ地区では礎石と考えられる石材も検出した。

(2)　Ｂ地区

①溝

SD01

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区北側(SD05南側)を東西方向に伸びる。幅約3.2m、深さ約30cmを測る。埋土は第１・２層で黄灰白色砂礫が堆積し、第３層で樹皮や木片が多量に出土する暗灰色シルトが堆積する。出土遺物は、土器等では土師器皿、白磁皿、瀬戸美濃天目・皿、土師器坩堝、瓦質土器擂鉢・火鉢、染付、木製品では多量の箸、柄杓の柄、切匙、漆椀、曲物、円板形木製品、下駄、つけ木、用途不明品等がある。

SD02

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区中央(SD03の北側)を東西方向に直線的に伸びる。幅約1.7m、深さ約40cmを測る。埋土は灰色シルトで、木片が多量に混入する。出土遺物は、完形の下駄がある。

SD03

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区中央(SD02の南側)を東西方向にやや湾曲しながら直線的に伸びる。幅約1.7m、深さ約90cmを測る、平底を呈する。埋土は、灰色砂混シルトで、木片が多数混入する。出土遺物は無かった。

SD04

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区南側(SK01の南側)を東西方向にやや湾曲しながら直線的に伸びる。最大幅約3.5m、最小幅約0.5m、深さ280cmを測る、断面が漏斗状の細くて深い溝である。埋

土は、礫が混入するシルトが４層に渡って堆積し、上層と中間層で掘り直しされたと考えられ、若干の時期差が窺える。出土遺物は、陶磁器では染付、木製品では柄杓の柄、漆椀、桶、網枠がある。

SD05

第２遺構面(中世面２)で検出した。調査区北側(SD01の北側)を東西方向に直線的に伸びる。幅約2.0m、深さ170cmを測る。埋土はシルトを主体とする３層の堆積で、中間層では植物遺体を含む。出土遺物は、箸、つけ木等がある。

②土坑

SK01

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区南側(SD04北側)に位置する円形の土坑である。直径約1.1m、深さ約25cmを測る平底を呈する。埋土は、黒褐色粗砂混シルト、黒色シルトの２層が堆積し、下層は植物遺体を含む。出土遺物は、土器等では土師器皿、染付、木製品では箱、曲物、切匙、箸、漆椀、桶、紡錘車、茶筅、将棋の駒等がある。

SK02

第１遺構面(中世面１)で検出した。調査区南側やや中央よりの東側壁付近に位置する円形の土坑で、西側半円部のみを検出した。検出幅約1.4m、深さ0.35mを測る、擂鉢状の床面を呈する。出土遺物はなかった。

(3)　C地区

①土坑

SK04

調査区南側(SK05とSK07の間)で検出され、やや歪な隅丸長方形を呈する。長辺約1.3m、短辺約0.6m、深さ約15cmを測る。埋土はオリーブ黒色粗砂混シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

SK05

調査区南端(SK04南側)で検出され、円形を呈すると思われる。南側は調査区壁、東側は撹乱により影響を受けている。東西検出長約0.9m、南北検出長約0.4m、深さ約10cmを測る。埋土は黄灰色粗砂～細礫混シルトが堆積する。遺物は出土しなかった。

SK07

調査区南側(SK04とSK08の間)で検出され、やや歪な楕円形を呈する。長軸約1.1m、短軸約0.6m、深さ約30cmを測る。埋土は、黒褐色粗砂～細礫混シルトを主体として、木片や焼土を含む。埋土上部では礎石と考えられる石材を検出しており、土坑の廃絶後に建物を設けたものと考えられるが、詳細は不明である。出土遺物は土師器皿がある。

SK08

調査区中央やや南側(SK09の南西側)の西側調査区壁付近で検出され、楕円形を呈する。長軸約3.2m、検出短軸約1.4m、深さ約70cmを測る。埋土は、粗砂～細礫混じりの黒色シルトを主体とした７層の堆積で、木片や炭の他、下層では植物遺体を含む。出土遺物は、土器では土師器皿、土師器短頸壺、木製品では漆器椀の他、長さ12～13cmの薄板がまとまって出土した。

SK09

調査区中央やや南側(SK08の北東側)で検出され、片側がやや狭まる楕円形を呈する。長軸約0.5m、短軸約0.3m、深さ18cmを測る。

②ピット

本地区では、合計20基程が検出され、調査区内において、４基程の単位がほぼ同一の方向軸で並んでいるようであるが、調査区幅が狭く、掘立柱建物として復元するには至っていない。また、図化可能な出土遺物はなかった。

(4)　Ｄ地区

①ピット

本地区では、７基が検出されたが、建物として復元可能なものではなく、時期も不明である。また遺物は出土しなかった。

(5)　Ｅ地区

本地区では、遺構面等が削平されており、遺構を検出するに至らなかった。

(6)　Ｆ地区

①溝

SD14

調査区南側を南北方向に直線的に伸び、遺構の南側は調査区外へ続いている。検出長約5.0m、幅約1.4m、深さ約60cmを測る、平底の溝である。横断面では底面がやや波状をなしており、複数の小規模な流れがあったことも想定される。埋土は、黒色極細砂シルトを主体する２層の堆積である。出土遺物は箸等がある。

②土坑

SK13

調査区北側の西壁断面において検出した。最大幅約3.8m、最小幅約1.9m、深さ約65cmを測る、断面がやや漏斗状を呈する平底である。埋土は黒色及び緑灰色のシルト～クレイを主体とする７層に渡る堆積で、中間層以下では植物遺体が混入する。出土遺物は、土師器皿がある。

３．遺物

(1)　土器・陶磁器

①Ａ，Ｇ地区

SD09出土遺物

土師器皿(108)と白磁皿(204)、青磁碗(205)が出土している(204,205は写真のみ)。

土師器皿(108)は口縁端部付近を水平方向に摘むように成形し、口縁端部に面を形成している。見込みのススの付着が著しい。白磁皿(204)は口縁部が外反し、釉調は暗く灰色に近い。森田分類の白磁Ｅ群に属し16世紀代の中国製白磁と考えられる。青磁碗(205)は体部に細線による蓮弁文を施していることから、龍泉窯系青磁でＢ－Ⅳ類と考えられる。

SD10出土遺物

土師器皿(109～111)、瓦質土器擂鉢(112)、白磁皿(113)、施釉陶器皿(115)が出土している。

土師器皿(109～111)はすべて口縁端部付近を水平方向に摘むように成形し、口縁端部に面を形成している。瓦質土器擂鉢(112)は底部から口縁部まで一続きに成形し、直線的な形状を呈している。口縁部は横ナデ調整し丸味のある形に仕上げている。擂り目は一単位が５本で約３㎝間隔に施されている。

白磁皿(113) は丸味のある体部を持ち、口縁部は外反する。白磁の釉調はやや暗い。森田分類の白磁Ｅ群に属し16世紀代の中国製白磁と考えられる。施釉陶器(115)は瀬戸美濃焼の皿である。丸味のある体部の上に外反する口縁が付く形態が白磁皿(113)と類似している。表面調整は回転ナデによるもので、調整の単位の境はシャープで弱い稜線を形成している。灰白色の胎土にオリーブ色の灰釉が施される。

SD08出土遺物

土師器皿(114)は口縁部を横方向になで、口縁端部を摘み上げるように仕上げている。外面はススの付着が著しい。

SD07出土遺物

土師器皿(116～122)、瓦質土器短頸壺(123)、無釉陶器擂鉢(124)が出土している。

土師器皿(116～122)の口縁端部の形状は、摘み上げるように仕上げる(117)(118)(121)と、口縁部を水平に横ナデし端部に面を形成する(116)、口縁部を横ナデにより丸く仕上げる(119)(120)(122)の３種類が存在する。またSD07出土の皿はススの付着が特に目立つ。(122)は見込みが艶のある褐色に変色しており、(118)の皿は全面にススが付着しているうえ、特に口縁部への付着が著しい。火のついた芯が何度も何度も繰り返し口縁部を焦がしていたと考えられ、この皿が灯明として何度も用いられたことを示している。

瓦質土器短頸壺(123)は丸い胴部の端部を上方に摘み上げることにより口縁部を形成している。口縁端部は内傾している。表面調整は胴部が縦ハケ、口縁直下は横ナデである。無釉陶器擂鉢(124)は越前焼と考えられる。体部は直線的で口縁部は丸く横ナデにより仕上げられる。内面の口縁直下には強いナデによる凹線状の凹みが認められる。擂り目は１単位９本である。口縁付近の色調は明橙褐色であるが、体部から底部は焼成中に還元状態であったためか灰色である。

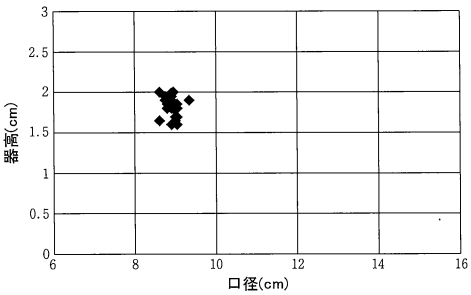
SD06出土遺物

土師器皿(125～127)が出土している。いずれも横ナデにより口縁端部を摘み上げるように仕上げている。

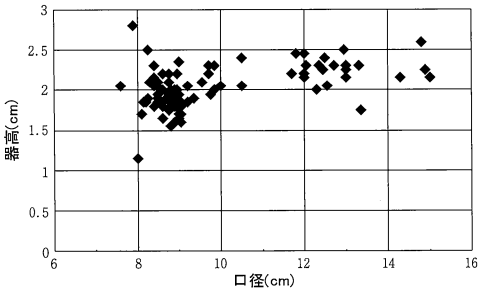
SX01出土遺物

SX01は土師器皿の一括埋納遺構と考えられ、土師器皿(140～167)が出土している他、墨書のある石製品(168)が出土している。

SX01で出土した土師器皿(141～167)はいずれも口縁部を横ナデし、口縁端部をやや摘み上げるように成形している。(140)のみ口縁を横ナデにより丸く仕上げる。また底裏からの指押さえにより、いわゆるヘソ皿風に底部が若干盛り上がっている皿も多い。法量については、28点の皿の口径が8.6～9.35cmと7.5mmの差の中に収まっており、器高は1.6～2.0cmと4mmの差の中に収まっている。また色調はすべて白色系であることから、SX01では定まった規格の元に生産された皿が一括で廃棄されたものと考えられる。またSX01出土の皿のうち、ススの付着した皿は約4割で、付着の程度も比較的薄い目であり、器表面全体の色調を変えてしまう程のものはない。



第4図　SX01出土土師器皿の法量分布



第5図　土師器皿全体の法量分布

SX02出土遺物

土師器皿(128)が出土している。土師器皿(128)は横ナデにより口縁端部を摘み上げるように仕上げている。

包含層出土遺物

土師器皿(129～131)、白磁皿(132)(133)、染付碗(134)、瓦質土器擂鉢(135)(136)、無釉陶器擂鉢(137)(138)、甕(139)がある。

土師器皿は口縁部を横ナデ調整しており、その結果、(129)は口縁端部を摘み上げるように整形し、(130)は口縁端部を丸く仕上げている。(131)は口縁部を水平に横ナデし、端部に面を形成している。

白磁皿(132)は、体部は下半部がやや丸味を帯びており、口縁部は外反する。底部に貼り付けられた高台は断面形が四角形であるが、畳付を削ることにより先端を尖らせている。畳付には砂が付着する。白磁の釉調はやや暗く、底裏も含めて全面に施釉されている。白磁皿(133)も(132)と同様の形態であるが、体部の丸味が強く白磁の釉調がやや明るい。(132)(133)とも森田分類の白磁E群に属し、16世紀代の中国製白磁と考えられる。染付碗(134)は底部の破片で、器壁の厚さが最大約8mmとやや厚手である。文様は外面には茎でつながれた草花文、内面は法螺貝文が描かれる。やや青味がかった釉が全面に施さ

れるが、底裏および高台貼付部の一部に釉が行きわたっていない部位がある。畳付の削りは幅が均一ではなく雑である。また底裏は焼成時に酸化状態になったためか、胎土の色調がやや赤味がかっている点、器壁が比較的厚い点など、他の染付碗と比較すると粗製品といえる。景徳鎮窯系染付碗C群の特徴を持つが、粗製である点から製作時期は碗C類の中でも最も遅い時期のものと考えられる。同様の染付碗は、当遺跡では平成10年度調査区A地区包含層出土の(078)がある。

瓦質土器擂鉢(135)は口縁部がやや内湾気味である。内外面とも表面調整は横ナデによるが、口縁部内面付近を強くなでて口縁部内面に緩い段を形成している。瓦質土器擂鉢(136)も同様の擂鉢であるが、口縁部がやや外へ開いている。擂り目は縦方向に施されている他、口縁部付近に横方向の擂り目が波形に施されているが、これは実用というより装飾的効果を狙ったものと考えられる。

A，G地区の包含層で出土した無釉陶器はすべて備前焼である。備前焼擂鉢(137)(138)の口縁部は上方へ拡張され外面に2条の沈線が巡らされる。体部は直線的で、表面は横ナデ調整されるが、特に外面は強くなでられ、器壁の水平方向の凹凸が認められる。擂り目は1単位11本で、体部に放射状に施されている。(139)は備前焼甕の口縁部の破片である。幅約5㎝の口縁帯を形成し外面に2重の襞がある。器表面には土部（塗り土）を施している。備前焼擂鉢、甕とも間壁編年の中世V期にあたる16世紀後半の遺物である。

②B地区

SD01出土遺物

土師器皿(169～171)、施釉陶器皿(172)、天目椀(175)、白磁皿(173)、染付碗(174)、土師器坩堝(176～177)、瓦質土器擂鉢(178)、瓦質土器火鉢(179)が出土している。

土師器皿は(169)(170)は横ナデにより口縁端部を摘み上げるように整形し、(171)は口縁端部を丸く仕上げている。また(170)(171)はススの付着が著しく器表面全体が暗褐色に変色しており、特に(170)は口縁部内外面に更に濃くススが付着しており、灯明として何度も繰り返し用いられたようである。

施釉陶器皿(172)の体部は直線的であるが口縁部付近でやや内側に湾曲する。底部はいわゆる碁笥底状で、同じく碁笥底を有する明染付（小野分類による染付皿C群）を模倣したものと考えられる。底裏を除く全面に灰釉が施され、口縁部付近に粗い貫入が認められる。天目椀(175)は器高3.5㎝で、一般的な天目椀と比べて器高が低い。体部は直線的に外反し、口縁直下で直立する。口縁部は外反する。内面全体と外面体部の中位から口縁部にかけて鉄釉と灰釉が施され、褐色または黒に発色している。体部下半部の土見せの部分は橙褐色を呈している。胎土は白に近い軽い土である。(172)(175)はどちらも16世紀代の瀬戸美濃焼と考えられる。

白磁皿(173)は胎土に砂粒などが混じっているため色調はやや暗い。体部は下半部が丸味があり、口縁部は外反する。釉調はやや暗く、底裏も含め全面に施釉されている。畳付の削りの幅は狭く、畳付の周囲に砂粒が付着している。森田分類の白磁E群に属し、16世紀代の中国製白磁と考えられる。染付碗(174)は、やや丸味のある体部の外面に草花文が描かれ、口縁部は内外面に幅広の圏線が1条ずつ描かれる。16世紀代の景徳鎮窯系の染付磁器と考えられる。

土師器坩堝(176)は、手づくねで成形された皿形の器である。耐熱性を求められるためか、他の皿よりかなり厚く成形されている。表面は全面的に灰色または一部が赤に変色しており、内面には金属などの溶解物が付着している。(177)も同様の坩堝であるがやや小型品である。

瓦質土器(178)は片口を持つ擂鉢で、体部から口縁部まで直線的に外へ開く形状である。口縁端部を水平になでることにより端面を形成している。体部外面は指おさえにより調整し、指頭痕が各所に認められる。特に底部付近の指押さえが顕著である。口縁部から体部内面にかけては横ナデにより調整されている。擂り目は体部のみ放射状に13本で、時計回りの方向に施されている。擂り目は1単位8本であるが、施文に用いた櫛は歯が4本で、一つの擂り目を描くにあたり2度連続で横並びに施文している。底部付近は擂り目が摩滅し、繰り返し使用された痕跡を示している。瓦質土器火鉢(179)は口径約30cm器高約24cmの円筒形で、口縁直下に1重、底部付近に2重の貼付突帯を巡らせており、形状・法量ともに木製の結桶に類似している。火鉢とは用途が異なる木製結桶を瓦質土器で模倣して製作した可能性がある。器の表面は底裏を除いて細かいミガキ調整が施されている。ミガキの方向は、体部は内外面とも横方向、底部内面はほぼ同心円状である。

SK01出土遺物

土師器皿(180～183)、染付碗(184)(210)(211)(213)が出土している。(210,211,213は写真のみ)

土師器皿(180～183)はすべて横ナデにより口縁端部を摘み上げるように整形している。SK01出土の皿はすべてにススが付着しているが、特に(182)の皿は内面が全面的に暗褐色に変色しているうえ、外面はススの混じった油が垂れた痕跡が染みとなって残されている。

染付碗(184)は、やや盛り上がった見込みの部分に如意雲文を描く。文様は細線で輪郭を描きその内部を呉須で塗っている。底裏には「宣徳年製」の銘款が、楷書に近い書体で丁寧に書かれている。高台の高さが約1cmなのに対し厚さは2～3mmと薄く、また畳付の削りの範囲も狭いことから、比較的丁寧に作られた製品と考えられる。景徳鎮窯系染付磁器で碗E群と考えられる。今年度調査分の染付磁器の中では最も古い様相を示している。染付碗(210)(211)は、丸を三つ組み合わせた文様で体部外面を埋めている。(211)は口縁部直下に2重圏線を巡らせている。いずれも景徳鎮窯系で碗C群にあたる。染付碗(213)は口縁直下の内外面に1条の圏線を描く。

SD04出土遺物

染付碗(185)が出土している。体部下半部は丸味を帯びており、体部上半部から口縁部にかけては直線的に成形されている。口縁部は内外面とも圏線を1条ずつ巡らせ、見込みは内部に蓮弁文帯を巡らせる。

包含層出土遺物

染付皿(186)(187)はいずれも体部が丸く口縁部は外反する。染付皿(186)は口縁部外面に幅広の圏線を巡らせ、口縁部内面に四方襷文帯を施し、その下方に1条の圏線を巡らせる。また見込みを取り囲むように2重圏線を描いている。染付皿(187)の文様の発色は鈍い。外面は口縁部と高台付近に1条の圏線を巡らせ、内面は口縁部に四方襷文を描き、見込みは二重圏線により囲む。いずれも景徳鎮窯系の染付皿B2群にあたる。

③C地区

SK08出土遺物

土師器皿(188)と土師器短頸壺(189)が出土している。

土師器皿(188)は横ナデにより口縁端部を丸く仕上げている。土師器壺(189)は平底の短頸壺である。体部外面と口縁部は横ナデにより調整するが、体部内面は無調整に近く、口縁部と体部の接合痕が認められる。

SK07出土遺物

土師器皿(190)は、横ナデにより口縁端部を摘み上げるように整形している。ススの付着により全体が褐色に変色している。

④D地区

包含層出土遺物

土師器皿(191)、白磁皿(192)がある。

土師器皿(191)は口縁部を横ナデし、口縁端部を丸く仕上げている。白磁皿(192)は他の白磁皿よりやや大型である。底部の厚さが体部より厚く、高台は比較的厚く作られ、断面形は台形である。釉は底裏も含めて全面に施されており、畳付の部分が削られている。森田分類の白磁E群に属し、16世紀代の中国製白磁と考えられる。

⑤E地区

包含層出土遺物

弥生土器壺(193)、弥生土器甕(194)、石斧(195)がある。

弥生土器壺(193)は弥生後期の壺の口縁部である。口縁はほぼ直立するが、やや外へ開き気味である。外面の調整は先に縦ハケにより調整した後、横ナデを施す。内面は下半部が不定方向のナデで上半部は横ナデである。口縁内面の横ナデは甘く、粘土紐の接合痕が残存している。(194)は弥生中期後半の甕である。口縁端部は上下に拡張され、その端面に2条の擬凹線が巡らされる。

⑥F地区

SK13出土遺物

土師器皿(196)(197)が出土している。

土師器皿(196)(197)はいずれも横ナデにより口縁端部を摘み上げるように整形している。これらどちらの皿にもススが付着しているが、(197)は口縁部がススの付着により薄い褐色に変色している。

包含層出土遺物

弥生土器鉢(198)、甕(199～203)がある。

弥生土器鉢(198)は口縁部を左右両側に肥厚させ、さらに口縁の下部に刻み目のある突帯を貼り付けている。

弥生時代甕は口縁端部を上方に拡張するタイプの甕である。(199)(201)(203)は拡張した端面に2条

の擬凹線を巡らせている。体部内面の調整はナデである。なかでも(203)は体部外面に縦方向のハケメを施し、頸部の下方に櫛状工具による列点文が施される。(202)は口縁部の端面に櫛描文を描いている。(200)は口縁端面の施文は行っていない。これらの弥生土器は体部内面の調整をナデにより行っており、時期は弥生時代中期後半と考えられる。

⑧出土地区不明の遺物

青磁碗(206)と染付碗(207～209)(212)、染付皿(214～217)がある。(いずれも写真のみ)

青磁碗(206)は細線により蓮弁文を描いており、剣頭の施文時に蓮弁の単位への意識を失いつつある時期のもので、龍泉窯系青磁碗Ｂ－Ⅳ類にあたる。

染付碗(207)は口縁部の内外面のどちらにも２重圏線を描き、体部外面に主文様を描いている。主文様は細線により輪郭を描きその内部を呉須により塗り潰している。16世紀代の景徳鎮窯系の染付磁器である。染付碗（208）は見込みを２重圏線で囲み、底裏は「富貴長命」の銘を書き２重圏線でこれを囲む。碗Ｅ群にあたると考えられる。染付碗(209)は丸を三つ組み合わせた文様で体部外面を埋めており、碗Ｃ群にあたる。(212)は小杯である。口縁部の内外面に１条の圏線を巡らし、体部外面に草花文を描いている。(214～217)は染付皿で、体部は丸く口縁部は外反する。なかでも(215～217)の文様構成は共通しており、外面は口縁直下に１条の圏線、内面は四方襷文を描いている。皿Ｂ２群に相当する。

（参考文献）

１．森田　勉　1982年「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

２．上田　秀夫　1982年「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

３．小野　正敏　1982年「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

４．間壁　忠彦　1991年『備前焼（考古学ライブラリー60)』　ニューサイエンス社

(2) 石製品

墨書石(168)

A-2地区の土師器埋納遺構SX01の下層から出土した。土師器と一括で取り上げてしまったため、出土状況は不明である。

花崗岩の自然石で、平面形は逆台形、縦15.6cm、横15.15cm、厚3.9cmの扁平な石である。両面に墨で文字が記されているが、片面はほとんど判読不能である。墨書の残りの良い方をA面、他方をB面として説明する。

A面には、縦書きで3行10文字が認められる。比較的明瞭な墨書ではあるが、下辺は墨痕がかすれており、また付着物や石の鉱物などにも妨げられて、判別しにくい所がある。現状で、下記の通り判読した。

「三界
□〔バンカ〕
大日□〔胎カ〕
何日□□」

1行目の「三界」は異論ないところである。

2行目上部の1字は梵字で、種子を表すものと考えられる。付着物が重なっていて判読が難しいが、似かよった形態の梵字としては「ह (バン)」が挙げられる。仮にバンとすれば、金剛界の大日如来を表すことになり、2・3文字目の「大日」と符合する。ただし胎蔵界の大日如来は「अः (アーク)」などで表されるので、4文字目の「胎?」とは矛盾する。

3行目1文字目は「何」で了解できる。2文字目は「日」で1字なのか、下の墨書と一体で1字を構成するのか不明であるが、ここでは「日」で1文字としておく。3文字目は付着物とかすれで判読できない。3文字目の下にやや離れて止めの墨痕のみが残り4文字目の存在を示すが、判読不能である。

全体を見直すと、中央天に梵字を掲げ、その下と両脇に2～4文字を配している。3行のうちには「三界」「大日」など仏教と深く関わる文字が含まれ、全文の意味は不明であるが、供養や呪術的な意味合いを想定できる。

B面にも数箇所に墨書の痕跡が観察でき、全体に文字が記されていたものと考えられる。しかし現状では右上に2文字分、左上に1文字程度が認識できるのみで、この他にもかすかな痕跡は認められたものの、図化できなかった。この中にも梵字が含まれている可能性があるが、判読不能である。

磨製石斧(195)

E-2地区の包含層から出土した。角に稜線をもつ磨製製品の破片で、石斧の側縁部付近と考えられる。現存長6.15cmである。

(3) 木製品

①A，G地区

SD07出土遺物

横槌(W088)、用途不明品(W089)、下駄(W090)、曲物(W091)、漆器椀(W092～W095)、蓋(W096)(W097)、羽子板(W098)、鍬(W100)、桶(W101)、部材(W102)、箸(W103)などが出土している。

横槌(W088)は円柱形の身と棒状の柄からなる。身の中央部分は僅かに窪みがあり、使用によるものと考えられる。

用途不明品(W089)は細長い薄板で、一端をとがらせている。もう一端の形状は不明である。

下駄(W090)の平面形は側辺がまっすぐで、前端が半円形を呈し、後端が後歯の後ろから欠損している。前穴を台の中央にあけ、後穴を後歯の前にあけている。歯は台とほぼ同じ幅で、縦断面がやや台形状である。

曲物(W091)は図化長約47cm、図化幅約13cmを測る、比較的大型品の側板であるが、直径等本来の大きさや形状の復元は難しい。２枚の薄い板を重ね、樺皮による結合により側板となす。底部付近は、底板と結合する樺皮が残る箇所の他、結合穴の痕跡が数箇所残る。

漆器椀(W092)は丸味を帯びた体部で、底部は欠損している。外面は黒漆上に朱で松木が描かれ、内面は朱漆をかける。(W093)は僅かに開きながら立ち上がる体部で、底部は欠損している。外面は黒漆上に朱で松竹等が描かれ、内面は朱漆をかける。(W094)は底部付近で僅かに稜をもってやや開きながら立ち上がる体部で、底部は欠損している。外内面は黒漆をかける。(W095)は僅かに開きながら立ち上がる体部で、底部は欠損している。外面は黒漆上に朱で松竹が描かれ、内面は朱漆をかける。

蓋(W096)は端部を含めてほぼ半分が欠損しているが楕円形状を呈する。板上の長軸、短軸に釘穴と思われる孔を有している。蓋(W097)は半分が欠損しているが、直径約30cmの円形に復元できる。板上には十字状に釘穴と思われる孔を有している。

羽子板(W098)は完形である。板の幅は持ち手に近づくほど狭くなり、左右対象に抉りをいれる。表裏面には模様等は施されていない。

鍬(W100)は大部分が欠損しており、全容は不明であるが、断面形の内側は厚く外側が薄いことや、平面の中央上よりに孔を穿った痕跡が見られることから平面形が半楕円形となる鍬の身と考えられる。

桶(W101)は板を並べて竹製のタガをはめて胴を作った結桶の一部である。平面形はほぼ長方形を呈し、横断面はやや湾曲する。外面の一端にはタガの圧痕と思われる窪みがある。また、窪み部の側面は釘穴が２箇所認められる。

部材(W102)は平面形の一端が僅かに広い長方形を呈し、やや偏平な角材のほぼ中央に方形の孔が貫通している。

箸(W103)は、断面が円形を呈する。両端部は共に細身になる。

SD10出土遺物

網枠(W081)、蓋(W082)、漆器椀(W083)、箸(W084～W086)、人形(W087)などが出土している。

網枠(W081)は大半が欠損しており、形状の復元は難しいが、断面円形の棒材で弧状を呈する。残存する端部はやや細く加工されている。

蓋(W082)は一部欠損するが円形を呈する小型のものである。中央に２対の紐孔をあけ、紐ないし棒材

を固定して把手をつけたものと考えられる。

漆器椀(W083)は丸味を帯びた体部で底部は欠損する。外内面に朱漆をかけ、外面には黒漆で二羽の鶴が1対となって描かれている。

箸(W084)は小割にした木片を削り棒状に整形するものである。断面は偏平な方形状を呈し、上端より下端側が若干細身となる。箸(W085)は断面が偏平な方形状を呈し、両端が若干細身となる。箸(W086)は比較的短く、断面はほぼ方形状を呈し、両端が若干細身となる。

人形(W087)は薄く細長い上端を圭頭状にして、下端をとがらせたものである。

などが出土している。

P.04出土遺物

掘立柱列の柱材として(W104)が出土している。

柱材(W104)は断面が方形状を呈する角材である。下端部は平坦に仕上げる。表面は被熱により炭化している。

ピット出土遺物

掘立柱列の柱材として〔W219〕が出土している。※〔〕は写真のみ

柱材〔W219〕は断面が不定円形状を呈する。下端部は平坦に仕上げる。表面は被熱により炭化している。

包含層出土遺物

鍬(W099)、田下駄(W106～W108)、漆器椀(W110～W114)、蓋(W118)、馬形(W119)、曲物〔W220〕、用途不明品(W105)(W109)(W115～W117)などが出土している。この内、(W107～W109)、(W115～W119)は中世面下の包含層(第4層)で、奈良時代のものと考えられる。

鍬(W099)は半分近くが欠損する。身の横断面では内側を厚く縁を薄くするもので、中央上寄りに平面が台形となる孔をあける。

田下駄(W106)は平面形が長方形を呈し、足板両端の左右から三角形の切欠きをいれるものである。田下駄(W107)は一部欠損するが、平面形がやや幅の狭い長方形状を呈する。両側端部に2箇所ずつ三角形状の切り込みを施す。枠を有しないタイプの田下駄である。田下駄(W108)は平面形が長方形を呈し、足板の前半部の左右に方形の孔を2箇所ずつあけ、後半部では端部2箇所と中央に1箇所に方形の孔をあける。

漆器椀(W110)は丸味を帯びた体部を呈し、底部が欠損する。外面の黒漆上に朱漆により松木、鶴、亀が描かれ、内面は朱漆をかけられる。漆器椀(W111)は体部が欠損する。高台は1cm弱と低めである。外面及び高台内側に黒漆がかけられ、体部内面は朱漆がかけられる。漆器椀(W112)は丸味を帯びた体部に、高さ約2.0cmの高台をもち、口縁部は欠損している。高台内側は低く削られる。外面及び高台内側は黒漆がかけられ、内面は朱漆がかけられる。漆器椀(W113)は高台部の一部である。外面及び高台内側は黒漆がかけられ、内面は朱漆がかけられる。漆器椀(W114)は高さ約2.0cmの高台である。内側も低く削られる。外面は黒漆がかけられ、内面は黒漆上に朱漆で「一」字状の線が描かれている。

蓋(W118)は一部が欠損しているが、平面形が直径約19.0cmの円形を呈する。上部は平坦ながら僅かに

凹みをもち、下部は外縁から約2.0cm内に削りを入れ、低い段状を呈する。端部及び中央には１箇所ずつ穿孔がある。

馬形(W119)は偏平な板を極めて象徴化された馬の形状で整形している。上部には鞍部が表現されているが、目などの表現はされていない。

曲物〔W220〕は残存状況が悪く、復元は難しいが、円形曲物の側板と考えられる。樺皮で綴じ合わせるための孔が認められる。

用途不明品(W105)は断面が不定の七角形を呈する材である。残存部分の端部は平坦に仕上げる。遺構には伴わず、不明確だが、柱材の可能性が考えられる。用途不明品(W109)は断面がやや偏平な角材で、一端を枘組状に細く加工し、端部より切り込みをいれている。用途不明品(W115)は偏平な小振りの角材で、上端がやや圭頭状に整形され、中央部に抉りが施される。用途不明品(W116)は上端部が断面方形状を呈する棒材で、上部から細く削り、栓等の用途が考えられる。用途不明品(W117)は断面円形状の細い棒材で、下端部にかけて更に細く削り、尖らせている。

※〔〕は写真のみ

②Ｂ地区

SD01出土遺物

箸(W123～W129)（多量に出土したものの内７点を図化した)、曲物柄杓(W131)、切匙(W132)、漆器椀(W133)(W134)、円板形木製品(W135)、曲物(W136)(W137)、長方形曲物(W138)(W139)、下駄(W142)(W143)、用途不明品(W144～W146)、つけ木(W147)(W148)などが出土している。

箸(W123)は小割にした木片を削り棒状に整形したものである。断面は円形状を呈し、両端共に若干細身となる。箸(W124)は断面が偏平な方形状を呈し、両端共に若干細身となる。箸(W125)は断面が円形状を呈し、両端共に細身となる。箸(W126)は断面が円形状を呈し、両端共に細身となる。箸(W127)は断面が楕円形状を呈し、両端共に細身となる。箸(W128)は断面が偏平な方形状を呈し、両端共に細身となる。(W129)は偏平な方形状を呈し、両端共に細身となる。

曲物柄杓(W131)は断面が偏平な方形状を呈する棒状の柄である。棒の一端が尖り、尖った側に身である小型の曲物を取り付ける。また、固定のための釘孔が残る。

切匙(W132)は偏平な板の一端を半楕円形状に整形したもので、半楕円状部分の横断面は端部にかけて薄くなり、刃部状の整形を施す。

漆器椀(W133)は丸味を帯びた体部に、高さ約1.0cmの高台をもつものである。体部外面及び高台内側は黒漆がかけられ、体部には朱漆で蜻蛉が描かれる。内面は朱漆がかけられる。(W134)は丸味を帯びた体部に、高さ約1.0cmのやや裾広がりの高台をもつものである。体部外面及び高台内側は黒漆がかけられ、内面は朱漆がかけられる。

円板形木製品(W135)は丁寧に加工された偏平な板で、直径約12.0cmの円板である。曲物の底板と考えられるが、側に釘孔は認めらない。

曲物(W136)は一部が欠損するが、直径約13.0cmの底板である。残存部には、２孔を１対とする釘孔が２箇所あり、計４箇所の釘孔で固定したものである。曲物(W137)は半分以上が欠損するが、直径約13.0cmの底板である。残存部には、側に１孔の釘孔があり、４箇所あったと考えられる。

長方形曲物(W138)は半分程が欠損するが、一辺約10.0cmの小型のもので、平面形が四方の隅を切り落

として八角形状を呈する底板である。残存部分には、樺皮で側板と綴じ合わせるための孔が２箇所ある。長方形曲物(W139)は半分程が欠損するが、一辺約32.0cmの大型のもので、平面形が四方の隅を切り落として八角形状を呈する底板である。残存部分には、樺皮で側板と綴じ合わせるための２孔１対の孔が２箇所、釘孔が２箇所ある。

下駄(W142)は平面形が小判形を呈する小型のものである。前穴を台の中央にあけ、後穴を後歯の前にあけている。歯は台とほぼ同じ幅で、断面は低い方形状である。下駄(W143)は平面形が前後の端を弧形にし、前幅よりも後幅が僅かに狭くなっている。前穴は中央にあけ、後穴は後歯の前にあけている。歯は下辺幅が台よりも僅かに広く、断面は方形状である。

用途不明品(W144)は、平面形が長軸約32.0cm、短軸約8.0cmの楕円形を呈し、中央に円形の孔を有する板(W144ａ)と、断面方形の棒材を栓の様な形に加工した(W144ｂ)からなるものである。(W144ｂ)の中央やや下寄りには釘孔と思われる孔があり、(W144ａ)の孔に(W144ｂ)を差し込んだ後、釘孔に釘あるいは紐等を通し固定したものと考えられる。(W145)は一端がやや幅広の長方形状の板である。両端には台形状若しくは半円形の窪みがある。(W146)は復元平面形が方形状と考えられる部材である。角材に三角形状に切り込む加工を施し、断面が偏平な方形状を呈する釘が打たれている。

つけ木(W147)は偏平な棒状の木片を削って一端を細くし、先端は被熱により焦げている。(W148)は棒状の木片を削って一端を細くし、先端は被熱により焦げている。

SD02出土遺物

下駄(W149)が出土している。

下駄(W149)は平面形が隅丸長方形を呈する。前穴を台の中央にあけ、後穴を後歯の前側にあける。歯は台とほぼ同じ幅で、断面形は低い方形状である。

SD04出土遺物

曲物柄杓(W150)、漆器椀(W151)〔W214〕、桶(W152)、網枠(W153)などが出土している。

曲物柄杓(W150)は断面が偏平な方形状を呈する棒状の柄である。棒の一端が尖り、尖った側に身である小型の曲物を取り付ける。また、固定のための釘孔が残る。

漆器椀(W151)は底部付近のみ残存し、体部及び高台端部は欠損している。外面及び高台内側に黒漆がかけられ、内面に朱漆がかけられる。漆器椀〔W214〕は体部の破片である。外面の黒漆上に朱で亀を描いている。内面は朱漆がかけられる。

桶(W152)は結桶の一部である。平面形はほぼ長方形を呈し、横断面はやや湾曲する。下端部には底板と合わせるための釘孔が２箇所認められる。

網枠(W153)は断面円形の棒材を直径約64.0cmの輪状に整形している。輪状にした枠の両端同士を約18.0cm重ね合わせ、樺皮や紐等の繊維状のもので巻いて固定する。

※〔〕は写真のみ

SD05出土遺物

箸(W120～W122)などが出土している。

箸(W120)は断面が五角形若しくは円形状を呈する大型のものである、一端は欠損し、もう一端は若干

細身となる。箸(W121)は断面が方形状を呈する。両端は共に若干細身となる。箸(W122)は断面が偏平な三角形状を呈し、両端は共に細身となる。

SK01出土遺物

箱(W154～W157)、用途不明(W158～W161)(W165)(W174～W177)、長方形曲物(W162)(W163)、楕円形曲物(W164)、切匙(W166)、箸(W167)(W168)、漆器椀(W169～W172)〔W213〕〔W216〕〔W217〕〔W218〕、桶(W173)、茶筅(W178)、将棋の駒(W179)などが出土している。

※〔〕は写真のみ

箱(W154)は箱枠(W154ａ)(W154ｂ)(W154ｃ)(W154ｄ)の組み合わせからなり、組み合わせ時において長辺32.70cm、短辺30.50cm、31.00cmを測るやや歪んだ方形状を呈する。(W154ａ)の平面形は長辺31.55cm、短辺2.60cm、厚み0.75cmの偏平な板材である。(W154ｂ)の平面形は長辺31.15cm、短辺2.25cm、厚み0.80cmの偏平な板材である。(W154ｃ)の平面形は長辺31.45cm、短辺2.45cm、厚み0.80cmの偏平な板材である。(W154ｄ)の平面形は長辺29.65cm、短辺2.30cm、厚み0.70cmの偏平な板材である。それぞれ下端部には底板を留める釘孔及び釘跡があり、枠同士を組み合わせるための釘孔を側端部にあけている。箱は、枠の組み合わせ部と底板接合部分を除いて塗が施された痕跡が残り、箱枠と底板を組み合わせた後に塗を施したことが窺える。また、対面する(W154ｂ)と(W154ｄ)は、上端部にも釘孔を有しており把手等をつけたとも考えられる。なお、本報告では器種名を便宜上箱としているが、その用途としては、外内面に塗を施した盆のようなものではないかと考えられる。(W155)は(W154)とほぼ同じ大きさだが、一端が欠損している。下端部及び側端部には釘孔がある。(W156)は半分以上が欠損する、断面が偏平な長方形状を呈する板で、側端部に釘孔が僅かに残る。(W157)は全体の２／３程が欠損すると考えられるが、方形状の底板と考えられる。一辺が約31.0cmで、端部が残存する三辺の側には釘孔がある。組み合わせた(W154)の内寸とほぼ同一であるため、(W154)と同一個体の可能性がある。

用途不明品(W158)は平面形が長辺約55.0cmの細長い長方形状で下端部に浅い抉りがあり、上下端部に三角形状の切り込みを持つ。側面に円形の孔を２箇所有し、上端部に２孔１対の釘孔が５箇所ある。

箱の台座等が考えられる。(W159)は平面形が緩やかな弧状を呈し、下端部に浅い抉りを持つ。両端部には釘が残る。(W160)は平面形が細い長方形状を呈し、断面形が台形状で、両端付近に円形の孔を２箇所あける。一端の側部には切り込みを入れ薄板を挟んでいる。(W161)は平面形が中央でやや膨らみを持つ長方形状の角材である。中央に方形の枘を切り、板材を挟んでいる。把手等の部材が考えられる。(W165)は断面形がやや丸味を帯びた台形状の棒材で、一端に加工痕が残る。(W174)は小振りの偏平な板材で、両端に方形の切り込みをいれる。(W176)(W177)は棒を厚み約4.0cmで切ったものである。加工痕がなく、側面には樹皮が残る。また、(W175)は(W176)(W177)と同様であるが、木心部に円孔を有している。

長方形曲物(W162)は半分程が欠損するが、一辺約29.0cmの比較的大型のもので、平面形が四方の隅を切り落として八角形状を呈する底板である。残存部分には、樺皮で側板と綴じ合わせるための２孔１対の孔が３箇所ある。(W163)は半分程が欠損するが、一辺約27.0cmの比較的大型のもので、平面形が四方の隅を切り落として八角形状を呈する底板である。残存部分には、樺皮で側板と綴じ合わせるための２孔１対の孔が１箇所ある。

楕円形曲物(W164)は大半が欠損しているが、長軸31.5cmの大型のもので、残存部分には、樺皮で側板と綴じ合わせるための２孔１対の孔が２箇所ある。

切匙(W166)は偏平な板の一端を半楕円形状に整形したもので、半楕円状部分の横断面は端部にかけてやや薄くなり、刃部状の整形を施す。

箸(W167)は断面が楕円形を呈する、上端部はやや欠損するが、下端部は細身となる。(W168)は断面が円形を呈する。比較的短く、上下端部共に丸味を持つ。

漆器椀(W169)はやや開き気味に丸味をもって立ち上がる体部に、僅かに内側を削る高台を持つものである。体部下位には穿孔が1箇所ある。外面及び底部は黒漆をかけ、内面は朱漆をかける。漆器椀(W170)は口縁部で僅かに外反する口縁部をもつ丸味を帯びた体部で、底部は欠損する。外面は黒漆をかけて朱漆で模様が描かれ、内面は朱漆をかける。漆器椀(W171)は丸味を帯びた体部に断面逆台形状に削られた低い高台を持つもので、口縁部は欠損している。外面及び高台内側は黒漆をかけ、体部には朱漆で模様が描かれ、内面は朱漆をかける。漆器椀(W172)は断面三角形に削られた比較的高めの高台で、体部は欠損している。外内面及び高台内側は黒漆がかけられる。漆器椀〔W213〕は体部一部である。外面は黒漆上に朱漆で模様描き、内面は朱漆がかけられる。漆器椀〔W215〕は体部の一部である。外面は黒漆上に朱漆で鶴と亀が描かれ、内面は朱漆がかけられる。漆器椀〔W216〕は体部の一部である。外面は黒漆上に模様が描かれる。漆器椀〔W217〕は体部の一部である。外面は黒漆上に朱漆で鶴等が描かれ、内面は朱漆がかけられる。漆器椀〔W218〕は体部の一部である。外面は黒漆上に朱漆で亀が描かれ、鶴の足の一部も認められる。また、内面は朱漆がかけられる。

桶(W173)は結桶の破片である。下端幅より上端幅が広く、口縁に近づくほど僅かに幅広となる。外面にはタガのものと考えられる圧痕が認められる。また、側面には固定のための釘跡が上下にある。

茶筅(W178)は横断面がやや歪んだ円筒状形を呈する竹製のもので、節の部分から縦に細く割って穂としているが、穂の部分は大半が欠損している。

将棋の駒(W179)は非常に薄い板を駒の形状に整形し、駒上には「金將」の文字が墨書で書かれている。

包含層出土遺物

箸(W130)、箱(W140)(W141)、下駄(W180)、楕円形木製品(W181)、円形木製品(W182)、楕円形曲物(W183)、桶(W184)、用途不明品(W185～W187)、部材(W188)、曲物(W189)、斎串(W190)、田下駄(W191～W193)、板材(W194)などが出土している。

箸(W130)は断面が楕円形を呈する。上端部はやや丸味があり、下端部はやや細身となる。

箱(W140)は平面形が細長い長方形状で、両端部が組み合わせるために互い違いに切り込みをいれてL字状となす。両端部の側面には枠同士の結合のための釘孔を持ち、下端部は底板との結合のための釘跡がある。箱(W141)は平面形が細長い長方形状で、両端部が組み合わせるために互い違いに切り込みをいれてL字状となす。両端部の側面には枠同士の結合のための釘孔を持ち、下端部は底板との結合のための釘跡がある。

下駄(W180)は平面形がやや幅広の小判形を呈している。前穴をやや左に片寄せ、後穴を後歯の前にあけている。歯は台よりもやや幅広で、縦断面が方形である。

楕円形木製品(W181)は半分程が欠損するが、長軸約15.0cmの楕円形の薄い板材である。現状では結合の孔痕等はなかった。

円形木製品(W182)は半分以上が欠損するが、直径約10.0cmの円形を呈する。現状では結合の孔痕等はなかったが、曲物の蓋と考えられる。

楕円形曲物(W183)は半分以上が欠損するが、長軸約33.0cmの楕円形を呈する。現状では樺皮で側板と結合するための孔痕は認められなかったが、曲物の底板と考えられる。

桶(W184)は結桶の破片である。下端幅より上端幅が広く、口縁に近づくほど僅かに幅広となる。外面にはタガのものと考えられる圧痕が認められる。横断面は僅かに内彎する。

用途不明品(W185)は半分以上が欠損しているが、平面形が長辺約36.0cmの長方形状で、両端部が若干弧状をなす。中央に方形状の孔が2箇所ある。用途不明品(W186)は偏平で細長い板状で、両端部を斜めに面取りしている。用途不明品(W187)は、欠損部分が多く、形状の復元は難しいが、厚み約1.5cmの厚めの板である。一部に円形と考えられる孔を1箇所穿っている。

部材(W188)は長さ約50.0cmの棒状で、僅かに弧状をなし、両端部共に尖らせている。上端部付近は側面に抉りをいれ、弧の内側を削り、面を作っている。

曲物(W189)は直径約9.0cm、高さ約7.0cmの小型のものである。薄板を円筒形に整形し、樺皮で綴じ合わせて側板となし、側板の上下にタガを綴じ合わせる。底板は側板の内径に合わせており、釘留めで固定する。

斎串(W190)は上部が欠損しており形状は不明で、下端部は尖らせている。

田下駄(W191)は平面形が長方形を呈し、一端に3箇所の紐孔、もう一端に2箇所の紐孔がある。田下駄(W192)は平面形が下辺部の両側に方形状の突起をもつ台形状を呈する。突起部には、対面する同形の部材を結合するための方形の孔があけられ、上端部には紐孔が2箇所あけられている。田下駄(W193)は幅狭の上辺部と幅広の下辺部をもつ六角形を呈する。上端には1箇所、下端部には2箇所、三角形状の切り込みを持つ。

板材(W194)は長辺約160.0cm、短辺約32.0cmの長方形状を呈する大型の板材である。表面には加工痕が顕著に残る。平面上には僅かに貫通する三角形上の切り込みや端部付近に方形状の孔が穿たれている。

③C地区

SK08出土遺物

漆器椀〔W215〕、用途不明品〔W221〕などが出土している。

漆器椀〔W215〕は体部の一部である。外面は黒漆上に朱漆で鶴と亀が描かれ、内面は朱漆がかけられる。

用途不明品〔W221〕は、極薄い板が20枚程度固まって出土したものである。大きさには若干のばらつきがあるが、概ね12.0cm程度である。

※〔〕は写真のみ

包含層出土遺物

漆器椀(W195)、切匙(W196)、用途不明品(W197)(W198)などが出土している。

漆器椀(W195)は高さ約3.0cmで、畳付部にかけてやや裾広がりになる高台部をもつ漆器椀の底部で、高台内側も深く削られている。外面及び高台内側は黒漆がかけられ、内面は朱漆がかけられる。

切匙(W196)は偏平な板の一端を半楕円形状に整形したもので、半楕円状部分の横断面は端部にかけて僅かに薄くなり、刃部状の整形を施す。

用途不明品(W197)は平面形が長方形状を呈し、下半部に方形の孔がある。用途不明品(W198)は平面形

が長辺約7.0cmの長方形状を呈し、両端部に方形状の突起をもつ。一端は釘孔があるが、一端は欠損している。

④E地区

包含層出土遺物

木鏃(W199)、つけ木(W200)、下駄(W201)、方形板材(W202)、建築部材(W203)などが出土した。

木鏃(W199)は長さ約9.0cmで、断面三角形の細長い鏃身部と篦被部、篦代部からなり、三稜鏃を模したものであり、弥生時代のものと考えられる。

つけ木(W200)は棒状の木片を断面三角形状に削り、一端を尖らせている。尖った部分は火を受け炭化している。

下駄(W201)は若干欠損するが、下駄の前歯である。平面形が台形状を呈し、上辺部の中央に前穴に差し込む枘を持つ。

方形板材(W202)は平面形が一辺10.0cmの方形を呈し、厚さ約1.5cmの板である。中央よりやや外よりに紐孔とみられる孔が2箇所あり、蓋と考えられる。

建築部材(W203)は直径約12.0cmの棒状で、大半が欠損する。下端部を削りやや尖らせる加工を施しており、柱材と考えられる。

⑤F地区

SD14出土遺物

箸(W209)(W210)などが出土している。

箸(W209)は断面が円形を呈する。両端部は共に細身となる。箸(W210)は断面が円形を呈する。両端部は共に細身となる。

包含層出土遺物

曲物(W204～W208)、用途不明品(W211)(W212)などが出土している。

曲物(W204)は一部が欠損するが、平面形が直径約29.0cmの円形を呈する底板である。端部付近には側板を樺皮で綴じ合わせるための2孔1対の孔を4箇所あける。表面は被熱により炭化している。(W205)は半分程が欠損するが、直径約28.0cmの円形を呈する。中央付近に円孔の痕跡があり、蓋と考えられる。(W206)は大半が欠損するが、円形の底板である。残存部分の端部付近には側板を樺皮で綴じ合わせるための2孔1対の孔が1箇所あり、樺皮も残存する。表面は被熱により炭化している。(W207)は半分以上が欠損するが、円形を呈する。釘跡や綴じ孔等の側板と綴じ合わせるものがなく、蓋と考えられる。(W208)は大半が欠損するが、円形を呈すると考えられる。残存部分の端部付近には側板を樺皮で綴じ合わせるための2孔1対の孔が1箇所あり、樺皮も残存する。

用途不明品(W211)は断面円形状を呈する棒状で、端部は丸くおさめる。(W212)は平面形が長軸約35.0cmの楕円形を呈すると考えられるが、半分以上が欠損している。内面と考えられる側は中央寄りに抉りをいれ、外面と考えられる側には削り出しの脚台の様な突出部がある。刳り物の容器の未製品の可能性も考えられる。

(4) 金属器

銅銭（M008～M010）

M008はA-1区の溝SD10の下層から出土した。赤銅色を呈するが、摩滅が著しくて文字等はまったく観察できず、表裏の判断さえつかない。直径2.15cm、厚0.5mm、方孔の一辺7.0mm、重1.6gである。

M009はA-3区の包含層から出土した。表面には天地右左の順に「皇宋通寶」の文字が鋳出されている。方孔の内側は、四方に溝を刻み込んでいる。直径2.4～2.45cm、厚1.0mm、方孔の一辺7.5mm、重3.1gである。

M010はB-5区の土坑SK01から出土した。遺存状況が悪く、外縁も所々欠けている。表面の文字はほとんど判読できず、4文字のうち、辛うじて地の字が「元」であるらしいことが読み取れる。直径2.4cm、厚1.0mm、方孔の一辺6.0mm、重2.5gである。

羽釜（M013）

B-5区の土坑SK01から出土した。現状で縦12.25cm、横9.35cm、重37.4gの、緩く弯曲した鉄板で、外面に2条の突帯、突帯間に1箇所の珠文が鋳出されている。寸胴形の羽釜の胴部とみられ、復元した直径は約36cmである。

環状金具（M018）

C-4区の土坑SK08から出土した。針金を折り曲げて環を作っている。単独で出土しているため、使用状況は不明である。縦3.35cm、横2.6cm、重2.4gである。

針（M019）

A-1区の溝SD10から出土した。一端を尖らせ、他端を瘤状にしており、針としておく。出土時には表面が赤褐色を呈しており、錆もほとんど発生していなかった。この状況が材質の違いか、塗料によるものかは不明である。全長6.15cm、幅2.0～2.5mm、重1.9gである。

釘（M020・M021）

M020はB-5区の土坑SK01から出土した。楕円形に折り曲げられており、先端を欠失する。頭部は三角形に広がり、端部が軽く折れ曲がる。現状で3.2×2.7cm程度の大きさだが、本来の全長は8cm以上になる。幅3.0～3.5mm、重2.8gである。

M021はG-2区の包含層から出土した。完形で、頭部は平たく延ばして、丁寧に折り曲げられている。全長9.65cm、幅3.0～5.0mm、重9.2gである。

表１　土器・陶磁器他一覧表

平成10年度調査分

No	種別	器種	地 区	出土遺構	口径	器高	底径	色　調	胎　土	備　考
001	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD202	(8.5)	(1.95)	(4.0)	10YR7/2にぶい黄橙	φ1mm石粒含む	スス付着
002	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD202	(10.0)	(2.05)	(5.3)	10YR8/3浅黄橙	φ1mm以下の石粒含む	スス付着
003	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD202	(15.0)	(2.15)	(6.9)	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
004	染付	碗	A	SD202	(13.0)	(4.1)	－	2.5GY6/1オリーブ灰	密	
005	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD204	(8.4)	(2.15)	(3.4)	2.5Y7/2灰黄	φ2mm石粒含む	スス付着
006	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD204	(12.0)	(2.15)	－	2.5Y8/2灰白	φ1mm以下石粒含む	スス付着
007	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD204	(13.0)	(2.15)	－	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
008	染付	碗	A	SD204	(12.0)	(5.1)	－	8/N 灰白	密	
009	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	9.75	(1.95)	(5.2)	2.5Y7/1灰白	砂粒若干含	スス付着
010	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD206	(8.2)	(1.85)	(3.6)	2.5Y7/2灰黄	φ1～2mmの石粒含む	スス付着
011	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	8.4	1.8	3.65	2.5Y8/1灰白	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
012	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	(8.5)	(2.1)	(3.8)	5Y7/1灰白	砂粒若干含	スス付着
013	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD206	8.9	1.95	4.1	2.5Y8/2灰白	φ1～3mmの石粒含む	完形
014	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	(9.0)	(2.35)	(4.4)	2.5Y7/1灰白	砂粒若干含	スス付着
015	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	(9.2)	(2.05)	(4.7)	5Y5/1灰	φ1mm程度の石粒含む	スス付着
016	土師器	Ⅲ(１類)	A	SD206	9.7	2.3	5.05	10YR8/2	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
017	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	(12.0)	(2.45)	(6.5)	2.5Y7/2灰黄	φ1mm～砂粒含む	スス付着
018	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	12.3	2.0	6.7	10YR7/4にぶい黄橙	φ1～2mmの小石含む	
019	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	(13.0)	(2.3)	(7.6)	2.5Y7/2灰黄	φ1mm程度の石粒含む	スス付着
020	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD206	12.95	2.5	6.4	2.5Y7/3浅黄	密	スス付着
021	施釉陶器	天目碗	A	SD206	11.25	5.3	(5.05)	10YR3/1黒褐	細かい	建窯
022	染付	碗	A	SD206	(14.0)	(4.9)	－	5G7/1明緑灰	密	
023	白磁	Ⅲ	A	SD206	－	(1.0)	(6.3)	8/N 灰白	密	
024	無釉陶器	擂鉢	A	SD206	－	(7.6)	(24.4)	10YR7/2にぶい黄橙	φ1～5mmの石粒含む	越前
025	青磁	Ⅲ	A	SD201	(10.0)	(3.0)	(5.0)	7.5GY7/1明緑灰	密	
026	土師器	Ⅲ(３類)	A	SD205	(7.6)	(2.05)	(2.7)	2.5Y8/2灰白	砂粒含む	スス付着
027	染付	碗	A	SD208	(12.0)	(1.55)	－	2.5GY8/1灰白	密	
028	土師器	Ⅲ(１類)	A	旧河道	(8.5)	(1.85)	(4.0)	10YR7/2にぶい黄橙	φ1～2mmの石粒含む	スス付着
029	土師器	Ⅲ(１類)	A	洪水砂	8.75	2.1	3.7	5Y7/1灰白	砂粒含む	完形
030	土師器	Ⅲ(３類)	A	旧河道	(9.2)	(1.85)	(4.7)	10YR8/2灰白	φ3mm石粒含む	スス付着
031	土師器	Ⅲ(１類)	A	洪水砂	9.85	2.3	(4.0)	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
032	土師器	Ⅲ(３類)	A	洪水砂	(13.3)	(2.3)	(7.0)	10YR8/3浅黄橙	砂粒含む	スス付着
033	土師器	Ⅲ(４類)	A	洪水砂	(14.8)	(2.6)	(4.3)	5YR7/6橙	φ1～2mmの石粒含む	
034	染付	小杯	A	旧河道	(5.5)	(3.2)	－	5G7/1明緑灰	密	
035	染付	碗	A	旧河道	－	(1.55)	(3.9)	8/N 灰白	密	
036	白磁	Ⅲ	A	洪水砂	－	(1.55)	(6.5)	2.5GY8/1灰白	密	
037	青磁	Ⅲ	A	洪水砂	(10.9)	(2.1)	－	7.5GY8/1	密	
038	白磁	Ⅲ	A	洪水砂	(11.4)	(2.9)	(4.6)	7.5Y7/1灰白	密	
039	白磁	Ⅲ	A	洪水砂	－	(0.9)	(6.0)	2.5GY8/1灰白	密	
040	無釉陶器	擂鉢	A	旧河道	(32.7)	(9.2)	－	5YR6/8橙	φ1～2mmの石粒含む	越前
041	瓦質土器	擂鉢	A	旧河道	(34.8)	(2.05)	－	4/N 灰		
042	無釉陶器	擂鉢	A	旧河道	(35.9)	(6.7)	－	7.5YR6/1褐灰	φ5mmの石粒含む	越前
043	無釉陶器	壺	A	旧河道	－	(4.0)	(10.0)	10R4/2灰赤	φ1～3mmの石粒含む	備前
044	瓦質土器	火鉢	A	旧河道	－	(3.6)	(12.8)	3/N 暗灰	φ1mm石粒含む	
045	土師器	Ⅲ(３類)	A	P207	(8.5)	(1.9)	(4.0)	5YR6/4にぶい橙	砂粒含む	
046	青磁	Ⅲ	A	P202	(10.3)	(2.55)	－	2.5GY7/1明オリーブ灰	密	
047	土師器	Ⅲ(５類)	A	P209	(7.9)	(2.8)	(3.6)	2.5Y8/2灰白	砂粒若干含	
048	染付	Ⅲ	A	P209	(10.4)	(2.75)	(4.05)	10G7/1明緑灰	密	
049	白磁	碗	A	包含層	(5.8)	(2.25)	－	7.5Y8/1灰白	密	
050	白磁	碗	A	包含層	(7.2)	(3.85)	2.6	2.5GY8/1灰白	密	
051	白磁	碗	A	包含層	－	(2.05)	(3.1)	8/N 灰白	密	
052	染付	Ⅲ	A	包含層	－	(1.7)	3.95	7.5GY7/1明緑灰	密	
053	施釉陶器	鉢(香炉)	A	包含層	－	(3.45)	－	5Y6/3オリーブ黄	密	瀬戸美濃
054	施釉陶器	碗	A	包含層	－	(2.8)	(3.0)	2.5Y2/1黒	密	瀬戸美濃
055	施釉陶器	天目碗	A	包含層	(9.7)	(4.85)	－	7.5YR3/4暗褐	密	瀬戸美濃
056	青磁	碗	A	包含層	－	(4.3)	5.55	10Y5/2オリーブ灰	密	
057	土師器	Ⅲ(３類)	A	包含層	(8.1)	(1.7)	(4.0)	10YR7/1灰白	砂粒若干残る	スス付着
058	土師器	Ⅲ(１類)	A	包含層	8.25	2.5	4.4	5Y7/1灰白	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
059	土師器	Ⅲ(１類)	A	包含層	8.3	2.1	2.55	2.5Y7/2灰黄	密	スス付着

No	種別	器種	地 区	出土遺構	口径	器高	底径	色　調	胎　土	備　考
060	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	(8.4)	(2.3)	(2.8)	10YR7/2にぶい黄	砂粒含む	スス付着
061	土師器	Ⅲ(3類)	A	包含層	8.6	1.8	3.8	2.5Y7/1灰白	砂粒混じる	スス付着
062	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	8.6	1.8	3.2	2.5Y6/2灰黄	砂粒含む	スス付着
063	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	8.75	1.75	3.9	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	完形　スス付着
064	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	8.75	2.2	3.75	2.5Y8/2灰白	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
065	土師器	Ⅲ(3類)	A	包含層	9.55	2.1	4.4	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
066	白磁	Ⅲ	A	包含層	(9.7)	(1.75)	－	5Y8/1	密	
067	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	9.85	2.0	5.25	2.5Y7/1灰白	φ1～7mmの石粒含む	スス付着
068	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	12.05	2.3	6.95	2.5Y7/2灰黄	φ1～4mmの石粒含む	
069	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	12.05	2.3	6.7	2.5Y7/2灰黄	φ2～3mmの石粒含む	スス付着
070	土師器	Ⅲ(1類)	A	包含層	(14.9)	(2.25)	(6.0)	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
071	染付	碗	A	包含層	(11.9)	(5.2)	(3.6)	5GY7/1明オリーブ	密	
072	染付	碗	A	包含層	(13.0)	(4.7)	－	2.5GY8/1灰白	密	
073	染付	碗	A	包含層	(13.4)	(4.05)	－	7.5GY8/1明緑灰	密	
074	染付	碗	A	包含層	(14.3)	(4.2)	－	10BG7/1明青灰	密	
075	染付	小杯	A	包含層	(6.0)	(2.3)	2.5	2.5GY8/1灰白	密	
076	染付	碗	A	包含層	-	(2.1)	(4.05)	5G7/1明緑灰	密	
077	染付	碗	A	包含層	-	(2.3)	(4.8)	10GY8/1明緑灰	密	
078	染付	碗	A	包含層	-	(3.0)	(4.6)	10GY8/1明緑灰	密	
079	染付	碗	A	包含層	-	(3.9)	(4.5)	5G7/1明緑灰	密	
080	白磁	Ⅲ	A	包含層	-	(1.75)	(6.5)	2.5GY8/1灰白	密	
081	白磁	Ⅲ	A	包含層	(12.0)	(2.9)	(6.8)	5Y7/2灰白	密	
082	青磁	碗	A	包含層	-	(4.3)	5.0	7.5GY7/1明緑灰	密	破損部接合痕
083	青磁	碗	A	包含層	(15.9)	(5.55)	－	10Y5/2オリーブ灰	密	
084	瓦質土器	火鉢	A	包含層	－	(3.0)	(3.8)	3/N暗灰	φ1mmの石粒含む	脚部のみ
085	土師器	短頸壺	A	包含層	(7.8)	(5.45)	(7.8)	2.5Y4/1黄灰	φ1～4mmの石粒含む	胴径11.2
086	瓦質土器	短頸壺	A	包含層	(8.1)	(5.35)	－	3/N暗灰	φ1～2mmの石粒含む	胴径11.0
087	瓦質土器	擂鉢	A	包含層	-	(4.7)	(8.6)	5Y5/1灰	φ1～2.5mmの石粒含む	
088	瓦質土器	擂鉢	A	包含層	(21.2)	(9.0)	－	3/N暗灰	φ1～3mmの石粒含む	
089	瓦質土器	擂鉢	A	包含層	(23.2)	(8.05)	－	4/N灰	φ1～5mm粒含む	
090	瓦質土器	擂鉢	A	包含層	(25.4)	(8.5)	(11.0)	2.5Y6/2灰黄	φ1～5mm石粒含む	
091	瓦質土器	擂鉢	A	包含層	(30.9)	(8.5)	－	3/N暗灰	φ1～3mmの石粒含む	
092	土師器	甕	A	包含層	(16.6)	(4.9)	－	10YR7/3にぶい黄橙	φ2～3mmの石粒含む	スス付着
093	土師器	甕	A	包含層	(17.7)	(4.3)	－	2.5Y4/1黄灰	φ1mm以下の砂粒含む	スス付着
094	土師器	甕	A	包含層	(14.0)	(5.95)	－	10YR6/2灰黄褐	φ1～3mm大の石粒含む	
095	土師器	甕	A	包含層	(19.9)	(5.45)	－	10YR6/3にぶい黄橙	φ2～4mmの石粒含む	スス付着
096	土師器	甕	A	包含層	(14.6)	(7.2)	－	10YR6/2灰黄褐	φ5mm大の石粒含む	スス付着
097	土師器	甕	A	包含層	(17.5)	(8.4)	－	10YR5/2灰黄褐	φ1～5mm石粒含む	スス付着
098	土師器	甕	A	包含層	(17.1)	(7.5)	－	10YR7/2にぶい黄橙	φ1～3mmの石粒含む	
099	須恵器	杯	A	包含層	(9.4)	(3.5)	(5.2)	6/N灰	φ1～2mmの石粒含む	最大径11.6
100	土師器	甕	A	包含層	(19.2)	(6.4)	－	10YR7/3にぶい黄橙	φ6mm石粒含む	
101	土師器	甕	A	包含層	(18.4)	(16.9)	－	7.5YR4/2灰褐	φ3～4mmの石粒含む	胴径27.6
102	土師器	甕	A	包含層	17.7	(15.6)	－	10YR4/2灰黄褐	φ5mm大の石粒含む	胴径38.4
103	石製品	砥石	A	包含層	－	－	－			
104	石製品	砥石	A	包含層	－	－	－			
105	瓦質土器	火鉢	B	包含層	-	(3.25)	(4.25)	7.5Y6/1灰	石粒含む	脚部のみ
106	瓦質土器	擂鉢	B	包含層	-	(3.15)	(9.9)	3/N暗灰	砂粒少し残る	
107	無釉陶器	甕	B	包含層	-	(7.7)	(39.3)	2.5YR6/6橙	φ5～6mmの石粒含む	備前

平成11年度調査分

No	種別	器種	地 区	出土遺構	口径	器高	底径	色　調	胎　土	備　考
108	土師器	Ⅲ(2類)	G	SD09	8.15	1.85	3.4	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
108	土師器	Ⅲ(2類)	G	SD09	8.15	1.85	3.4	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	スス付着
109	土師器	Ⅲ(2類)	A	SD10	8.8	1.55	4.0	2.5Y8/2灰白	砂粒含む	完形
110	土師器	Ⅲ(2類)	A	SD10	8.8	2.0	3.6	2.5Y7/2灰黄	φ2～5mmの石粒含む	完形　スス付着
111	土師器	Ⅲ(2類)	A	SD10	9.0	1.7	3.7	2.5Y7/2灰黄	密	完形
113	白磁	Ⅲ		SD10	-	(2.15)	-	10YR8/1灰白	密	
114	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD08	(12.7)	(2.3)	－	10YR6/2灰黄	φ1～4mm石粒含む	スス付着
115	施釉陶器	Ⅲ	A	SD10	(10.3)	(2.0)	－	5Y8/2灰白	φ1mm石粒含む	瀬戸美濃
116	土師器	Ⅲ(2類)	G	SD07	8.2	1.85	3.5	2.5Y7/2灰黄	φ1mm石粒含む	スス付着
117	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD07	8.3	2.1	4.2	2.5Y8/2灰白	砂粒含む	完形
118	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD07	8.6	2.2	3.45	10YR6/3にぶい黄橙	砂粒含む	完形　スス付着
119	土師器	Ⅲ(3類)	A	SD07	(10.5)	(2.05)	(5.0)	10YR8/2灰白	φ1～2mm石粒含む	スス付着

No	種別	器種	地 区	出土遺構	口径	器高	底径	色　調	胎　土	備　考
120	土師器	Ⅲ(3類)	A	SD07	(11.8)	(2.45)	(5.0)	2.5Y7/2灰黄	φ3mm石粒含む	スス付着
121	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD07	12.45	2.25	5.9	2.5Y6/3にぶい黄	φ1mm石粒含む	完形　スス付着
122	土師器	Ⅲ(3類)	G	SD07	(13.0)	(2.25)	(7.0)	2.5Y8/3淡黄	φ1～4mm石粒含む	スス付着
123	瓦質土器	短頸壺	G	SD07	(8.4)	(5.4)	－	3/N暗灰	φ1mm石粒含む	胴径11.6
124	無釉陶器	擂鉢	G	SD07	(36.3)	(11.1)	(16.2)	5Y7/1灰白	φ1mm石粒含む	越前か
125	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD06	8.6	1.85	3.85	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	完形
126	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD06	8.9	2.0	3.85	2.5Y7/2灰黄	φ3mm石粒含む	完形　スス付着
127	土師器	Ⅲ(1類)	G	SD06	9.7	2.2	4.8	2.5Y7/2灰黄	φ1mm石粒含む	完形　スス付着
128	土師器	Ⅲ(1類)	G	SX02	(12.0)	(2.2)	(6.6)	5YR7/6橙	砂粒含む	
129	土師器	Ⅲ(1類)	G	包含層	8.55	2.0	3.95	2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の石粒含む	完形　スス付着
130	土師器	Ⅲ(3類)	G	包含層	8.7	1.9	4.55	2.5Y7/2灰黄	密	完形　スス付着
131	土師器	Ⅲ(2類)	A	包含層	13.35	1.75	6.0	2.5Y6/1黄灰	荒	
132	白磁	Ⅲ	A	包含層	(11.2)	(3.2)	6.0	7.5Y7/1灰白	密	
133	白磁	Ⅲ	G	包含層	(11.6)	(3.15)	(5.7)	2.5GY8/1灰白	φ1～3mm石粒含む	
134	染付	碗	G	包含層	－	(1.7)	(5.0)	5G7/1明緑灰	φ1～5mm石粒含む	
135	瓦質土器	擂鉢	G	包含層	(25.3)	(4.7)	－	2/N黒	φ5mm大石粒含む	
136	瓦質土器	擂鉢	G	包含層	(39.1)	(6.1)	－	5/N灰	φ1～1.5mm石粒含む	
137	無釉陶器	擂鉢	G	包含層	(24.8)	(12.05)	(10.7)	10R5/1赤灰	φ5mm大の石粒含む	備前
138	無釉陶器	擂鉢	G	包含層	(26.9)	(9.2)	－	7.5R4/1暗赤灰	φ1mmの石粒含む	備前
139	無釉陶器	甕	A	包含層	(42.0)	(7.7)	－	5YR4/1赤灰	φ1mmの石粒含む	備前
140	土師器	Ⅲ(3類)	A	SX01	8.6	2.0	4.25	2.5Y7/1灰白	φ1mmの石粒含む	完形
141	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.75	1.9	4.3	10YR7/2にぶい黄橙	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
142	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.75	1.9	4.5	2.5Y7/1灰白	φ1mm以下の石粒含む	完形
143	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.75	1.95	4.15	2.5Y7/2灰黄	φ1～5mmの石粒含む	完形
144	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.6	1.65	4.05	10YR7/2にぶい黄橙	砂粒若干含む	完形
145	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.8	1.8	4.8	2.5Y7/2灰黄	φ3mmの石粒含む	スス付着
146	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.8	1.85	4.6	2.5Y7/2灰黄	砂粒含む	完形　スス付着
147	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.8	1.9	4.05	2.5Y7/2灰黄	φ1mmの石粒含む	
148	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.8	1.9	4.65	2.5Y7/2灰黄	石粒含む	完形　スス付着
149	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.85	1.85	4.3	2.5Y7/1灰白	砂粒含む	完形　スス付着
150	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.9	1.6	4.9	2.5Y7/2灰黄	φ4mmの石粒含む	完形
151	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.9	1.8	4.15	2.5Y7/2灰黄	φ1～5mmの石粒含む	完形　スス付着
152	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.9	1.9	4.2	2.5Y7/2灰黄	φ1～4mmの石粒含む	
153	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.9	1.95	4.35	10YR7/3にぶい黄橙	φ1mmの石粒含む	完形
154	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.9	1.99	4.55	2.5Y7/1灰白	φ1～2mmの石粒含む	
155	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.95	1.8	4.2	2.5Y7/1灰白	φ1～3mmの石粒含む	完形
156	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.95	1.8	4.25	2.5Y7/1灰白	φ1～2mmの石粒含む	完形
157	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	8.95	2.0	(3.9)	2.5Y7/2灰黄	φ3mmの石粒含む	
158	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.0	1.65	4.2	10YR7/4にぶい黄橙	φ1mmの石粒含む	完形
159	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.0	1.7	4.15	10YR7/2にぶい黄橙	砂粒含む	
160	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.0	1.7	4.35	10YR7/2にぶい黄橙	石粒含む	完形
161	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.0	1.7	4.9	2.5Y7/1灰白	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
162	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.05	1.6	3.95	10YR7/2にぶい黄橙	φ1mmの石粒含む	完形
163	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.05	1.7	5.5	2.5Y7/2灰黄	φ1～2mmの石粒含む	完形　スス付着
164	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.05	1.8	4.35	5Y7/1灰白	砂粒若干含む	スス付着
165	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.05	1.85	4.0	2.5Y7/2灰黄	砂粒若干含む	スス付着
166	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.05	1.85	4.4	2.5Y7/1灰白		完形　スス付着
167	土師器	Ⅲ(1類)	A	SX01	9.35	1.9	4.0	2.5Y7/2灰黄	φ1mmの石粒含む	スス付着
168	石製品		A	SX01				2.5Y7/1黄灰	砂粒若干含む	墨書
169	土師器	Ⅲ(1類)	B	SD01	8.7	1.9	4.35	2.5Y7/2灰黄	φ1～2mmの石粒含む	スス付着
170	土師器	Ⅲ(1類)	B	SD01	8.95	2.2	3.55	5Y6/1灰	密	スス付着
171	土師器	Ⅲ(3類)	B	SD01	(10.5)	(2.4)	(6.1)	2.5Y6/2灰黄	密	スス付着
172	施釉陶器	Ⅲ	B	SD01	(9.6)	(2.75)	(4.7)	5Y7/3浅黄	密	瀬戸美濃
173	白磁	Ⅲ	B	SD01	(10.0)	(2.45)	(5.1)	7.5Y8/1灰白	密	
174	染付	碗	B	SD01	(11.3)	(4.05)	－	5B7/1暗青灰	φ3,4mmの石粒含む	
175	施釉陶器	天目碗	B	SD01	(7.7)	(3.45)	(3.9)	7.5YR2/3極暗褐		瀬戸美濃
176	土師器	坩堝	B	SD01	7.0	2.75	3.15	6/N灰	φ1～5mmの石粒含む	二次焼成
177	土師器	坩堝	B	SD01	4.75	2.1	1.5	5Y7/1灰白	φ1～3mmの石粒含む	二次焼成
178	瓦質土器	擂鉢	B	SD01	23.6	9.5	10.0	5Y5/1灰	φ1～3mmの石粒含む	完形
179	瓦質土器	火鉢	B	SD01	(29.8)	(23.6)	(24.4)	7.5Y2/1黒	φ1mmの石粒含む	
180	土師器	Ⅲ(1類)	B	SK01	8.25	1.9	4.2	2.5Y7/2灰黄	φ3mmの石粒含む	スス付着

No.	種別	器種	地 区	出土遺構	口径	器高	底径	色　調	胎　土	備　考
181	土師器	Ⅲ(1類)	B	SK01北半部	8.4	2.05	3.95	10YR7/1灰白	砂粒若干含む	スス付着
182	土師器	Ⅲ(1類)	B	SK01	(11.7)	(2.2)	(4.8)	2.5Y6/2灰黄	密	スス付着
183	土師器	Ⅲ(1類)	B	SK01	(12.5)	(2.4)	(6.4)	5Y7/1灰白	密	スス付着
184	染付	碗	B	SK01	—	(1.5)	(4.5)	10BG7/1明青灰	密	
185	染付	碗	B	SD04	(16.8)	(4.65)	—	5B7/1暗青灰	密	
186	染付	Ⅲ	B	包含層	(13.4)	(2.5)	—	5B7/1暗青灰	φ4mmの石粒含む	
187	染付	Ⅲ	B	包含層	(13.0)	(3.05)	(8.0)	5B7/1暗青灰	φ1mmの石粒含む	
188	土師器	Ⅲ(3類)	C	SK08	12.55	2.05	6.75	2.5Y6/1黄灰	密	スス付着
189	土師器	短頸壺	C	SK08	(8.9)	(6.05)	(5.2)	2.5Y7/1灰白	φ1mmの石粒含む	胴径9.9
190	土師器	Ⅲ(1類)	C	SK07	(14.3)	(2.15)	(7.0)	2.5Y6/1黄灰	密	スス付着
191	土師器	Ⅲ(3類)	D	包含層	(9.0)	(1.95)	(4.6)	10YR8/2灰白	φ1～3mm石粒含む	スス付着
192	白磁	Ⅲ	D	包含層	—	(1.6)	(4.8)	5Y8/1灰白	φ1～2mm石粒含む	
193	弥生	壺	E	包含層	(12.2)	(7.4)	—	10YR7/2にぶい黄橙		
194	弥生	甕	E	包含層	不明	—	—	10YR7/2にぶい黄橙	砂粒含む	
195	石製品	石斧	E	包含層	—	—	—		φ1～2mm石粒含む	
196	土師器	Ⅲ(1類)	F	SK13	8.0	1.15	3.4	10YR7/2にぶい黄橙	φ1mm石粒含む	スス付着
197	土師器	Ⅲ(1類)	F	SK13	12.35	2.3	4.9	2.5Y8/3淡黄	φ1mm長石、石英含む	スス付着
198	弥生	鉢	F	包含層	(21.7)	(4.0)	—	10YR6/2灰黄褐	φ1～2mm石粒含む	
199	弥生	甕	F	包含層	(18.1)	(2.75)	—	10YR7/2にぶい黄橙	φ1～3mm石粒含む	
200	弥生	甕	F	包含層	(16.7)	(5.3)	—	10YR6/3黄橙	φ1～2mm石粒含む	
201	弥生	甕	F	SX01	(13.4)	(4.25)	—	10YR5/2灰黄褐	φ1～3mm石粒含む	
202	弥生	甕	F	包含層	(20.0)	(2.15)	—	5YR6/6橙		
203	弥生	甕	F	包含層	(12.4)	(5.45)	—	10YR5/2灰黄褐		
204	白磁	Ⅲ	G	SD09						写真のみ
205	青磁	碗	G	SD09						写真のみ
206	青磁	碗	B							写真のみ
207	染付	碗	G							写真のみ
208	染付	碗	G							写真のみ
209	染付	碗	B							写真のみ
210	染付	碗	B	SK01						写真のみ
211	染付	碗	B	SK01						写真のみ
212	染付	碗	B							写真のみ
213	染付	碗	B	SK01						写真のみ
214	染付	Ⅲ	B							写真のみ
215	染付	Ⅲ	B							写真のみ
216	染付	Ⅲ	B							写真のみ
217	染付	Ⅲ	B							写真のみ

表２　木製品一覧表

平成10年度調査分

No	種　別	器　　種	地区	出土遺構	層　　位	長さ〔口径〕	幅〔高さ〕	高さ〔底径〕	備　　考
W001	服飾具	下駄	A	SD206		(16.25)	(8.35)	4.0	
W002	容器	長方形曲物	A	SD206		17.4	16.65	0.8	樺皮結合 ほぼ完形
W003	容器	漆器椀	A	SD206		—	〔7.2〕	7.05	
W004	容器	漆器椀	A	SD206	下層	〔13.3〕	〔6.0〕	〔6.2〕	
W005	容器	漆器椀	A	SD206		—	〔2.5〕	〔6.0〕	
W006	用途不明	円板形木製品	A	SD206		6.43	6.4	0.7	
W007	容器	曲物	A	SD206		9.5	8.8	0.6	釘結合 ほぼ完形
W008	用途不明	円板形木製品	A	SD206		(12.35)	(5.55)	0.6	
W009	用途不明	楕円形木製品	A	SD206		13.9	(4.9)	0.75	
W010	用途不明	用途不明品	A	SD206		(14.5)	(4.55)	0.85	
W011	容器	桶	A	SD206		(13.0)	(3.3)	—	
W012	用途不明	部材	A	SD206		(35.2)	6.7	4.85	
W013	服飾具	下駄	A	SD204		(21.8)	(7.9)	5.1	
W014	容器	楕円形曲物	A	SD204		14.45	(5.55)	0.35	樺皮結合
W015	容器	漆器椀	A	SD202		〔13.5〕	〔6.5〕	〔7.1〕	
W016	容器	漆器皿	A	SD202		〔8.5〕	〔2.6〕	〔5.35〕	ほぼ完形
W017	容器	長方形曲物	A	SD202		(23.25)	(5.55)	2.75	樺皮結合
W018	容器	桶	A	SD202		16.07	5.4	1.35	
W019	用途不明	用途不明品	A	SD201		18.0	2.35	1.08	
W020	祭祀具	羽子板	A	包含層		26.7	9.7	0.75	ほぼ完形
W021	食事具	箸	A	SD202		(24.4)	(0.75)	(0.7)	
W022	食事具	箸	A	包含層		(20.1)	(0.45)	(0.6)	
W023	容器	漆器椀	A	包含層		—	〔2.8〕	〔5.95〕	
W024	用途不明	円板形木製品	A	包含層		〔5.4〕	〔3.9〕	0.3	
W025	容器	曲物	A	包含層		(21.65)	(5.1)	(0.95)	樺皮結合
W026	用途不明	用途不明品	A	包含層		(17.45)	(6.85)	0.725	
W027	服飾具	下駄	A	包含層		(20.3)	(14.15)	(1.8)	
W028	服飾具	下駄	A	包含層		(18.34)	12.1	5.8	
W029	服飾具	下駄	A	包含層		(15.2)	(10.7)	(1.05)	
W030	服飾具	下駄	A	旧河道		(20.2)	(5.45)	(2.25)	
W031	容器	漆器椀	A	包含層		〔15.5〕	〔6.9〕	—	
W032	容器	漆器椀	A	包含層		〔12.2〕	〔4.75〕	—	
W033	容器	漆器椀	A	包含層		—	〔1.9〕	〔7.1〕	
W034	容器	漆器椀	A	包含層		—	〔3.65〕	〔6.5〕	
W035	容器	漆器皿	A	包含層		〔11.7〕	—	〔6.07〕	
W036	容器	漆器皿	A	包含層		〔15.0〕	〔4.4〕	—	
W037	容器	漆器皿	A	包含層		〔9.8〕	〔4.35〕	〔5.4〕	
W038	容器	曲物	A	包含層		(27.1)	(9.17)	1.05	側板結合方法不明
W039	用途不明	円板形木製品	A	包含層		8.43	(6.07)		
W040	容器	曲物	A	包含層		8.35	8.25	1.2	
W041	容器	曲物	A	包含層		7.85	(7.8)	0.75	釘結合
W042	容器	長方形曲物	A	包含層		10.1	(2.85)	0.3	樺皮結合
W043	漁撈具	アカ取り	A	遺構面	下層	(34.9)	(13.05)	(4.15)	
W044	漁撈具	アカ取り	A	遺構面	下層	37.9	(14.43)	6.34	
W045	容器	盤	A	遺構面	下層	(50.4)	(8.95)	(5.8)	
W046	祭祀具	斎串	A	遺構面	下層	16.8	0.7	0.61	ほぼ完形
W047	祭祀具	剣形木製品	A	遺構面	下層	(20.35)	(2.85)	(1.5)	
W048	用途不明	部材	A	遺構面	下層	(35.7)	(6.45)	(2.6)	
W049	用途不明	部材	A	遺構面	下層	35.45	9.7	0.9	ほぼ完形
W050	用途不明	部材	A	遺構面	下層	(34.2)	(14.4)	3.8	
W051	用途不明	部材	A	遺構面	下層	(31.9)	(11.8)	1.7	
W052	農具	田下駄	A	遺構面	下層	42.4	10.3	1.5	ほぼ完形
W053	農具	田下駄	A	遺構面	下層	43.9	9.7	2.1	
W054	農具	田下駄	A	遺構面	下層	48.72	11.62	1.56	ほぼ完形
W055	農具	田下駄	A	遺構面	下層	51.5	14.0	(2.4)	ほぼ完形
W056	農具	田下駄	A	遺構面	下層	41.0	9.9	1.65	
W057	農具	田下駄	A	遺構面	下層	38.5	(8.15)	(1.35)	
W058	農具	田下駄	A	遺構面	下層	31.5	(7.15)	(1.55)	

No	種　別	器　　種	地区	出土遺構	層　　位	長さ〔口径〕	幅〔高さ〕	高さ〔底径〕	備　　考
W059	農具	田下駄	A	遺構面	下層	33.95	(7.1)	1.8	
W060	農具	田下駄	A	遺構面	下層	24.95	(8.8)	(2.1)	ほぼ完形
W061	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(59.2)	(9.75)	(1.45)	
W062	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(47.5)	(13.95)	(1.8)	
W063	農具	田下駄	A	遺構面	下層	53.4	(13.92)	1.66	
W064	農具	田下駄	A	遺構面	下層	44.44	9.1	1.22	
W065	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(40.1)	(17.0)	(3.0)	
W066	農具	田下駄	A	遺構面	下層	36.35	12.3	2.7	
W067	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(27.2)	(10.5)	1.3	
W068	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(61.85)	(9.1)	(3.55)	
W069	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(57.5)	9.28	2.6	
W070	農具	田下駄	A	遺構面	下層	56.65	15.42	1.67	
W071	農具	田下駄	A	遺構面	下層	(49.6)	(18.2)	(3.0)	
W072	建築部材	部材	A	遺構面	下層	(143.8)	(5.6)	(5.2)	
W073	用途不明	部材	A	遺構面	下層	120.05	(13.75)	2.4	
W074	建築部材	矢板	A	遺構面	下層	47.1	18.57	2.54	ほぼ完形
W075	用途不明	部材	A	遺構面	下層	(51.7)	(13.45)	(1.75)	
W076	用途不明	部材	A	遺構面	下層	24.55	3.5	3.1	
W077	用途不明	部材	A	遺構面	下層	(32.14)	7.83	2.73	
W078	服飾具	下駄(歯)	B	遺構面	下層	(7.3)	(7.65)	(1.35)	
W079	服飾具	下駄(歯)	B	遺構面	下層	8.6	(6.63)	1.28	
W080	容器	曲物	B	遺構面	下層	(22.9)	(6.6)	(1.2)	樺皮結合

平成11年度調査分

No	種　別	器　　種	地区	出土遺構	層　　位	長さ〔口径〕	幅〔高さ〕	高さ〔底径〕	備　　考
W081	漁撈具	網枠	G	SD10		42.25	①1.55 ②1.44 ③1.05	①1.7 ②1.75 ③1.15	
W082	容器	蓋	A	SD10	下層	(8.1)	(4.7)	(0.95)	樺皮によるツマミ
W083	容器	漆器椀	A	SD10	下層	—	〔3.85〕		
W084	食事具	箸	A	SD10	下層	24.03	0.7	0.43	
W085	食事具	箸	A	SD10	下層	22.8	0.7	0.4	
W086	食事具	箸	A	SD10	下層	19.6	0.55	0.5	
W087	祭祀具	人形	A	SD10	下層	21.45	2.8	0.4	
W088	農具	横槌	A	SD07		32.1	7.76	6.92	
W089	用途不明	用途不明品	A	SD07		(16.0)	(1.1)	(0.3)	
W090	服飾具	下駄	A	SD07		(19.7)	(10.2)	4.7	
W091	容器	曲物	A	SD07		(47.15)	(13.37)	(0.89)	樺皮結合
W092	容器	漆器椀	A	SD07		〔14.7〕	〔6.2〕	—	
W093	容器	漆器椀	G	SD07		〔12.9〕	〔5.3〕	—	
W094	容器	漆器椀	G	SD07	中層	〔19.0〕	〔6.8〕	—	
W095	容器	漆器椀	A	SD07		—	〔4.2〕	〔6.8〕	
W096	容器	蓋	A	SD07		(27.93)	(9.66)	0.48	
W097	容器	蓋	A	SD07		29.3	16.95	0.65	
W098	遊戯具	羽子板	G	SD07	中層	31.5	10.3	0.8	
W099	農具	鍬	A	包含層	1層	(21.0)	(8.1)	(2.7)	
W100	農具	鍬	A	SD07		(20.4)	(5.15)	(3.6)	
W101	容器	桶	A	SD07		(18.9)	(4.7)	(1.4)	
W102	部材	部材	A	SD07		(30.3)	(6.35)	(3.4)	
W103	食事具	箸	G	SD07	下層	20.8	0.55	0.55	ほぼ完形
W104	建築部材	柱材	G	P04		35.8	14.45	12.0	完形
W105	用途不明	用途不明品	G	包含層		21.35	12.6	11.6	完形
W106	農具	田下駄	A	包含層	1層	37.74	15.17	1.47	ほぼ完形
W107	農具	田下駄	G	包含層	4層・褐色シルト	37.7	9.1	1.85	
W108	農具	田下駄	A	包含層	4層	43.25	13.7	1.9	
W109	用途不明	用途不明品	G	包含層	4層・褐色シルト	31.05	①3.3 ②1.85	①4.5 ②1.6	ほぼ完形
W110	容器	漆器椀	A	包含層		〔11.6〕	〔6.2〕	—	
W111	容器	漆器椀	A	包含層		—	〔2.4〕	〔5.9〕	
W112	容器	漆器椀	G	包含層		—	〔7.0〕	〔6.9〕	

No	種　別	器　　種	地区	出土遺構	層　　位	長さ〔口径〕	幅〔高さ〕	高さ〔底径〕	備　　考
W113	容器	漆器椀	G	包含層		—	〔1.2〕	〔8.0〕	
W114	容器	漆器椀	G	包含層		—	〔2.0〕	〔8.0〕	
W115	用途不明	用途不明品	A	包含層	4層	19.45	4.65	1.83	
W116	用途不明	用途不明品	G	包含層	4層・褐色シルト	13.7	3.65	3.15	
W117	用途不明	用途不明品	G	包含層	4層	12.6	0.65	0.6	完形
W118	容器	蓋	G	包含層	黒褐シルト	〔18.8〕	〔1.15〕	〔15.2〕	
W119	祭祀具	馬形	A	包含層	②+③+④層	27.2	(3.9)	(1.0)	
W120	食事具	箸	B	SD05	黒褐粗砂混じりシルト	28.15	1.05	0.95	
W121	食事具	箸	B	SD05	黒褐粗砂混じりシルト	22.7	0.64	0.59	
W122	食事具	箸	B	SD05	黒褐粗砂混じりシルト	22.85	0.7	0.35	完形
W123	食事具	箸	B	SD01	ﾋﾉｷのﾍｷﾞ　植物遺体層	29.57	0.79	0.81	
W124	食事具	箸	B	SD01	黒褐色シルト	25.75	0.75	0.4	
W125	食事具	箸	B	SD01	黒褐色シルト	24.31	0.59	0.5	
W126	食事具	箸	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	24.25	0.7	0.6	
W127	食事具	箸	B	SD01	黒褐色シルト	23.0	0.8	0.5	ほぼ完形
W128	食事具	箸	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	22.9	0.75	0.4	完形
W129	食事具	箸	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	21.9	0.81	0.57	
W130	食事具	箸	B	包含層		21.87	0.75	0.57	
W131	容器	曲物柄杓	B	SD01	黒褐色シルト	51.93	1.76	0.93	
W132	食事具	切匙	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	29.0	3.0	0.45	
W133	容器	漆器椀	B	SD01		〔15.6〕	〔0.6〕	〔9.6〕	
W134	容器	漆器椀	B	SD01		〔13.8〕	〔6.4〕	〔7.0〕	
W135	用途不明	円板形木製品	B	SD01		12.05	12.0	0.5	
W136	容器	曲物	B	SD01		13.18	10.03	0.75	釘結合
W137	容器	曲物	B	SD01	黒褐色シルト	(13.0)	(5.2)	(0.75)	釘結合
W138	容器	長方形曲物	B	SD01	黒褐色シルト	9.57	(7.48)	0.21	樺皮結合
W139	容器	長方形曲物	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	32.24	(11.23)	0.42	樺皮結合
W140	容器	箱	B	包含層	黒褐色シルト	35.55	3.65	0.68	側板
W141	容器	箱	B	包含層	黒褐色シルト	29.8	3.9	0.7	側板　ほぼ完形
W142	服飾具	下駄	B	SD01	黒褐シルト	12.6	4.25	1.45	
W143	服飾具	下駄	B	SD01	ヒノキのヘギ　植物遺体層	20.1	9.95	1.7	
W144a	用途不明	用途不明品	B	SD01	黒褐色シルト	32.47	6.35	0.6	
W144b	用途不明	用途不明品	B	SD01	黒褐色シルト	5.7	2.0	1.7	
W145	用途不明	用途不明品	B	SD01		(22.85)	7.86	0.66	
W146	用途不明	用途不明品	B	SD01	黒褐色シルト	(5.6)	3.85	4.0	
W147	雑具	つけ木	B	SD01	黒褐色シルト	18.85	1.7	0.85	完形
W148	雑具	つけ木	B	SD01	黒褐色シルト	18.65	1.5	1.15	完形
W149	服飾具	下駄	B	SD02		15.4	8.3	1.65	完形
W150	容器	曲物柄杓	B	SD04		(56.18)	①1.82②1.58	①0.91②0.74	
W151	容器	漆器椀	B	SD04		—	〔1.6〕	〔5.6〕	
W152	容器	桶	B	SD04		23.5	5.9	0.95	側１枚
W153	漁撈具	網枠	B	SD04	西壁断面から採取	63.7	65.8	1.1～2.1	完形
W154	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	31.55	2.6	0.75	枠のみ
W154	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	31.15	2.25	0.8	枠のみ
W154	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	31.45	2.45	0.8	枠のみ
W154	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	29.65	2.3	0.7	枠のみ
W155	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	31.6	2.7	0.7	
W156	容器	箱	B	SK01	上層　木屑層	21.5	2.9	0.75	
W157	容器	箱	B	SK01		30.9	(10.9)	0.7	底板
W158	用途不明	用途不明品	B	SK01	北	54.47	6.45	1.28	ほぼ完形
W159	用途不明	用途不明品	B	SK01	北	37.15	3.75	1.5	
W160	用途不明	用途不明品	B	SK01		28.05	2.8	1.95	ほぼ完形
W161	用途不明	用途不明品	B	SK01	北	12.0	2.85	3.0	
W162	容器	長方形曲物	B	SK01	北	(28.85)	(5.25)	(0.25)	樺皮結合
W163	容器	長方形曲物	B	SK01	北	(26.65)	(4.9)	(0.3)	樺皮結合
W164	容器	楕円形曲物	B	SK01	北	(31.18)	(3.14)	0.68	樺皮結合
W165	用途不明	用途不明品	B	SK01	北	27.85	3.95	4.0	
W166	食事具	切匙	B	SK01	北	21.85	4.0	0.45	完形
W167	食事具	箸	B	SK01		25.15	0.75	0.6	ほぼ完形
W168	食事具	箸	B	SK01		20.27	0.67	0.63	ほぼ完形

No	種　別	器　　種	地区	出土遺構	層　　位	長さ〔口径〕	幅〔高さ〕	高さ〔底径〕	備　　考
W169	容器	漆器椀	B	SK01		〔15.6〕	〔8.0〕	〔7.4〕	
W170	容器	漆器椀	B	SK01		〔11.9〕	〔4.4〕	—	
W171	容器	漆器椀	B	SK01		—	〔4.6〕	〔7.2〕	
W172	容器	漆器椀	B	SK01		—	〔2.6〕	〔7.6〕	
W173	容器	桶	B	SK01		12.27と12.25	3.38と3.4	0.81と0.78	側板２枚
W174	用途不明	用途不明品	B	SK01	上層　木屑層	7.0	2.54	0.62	
W175	用途不明	用途不明品	B	SK01		3.7	4.3	3.6	ほぼ完形
W176	用途不明	用途不明品	B	SK01	上層　木屑層	4.2	4.45	3.73	ほぼ完形
W177	用途不明	用途不明品	B	SK01	上層　木屑層	3.65	4.4	3.3	ほぼ完形
W178	食事具	茶筅	B	SK01		9.7	3.4	2.23	
W179	遊戯具	将棋の駒	B	SK01	北	3.8	2.68	0.3	完形
W180	服飾具	下駄	B	包含層	第３層・暗灰色砂礫混シルト	13.15	(4.8)	(1.45)	
W181	容器	楕円形木製品	B	包含層		(14.84)	(5.44)	(0.36)	
W182	容器	円形木製品	B	包含層		10.1	4.45	0.6	結合箇所不明
W183	容器	楕円形曲物	B	包含層		(32.35)	(5.1)	(0.5)	結合箇所不明
W184	容器	桶	B	包含層	暗灰色砂混じりシルト	16.36	5.56	1.04	側板
W185	用途不明	用途不明品	B	包含層	暗褐色シルト	35.5	6.4	1.2	
W186	用途不明	用途不明品	B	包含層	暗灰色砂混じりシルト	17.75	2.5	0.45	側板
W187	用途不明	用途不明品	B	包含層		(19.3)	(5.1)	1.35	
W188	部材	部材	B	包含層	③層	49.05	3.3	3.04	完形
W189	容器	曲物	A	包含層		〔8.0〕	〔6.7〕	〔0.7〕	側板　ほぼ完形
W190	祭祀具	斎串	B	包含層	④層	(15.3)	1.8	0.65	
W191	農具	田下駄	B	包含層	④層	25.9	10.75	1.8	ほぼ完形
W192	農具	田下駄	B	包含層		35.05	15.1	4.55	台枠
W193	農具	田下駄	B	包含層	④層	(38.85)	(16.74)	(2.7)	台枠
W194	建築部材	板材	B	包含層		156.6	34.1	2.3～3.1	
W195	容器	漆器椀	C	包含層	中世包含層	—	〔2.7〕	〔7.6〕	底部
W196	食事具	切匙	C	包含層		(15.7)	(3.4)	(0.3)	
W197	用途不明	用途不明品	C	包含層	暗灰色砂礫混シルト	13.72	7.0	2.77	
W198	用途不明	用途不明品	C	包含層		8.7	3.8	1.2	
W199	祭祀具	木鏃	E	包含層	3層4層及び直下層（青灰シルト）	9.29	1.15	0.76	完形だが裏にキズ
W200	雑具	つけ木	E	包含層	4層・黒褐シルト層	(15.15)	2.07	1.45	
W201	服飾具	下駄	E	包含層		7.7	6.6	1.9	
W202	用途不明	方形板材	E	包含層		9.8	10.0	1.4	有孔(２カ所) 完形
W203	部材	建築部材	E	包含層	4層・黒褐シルト層	19.1	11.55	11.05	
W204	容器	曲物	F	包含層	4層下面砂礫層上面	18.2	18.5	0.75	樺皮結合
W205	容器	曲物	F	包含層	4層	17.9	7.5	1.0	結合箇所不明
W206	容器	曲物	F	包含層	③+④層	14.6	3.7	0.6	樺皮結合
W207	容器	曲物	F	包含層	3層	13.5	5.25	0.55	結合箇所不明
W208	容器	曲物	F	包含層	④層？	15.75	4.2	0.65	樺皮結合
W209	食事具	箸	F	SD14		24.4	0.5	0.4	完形
W210	食事具	箸	F	SD14		22.6	0.6	0.5	完形
W211	用途不明	用途不明品	F	包含層		7.6	1.65	1.75	
W212	用途不明	用途不明品	F	包含層	灰色シルト層上面	34.0	①6.9 ②7.6	①9.8 ②6.8	
W213	容器	漆器椀	B	SK01	上層　木屑層				写真のみ
W214	容器	漆器椀	B	SD04					写真のみ
W215	容器	漆器椀	C	SK08					写真のみ
W216	容器	漆器椀	B	SK01					写真のみ
W217	容器	漆器椀	B	SK01	北				写真のみ
W218	容器	漆器椀	B	SK01					写真のみ
W219	建築部材	柱材	G	礎石建物					写真のみ
W220	容器	曲物	G	包含層					写真のみ
W221	用途不明	用途不明品	C	SK08		① 3.6 ②77	① 9.8 ②9.95	① 4.5 ②1.0	写真のみ

表３　金属器一覧表

No.	素材	器種	年度	地区	出土遺構	長さ	幅	高さ(厚さ)	備　　考
M001	銅	刀子柄	平成10年度	A	包含層	9.55	1.5	0.35	
M002	銅	刀子柄	平成10年度	A	包含層	5.5	1.45	0.5	
M003	銅	飾り金具	平成10年度	A	SD201	1.95	1.9	0.9	
M004	銅	飾り金具	平成10年度	A	包含層	2.9	3.0	1.9	
M005	銅	銭	平成10年度	A	包含層	2.5	2.5	0.1	
M006	銅	銭	平成10年度	A	SD205	2.45	2.45	0.1	
M007	銅	銭	平成10年度	A	包含層	2.45	2.45	0.15	
M008	銅	銭	平成11年度	A	SD10	2.15	2.15	0.05	
M009	銅	銭	平成11年度	A	包含層	2.45	2.4	0.15	
M010	銅	銭	平成11年度	A	SK01	2.4	2.4	0.1	
M011	鉄	板材	平成10年度	A	包含層	9.9	1.45	0.25	
M012	鉄	鎌	平成10年度	A	SD204	17.9	13.9	0.25	刃幅3.3、柄幅1.8
M013	鉄	羽釜	平成11年度	A	SK01	10.55	9.35	0.15	
M014	鉄	釘	平成10年度	A	包含層	9.6	－	－	
M015	鉄	釘	平成10年度	A	包含層	10.3	5.5	0.4	
M016	鉄	釘	平成10年度	A	包含層	6.2	0.55	0.35	
M017	鉄	釘	平成10年度	A	包含層	6.15	0.6	0.3	
M018	鉄	環状金具	平成11年度	A	SK08	3.35	2.6	0.35	
M019	鉄	釘	平成11年度	A	SD10	6.15	0.3	0.2	
M020	鉄	釘	平成11年度	A	SK01	3.2	2.7	0.35	環状に曲げられる。
M021	鉄	釘	平成11年度	A	包含層	9.65	0.5	0.3	

第4章　分析・鑑定

第1節　宮内堀脇遺跡Ⅱから出土した木製品の樹種

京都大学名誉教授
伊　東　隆　夫

兵庫県の北部、豊岡市出石町に所在する宮内堀脇遺跡は出石川右岸に広がる平野部に立地し、東側に丘陵が隣接する位置にあり、奈良時代から江戸時代初頭の遺跡である。奈良・平安時代に属する旧河道と溝などの遺構、および、室町時代末～江戸時代初頭にあたる建物や道路に沿って掘られた溝、水路、壕などの遺構が検出されている。同遺跡から出土する木製品として、奈良・平安時代から田下駄が多数発掘され、漁具の「アカ取り」も出土している。室町時代末～江戸時代初頭からは、多数の漆器椀、「曲物」「桶」「箱」などの容器、「下駄」「羽子板」「箸（はし）」などが多く出土し、「茶筅」「将棋の駒」なども出土している。

今回、100点の木製品について、樹種同定をおこなった。定法にしたがい、安全カミソリで三断面の切片を切り出し、顕微鏡用標本を作製し、通常の光学顕微鏡で以下の顕微鏡的特徴を観察し、写真を撮影してコンピュータに記録した。

マツ（二葉）（*Pinus* spp. Diploxylon）（写真：5,18）

樹脂道が存在する。樹脂細胞は存在しない。分野壁孔は典型的な窓状。放射仮道管が存在し、仮道管内壁に鋸歯状突起がみられる。

モミ（*Abies firma* Sieb. et Zucc.）（写真：2,6）

樹脂道および樹脂細胞が存在しない。放射柔細胞壁は厚く、末端壁は肥厚し、数珠状となる。放射仮道管は存在しない。

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）（写真：3,7,13）

樹脂道は存在しない。樹脂細胞は晩材部にまばらにかつ接線状にならぶ。分野壁孔は典型的なスギ型。放射組織は単列。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtuse* Endl.）（写真：4,16）

樹脂道は存在しない。樹脂細胞は接線状に点在。分野壁孔はヒノキ型。放射組織は単列。

カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）（写真：10）

樹脂道および樹脂細胞は存在しない。仮道管内壁に対になったらせん肥厚がみられる。

ヤナギ属（*Salix* sp.）（写真：12）

散孔材。大きさ100μm以下の道管が単独ないし、2-3個放射方向に複合して分布する。単穿孔。道管放射組織間壁孔は顕著なふるい状。放射組織は単列同性。

サワグルミ（写真：8）

散孔材。大型の道管がほぼ単独ないし、2-3個放射方向に複合する。単穿孔。軸方向柔組織は接線状となる。放射組織は同性で、1-2列。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)(写真: 9,11)

環孔材。孔圏道管は非常に大きく、複列となる。単穿孔。孔圏外道管は火炎状となる。放射組織は単列。

ホオノキ(*Magnolia obovata* Thunb.)(写真: 1,17)

散孔材。道管の大きさは中庸で、単独ないし、2-4個放射方向に複合する。単穿孔。道管側壁に階段壁孔。放射組織はほぼ同性で、1-2列。年輪界に柔組織。

ツツジ属(*Rhododendron* sp.)(写真: 14)

散孔材。きわめて小さい道管が多数接線方向に複合して分布する。階段穿孔。放射組織は同性、異性Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ型がみられ、1-3列であるが、単列と3列の放射組織が目立つ。

キリ(*Paulownia tomentosa* Steud.)(写真: 15)

環孔材。大型の道管が孔圏を複層になって形成する。単穿孔。軸方向柔組織が顕著で、周囲状、翼状、連合翼状となる。放射組織は同性で、1-4列。

樹種同定の結果は表4に示す。表1から器種と樹種との関係をまとめると表5が得られる。表5からはきわめてはっきりした傾向がみられる。すなわち、樹種同定した100点のうち58点の6割がスギ、16点の2割弱がヒノキ、残りがその他の樹種であった。スギ58点の内訳は田下駄が15点、部材が9点と目だって多いが残りは、下駄、火鑽臼、曲物、祭祀具、など広範囲の木製品に利用されていた。スギに次いで多用されていたヒノキの内訳の中で、箱が5点と最も多かった。田下駄、部材に次いで製品数の多かった下駄の用材をみると、キリ、サワグルミ、スギ、ホオノキ、ヤナギ属といずれも軽量の樹種が用いられていた。

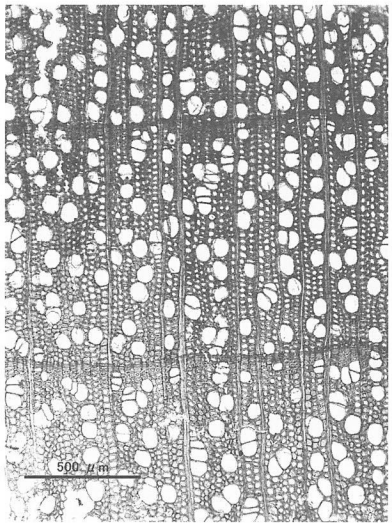
表４　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品　樹種同定一覧

サンプル番号	調査番号	登録番号	報告番号	器　　種	樹　種	時　代
1	980165	6	W019	用途不明品	スギ	16世紀
2	980165	20	W028	下駄	ホオノキ	16世紀
3	980165	22	W040	曲物	スギ	16世紀
4	980165	27	W038	曲物	モミ	16世紀
5	980165	33	W029	下駄	ホオノキ	16世紀
6	980165	36	W013	下駄	ホオノキ	16世紀
7	980165	38	W014	楕円形曲物	ヒノキ	16世紀
8	980165	40	W021	箸	ヒノキ	16世紀
9	980165	43	W018	桶	スギ	16世紀
10	980165	45	W010	火鑽臼	スギ	16世紀
11	980165	48	W008	円形木製品	ヒノキ	16世紀
12	980165	49	W007	曲物	スギ	16世紀
13	980165	50	W009	楕円形木製品	ヒノキ	16世紀
14	980165	53	W022	箸	スギ	16世紀
15	980165	59	W041	曲物	マツ(二葉)	16世紀
16	980165	61	W012	部材	クリ	16世紀
17	980165	63	W047	剣形	スギ	古代
18	980165	64	W057	田下駄	スギ	古代
19	980165	65	W076	部材	ヒノキ	古代
20	980165	68	W002	長方形曲物	モミ	16世紀
21	980165	74	W006	円形木製品	スギ	16世紀
22	980165	75	W011	桶	スギ	16世紀
23	980165	76	W059	田下駄	スギ	古代
24	980165	77	W065	田下駄	スギ	古代
25	980165	78	W066	田下駄	スギ	古代
26	980165	79	W050	部材	スギ	古代
27	980165	80	W051	部材	スギ	古代
28	980165	81	W056	田下駄	スギ	古代
29	980165	82	W058	田下駄	スギ	古代
30	980165	83	実測なし	田下駄	スギ	古代
31	980165	84	W068	部材	スギ	古代
32	980165	85	W070	田下駄	スギ	古代
33	980165	86	W052	田下駄	スギ	古代
34	980165	87	W061	部材	スギ	古代
35	980165	88	W073	部材	スギ	古代
36	980165	89	W044	アカ取り	スギ	古代
37	980165	90	W046	斎串	スギ	古代
38	980165	91	W075	部材	スギ	古代
39	980165	101	W043	アカ取り	ヒノキ	古代
40	980165	104	W001	下駄	サワグルミ	16世紀
41	980165	105	W054	田下駄	スギ	古代
42	980165	106	W055	田下駄	ヒノキ	古代
43	980165	109	W063	田下駄	スギ	古代
44	980165	111	W072	部材	スギ	古代
45	980165	129	W045	盤	クリ	不明
46	980165	136	W049	部材	スギ	16世紀
47	980165	140	実測なし	部材	スギ	16世紀
48	990219	1	W153	網枠	カヤ	16世紀
49	990219	2	W194	板材	スギ	古代
50	990219	5	W108	田下駄	スギ	古代
51	990219	6	W106	田下駄	スギ	古代
52	990219	7	W115	用途不明品	スギ	古代
53	990219	8	実測なし	部材	ヒノキ	古代
54	990219	11	W119	馬形	スギ	古代
55	990219	20	W084	箸	スギ	16世紀
56	990219	21	W085	箸	スギ	16世紀
57	990219	25	W086	箸	スギ	16世紀
58	990219	34	W089	用途不明品	スギ	16世紀
59	990219	37	W088	横槌	クリ	16世紀
60	990219	39	W101	桶	スギ	16世紀

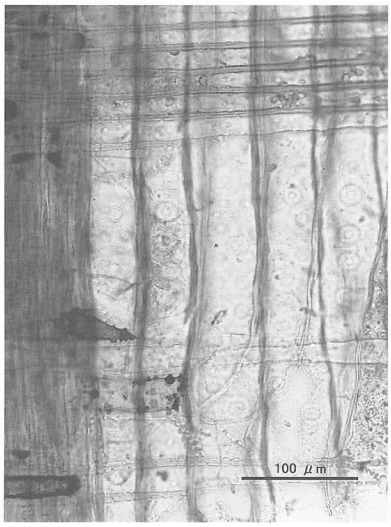
サンプル番号	調査番号	登録番号	報告番号	器　　種	樹　種	時　代
61	990219	48	W090	下駄	ヤナギ属	16世紀
62	990219	49	W087	人形	モミ	古代
63	990219	50	W091	曲物	スギ	16世紀
64	990219	51	W192	田下駄	スギ	古代
65	990219	64	W158	用途不明品	スギ	16世紀
66	990219	65	W159	用途不明品	クリ	16世紀
67	990219	70	W166	切匙	スギ	16世紀
68	990219	77	W132	切匙	スギ	16世紀
69	990219	119	W144a	用途不明品	スギ	16世紀
70	990219	119	W144b	用途不明品	スギ	16世紀
71	990219	170	W150	曲物柄杓	スギ	16世紀
72	990219	239	実測なし	用途不明品	スギ	16世紀
73	990219	251	W191	田下駄	スギ	古代
74	990219	252	W190	斎串	スギ	古代
75	990219	254	W188	部材	カヤ	16世紀
76	990219	280	W179	将棋の駒	スギ	16世紀
77	990219	289	W149	下駄	スギ	16世紀
78	990219	296	W175	用途不明品	ツツジ属	16世紀
79	990219	297	W142	下駄	キリ	16世紀
80	990219	299	W180	下駄	スギ	16世紀
81	990219	301	W136	曲物	ヒノキ	16世紀
82	990219	302	W135	円形木製品	スギ	16世紀
83	990219	303	W157	箱	ヒノキ	16世紀
84	990219	304①	W154	箱	ヒノキ	16世紀
85	990219	304②		箱	ヒノキ	16世紀
86	990219	304③		箱	ヒノキ	16世紀
87	990219	304④		箱	ヒノキ	16世紀
88	990219	305	W160	用途不明品	スギ	16世紀
89	990219	306	W143	下駄	ホオノキ	16世紀
90	990219	310	実測なし	用途不明品	スギ樹皮	16世紀
91	990219	319	W196	切匙	スギ	16世紀
92	990219	329	W199	木鏃	モミ	弥生時代
93	990219	353	W204	曲物	ヒノキ	古代
94	990219	366	W118	皿	ヒノキ	古代
95	990219	392	W116	用途不明品	ヒノキ？	古代
96	990219	399	実測なし	建築部材	クリ	16世紀
97	990219	400	W104	建築部材	マツ(二葉)	16世紀
98	990219	401	W098	羽子板	モミ	16世紀
99	990219	409	W189	曲物側板	マツ(二葉)	16世紀
100	990219	409	実測なし	曲物	マツ(二葉)	16世紀

表5　宮内堀割遺跡Ⅱ出土木製品　器種別樹種一覧

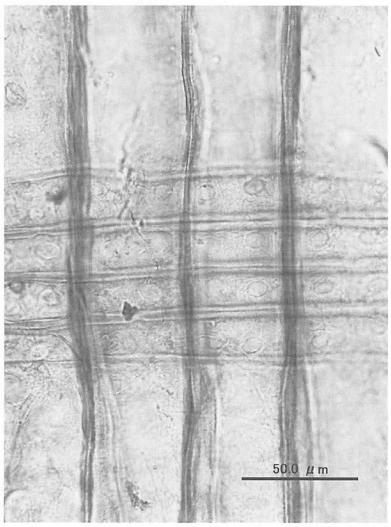
器　種	カヤ	キリ	クリ	サワグルミ	スギ	スギ樹皮	ツツジ属	ヒノキ	ヒノキ?	ホオノキ	モミ	ヤナギ属	マツ(二葉)	総計
下　駄		1		1	2					4		1		9
田下駄					15			1						16
切　匙					3									3
箸					4			1						5
網　枠	1													1
アカ取り					1			1						2
横　槌			1											1
火鑽臼					1									1
曲　物					2			2			1		2	7
楕円形曲物								1						1
長方形曲物											1			1
曲物柄杓					1									1
曲物側板					1								1	2
円形木製品					2			1						3
楕円形木製品								1						1
桶					3									3
箱								5						5
盤			1											1
皿								1						1
剣　形					1									1
斎　串					2									2
人　形											1			1
馬　形					1									1
木　鏃											1			1
羽子板											1			1
将棋駒					1									1
建築部材			1										1	2
板　材					1									1
部　材	1		1		9			2						13
用途不明品			1		8	1	1		1					12
合　計	2	1	5	1	58	1	1	16	1	4	5	1	4	100



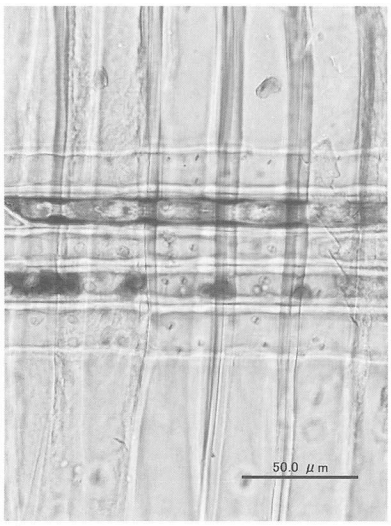
1. 980165-20 下駄 ホオノキ



2. 980165-27 曲物 モミ

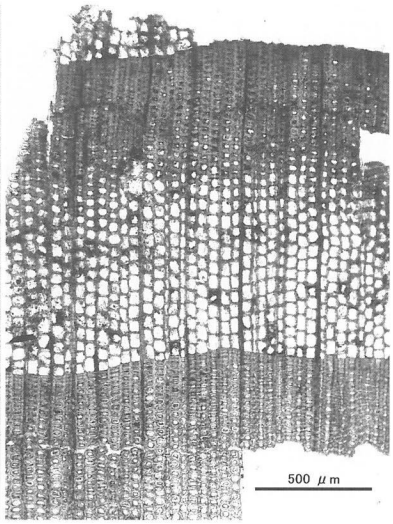


3. 980165-43 桶 スギ

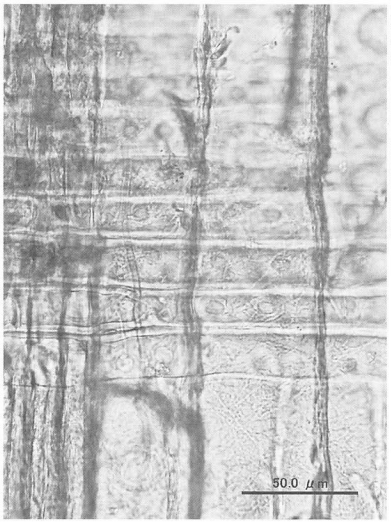


4. 980165-50 楕円形木製品　ヒノキ

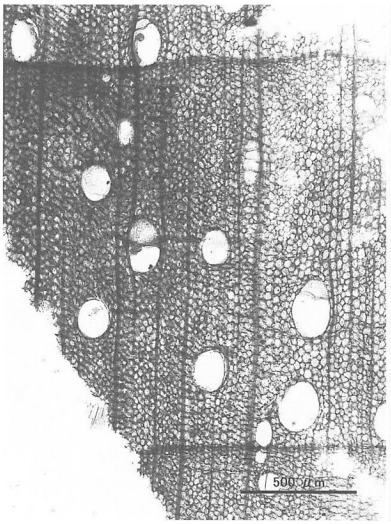
5. 980165-59 曲物 マツ(二葉)



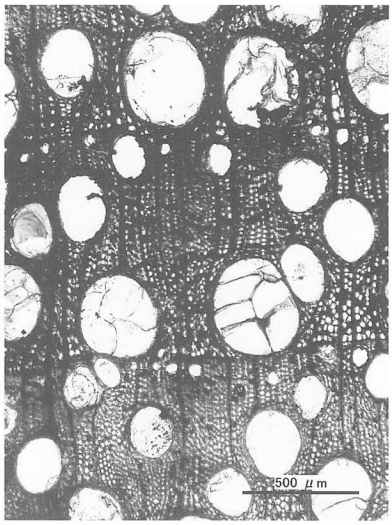
6. 980165-68 長方形曲物 モミ



7. 980165-81 田下駄 スギ



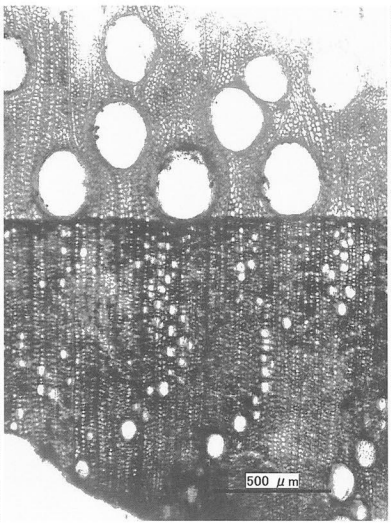
8. 980165-104 下駄 サワグルミ



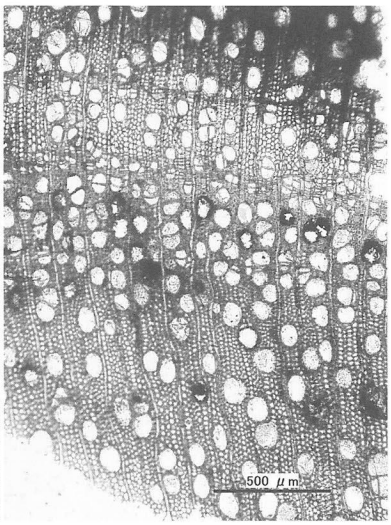
9. 980165-129 盤 クリ

第６図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品の顕微鏡写真（１）

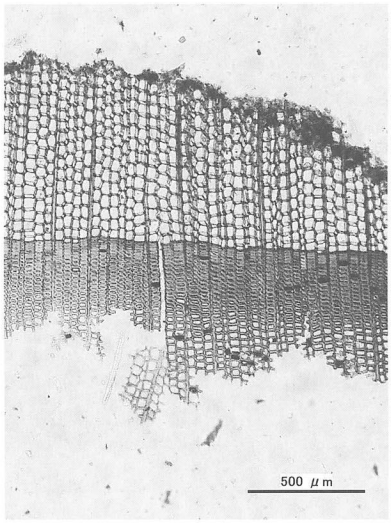
10. 990219-1 網枠 カヤ



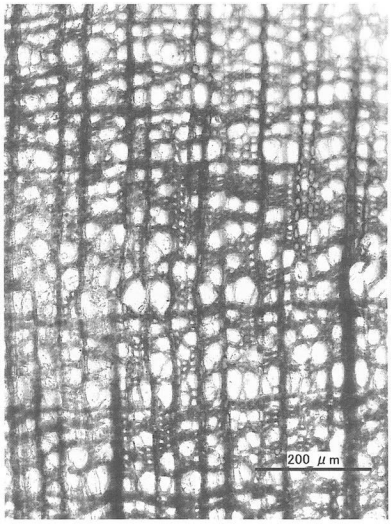
11. 990219-37 横槌 クリ



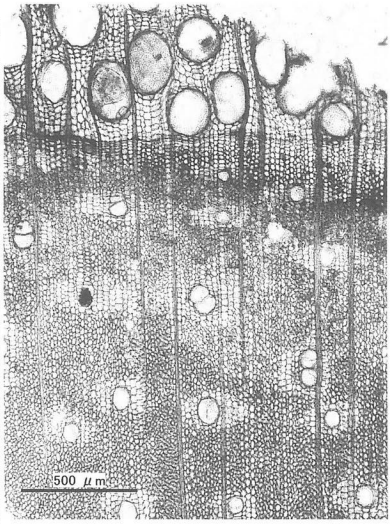
12. 990219-48 下駄 ヤナギ属



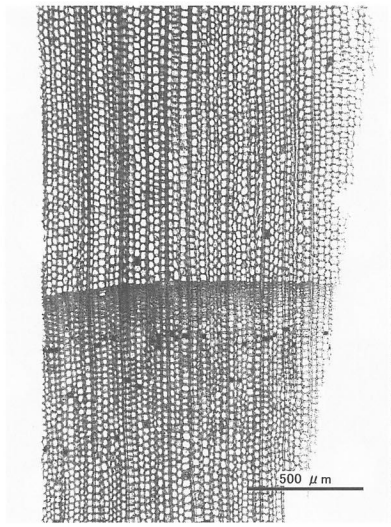
13. 990219-252 斎串 スギ



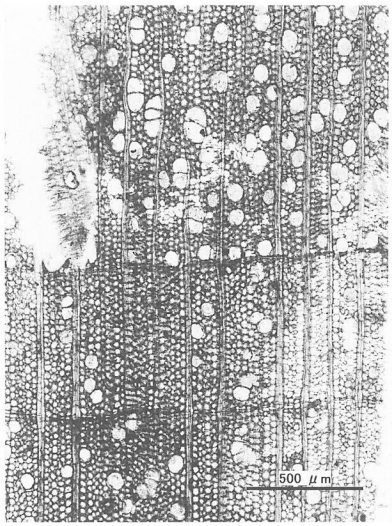
14. 990219-296 用途不明品　ツツジ属



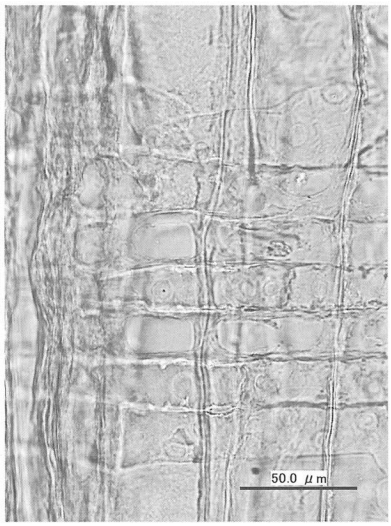
15. 990219-297 下駄 キリ



16. 990219-304② 箱 ヒノキ



17. 990219-306 下駄 ホオノキ



18. 990219-409 曲物側板　マツ（二葉）

第７図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土木製品の顕微鏡写真（２）

第２節　宮内堀脇遺跡出土漆器の材質・技法に関する調査

くらしき作陽大学　北野信彦

１．はじめに

宮内堀脇遺跡は、山名氏宗家の居城であった此隅山城の城下町遺跡と考えられており、ここからは室町時代後期の16世紀後期から近世初頭期段階に至る城下町関連の遺構と遺物が多数検出された。この中には、多数の漆器資料も含まれていた。今回、これらの材質・技法に関する文化財科学的調査を行ったので、その結果を報告する。

２．出土漆器の調査

2.1　調査対象資料

今回調査を行った漆器資料は、ろくろ挽き物である椀や小皿型の飲食器資料37点である。基本的には中世後期段階の資料が中心であり、いずれも実用性が高い生活什器類であると考えられる。

2.2　調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、ろくろ挽き作業により椀や皿型の挽き物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず、各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた、①木胎の樹種同定、②木取り方法、③漆塗り構造の分類、 ④赤色系漆の定性分析、などの材質・技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

(1)　木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフラニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2)　木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

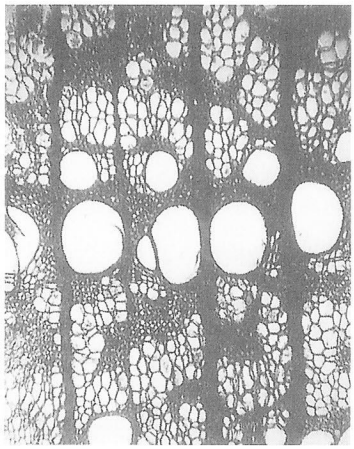
(3)　漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に１mm×３mm程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイト GY1251J.P　ハードナーHY.837）に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行い、一部の代表的な漆器については生物顕微鏡を用いた薄層の透過観察を併用した。

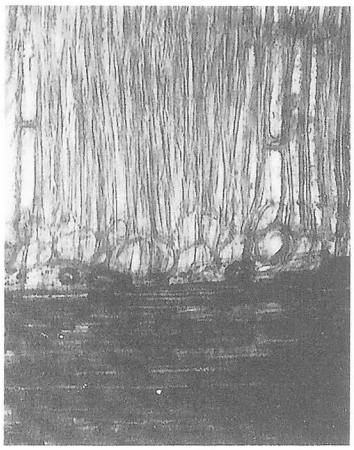
(4)赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料に関する定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所Ｓ-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000エネルギー分散型Ｘ線分析装置（EPMA・電

にれ科ケヤキ



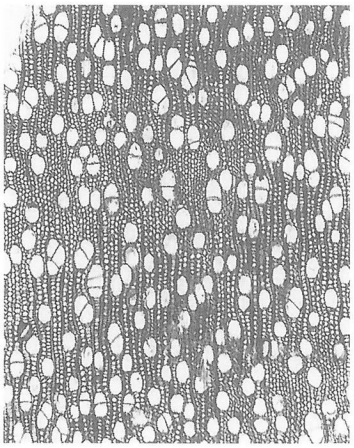
木口（30×）



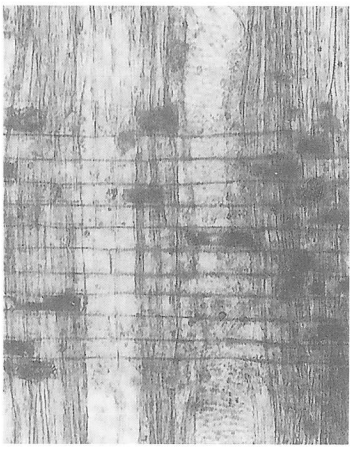
柾口（100×）

板目（50×）

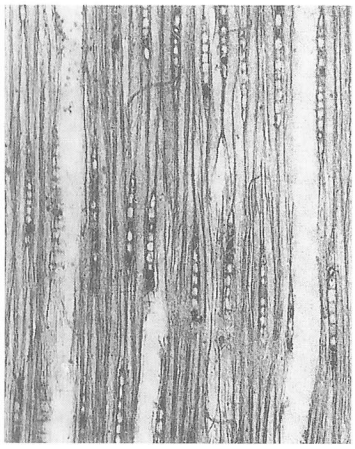
とちのき科トチノキ



木口（30×）

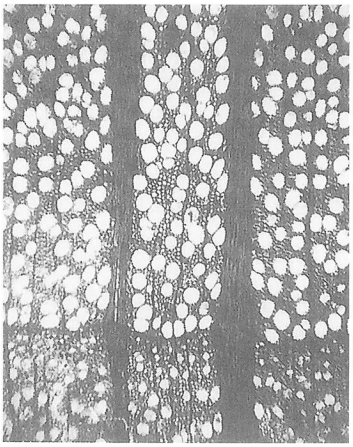


柾口（100×）

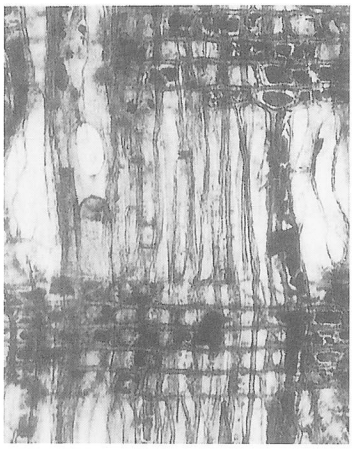


板目（50×）

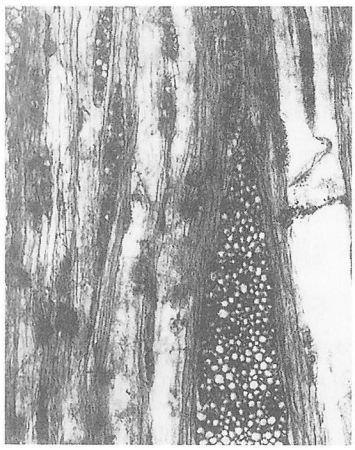
ぶな科ブナ



木口（30×）



柾口（100×）



板目（50×）

第８図　代表的な樹種同定写真

子線マイクロアナライザー）を連動させて使用した。分析設定時間は600秒。さらに、クロスチェックを行なうために（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置に設置して、特性X線を検出した。設定条件として、分析積算時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は40.000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

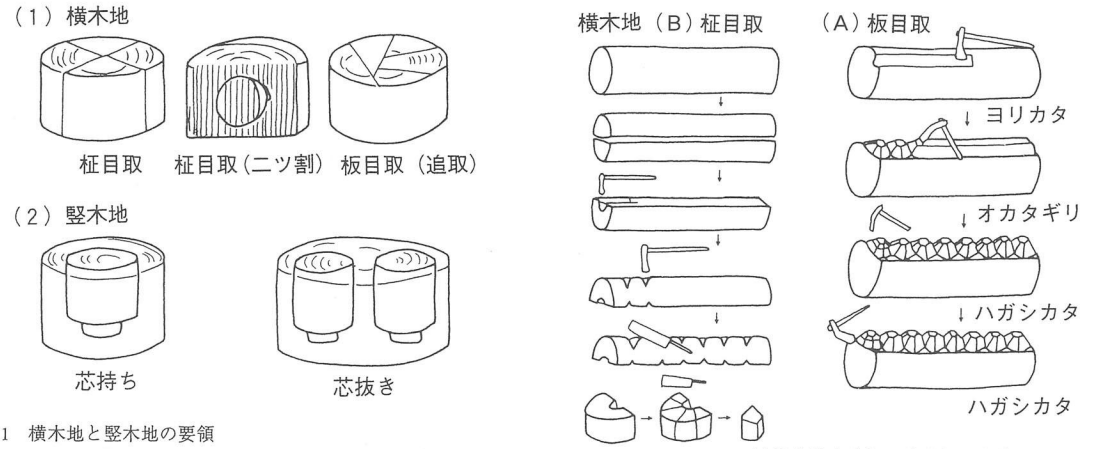
2.3 調査結果

本報で調査対象とした挽き物類の出土漆器資料は、(1) 内外面ともに黒色系漆か、内面赤色系漆・外面黒色系漆を地塗りし、資料によってはこの上に赤色系漆もしくは黒色系漆で漆絵を肉筆描きする椀型資料、(2)高台底のみには黒色系漆を塗布するものの、地の内外面は無加飾で赤色系漆を塗布する端反の小皿型資料、の２つのグループに分類された。このうちの(1) の椀型資料には、高台が比較的高いものと普通のものが存在する。これは椀・蓋のセット関係というよりは、三ッ組椀の大・中・小型椀のセット関係をそれぞれ反映しているものであろう(表６)。

本漆器資料の樹種同定を行なった結果、いずれも挽き物類であるためか、広葉樹材が選択されていた(図８)。そして、椀型資料群35点は、やや一般的な良材であるコナラ節（２点)、ブナ（３点)、ホオノキ（１点)、トチノキ(26点)と、最良材であるケヤキ（３点）が、端反の小皿型資料は、いずれも最良材であるケヤキ材（２点）が用いられていた(表７)。そしてこれらの木取り方法は、いずれも横木地であり、板目取り（A）と柾目取り（B）の双方が確認された(第９図)。

表６　漆器の分析結果一覧表

報告No	資料No	器型	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考
					内	外	文様	内	外	内	外	文様	
W035	16	端反小皿	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		根来系、布着せ補強
W036	17	椀	ブナ	B	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	紅葉文様
W032	24	椀	トチノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	朱＋ベンガラ		朱	
W037	32	椀	トチノキ	A	赤	黒		Ⅲ	Ⅰ	朱＋ベンガラ			
W095	42	椀	ホオノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱＋ベンガラ	朱潤		
W092	43	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
W034	44	椀	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
W083	45	椀	トチノキ	A	赤	赤	外-絵-黒	Ⅰ	Ⅱ	朱	朱		鶴亀文様
W110	46	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	鶴亀松文様
W033	52	椀	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
W016	54	端反小皿	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		根来系、布着せ補強
W015	55	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W031	69	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W003	72-1	椀	コナラ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ			朱	
W003	72-2	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W004	102	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W005	103	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱＋ベンガラ	
W170	278	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W218	282	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W133	285	椀	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
W213	287	椀	トチノキ	B	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W171	288	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W214	291	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W216	292	椀	ケヤキ	B	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	俵引っ掻き文様
W151	293	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W217	294	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W172	295	椀	ケヤキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ				
W134	298-1	椀	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱			
W134	298-2	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	鶴亀文様◎
W169	300	椀	ケヤキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ			
W195	322	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱	
W215	326	椀	ブナ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱＋ベンガラ		朱＋ベンガラ	
W093	368	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	
W094	369	椀	トチノキ	A	赤	赤	外-絵-黒	Ⅰ	Ⅱ	朱	朱		
W112	371	椀	コナラ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅲ	朱＋ベンガラ			
W114	372	椀	ブナ	A	黒	黒	内-絵-赤	Ⅱ	Ⅰ			朱＋ベンガラ	
W113	374	椀	トチノキ	A	赤	黒	外-絵-赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱	



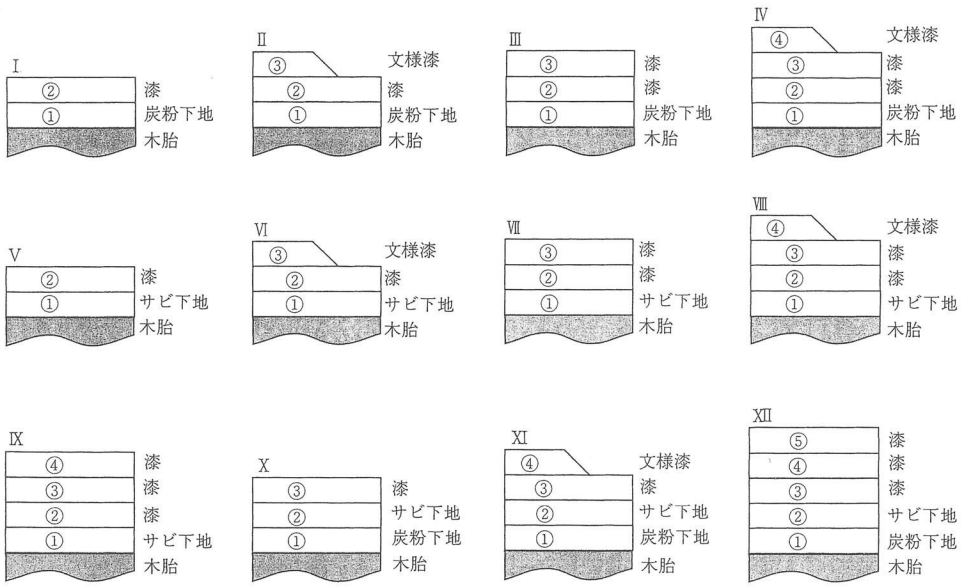
1　横木地と竪木地の要領
（橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』-1979- より原図引用）

2　近世会津木地師の木取りの方法
（須藤護『日本人の生活と文化(木)
暮らしの中の木器』-1982- より原図引用）

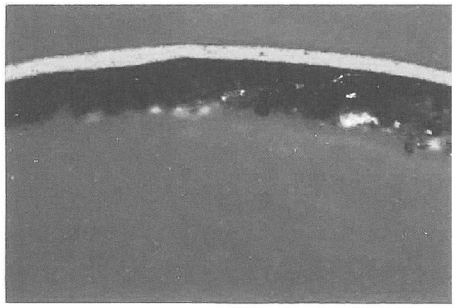
第９図　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

通常、江戸時代中期以降の挽き物類である椀木地の用材にはトチノキ・ブナ・ケヤキ材が中心となるが、中世後期から近世初頭期段階には、全国的に樹種の多様性が見出され、とりわけクリ・コナラ・シオジ材の使用が特徴的である点が調査者のこれまでの基礎調査で明らかになっている。本漆器資料群の場合、当該年代の特徴であるコナラ節材も含まれるものの、ケヤキ・トチノキ・ブナ材で全体の91.9%、とりわけトチノキ材が全体の73%の占有率を占めており、この点が本資料群の大きな特徴である。

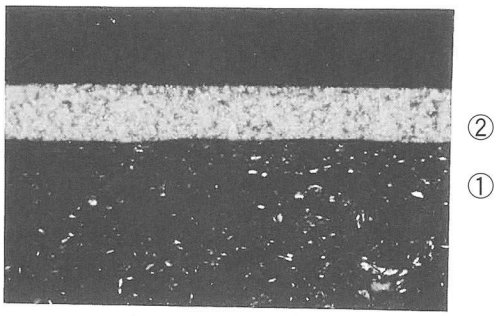
次に、個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al(アルミニウム)、Si(シリカ)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Fe(鉄) など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。そして、椀型資料は、いずれも炭粉下地の上に薄く黒漆層や透明感のある赤褐色系漆、朱漆が1層ないしは２層塗布した漆器資料群であった(写真1,2)。



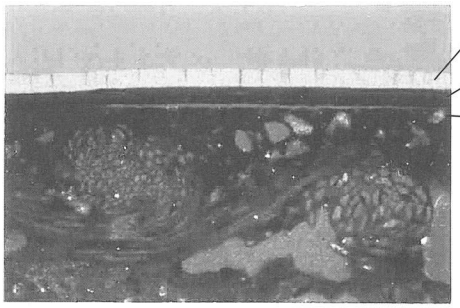
第10図　漆塗り構造の分類



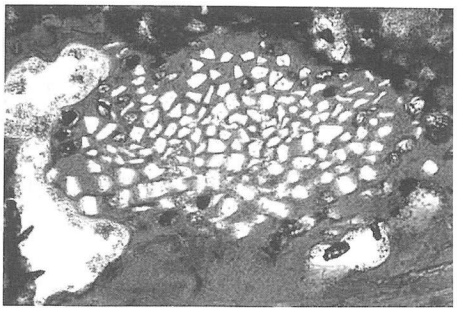
（写真１）赤色系漆の断面観察（×100）
①炭粉下地　②朱漆　（落射）



（写真２）赤色系漆の断面観察（×200）
①炭粉下地　②朱漆（落射偏光）



（写真３）赤色系漆の断面観察（×100）
①布着せ補強　②サビ下地
③赤褐色系漆　④朱漆（落射）



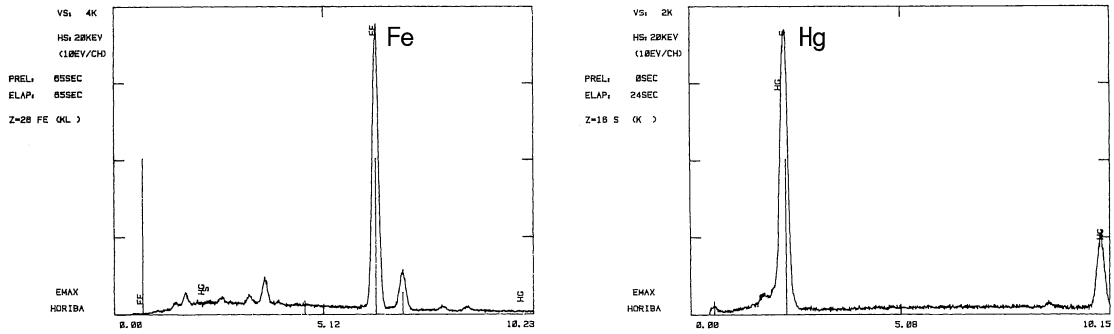
（写真４）同左拡大の布着せ補強部分（×200）
（透過）

第11図　赤色系漆の断面観察写真

このような炭粉下地の上に薄い上塗り漆層を塗布する技法は、中世末から近世初頭期における実用的な出土漆器椀類に一般的にみられる特徴である。そして、加飾の漆絵は地の上塗り漆の上に描かれていた(第10図)。

一方、端反の小皿型資料は、それとは大きく異なり、２点とも木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を伴うサビ下地が施されていた。そして、このサビ下地の上に中塗りの黒漆を塗布し、さらに上塗りの朱漆が塗り重ねられていた(写真3,4)。これは、漆工史の分野では中世漆器を代表すると位置づけられている「根来系朱漆器」では、正当もしくは典型的とも評せられる技法である。そして本資料の場合、いずれも、粒度が均質で細かく揃った朱顔料による良好な赤い発色を呈する朱漆が、内外面ともに上塗りされており、これらが良質な漆器であったことが理解される。

次に、本漆器資料における赤色系漆の使用顔料を電子線マイクロアナライザーおよび蛍光Ｘ線分析した結果、水銀(Hg)成分が強く検出され、さらに顕微鏡観察では、少なくとも朱（辰砂もしくは水銀朱HgS)の赤色顔料の粒が確認される資料群と、水銀(Hg)成分とともに、若干の鉄(Fe)成分のピークが検出され、さらに顕微鏡観察した結果、いずれも朱顔料の粒が確認される資料群、の二種類の赤色系漆に分類された。本漆器資料の場合、いずれの赤色系漆からも水銀(HgS)が強く検出されたため、基本的には朱顔料(HgS) を使用した朱漆である。しかし、後者の資料群では、鉄(Fe)のピークも同時に検出されるため、これを埋没土中の鉄成分の沈着汚染である可能性も残されるが、色味調整で朱にベンガラ(Fe_2O_3)顔料を混ぜて使用した赤色漆も一部存在するものと理解した(第12図)。そして、個々の赤い色相は、黄味が強い朱色～鮮赤色～暗紅色に至るまで、資料により若干異なっていた。これは、個々の資料の土中埋没時の劣化状態の違いが朱漆の色調の変色度合いに影響を与えた可能性もあろうが、金属顕微鏡観



赤色系漆　ベンガラ(Fe_2O_3)　　赤色系漆　朱（HgS）

第12図　蛍光X線分析結果

察では(1)資料No.16・54などの朱漆器や地塗内外面に描かれた赤色の色絵漆の多くに代表されるような極めて細かく粒度がそろった朱顔料を使用している資料、(2)資料No.42のようにやや粗い粒度の朱顔料を混入した朱潤み資料、(3)その他の中間タイプなど、少なくとも3種類のグループに分類された。

3．考察

以上、宮内堀脇遺跡出土漆器資料のうちの挽き物類は、いずれも椀・小皿型などの飲食器類を中心とした極めて実用的な生活什器としての漆器であった。ところが、これらを材質・技法といった生産技術面の組成からみると、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料と、堅牢で多層塗り構造を持つ優品資料に分類された。これらは、(1)内・外黒色系漆もしくは内朱漆・外黒色系漆を地塗りし、それらに朱漆で漆絵を筆描きする。木胎部は肉厚でやや大振りの器形を有する高台高が比較的高い資料と普通の高台高の資料があるが、これは大中小入れ子の三つ椀タイプのいずれかによる椀型、(2)高台底のみに黒色系漆を塗布するものの、地の内外面は無加飾で朱漆を塗布する。木胎部の厚みは薄造りで端反りがある小皿型、の大きく2つの材質・技法別のグループに分類された、そしてれぞれ前者は(1)群、後者は(2)群の生産技術が用いられていた。

さて、本漆器資料は、中世末から近世初頭期段階に一般的に使用されていた生活什器としての漆器椀類であることが、出土遺構の層位や共伴遺物の編年観から位置づけられている。この点については、漆器の生産技術面からも、(a)コナラ節材の使用や、優良材であるケヤキ材でも炭粉下地を施した一般的な塗り構造を有する資料が含まれる点、(b)炭粉下地に極めて薄い上塗り漆を一層塗布する資料が多い点、(c)赤色系漆には、江戸時代前期以降極めて一般的なベンガラ漆ではなく、朱漆が多用される点、(d)加飾の漆絵である米俵などの吉祥文様や紅葉などの植物文様のモチーフが豪放な肉筆であるとともに、引っ掻き技法が採用される資料も含まれている点、など、該当時代の漆器資料の特徴をよく表現していた。

その一方で、本資料の場合、中世末から近世初頭期段階の資料群としては、トチノキ材の占有率が極めて高かった。そしてこれらには、資料No.45,55,69,72-2,282,294,298-2のように、同様の比較的洗練されたデザインモチーフからなる鶴亀（松を含む場合がある）文様が朱漆で描かれるとともに、生産技術面も含めた一括性が高い資料群も含まれており、この点は本漆器資料の特徴の一つである。

また、中世以来の代表的な漆器の一つとして、主に寺社什器を中心とした実用本位の「根来手」「根来椀」、もしくは「根来塗」と呼称された朱漆器類があるが、本漆器資料のうちの資料No.16,54の端反小皿などは、生産技術面からみてもその典型的な実例であることがわかった。この「根来塗」は、漆工史

表7　ろくろ挽き物の用材分類表

A 環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデ、その他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズサクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので、使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で、加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

の分野では、実用的な朱漆器に中世大寺院であった紀州根来寺の名前を冠する理由として、根来寺山内工房で良質な寺院什器としての朱漆器生産を行なっていた点をあげ、根来塗の終末は、豊臣秀吉による天正十三（1585）年の根来寺焼き討ち、すなわち山内勢力の衰退にあるとしている。ところが、近年の中・近世考古学の分野では、室町時代中期以降の寺院関連遺跡ばかりでなく、上級武家地や尾張清洲城下町遺跡のような地方城館関連遺跡からも多数の朱漆器類が検出されるめ、寺院什器のみに限定されず、地方武家階級を含めた広範な社会階層にも朱漆器が使用されていたと考えられている。そして、このような朱漆器の使用状況をよく表現した絵画史料として、中世後期頃の上級武家の食事風景を描いた『酒飯論』などがあり、本漆器資料も、寺院什器である可能性もあるが、山名氏家臣団の上級武家における儀式用の飲食器の一つであった可能性も残しておきたい。報告者は、これまで中世末期段階の根来塗漆器資料として、和歌山県埋蔵文化財センターや岩出町教育委員会がそれぞれ発掘調査を行っている中世根来寺寺域関連遺跡（根来寺坊院跡）出土朱漆器の生産技術面に関する分析調査を行った経験を持つが、その際、極めて多種多用な材質・技法を有する資料が見出された。その点では、本漆器資料の場合、正当もしくは典型的な根来系朱漆器の材質・技法を有していたことは特筆される点である。

いずれにしても本漆器資料には、普段使いの漆器と、ハレの儀式食などに使用するような朱漆器の両者が見出された。そしてこの中には、畿内の京都などで占有率が高いトチノキ材の使用事例が多く、洗練された絵柄のモチーフによる鶴亀文様を描く資料群や、正当もしくは典型的な根来系朱漆器の資料群なども含まれていた。宮内堀脇遺跡は、物資流通を含めた交通の要衝であると同時に、当時有力大名であった山名氏宗家の城下町関連である。このような当時の背景を考慮に入れると、当該地域で使用されていた日常生活什器である漆器に、畿内を中心とした漆器生産技術の範疇に入る資料が多く含まれていても、ある程度納得いく結果といえよう。もちろん、このような漆器に、在地性が強い小規模の漆器生産地の製品を加えながら、両者相互補完してそれぞれの時と場所のニーズに答えた調達と使用が本遺跡内では為されていたものと考える。

（基本文献）

北野信彦（2005）『近世出土漆器の研究』吉川弘文館

北野信彦（2005）『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣

北野信彦（2005）『漆器の考古学　－出土漆器からみた近世という社会－』あるむ出版

第５章　まとめ

第１節　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土の土師器皿について

今回の調査で出土した土師器皿について、主に口縁部形態に着目して型式分類するとともに、その用途および系譜についての検討を行う。なお宮内堀脇遺跡の調査報告は、本報告書の刊行後に、武家屋敷遺構については別途、調査報告書が作成される予定である。出土した遺物の量なども本報告と比べて桁違いに多く、その報告結果によって本稿の内容に大きな修正を加える必要が生じる可能性がある。本稿はあくまでも今回の調査で出土した土師器皿についてのまとめであることを冒頭に断っておきたい。

１．製作技法と型式分類

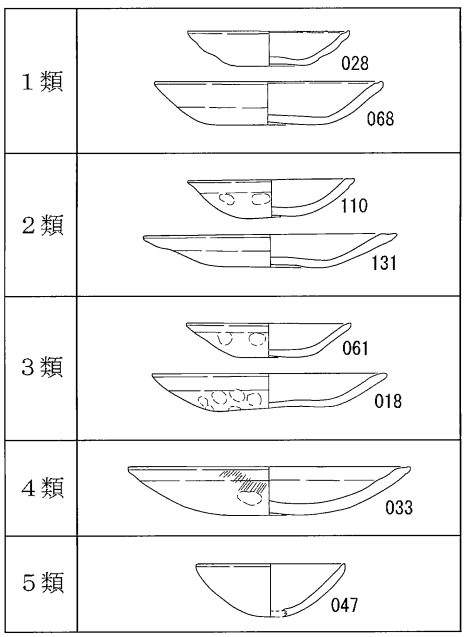
出土した土師器皿はいずれも手づくねで成形されており、ロクロ成形された土師器皿は一点も存在しない。基本的には底部から体部にかけて成形した後、底部をナデにより調整し、さらに体部を横ナデ調整する。口縁部の横ナデの施し方によって、皿の口縁部に形状の差異が生じている。

つまり、〔１類〕粘土をわずかに摘み上げるように整形しており、口縁端部がより薄く仕上げられて口縁内面に段が生じるもの、〔２類〕口縁端部付近を水平に近い方向に摘むように成形し、口縁端部に端面を形成するもの、〔３類〕口縁端部を摘み上げず横ナデを施し、端部の断面形が丸くなるよう仕上げるものの３種の口縁が存在する（第13図）。

これらの土師器皿の底部における調整はナデを基本とするが、見込みをほぼ一定方向になで、その後に周縁部を同心円状になでており、このナデが強ければいわゆるヘソ皿のように底部周縁部が凹み中心部が盛り上がる形状を呈する。１類ほど底部周縁のナデが丁寧で、周縁部が凹み中心部が盛り上がる傾向が強く、３類では底部周縁部のナデがそれほど顕著ではないものが多い。

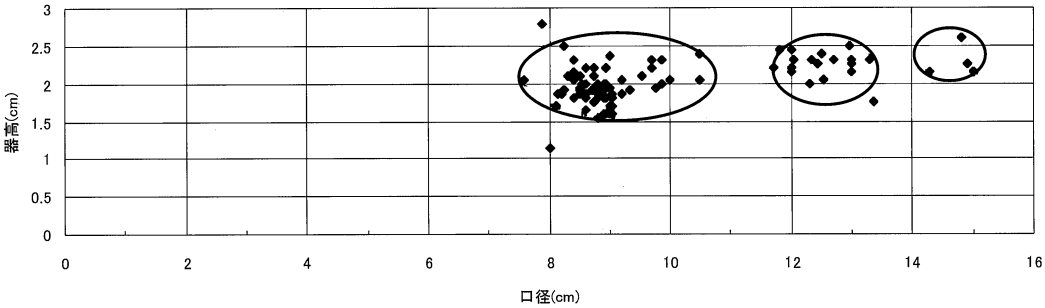
以上、土師器皿を１～３類の３型式に分類したが、例外が存在する。平成10年度Ａ地区の旧河道で出土した土師器皿(033)は、口縁部形態こそ２類に類似しているが、器壁が他より厚い点、体部と底部の境目が不明瞭で形態が丸底に近い点、器面調整としてハケメが認められる点、色調が橙褐色である点が他の３類と比べて異質であることから、別に〔４類〕を設定して(033)をここに分類した。また平成10年度P.203で出土した(047)については他の３類の皿と同じく口縁部が横ナデにより丸く仕上げられているが、器形が椀形に近く丸底である点が他の土師器皿と大きく異なっていることから(047)を３類から外し、〔５類〕とした。

このように当遺跡出土の土師器皿については主として口縁部形状などから１～５類に分類した。このうち１～３類が同じ組列上での型式変化するものと考えられる。１類から３類へと口縁部の形態が単純化する方向への型式変化が想定され、２類はその中間形態と考えられる。

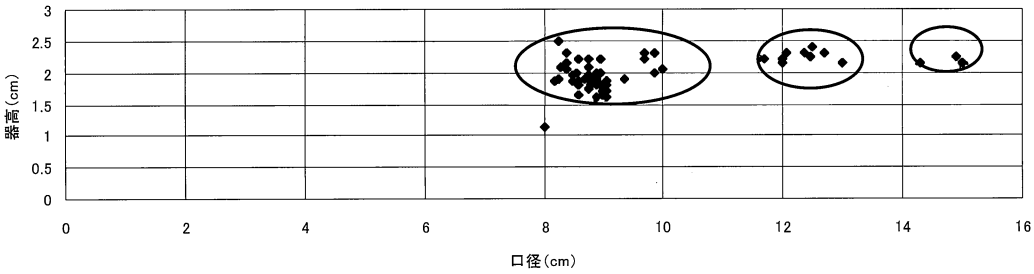


第13図　宮内堀脇遺跡Ⅱ出土土師器皿の分類図（縮尺=1/4）

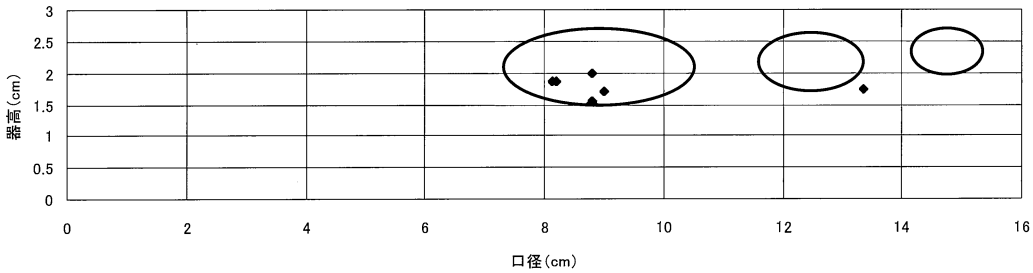
【グラフ1】 土師器皿(全体)の法量



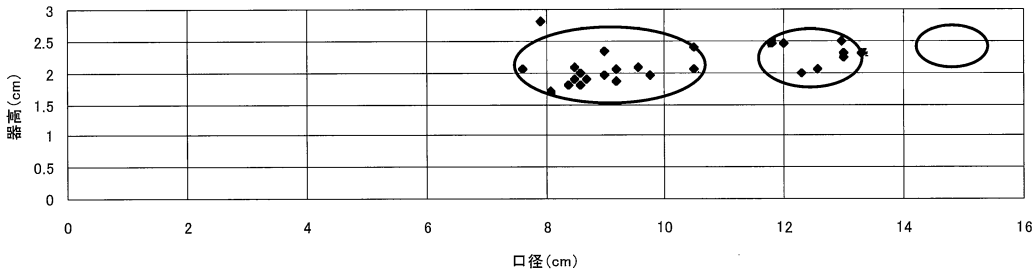
【グラフ2】 土師器皿(1類)の法量



【グラフ3】 土師器皿(2類)の口径と器高



【グラフ4】 土師器皿(3類)の口径と器高



第14図　土師器皿の型式ごとの法量分布（1～3類）

2．法量

土師器皿の法量については、出土品整理の段階から法量に規格があることが想定されたため、土師器皿全体の口径と器高を計測しその分布状況をグラフ化した（第14図）。これにより、特に口径の値について、土師器全体では14～15cm、12～13cm、８～10cmといった範囲を核とする大、中、小の３つの法量グループに束ねることができる。

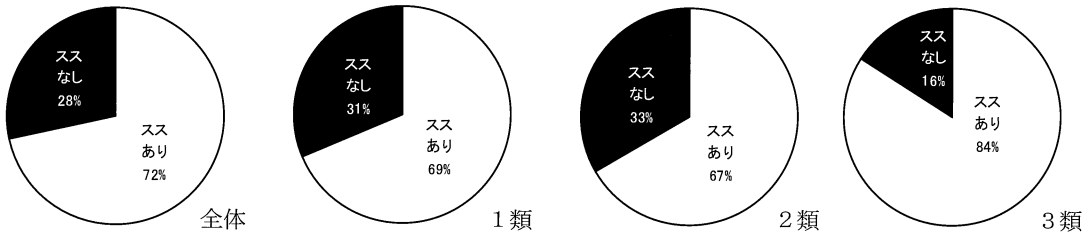
先に口縁部の形態により１～５類の５型式に分類したが、１～３類の皿が大、中、小の３法量を持つことが想定された。しかし実際に３法量すべてが揃うのは１類のみで、２類と３類は中、小の２法量しか見られない。ただ土師器皿全体を見ても最も法量の大きなグループは４点しか存在せず、今後、宮内堀脇遺跡における他の地区の調査が進展すれば、２，３類の大皿が現れる可能性がある。ここでは型式の違いにより法量グループの数が異なるとは言い切れない。

3．用途

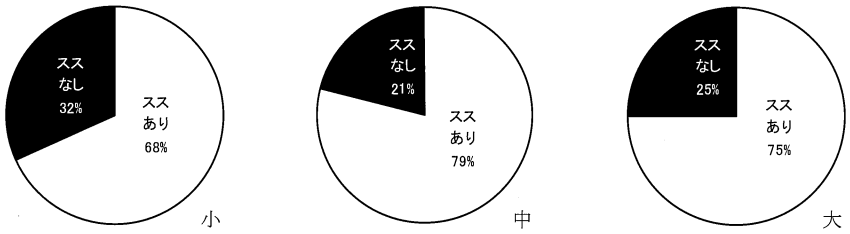
中世における土師器皿（かわらけ）の用途について、吉岡康暢氏は「饗宴・儀礼用器」および西国各地を中心として「使い捨て的かつ補助的な副食器（菜・調味皿）」としている。さらに「14世紀後半以降、灯油の普及に伴う油皿（灯明皿）としての利用」にも言及している[1]。

報告における土師器皿のうち、全体の約７割以上にススや油の染みが付着していることから、吉岡氏が指摘したとおり灯明皿というのが、宮内堀脇遺跡における土師器皿の最も主要な用途と考えられる。ここでは、食器や供膳具という土師器皿の本来の用途とは異なる、灯明具としての土師皿がどの程度使用されているかを、型式および法量別に数量化しグラフ化してみた。

土師器皿の型式ごとに比較すると１類は69％、２類は67％、３類は84％で、３類が灯明皿として用いられた遺物の割合が最も高い。１類、２類と比べて３類がやや灯明皿として使われた割合が高い。３類は１類、２類より時期が若干新しく、時代が下るほど食器より灯明皿の割合が高くなると考えられる。（第15図）



第15図　土師器皿の型式ごとのスス付着状況



第16図　土師器皿の法量ごとのスス付着状況

次に土師器皿の法量とススの付着状況についてであるが、口径８～10cm台が中心となる小皿はススの付着率は66％、12～13cmが核となる中皿は79％、14～15cmが核となる大皿は75％である。法量の差によるススの付着率、つまり灯明皿としての使用率の差はそれほど大きくはないが、小皿よりもむしろ直径12cm以上の中皿以上の皿に、灯明皿が若干多いように見受けられる。（第16図）

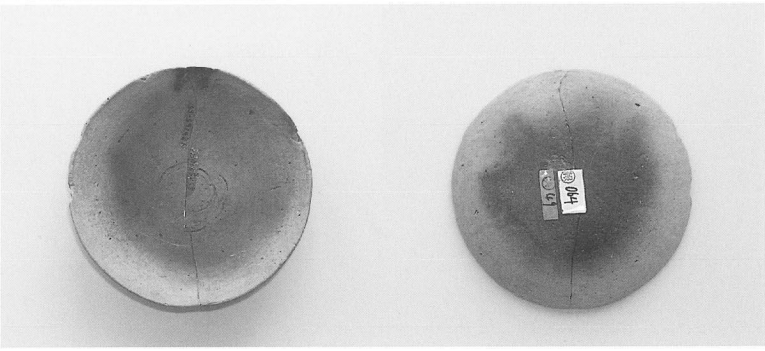
ところで、平成11年度のＡ地区には土師器皿の一括埋納遺構であるSX01が存在する。この遺構で出土した土師器皿について、ススなどが付着している割合は42.9％で、全体の比率と比べてかなり低い。またSX01で出土した土師器皿は１類が大半であるが、その１類における灯明皿の比率と比べてもやはりかなり低率である。またススの付着の仕方についても、宮内堀脇遺跡全体では、ススの付着が体部外面にまで至るものや、灯明の芯の痕跡が見られるものなど、灯明として使用された痕跡が明瞭で、ある程度一定期間にわたり灯明として利用され続けたと考えられるものが多く存在する。一方SX01出土の土師器皿は、ススの痕跡の付き方が薄く、灯明として用いられたとしてもそれほど長期間は用いられず、灯明皿としても使い捨て的に用いられていたようである。

このことからSX01出土の土師器皿は、儀式あるいは饗宴などで酒席に用いられた酒杯と灯明皿が、祭祀的な意味合いを込めて一括埋納されたと想定される。また食器としての土師器皿と、灯明具としての土師器皿が供伴している点から、なんらかの儀式が夜間に行われた可能性が高いと考えられる。さらに供伴する石製品には仏教用語である「三界…」で始まる墨書があることから、執り行われた儀式が仏事などに関する可能性がある。

４．系譜

これらの土師器皿の年代について詳細は次節で記すが、16世紀後半が中心となる。宮内堀脇遺跡で出土したのと同種のロクロを用いず成形された土師器皿は、いわゆる京都系土師器として一括して論じられることが多く、今回出土した土師器皿の祖形についてもやはり京都産土師器に求めることが可能で、

第17図　ススの付着状況
〔SX01出土遺物(163)〕



第18図　ススの付着状況
〔包含層出土遺物(064)〕

小森、上村両氏の分類による皿Sが祖形となると考えられる。白色系の色調と、尖り気味にやや上方へ向けて先端が小さく丸く収める口縁端部に共通性が見出される[2]。このような口縁処理は後に、口縁端部が内径する端面化が進み、さらにこの端面も徐々に不明瞭となって喪失する方向で変化することも、宮内堀脇遺跡の土師器皿と共通しているように思われる。いわば京都における土師器皿の型式変化に、宮内堀脇遺跡の土師器皿も連動して変化していることを考えれば、宮内堀脇遺跡に京都系土師器への導入は一時的なことではなく、常に京都における土師器の動向を意識した土師器皿生産が継続して行われていたと推測される。

このように宮内堀脇遺跡に京都系土器が導入された背景について、服部実喜氏によれば、16世紀は京都系土器の模倣生産が各地で本格的に開始された時期であり、京都系土器を導入した戦国大名は、室町期の国司や守護、守護代から発展した西国大名に偏在していることを指摘している[3]。宮内堀脇遺跡は但馬山名氏が築いた此隅山城の麓に所在する城下の遺跡であり、山名氏の居館が近接地に存在する可能性が高い。従って当遺跡で出土する土師器皿についても、山名氏などが行った儀礼や饗宴のために持ち込まれ、後に転じて灯明皿として用いられるようになったものが今回の調査で多く出土したものと考えられる。

（註）

(1) 吉岡康暢　1997年「〝カワラケ〟小考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第74集　国立歴史民俗博物館

(2) 小森俊博、上村憲章　1996年「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

(3) 服部実喜　2003年「かわらけ」『戦国時代の考古学』高志書院

第２節　土器・陶磁器と遺構の年代について

１．主な出土遺物

(1)　弥生～古墳時代

古墳時代前～中期の土師器壺・甕および須恵器杯がある。また弥生土器の高杯・鉢・壺・甕が出土しおり、時期は弥生中期後半頃と考えられる。

(2)　中世末期の出土遺物

宮内堀脇遺跡で検出した主要な遺構、遺物は16世紀後半～17世紀初頭頃にあたるものが多い。遺構で最も多く出土したものが土師器の皿である。土師器は他に短頸壺や坩堝などがある。その他の土器には瓦質土器の擂鉢・火鉢・脚付鉢・短頸壺などがある。

国産陶器には施釉陶器と無釉陶器がある。施釉陶器は瀬戸美濃焼で、天目椀のほか中国の磁器を模した灰釉皿がある。無釉陶器は越前焼と備前焼が存在し、越前焼は擂鉢、備前焼は壺・甕・擂鉢より成る。

国産磁器としては初期伊万里の染付と青磁の皿が出土している。

中国産磁器は染付磁器、青磁および白磁がある。染付は大半が景徳鎮窯系で１点のみ漳州窯系が存在する。器種は碗・皿・小杯がある。青磁碗は基本的に龍泉窯系の細蓮弁文碗である。白磁皿は端反皿が多い。また中国産陶器として建窯産と考えられる天目椀が一点出土している。

(3)　中世遺構の年代について

今回の調査で検出した中世末期の遺構について、出土遺物により年代決定を試みる。まずは土師器皿の型式により遺構の相対年代を検討する。土師器皿は一般的に消耗品であり伝世期間を考慮する必要がないことから、相対年代を決定するための基準として適当と考える。さらに遺構ごとに中世の土器・陶磁器について共伴関係を示すとともに、主に輸入磁器との共伴関係から出土遺構の絶対年代を検討に努めた。ただし染付などの貿易陶磁は、一つの型式の消長期間が長く、これにより実年代を決定したことにより、当遺跡の実年代も少なからず誤差を含んだものであることを事前に断っておく。

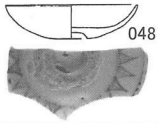
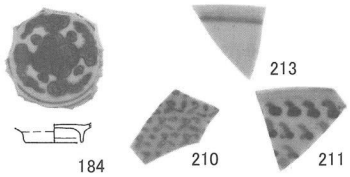
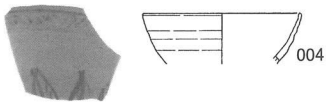
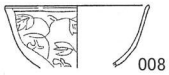
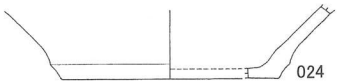
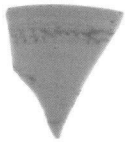
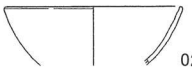
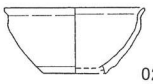
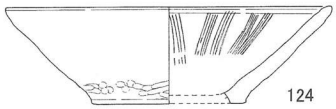
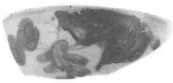
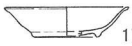
２．土師器皿から見た遺構の相対年代

遺物が出土した遺構のうち、複数の種類の遺物を共伴する遺構を選び出し、これらの遺構を相対年代の順に並び替えた。相対年代を決める基準は先述したとおり土師器皿である。土師器皿は口縁端部の形状により１～５類に分類した。旧河道以外の遺構から出土した土師器皿は１，２，３，５類が存在する。土師器皿が１類のみの遺構はSK01(⑪B地区)、SD202(⑩)、SD204(⑩)、２類のみの遺構はSD11(⑪AG地区)、３類が出土するのはSD206(⑩)、SD07(⑪AG地区)、SD01(⑪B地区)、SK08(⑪C地区)、５類のみ出土するのはP.203(⑩)である。(丸数字⑩⑪は調査年度を示す。)

土師器皿が「１類→２類→３類」の順で型式変化していくことから、遺構の年代は(1)土師器皿１類のみの「SK01(⑪B地区)、SD202(⑩)、SD204(⑩)」→(2)土師器皿２類のみの「SD11(⑪AG地区)」→(3)土師器皿３類を伴う「SD206(⑩)、SD07(⑪AG地区)、SD01(⑪B地区)、SK08(⑪C地区)」の順と考えられる。５類のみ出土したP.203(⑩)については共伴する染付磁器の皿から年代を検討した。次頁遺構では遺構ごとに出土遺物の共伴関係を記す。

年度	遺構名	土師器	瓦質土器	国産陶器 瀬戸美濃
⑩	P.203	5類 047		
⑪	SK01(B地区)	1類 180		
⑩	SD202	1類 002 003		
⑩	SD204	1類 005 007		
⑪	SD11(AG地区)	2類 110	112	115
⑩	SD206	1類 016 3類 011 018		
⑪	SD07(AG地区)	1類 117 121 2類 116 3類 119 120	123	
⑪	SD01(B地区)	1類 169 177 3類 171	178 179	172 175
⑪	SK08(C地区)	3類 188	189	

第19図　宮内堀脇遺跡Ⅱ土器・陶磁器の共伴関係

国産陶器	輸入磁器			輸入陶器
越前	染付	白磁	青磁	
 048				
 184 210 211 213				
 004				
 008				
113				
 024   022 023  021				
 124				
 174  173				

3．各遺構の土器・陶磁器の共伴関係（第19図）

(1)　土師器皿が１類のみの遺構

SK01（⑪Ｂ地区）

土師器皿１類の他には、景徳鎮窯系染付碗がある(184)(210)(211)(213)。染付碗(184)は小野正敏氏の分類によるＥ群に属する[1]。碗Ｅ群の年代については小野氏の編年案によれば16世紀第３四半期を核とし、16世紀中頃から後半とされるが、碗(184)は絵付けについては、見込みの如意雲文を細い線で輪郭を描き内部を呉須で塗るという手法をとっており、また高台を薄く高く成形し、畳付も狭い範囲を丁寧に削っている。このように絵付けや成形・調整の手法につき退化している様子が見られないことから、碗Ｅ類でも比較的古い様相を示しており、16世紀中頃の遺物と考えたい。

SD202（⑩）

この溝は漳州窯系染付碗(004)が出土しており、16世紀中頃の溝と考えられる。

SD204（⑩）

景徳鎮窯系染付碗(008)が出土している。(008)は染付碗Ｅ群であるが、①他の染付磁器と比べて胎土が精製されており、より白く発色している点、②口縁直下の圏線や体部外面の暗花文に乱れがなく丁寧に施文されている点などから、染付碗(184)と同様、染付碗Ｅ群の中でもより古い様相を示しており、16世紀中頃の遺物と考えられる。

(2)　土師器皿が２類のみの遺構

SD11（⑪ＡＧ地区）

瓦質土器擂鉢(112)と瀬戸美濃焼の端反皿(115)、白磁皿(113)が出土している。瀬戸美濃焼の端反皿は大窯期の遺物で、白磁皿は森田分類のＥ群にあたり[2]、いずれも16世紀代の遺物である。

(3)　土師器皿３類を伴う遺構

SD206（⑩）

中国産天目椀(021)、景徳鎮窯系染付(022)、白磁皿(023)、越前擂鉢(024)がある。天目椀(021)は建窯産と考えられる。景徳鎮窯系染付(022)は染付碗Ｃ群にあたる。碗Ｃ群の存続期間は15世紀後半から16世紀後半と考えられるが、碗(022)は波濤文帯が崩れ、波濤文と認識しにくい程であるなどＣ群でも新しい様相を示していると思われる。時期は碗Ｃ群が存続する末期の16世紀後葉と考えられる。

SD07（⑪ＡＧ地区）

瓦質土器短頸壺(123)が越前擂鉢(124)がある。どちらも16世紀代の遺物である。

SD01（⑪Ｂ地区）

土師器坩堝(177)、瓦質土器擂鉢(178)、火鉢(179)、瀬戸美濃焼灰釉皿(172)、瀬戸美濃天目(175)、景徳鎮窯系染付(174)、白磁皿(173)がある。どれも16世紀代の遺物である。瀬戸美濃焼皿(172)は碁笥底状の底部を持ち、染付皿Ｃ群の写しと考えられる。景徳鎮窯系染付碗(174)は文様の輪郭を描き内部を呉須で塗る意識はあるが、輪郭が乱れており、SK01（⑪Ｂ地区）出土の碗(184)よりも新しい様相を示していることから、碗(174)は16世紀後半の遺物と考えられる。

SK08（⑪Ｃ地区）

土師器短頸壺(189)が出土する16世紀代の遺構である。

(4)　土師器皿が５類のみの遺構

P.203(⑩)

景徳鎮窯系染付皿(048)がある。皿(048)の底部は碁笥底で染付皿Ｃ群にあたる。皿Ｃ群は碗Ｅ群よりも相対的に古く16世紀前半が中心となる。

４．土器陶磁器から見た遺構の年代

今回の調査で出土した中世の遺物は16世紀後半の遺物が中心である。その中で土師器皿１類が出土する遺構は16世紀中頃に近い時期が考えられ、３類を伴う遺構は16世紀後葉まで時期が下る可能性が高い。２類を伴う遺構はその間の時期（16世紀中葉後半～16世紀後葉前半）が想定される。また土師器皿が５類しか出土しないP.203(⑩)は、他の遺構との相対的な先後関係を把握しかねるが、染付皿Ｃ類の出土により16世紀前半から中頃までさかのぼる可能性がある。

（註）

(1)　小野　正敏　1982年「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

(2)　森田　勉　1982年「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

第3節　まとめ

1．宮内堀脇遺跡の周辺

豊岡市出石町宮内地区は、出石神社とともに古くからの由緒をもった地域である。昭和62年度から平成７年度にかけて、小野川放水路事業に伴って行われた「入佐川遺跡」「袴狭遺跡」「砂入遺跡」などの発掘調査では、奈良～平安時代初期の木簡・木製祭祀具が数万点も出土し、第１期但馬国府・出石郡衙の存在を裏付けることとなった。

その後長い中世を経て戦国時代になると、この地域には但馬守護職の山名氏が拠る「此隅山城」の城下町が形成された。戦国時代末期～近世初頭に、街の中心は現在の出石城下町の方へ遷ってしまったが、かえってそれがために中世の戦国城下町が水田下にパックされて良好に遺存することになった。その遺構の一端は、袴狭遺跡で見つかった三間堂や入佐川遺跡の堀跡にすでに表れていたが、本格的に城下町の様相が明らかとなったのは、平成７～11年度に（一）町分久美浜線の道路改良に伴って実施した宮内堀脇遺跡の調査によってであった。

本報告書はそのうちの平成10～11年度の調査成果を掲載するが、調査区全体の中では城下町の中心から外れていく箇所に位置する。今回のまとめでは報告した範囲の中で導き出せる点を列挙するにとどめて、全体の総括は次回の報告に委ねたい。

2．此隅山城下町について

平成10～11年度の調査区は幅５～20m、延長約400mの範囲に及ぶ。そのうち城下町に関連する遺構が存在するのは、北半部の平成10年度Ａ，Ｂ地区、平成11年度Ａ～Ｃ，Ｇ地区の区間である。見つかった遺構には溝・建物跡・土坑・土師器埋納遺構などがある。

区画溝

調査区の形状が南北に細長いこともあって、見つかった溝のほとんどは東西方向のものである。方向も水田条里に沿ったものが多く、およそ10～20mの間隔で平行に現れるため、町屋の区画溝としての機能が想定される。細い溝でも深さは50cm～１m以上で何度も掘り直され、整地による嵩上げとともに、低湿地での排水と高燥化に意を砕いた様子が窺える。

条里方向に合わない溝には、平成11年度Ａ，Ｇ地区のSD10とＢ地区のSD01がある。Ａ，Ｇ地区のSD10は埋め立てられた後、上に礎石建物が築かれており、町屋が拡大する過程を示すものであろう。一方Ｂ地区のSD01は、隣接する区画溝SD05埋没後の上層から浅く掘り込まれている。

平成10年度Ａ地区と平成11年度Ｇ地区北半の東壁沿いには、旧河道状の大きな落ち込みの西肩が、南北方向に通っている。これが一連のものであるとすれば、およそ85mに及ぶが、比較的直線的な形状でもあるところから、平成７～９年度の調査で検出したような堀状の遺構になる可能性も考えられる。

溝が検出されるのは平成11年度Ｂ地区までで、Ｃ地区では溝による区画はなく、かえって土坑・柱穴の密度が高まる。整然とした区画から外れたＣ地区あたりでは、掘り込みや造作に対する規制も緩やかであった状況を反映するものであろう。さらにＤ地区までいくと谷筋となって洪水砂が厚く堆積しており、城下町の領域からは外れることになる。

建物跡

建物跡を検出できたのは平成11年度Ａ，Ｇ地区のみで、SD07の北側の区画に礎石建物、南側の区画に

掘立柱建物が存在する。しかしこれ以外の地区でも区画の内部は遺構の密度が薄く、本来は礎石立ちの建物が林立していたのであろう。

また平成11年度Ｂ地区南端の西壁に地層のずれが見られるように地盤は軟弱で、重量のある建物は避けたものと考えられる。同Ｂ地区 SD01 などからまとまって出土した樹皮様の木片は、家屋の屋根や壁材に供されたものかもしれない。

なお調査区内では井戸は見つかっていない。これはシルト層の分厚い堆積により、良質の地下水が期待できないためであろうことを付言しておく。

土坑・土師器埋納遺構

平成11年度Ｂ地区の SK01 は正円形で底が水平な土坑であり、本来は桶を据えていたものかもしれない。埋土からの出土品には箱(W154)・茶筅(W178)・将棋の駒(W179)といった類例の少ない遺物が含まれており、生活程度の高さを物語っている。

平成11年度Ａ地区の SX01 は土師器皿の集積とともに、墨書のある花崗岩の自然石(168)が埋納されている。墨書には梵字・仏教用語が含まれており、供養・地鎮などの宗教儀式に伴う遺構といえる。

城下町の遺物

出土土器の主体となる土師器皿は16世紀後半頃の年代を示し、輸入陶磁器・備前焼・在地系の瓦質土器などがセットとなる。

木製漆椀は樹種同定の結果、日用品についてはトチノキ材が卓越しているのが特徴である。一方、根来塗系の朱塗漆器はケヤキ材に下地・中塗り・上塗りを重ねており、質・技法の違いが際立っていた。

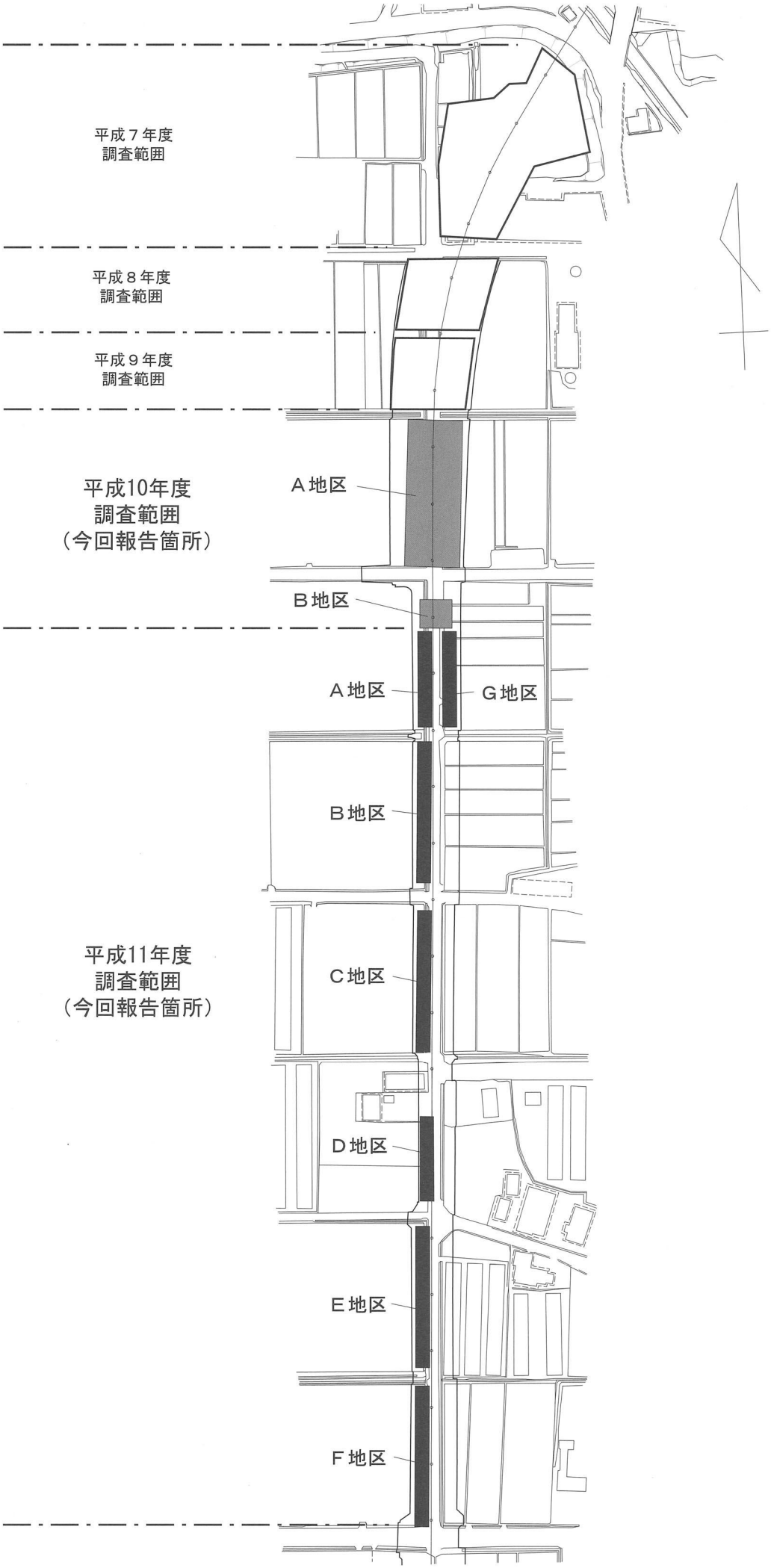
平成７～９年度調査区では、上級家臣団の屋敷地を調査し、大量の遺物が得られている。此隅山城下町の様相を明らかにし、他地域との比較・対照が可能になるには、次号の成果を待たねばならない。

３．その他の時期について

中世遺構面の下層には、古代の遺物包含層がある。出土品は田下駄など木製農具が大半で、集落ではなく水田域、それも相当の深田であったろうことが窺える。

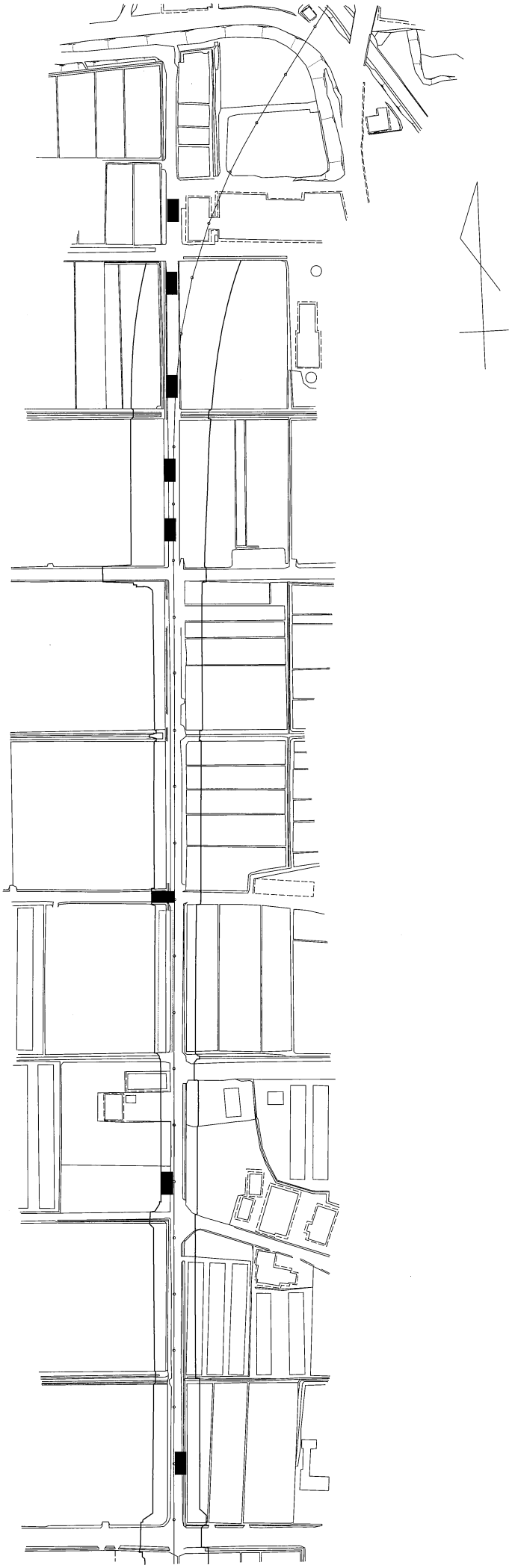
Ｅ,Ｆ地区では少量の弥生土器が出土しているが、Ｅ地区出土の木鏃(W199)も弥生時代後期の所産と考えられる。全体が三角錐形を呈し、漢代の楽浪郡などで出土する青銅製三稜鏃と形状が共通する。

図　　版



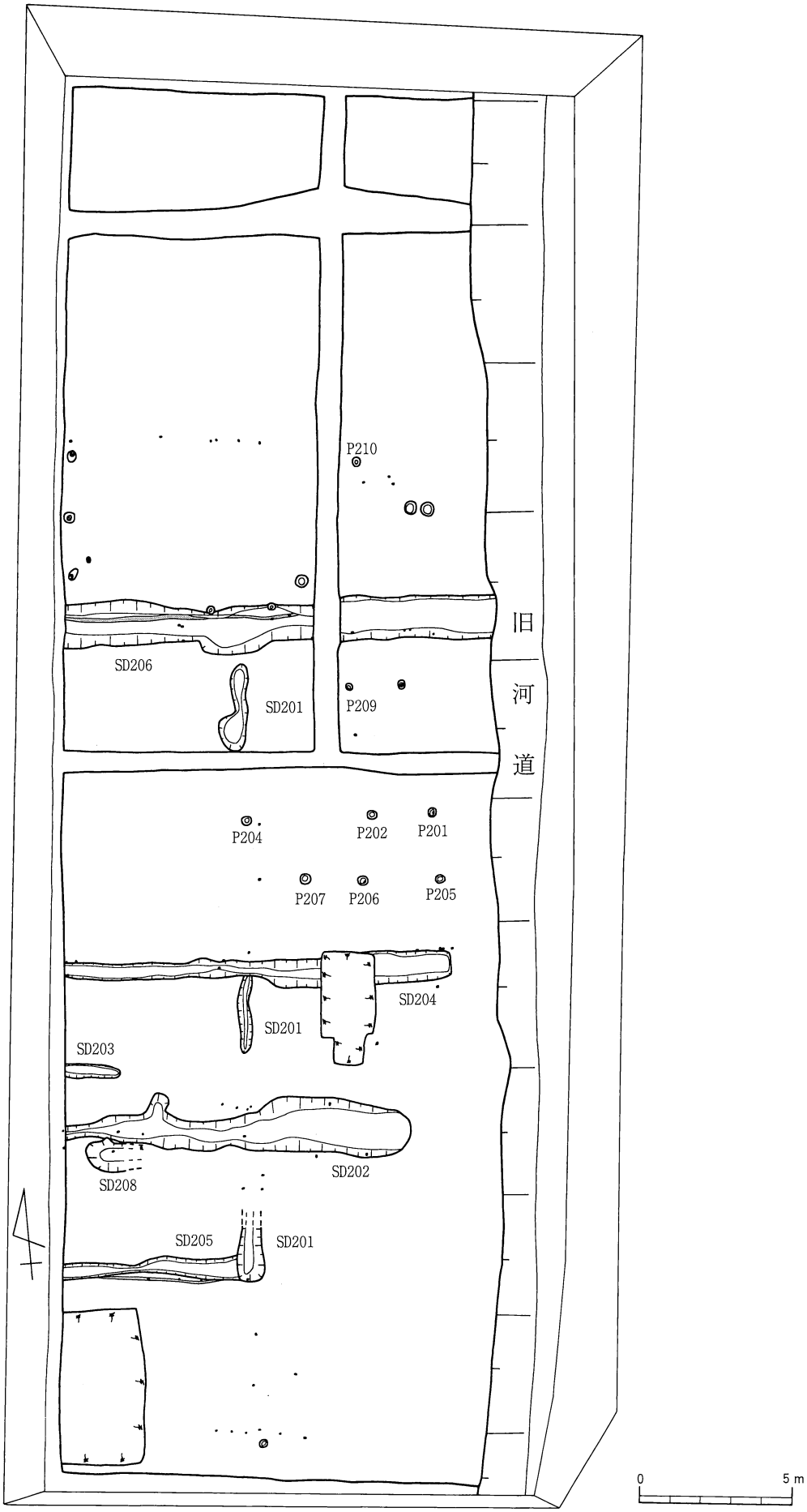
調査区配置図（縮尺＝１：2,000）

図版 2



確認調査トレンチ配置図（縮尺＝１：2,000）

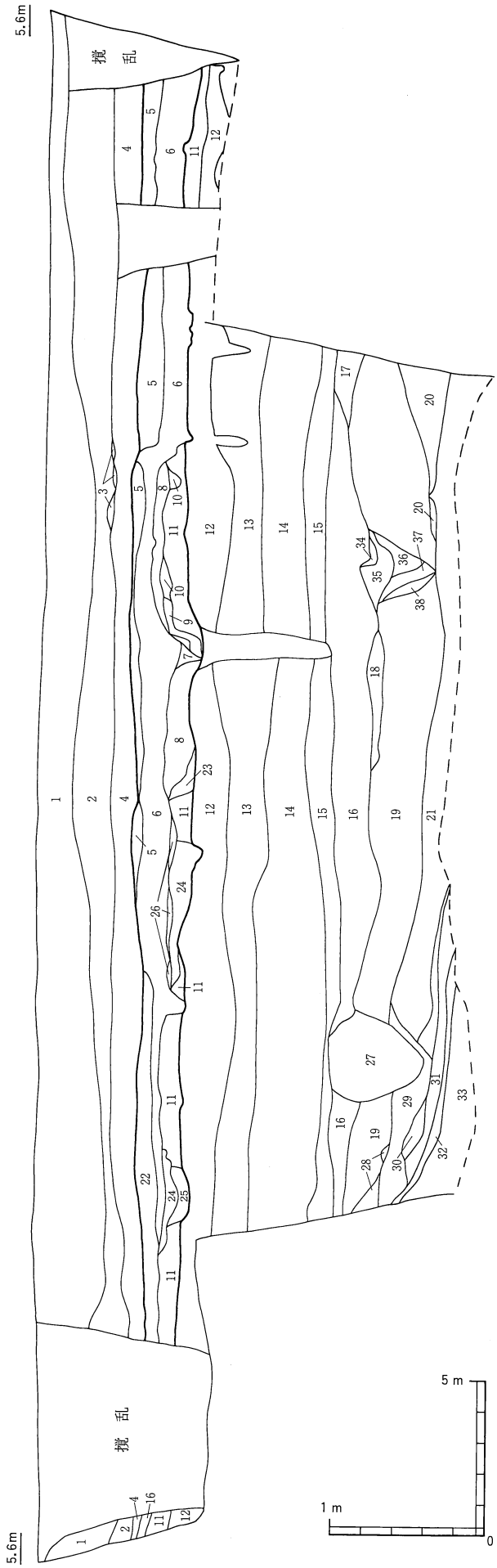
平成10年度の調査
（１９９８年）


P210
旧
河
道
SD206
SD201
P209
P204
P202
P201
P207
P206
P205
SD204
SD201
SD203
SD208
SD202
SD205
SD201
0
5 m

A地区全体図

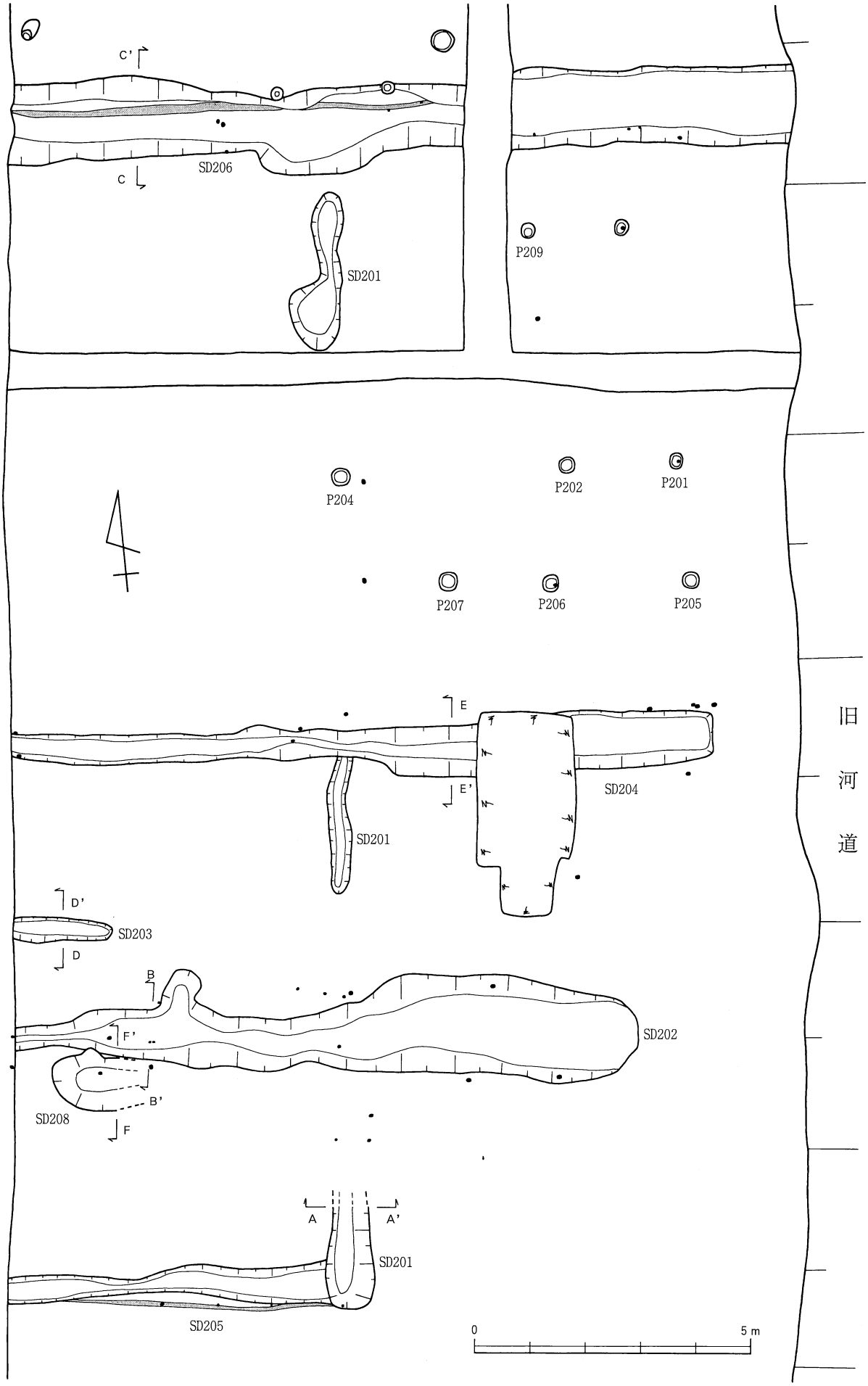
図版 4

平成10年度



1 耕土および盛土
2 灰色 砂レキ混じりシルト
3 橙褐色 シルト混じり砂レキ層
4 灰色 砂レキ混じりシルト
5 灰色 砂レキ混じりシルト（4より砂レキの比率が多い）
6 褐灰色 シルト混じり粗砂（整地土層）
7 橙褐色 シルト混じり砂レキ層
8 灰色 シルト混じり粗砂
9 橙褐色 シルト混じり砂レキ層
10 灰色 シルト混じり粗砂
11 灰色 砂レキ混じりシルト
12 灰色 レキ混じり砂質シルト
13 褐灰色 シルト
14 灰色 砂レキ混じりシルト
15 灰色 レキ混じり砂質
16 暗灰色 シルト質極細砂
17 暗灰色 シルト混じり粗砂
18 暗灰色 砂レキ混じりシルト
19 黒褐色 シルト（腐植土・砂レキが混入）
20 黒褐色 シルト（腐植土）
21 灰色 シルト
22 灰色 砂レキ混じりシルト
23 灰色 レキ混じり砂質シルト
24 暗灰色 シルト混じり粗砂
25 暗灰色 砂レキ混じりシルト
26 灰色 砂レキ混じりシルト
27 黄褐色 砂レキ層
28 黒灰色 シルト（腐植土）
29 黒褐色 シルト（腐植土）
30 灰色 砂混じりシルト
31 灰色 シルト
32 灰色 砂混じりシルト
33 灰色 シルト
34 暗灰色 シルト（植物遺体含む）
35 暗灰色 砂レキ混じりシルト
36 暗灰色 レキ混じり砂質シルト
37 暗褐色 粗砂
38 暗褐色 シルト（腐植土）

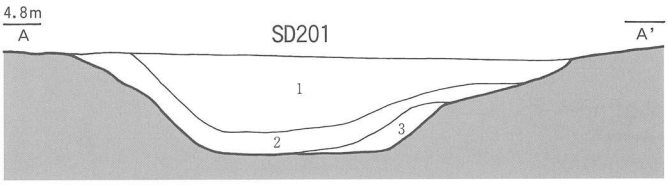
A地区西壁土層図


C'
C
SD206
SD201
P209
P204
P202
P201
P207
P206
P205
E
E'
SD204
SD201
旧
河
道
D'
SD203
D
B
F'
SD202
B'
SD208
F
A
A'
SD201
SD205
0
5 m

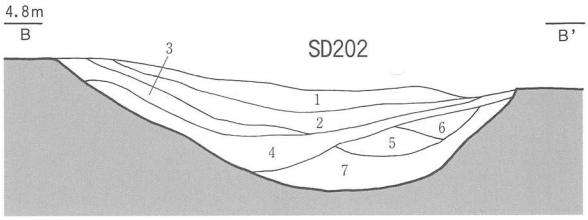
A地区遺構配置図

図版 6

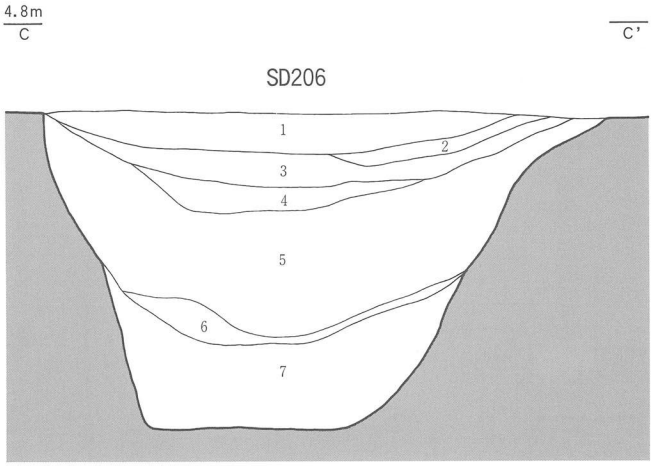
平成10年度



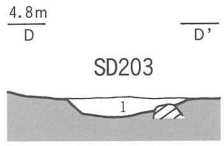
1　暗褐灰色　砂混じりシルト
2　暗褐色　砂混じりシルト（植物遺体を多量に含む）
3　褐灰色　シルト



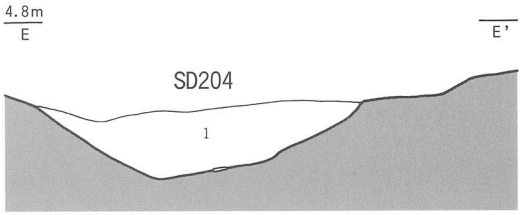
1　黄灰色　粗砂（底に植物遺体層を形成）
2　灰色　砂混じりシルト
3　暗灰色　砂混じりシルト
4　暗褐色　シルト（植物遺体を多量に含む）
5　明褐色　シルト
6　明褐色　砂混じりシルト
7　明褐色　シルト（底に植物遺体層を形成）



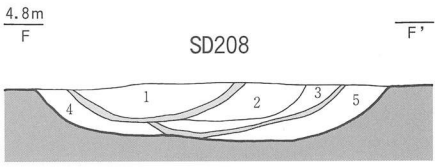
1　灰褐色　砂混じりシルト
2　黄灰色　中砂
3　褐色　シルト（植物遺体含む）
4　明褐色　砂混じりシルト（植物遺体含む）
5　褐灰色　砂混じりシルト（木片含む）
6　褐色　シルト（植物遺体を多量に含む）
7　暗褐灰色　シルト（木片含む）



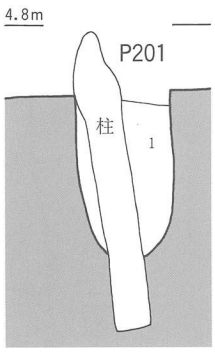
1　黒褐色　砂混じりシルト



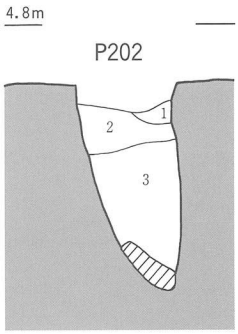
1　暗褐灰色　砂混じりシルト（植物遺体含む）



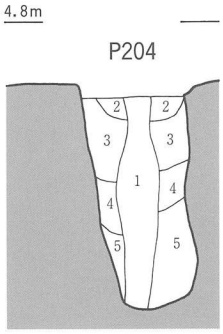
1　明褐色　粗砂（底に植物遺体層を形成）
2　明褐色　粗砂
3　暗灰色　シルト混じり粗砂（底に植物遺体層を形成）
4　暗灰色　シルト混じり粗砂
5　褐色　シルト混じり粗砂



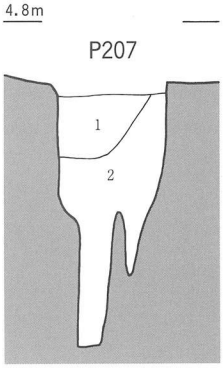
1　暗褐灰色　シルト混じり粗砂



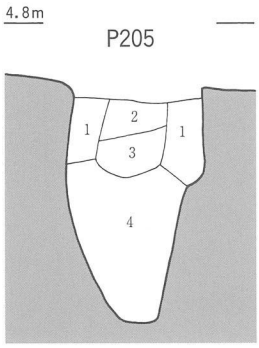
1　暗褐色　砂混じりシルト
2　黄褐色　粗砂
3　青灰色　粗砂



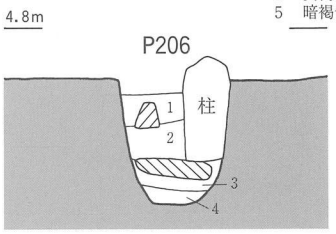
1　青灰色　シルト
2　青灰色　粗砂
3　暗褐色　シルト
4　黄褐色　粗砂
5　暗褐色　シルト



1　褐色　シルト混じり粗砂
2　黄灰色　粗砂

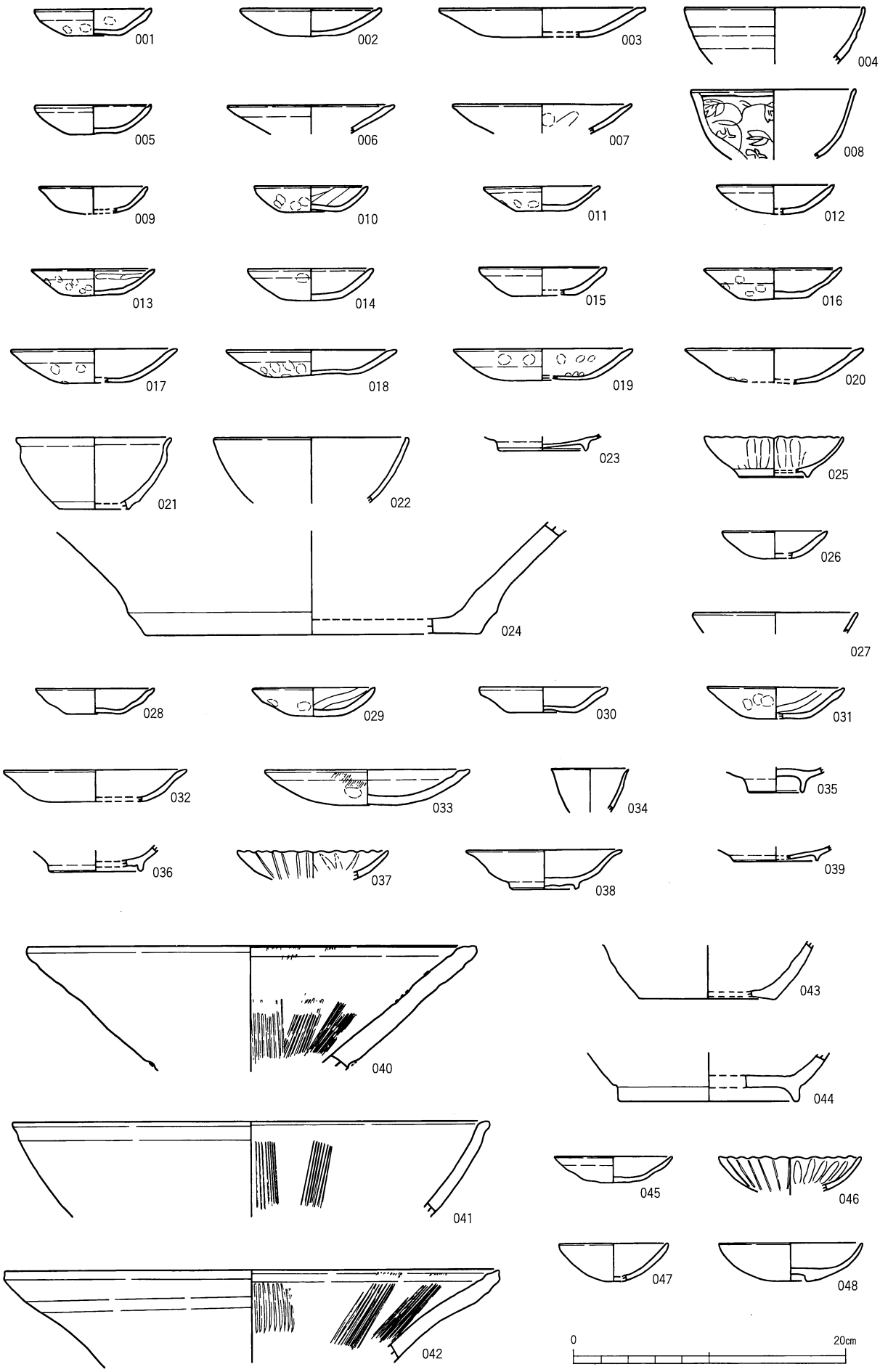


1　橙褐色　粗砂
2　暗褐色　シルト混じり細砂
3　黒灰色　細砂
4　灰色　粗砂



1　褐色　砂混じりシルト
2　灰色　細砂
3　褐色　砂混じりシルト
4　黄灰色　粗砂

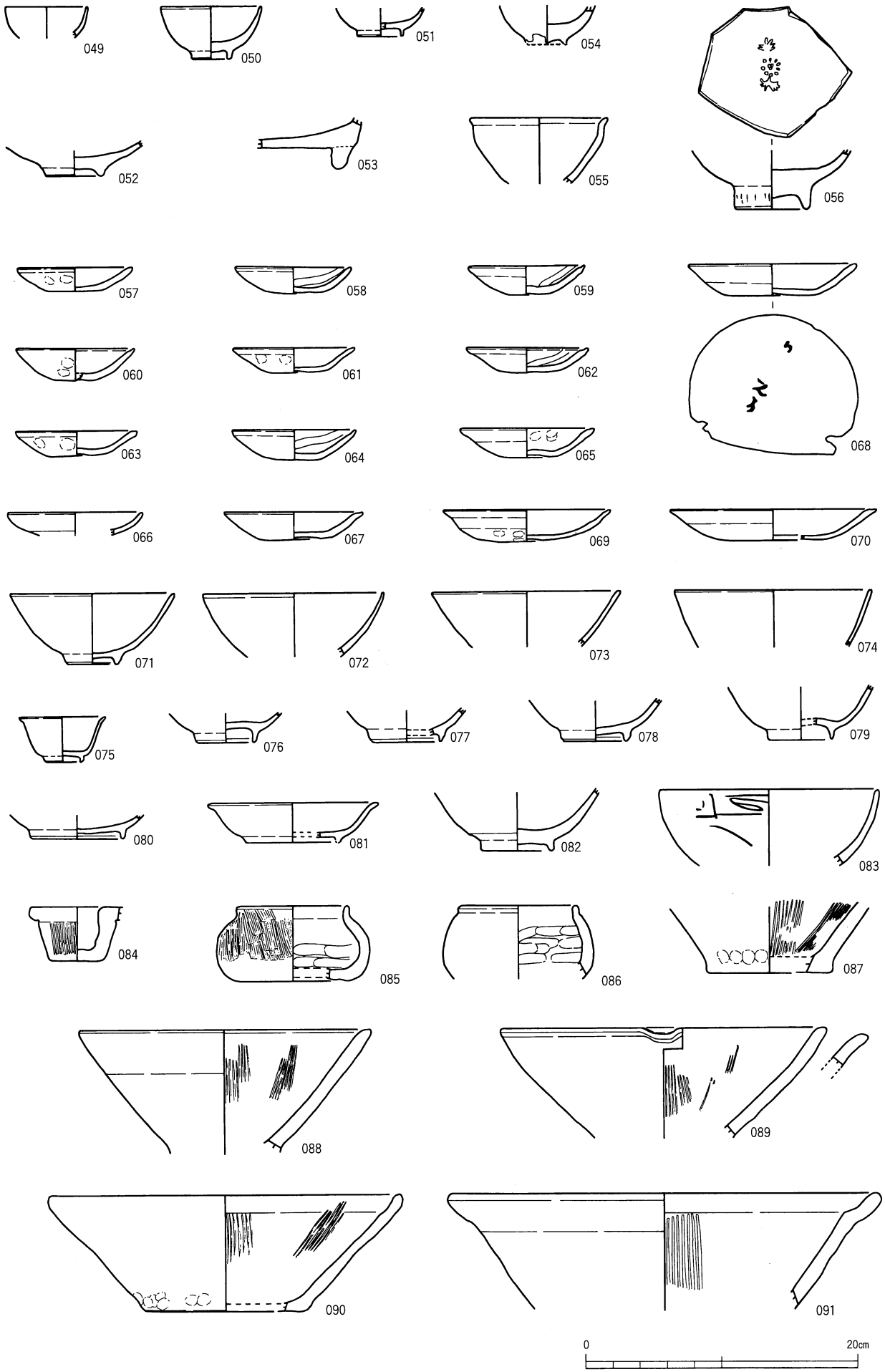
A地区　遺構土層図



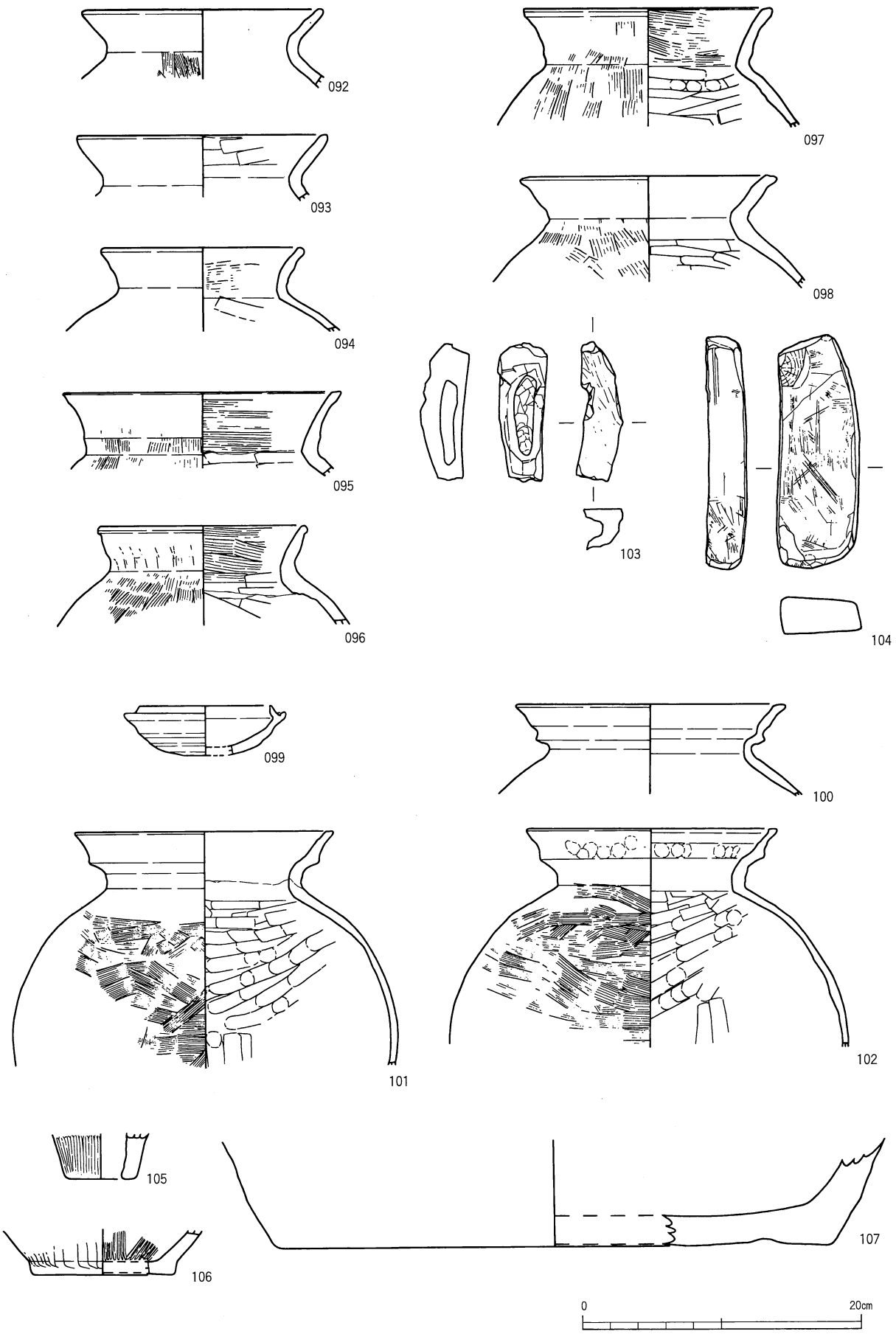
A地区　遺構出土土器・陶磁器

図版 8

平成10年度



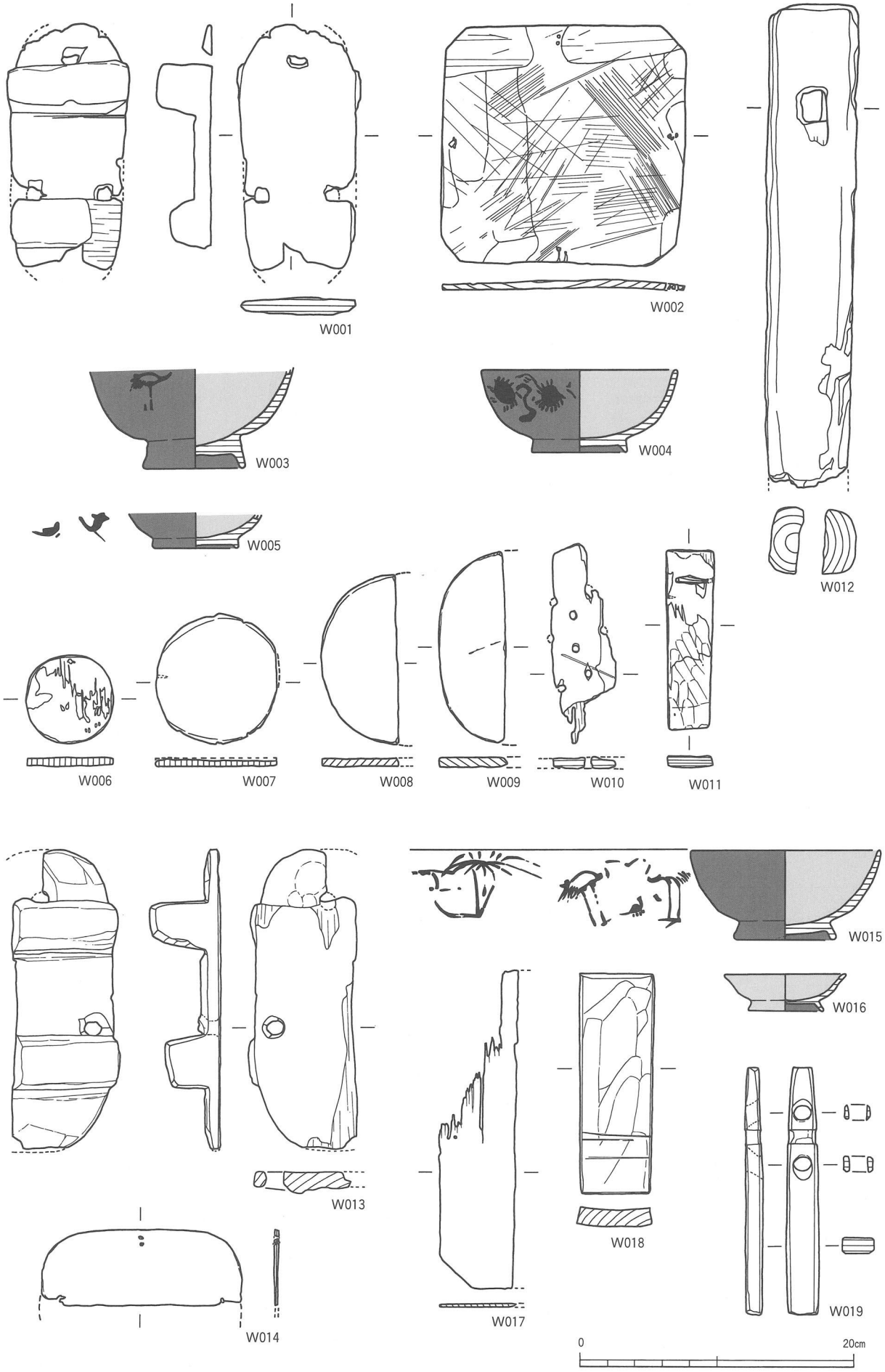
A地区　包含層出土土器・陶磁器



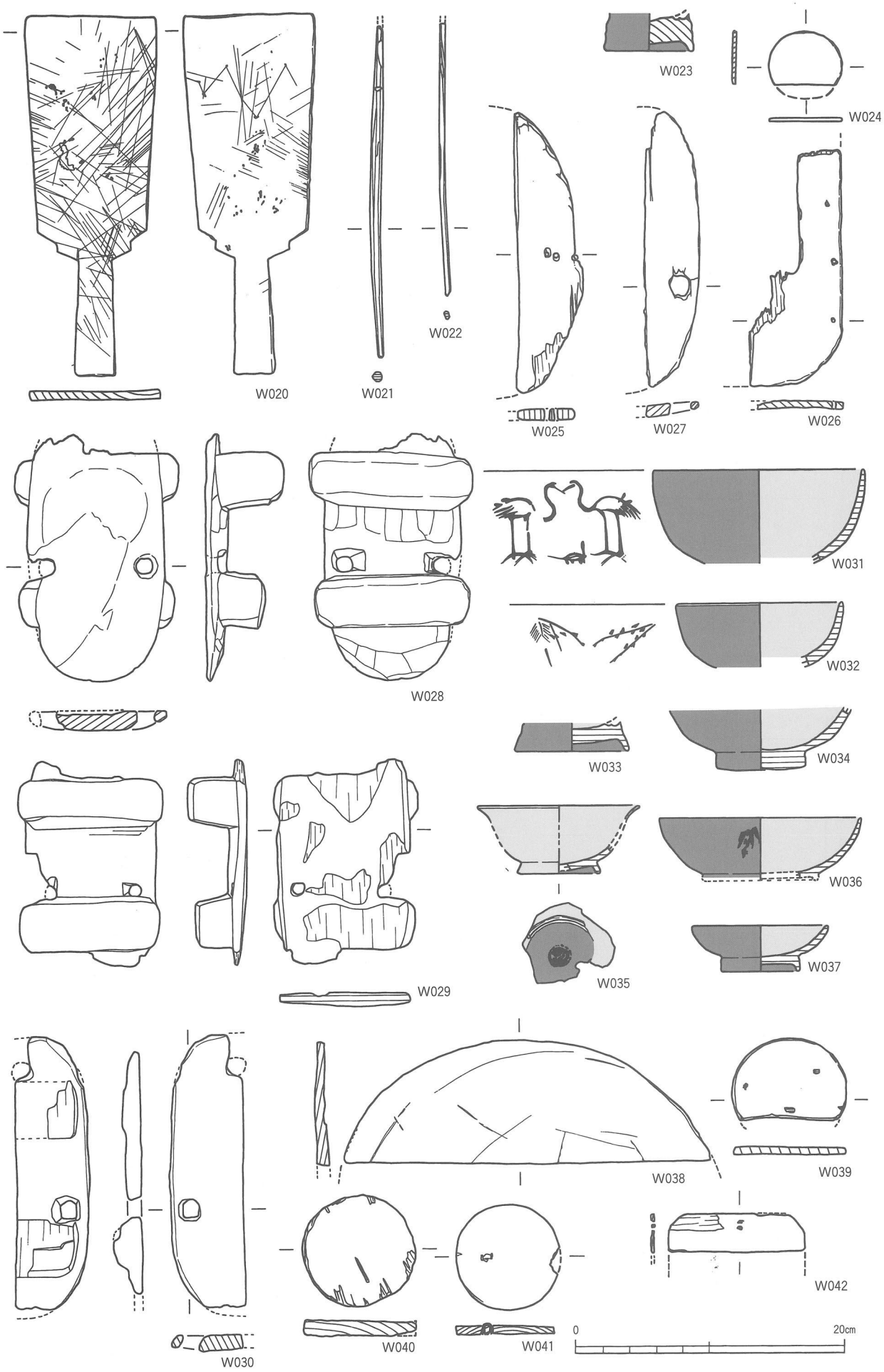
A地区　包含層出土土器・陶磁器　　B地区　出土土器

図版10

平成10年度



A地区　遺構出土木製品

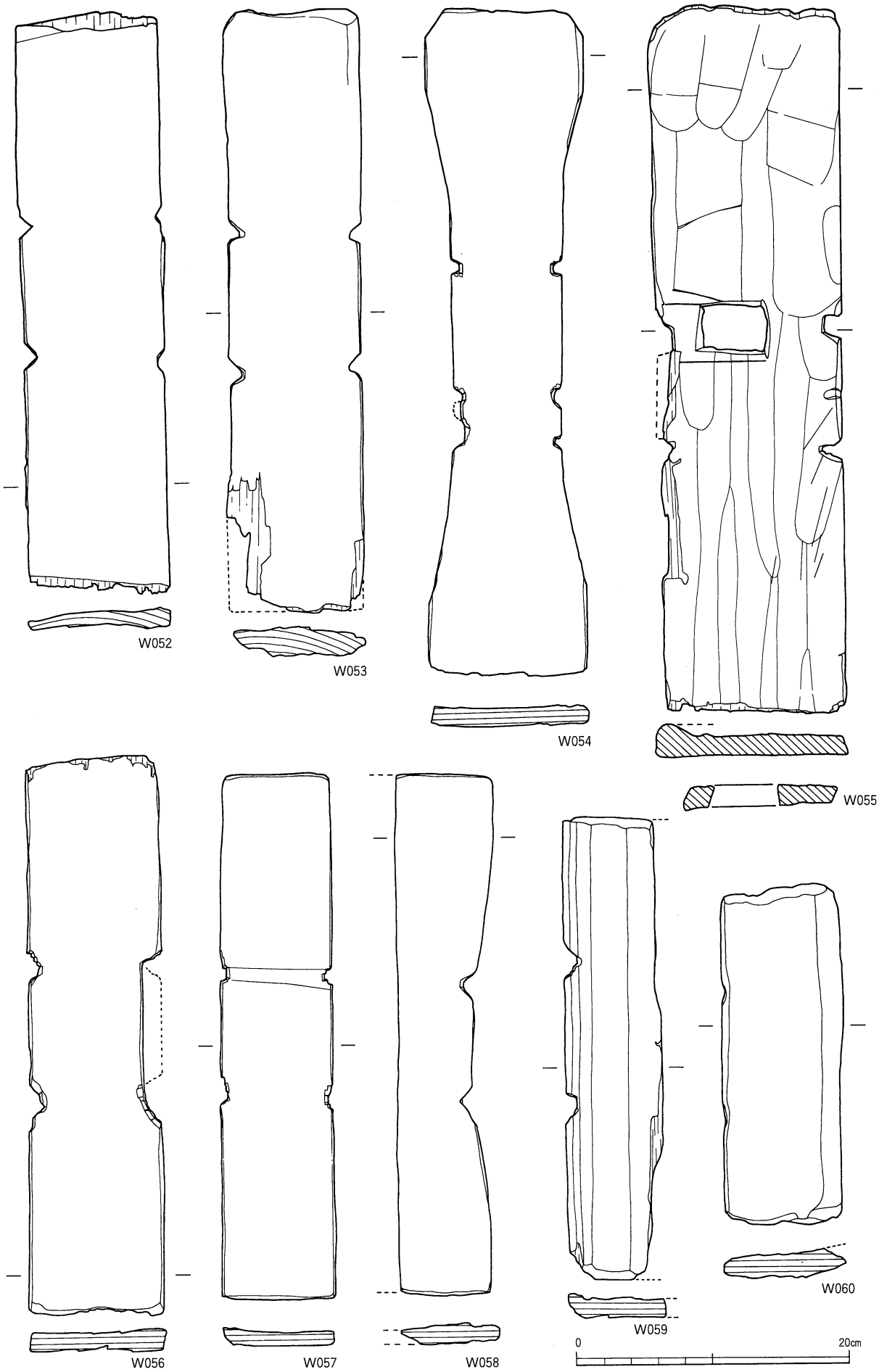


A地区　包含層出土木製品

図版12

平成10年度

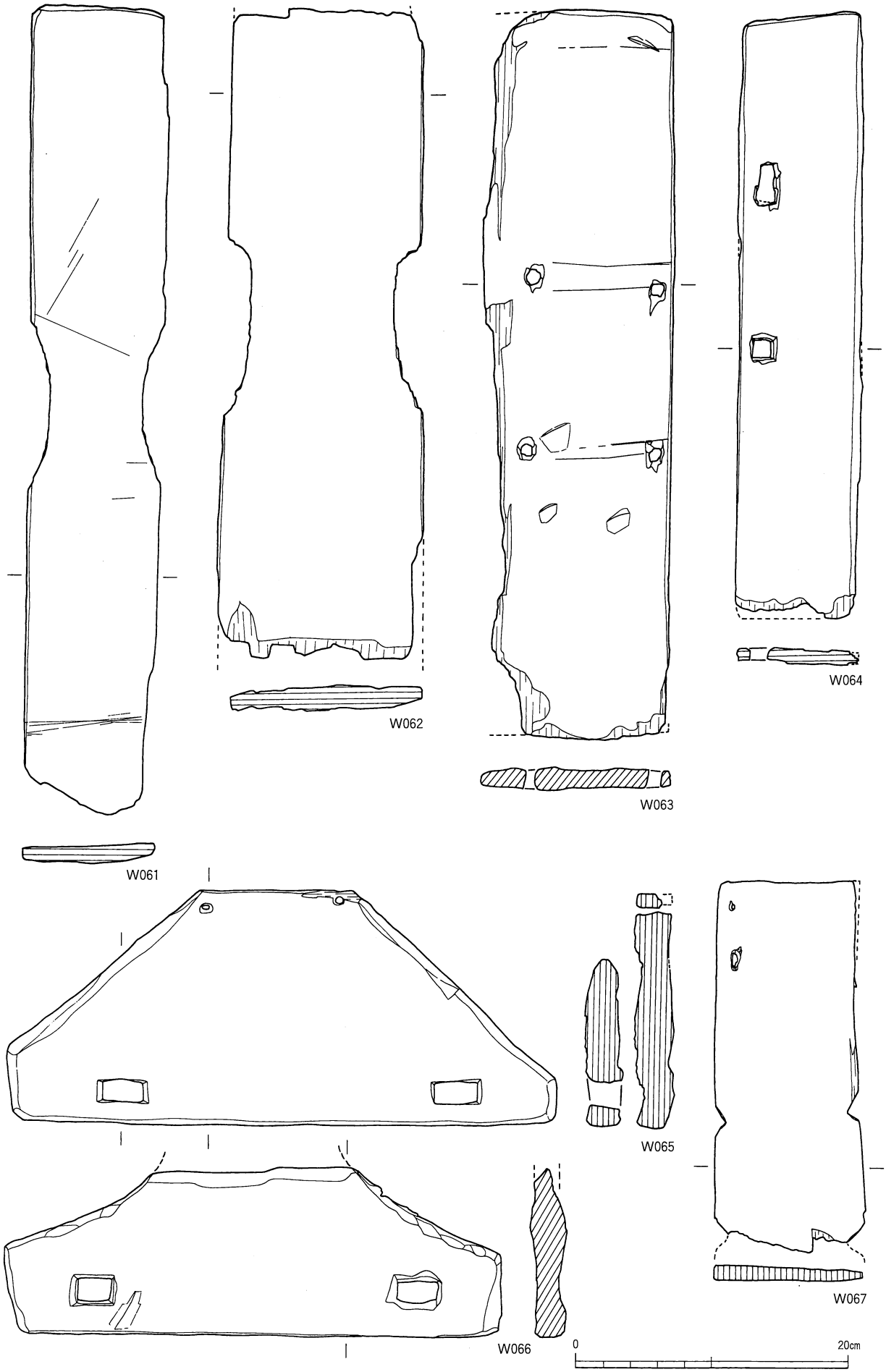
A地区　下層出土木製品



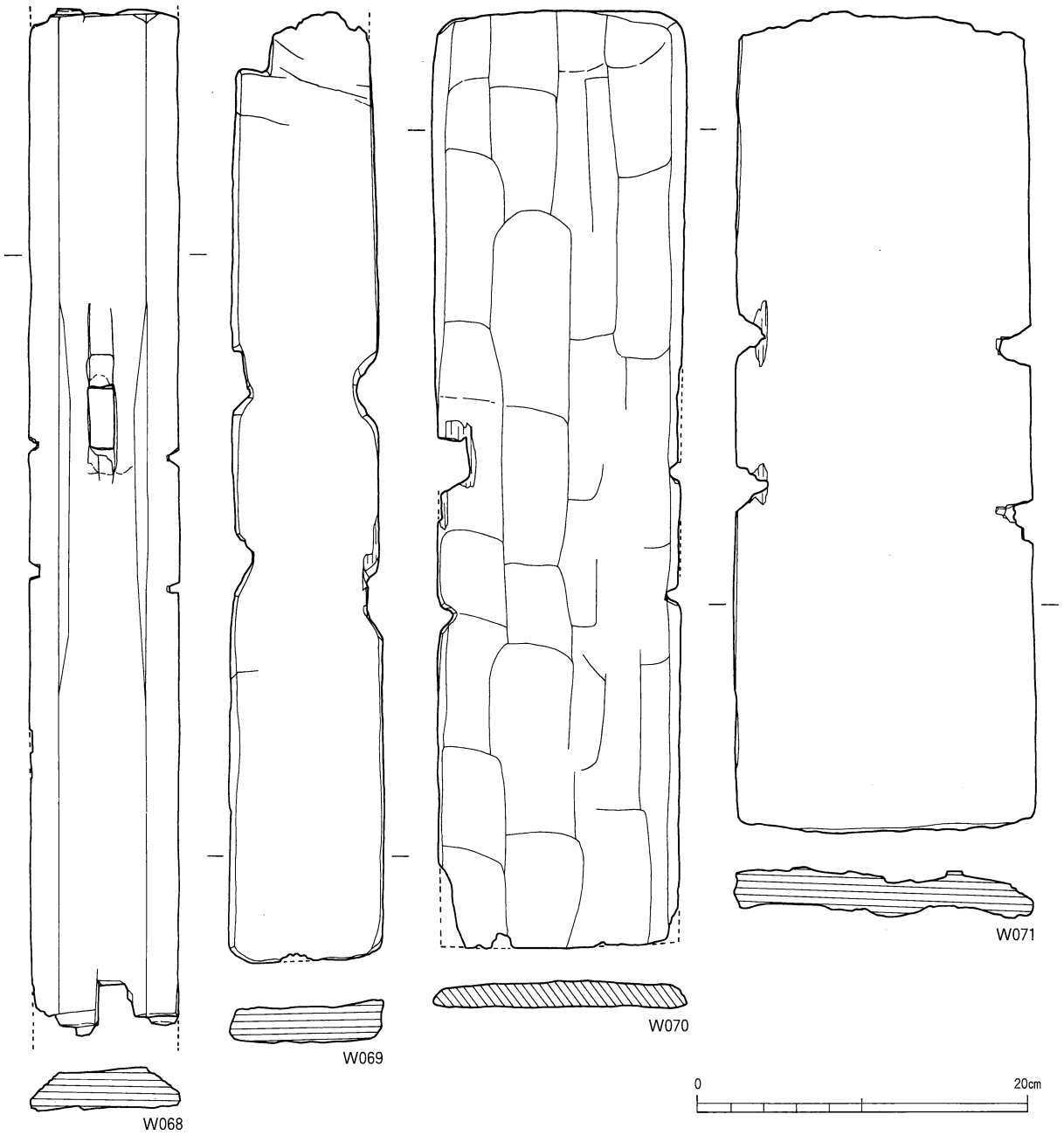
A地区　下層出土木製品

図版14

平成10年度



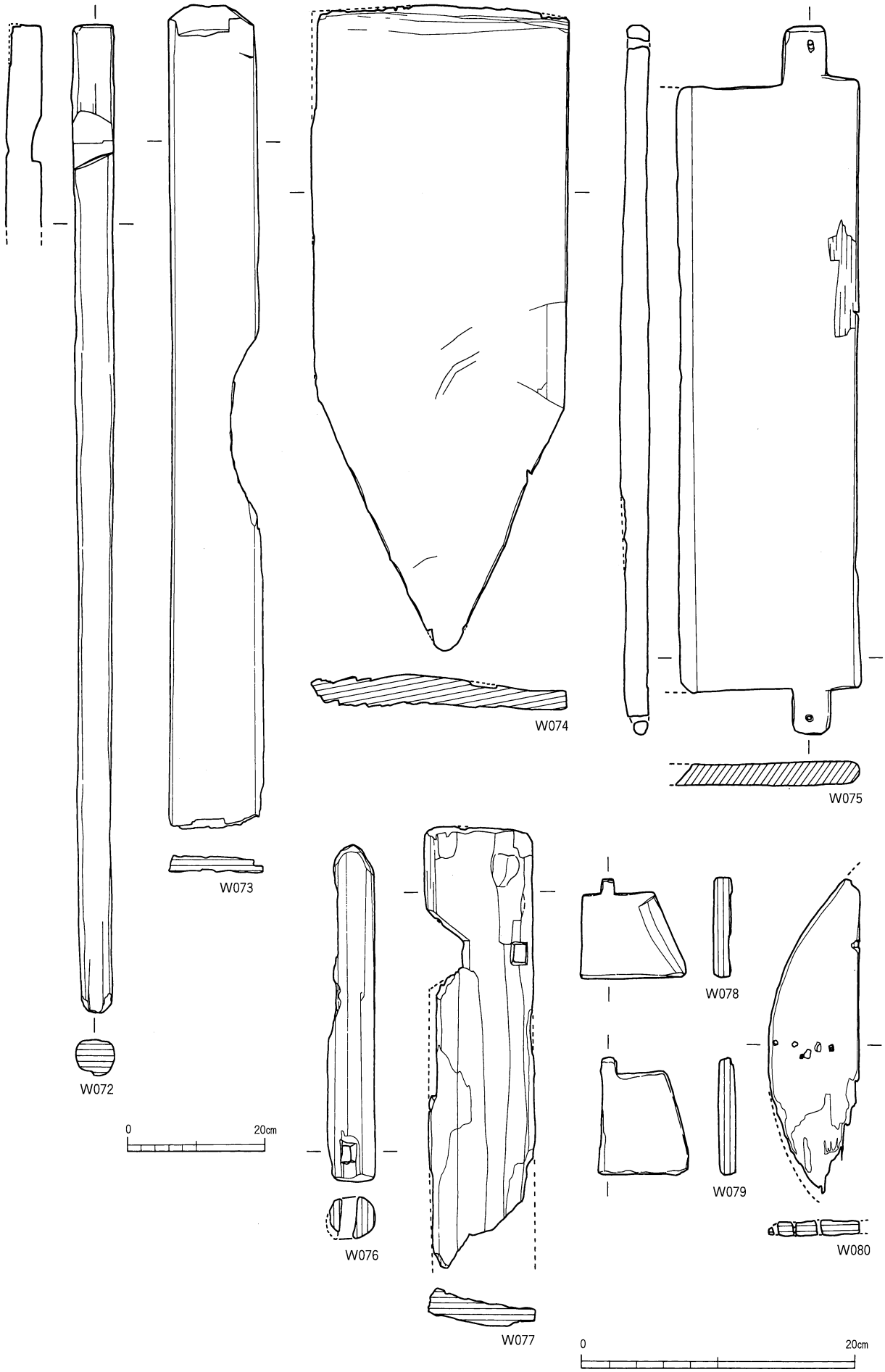
A地区　下層出土木製品



A地区　下層出土木製品

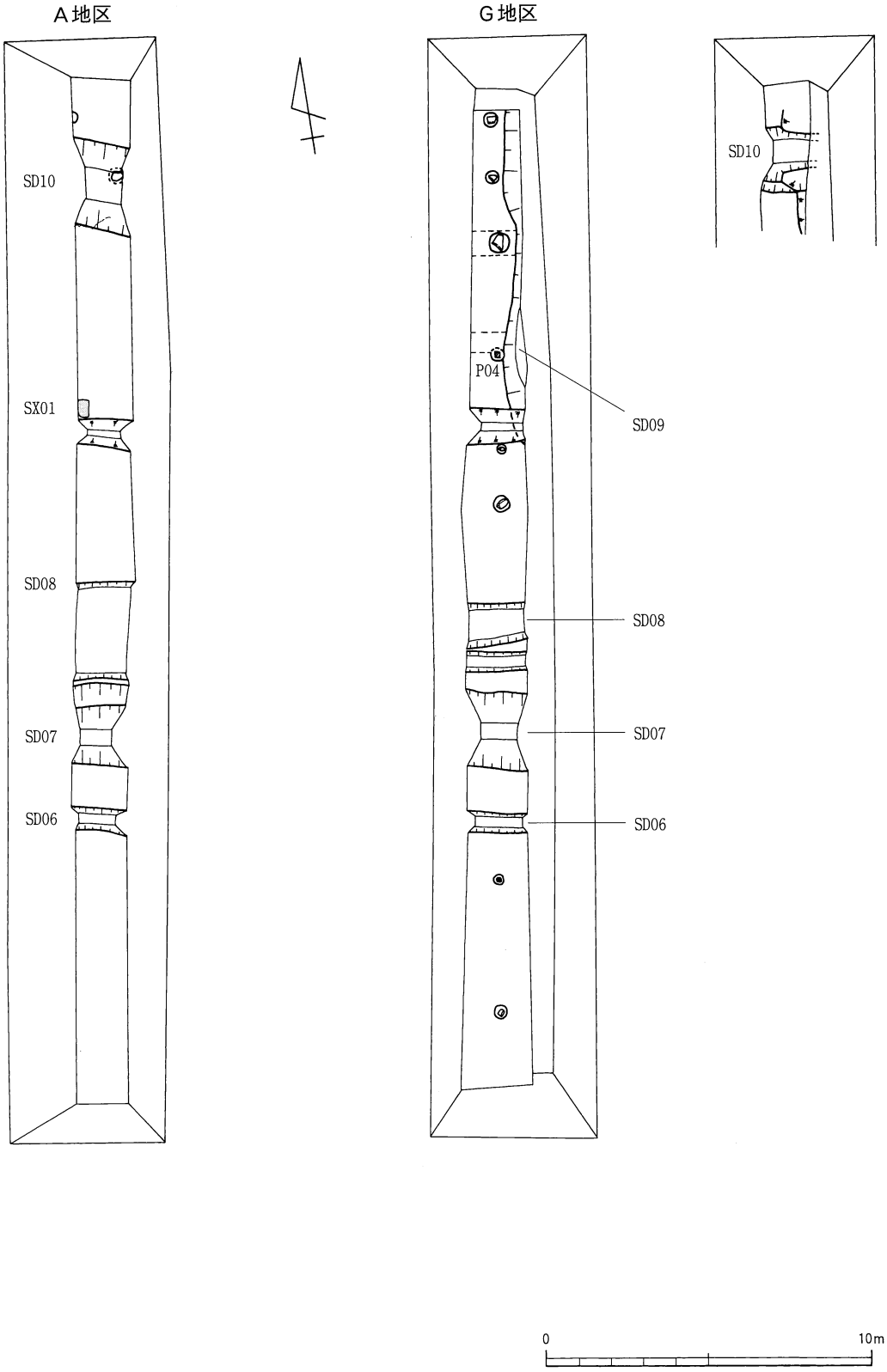
図版16

平成10年度



A地区　下層出土木製品　　B地区　出土木製品

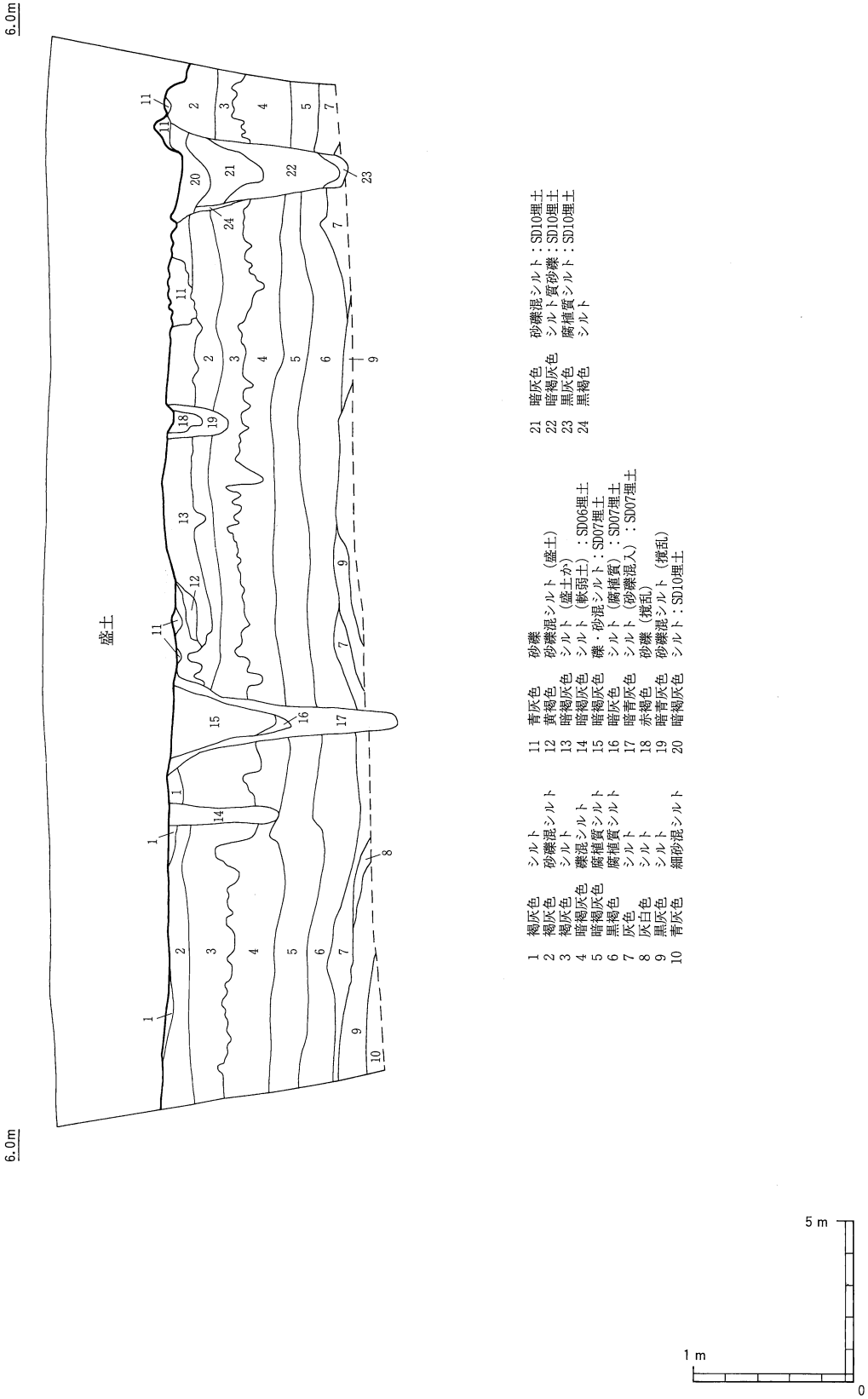
平成11年度の調査
（１９９９年）


A地区
G地区
SD10
SX01
SD08
SD07
SD06
P04
SD09
SD08
SD07
SD06
SD10
0
10m

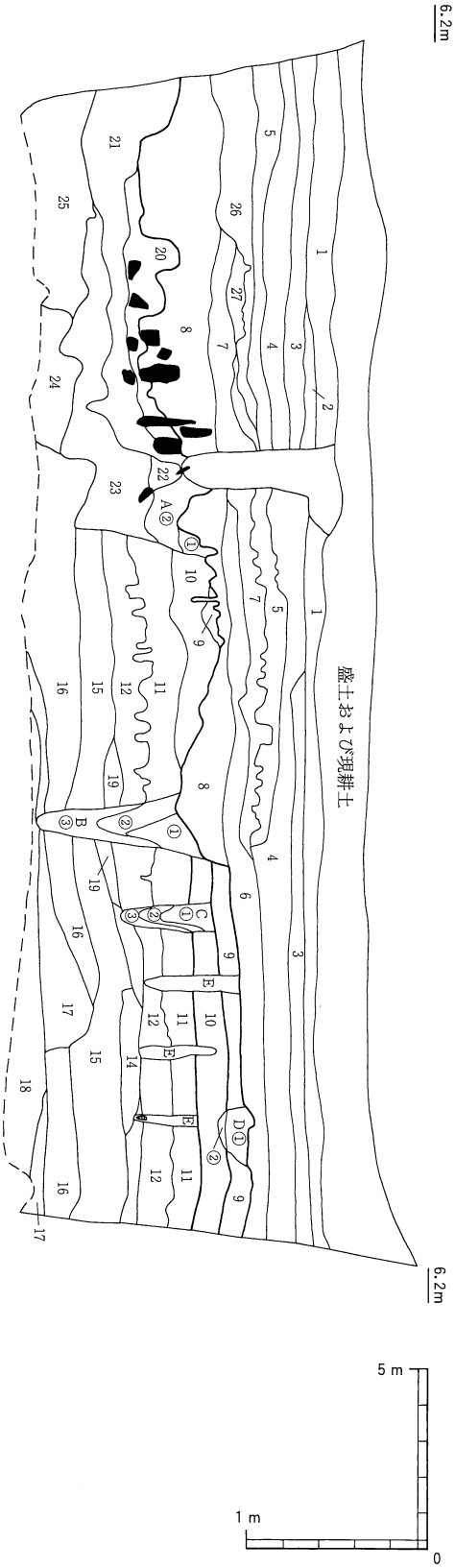
A，G地区　全体図

図版18

平成11年度



A地区西壁土層図

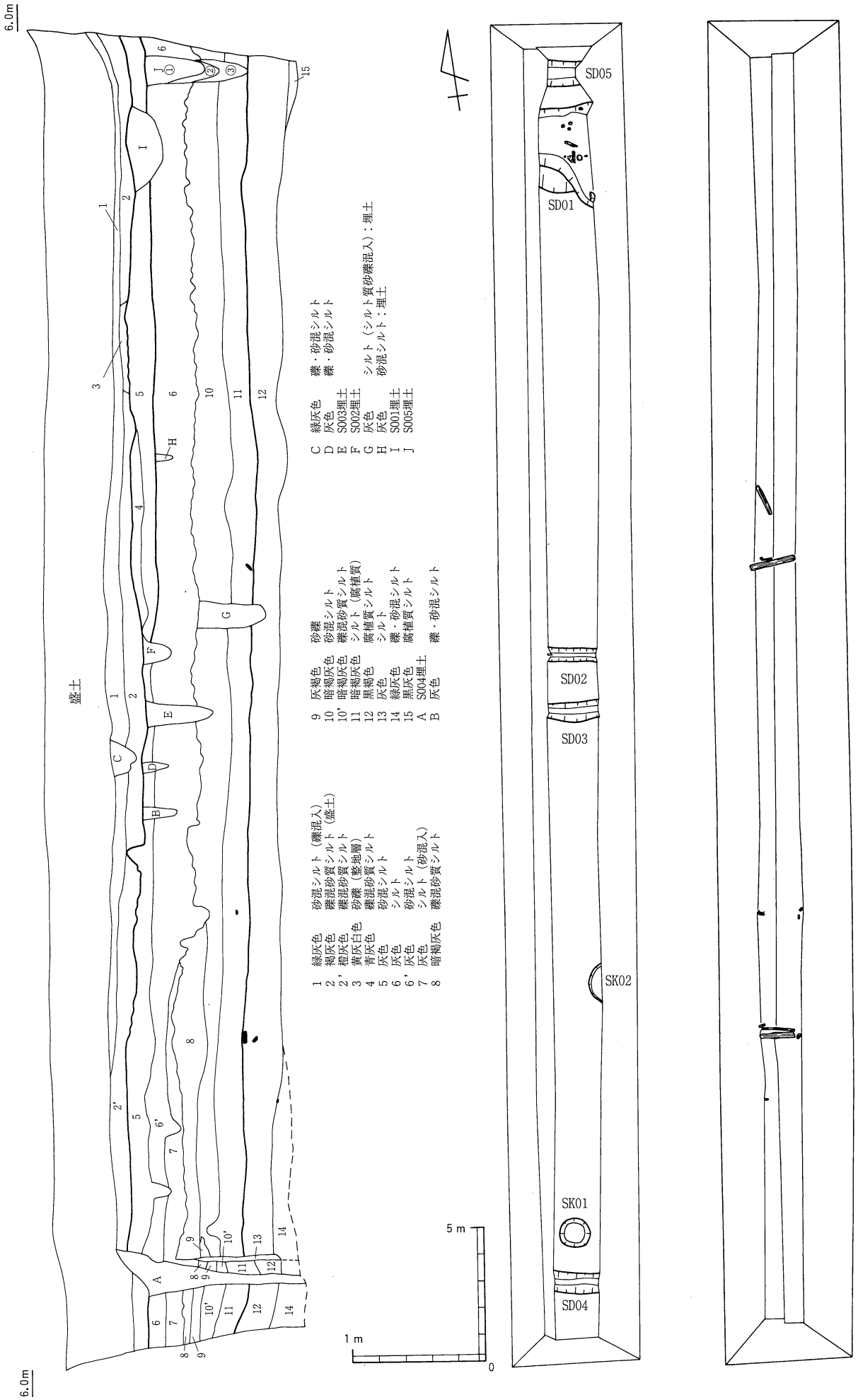


1 灰色 礫砂混シルト
2 灰色 シルト
3 赤灰色 シルト質砂礫
4 灰色 礫混砂質シルト
5 赤灰色 シルト混砂礫
6 灰色 シルト（礫、砂混入）
7 灰色 礫混砂質シルト
8 暗灰色 礫混砂質シルト
9 灰色 礫混砂質シルト
10 灰色 礫混砂質シルト
11 灰色 シルト
12 暗褐灰色 礫混砂質シルト
13 灰色 シルト
14 灰色 砂質シルト
15 暗灰褐色 シルト
16 黒褐色 腐植質シルト
17 暗灰色 シルト
18 灰色 シルト
19 暗褐灰色 礫砂混シルト
20 灰色 シルト
21 暗灰色 礫混粗砂
22 灰色 シルト
23 灰色 シルト
24 暗灰色 シルト（木片混入）
25 暗灰色 礫混砂質シルト
26 灰色 礫混砂質シルト
27 灰色 シルト
A ①灰色、礫砂混シルト
②黄灰色、砂礫
B ①、②、③：SD07埋土
C ①、②、③：SD06埋土
D ①暗灰色、礫混砂質シルト
②黒褐色、泥炭（植物遺体）
E 灰色、礫砂混シルト：柱穴埋土

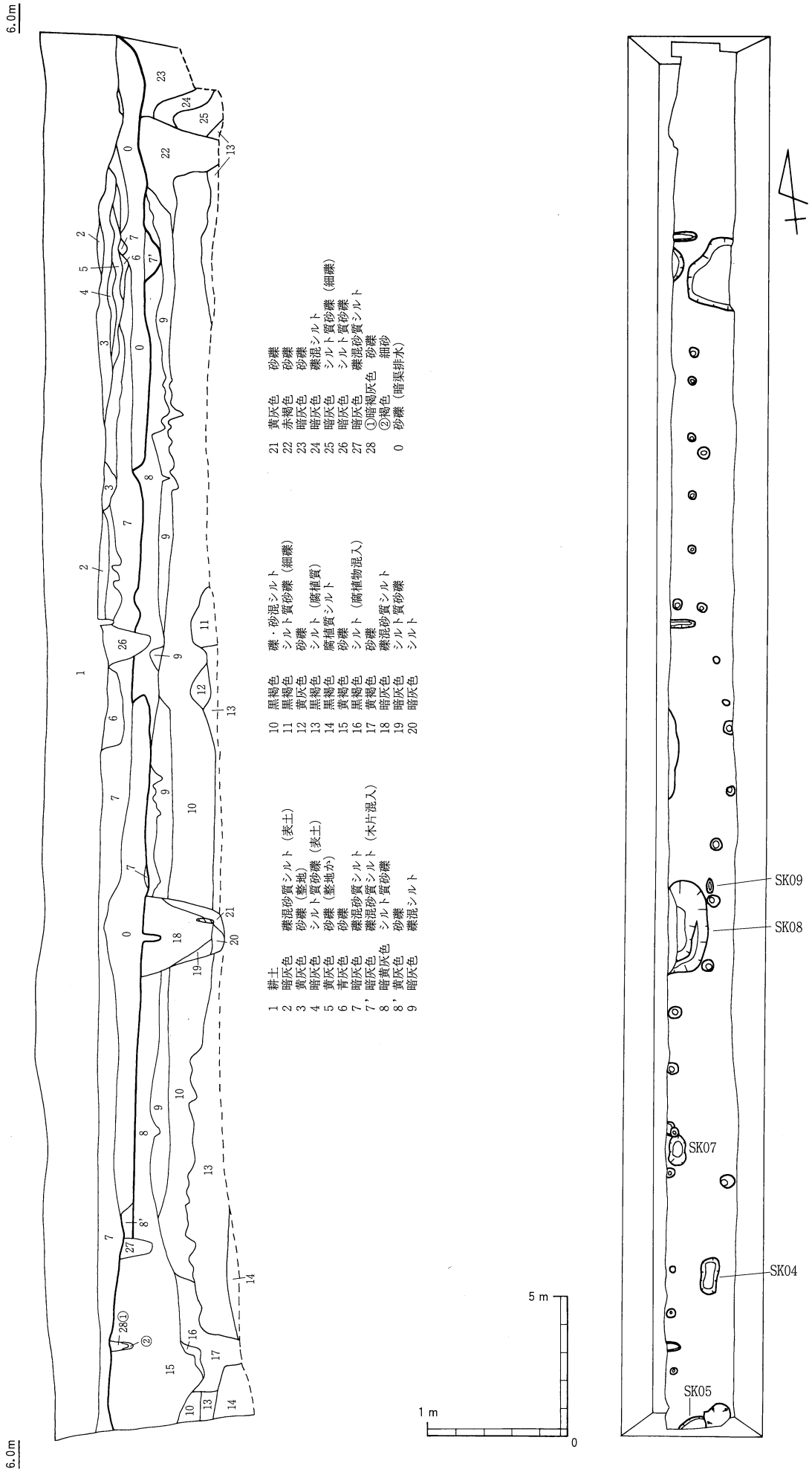
G地区東壁土層図

図版20

平成11年度



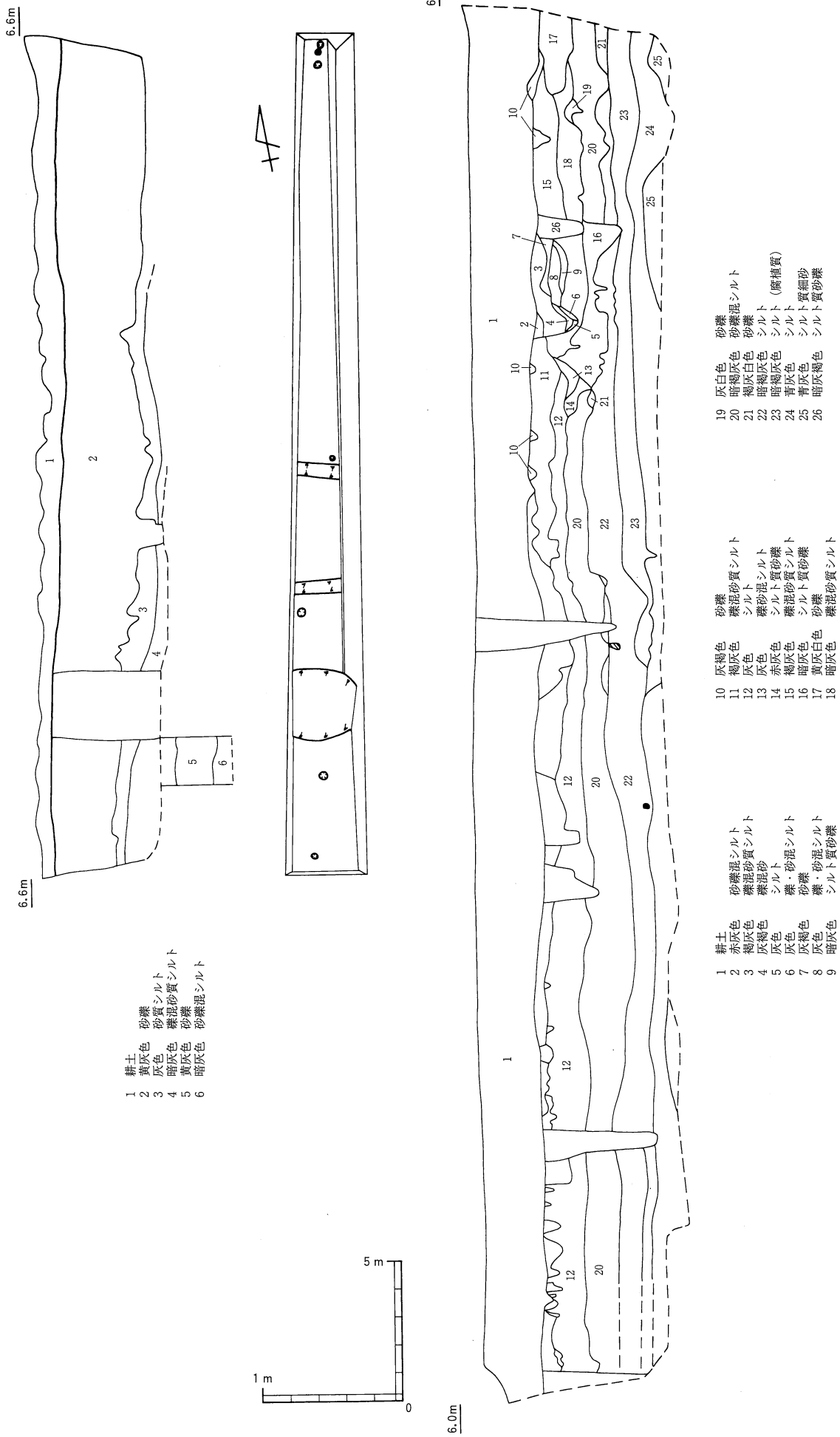
B地区全体図　西壁土層図



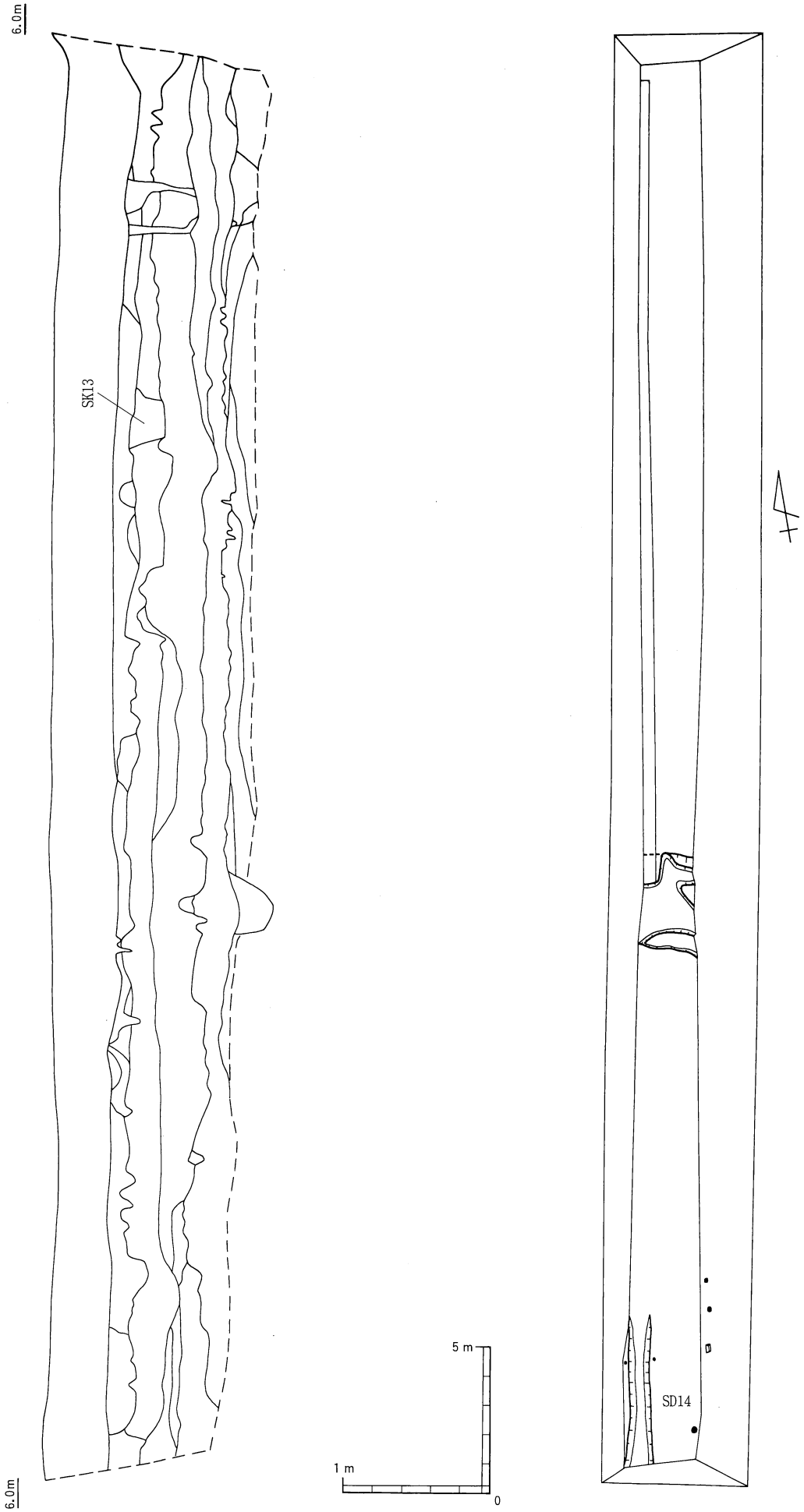
C地区全体図　西壁土層図

図版22

平成11年度



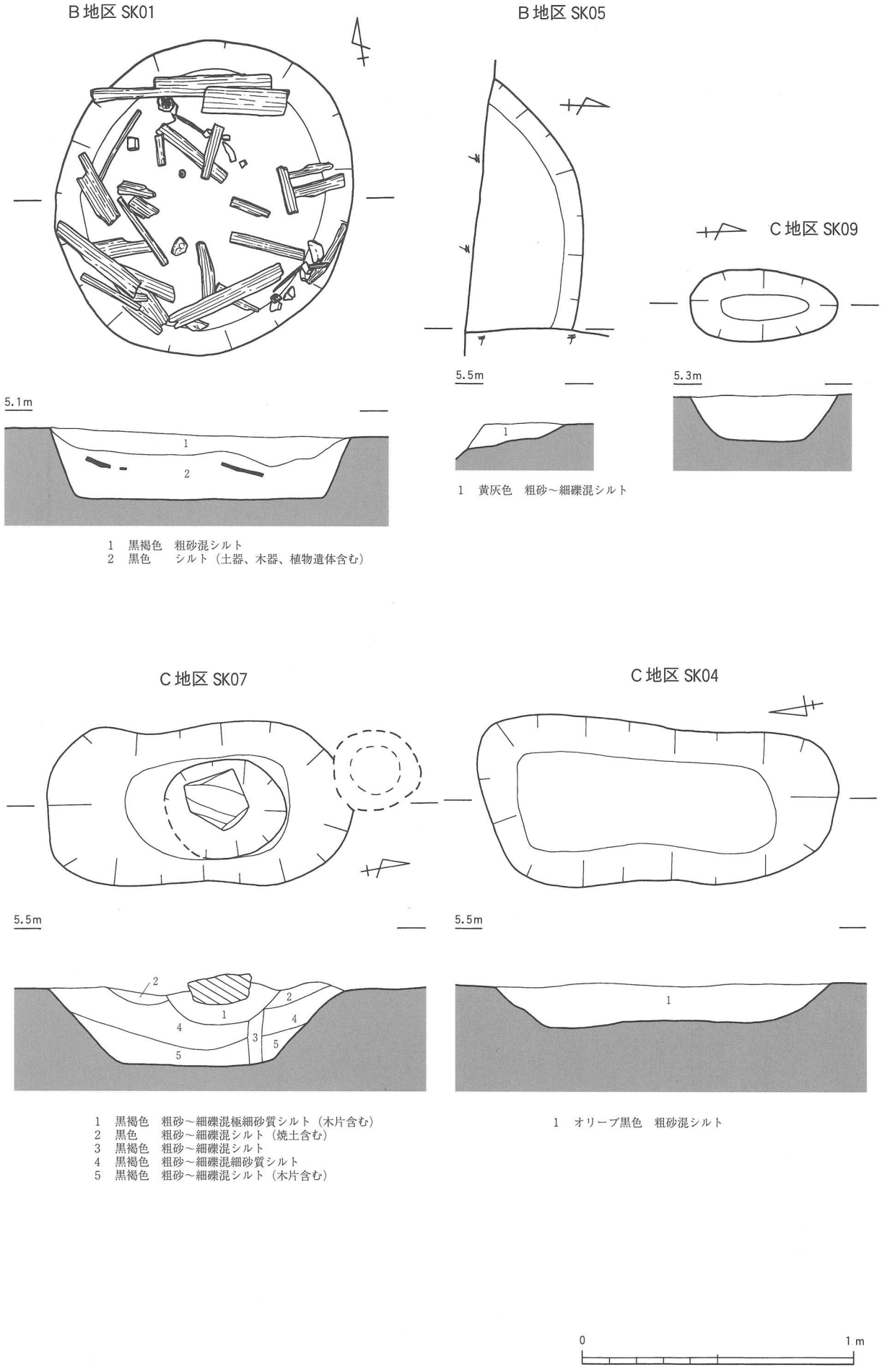
D地区全体図　西壁土層図　　E地区西壁土層図



F地区全体図　西壁土層図

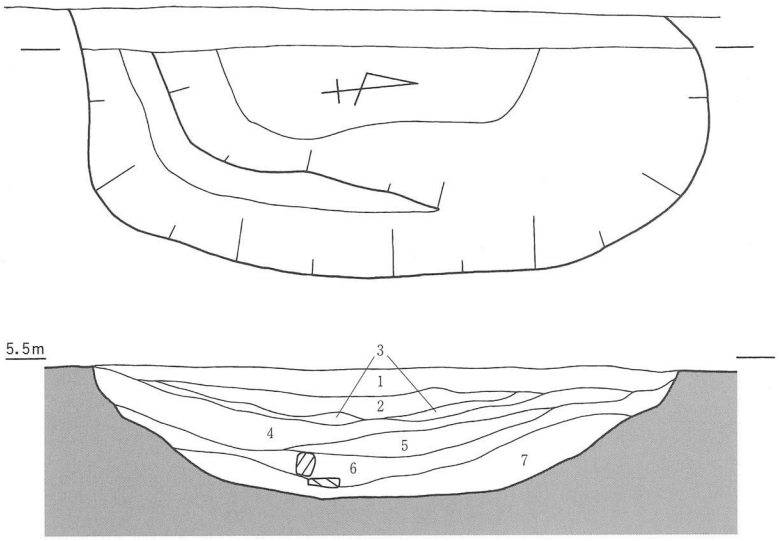
図版24

平成11年度



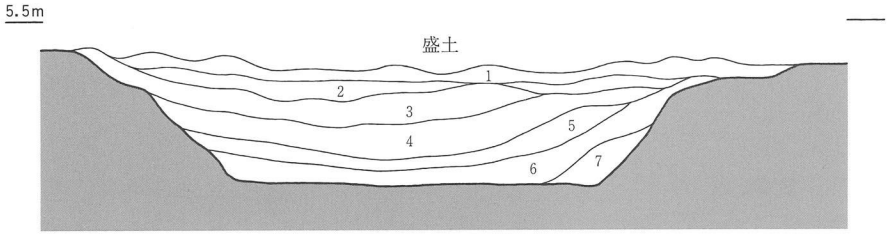
土坑　平面図・土層断面図

C 地区 SK08



1　黒色　粗砂～細礫混シルト
2　オリーブ黒色　粗砂～細礫混シルト
3　黒色　シルト（木片含む）：炭層
4　オリーブ黒色　粗砂～細礫混シルト
5　灰色　シルト（粗砂～細礫含む）
6　オリーブ黒色　シルト（粗砂～細礫、植物遺体含む）
7　灰色　中砂～細礫（真砂土、シルトブロック含む）

F 地区 SK13

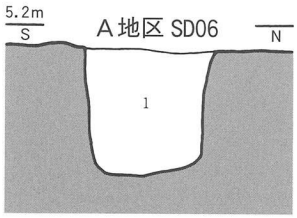


1　オリーブ黒色　中砂混シルト（粗砂含む）
2　暗灰黄色　シルト（中砂～粗砂、細礫、炭、木片含む）
3　オリーブ黒色　シルト～クレイ（中砂～粗砂、植物遺体含む）
4　暗緑灰色　シルト～クレイ（中砂、炭含む）
5　オリーブ灰色　シルト（中砂、木片、植物遺体含む）
6　緑灰色　シルト～クレイ（中砂～粗砂、細礫、植物遺体含む）
7　オリーブ灰色　シルト混粗砂（木片含む）

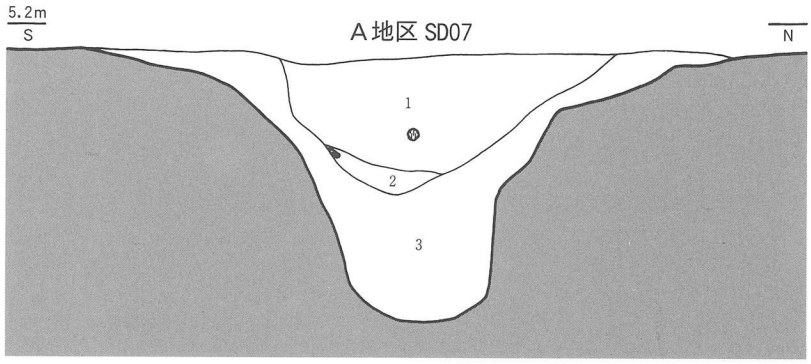
土坑　平面図・土層断面図

図版26

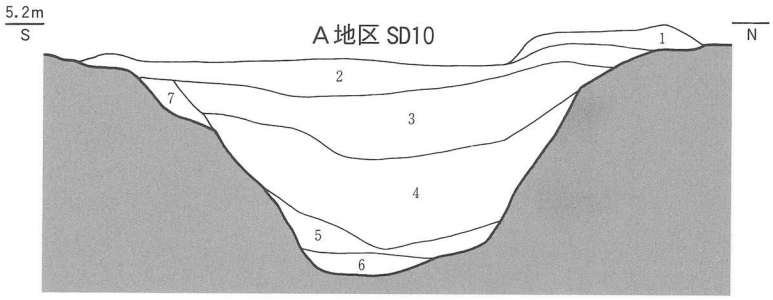
平成11年度



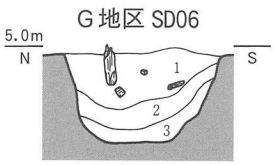
1　黒褐色　シルト（極粗砂～細礫、シルトブロック含む）



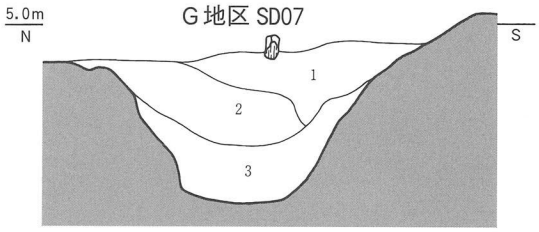
1　黒褐色　粗砂～細礫混極細砂質シルト（木器、土器含む）
2　黒褐色　シルト（極粗砂、木材、植物遺体含む）
3　オリーブ黒色　シルト（極粗砂～細礫、植物遺体含む）



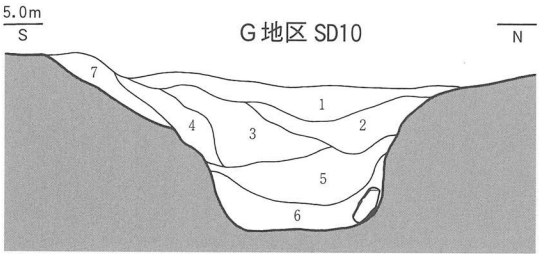
1　オリーブ褐色　粗砂～細礫＋シルトブロック（整地土）
2　黒褐色　極細砂質シルト（極粗砂～細礫＋シルトブロック含む）
3　黒褐色　極細砂質シルト（極粗砂～細礫＋シルトブロック含む）
4　暗オリーブ褐色　シルト～細礫（シルトブロック、真砂土含む）
5　オリーブ黒色　シルト（細礫、木片、籾殻等、植物遺体含む）
6　黒色　シルト（植物遺体含む）
7　黒褐色　極細砂質シルト



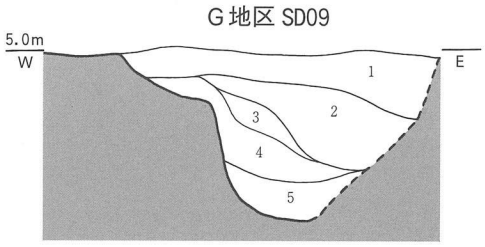
1　灰色　砂礫混シルト
2　黒灰色　腐植質シルト
3　灰色　シルト



1　灰色　砂礫混シルト
2　黄灰白色　砂礫
3　灰色　シルト



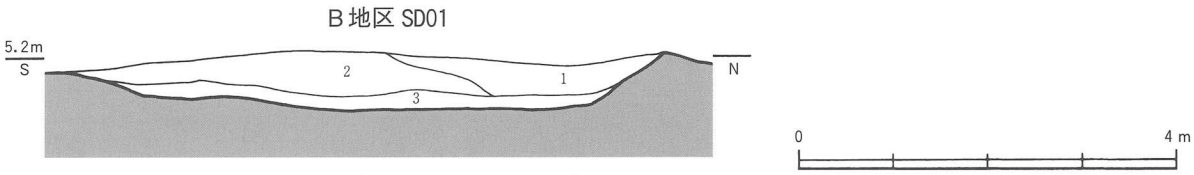
1　黒色　極細砂質シルト（極粗砂～細礫、有機物含む）
2　黒褐色　シルト（粗砂～極粗砂、有機物、炭含む）
3　黒色　シルト（粗砂～極粗砂、木片、有機物含む）
4　黒色　シルト（極粗砂、黒色シルトブロック、木片、有機物含む）
5　黒色　細砂～極細砂混シルト（黒色シルトブロック含む）
6　黒色　シルト（細砂～極粗砂、黒色シルトブロック、巨礫含む）
7　黒褐色　シルト



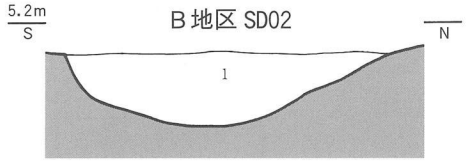
1　灰色　シルト
2　暗灰黄色　中砂～細礫（木片、植物遺体含む）
3　黒褐色　シルト（細砂～中砂、植物遺体含む）
4　灰色　シルト（植物遺体含む）
5　黒褐色　シルト（極粗砂～細礫、木片含む）

0　2 m

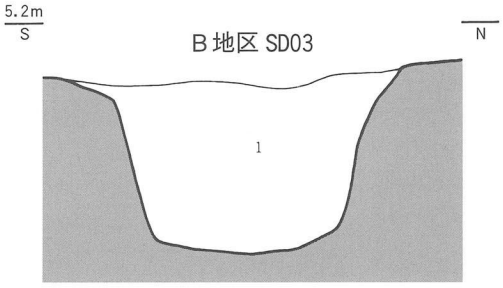
溝　土層断面図（A，G地区）



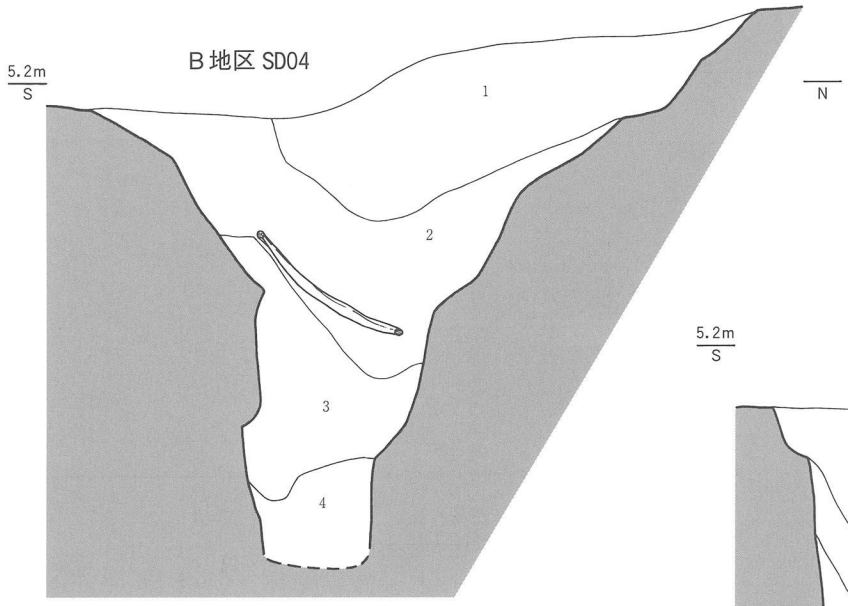
1　黄灰白色　砂礫（黒灰色腐植質シルト薄く堆積）
2　黄灰白色　砂礫
3　暗灰色　　シルト（木片混入）



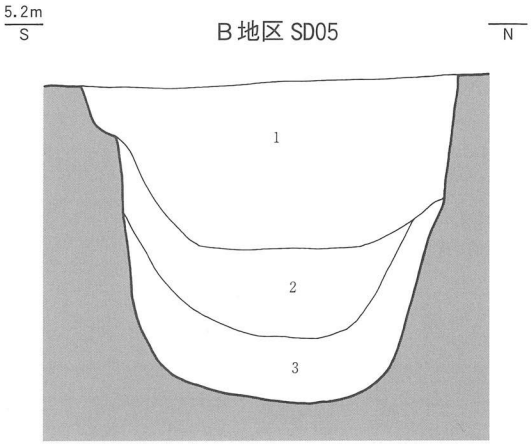
1　灰色　シルト（木片多数混入）



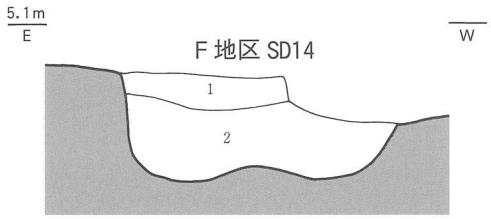
1　灰色　砂混シルト（木片多数混入）



1　褐灰色　　礫混砂質シルト
2　灰色　　シルト
3　暗灰色　　礫混砂質シルト
4　暗褐灰色　腐植質シルト



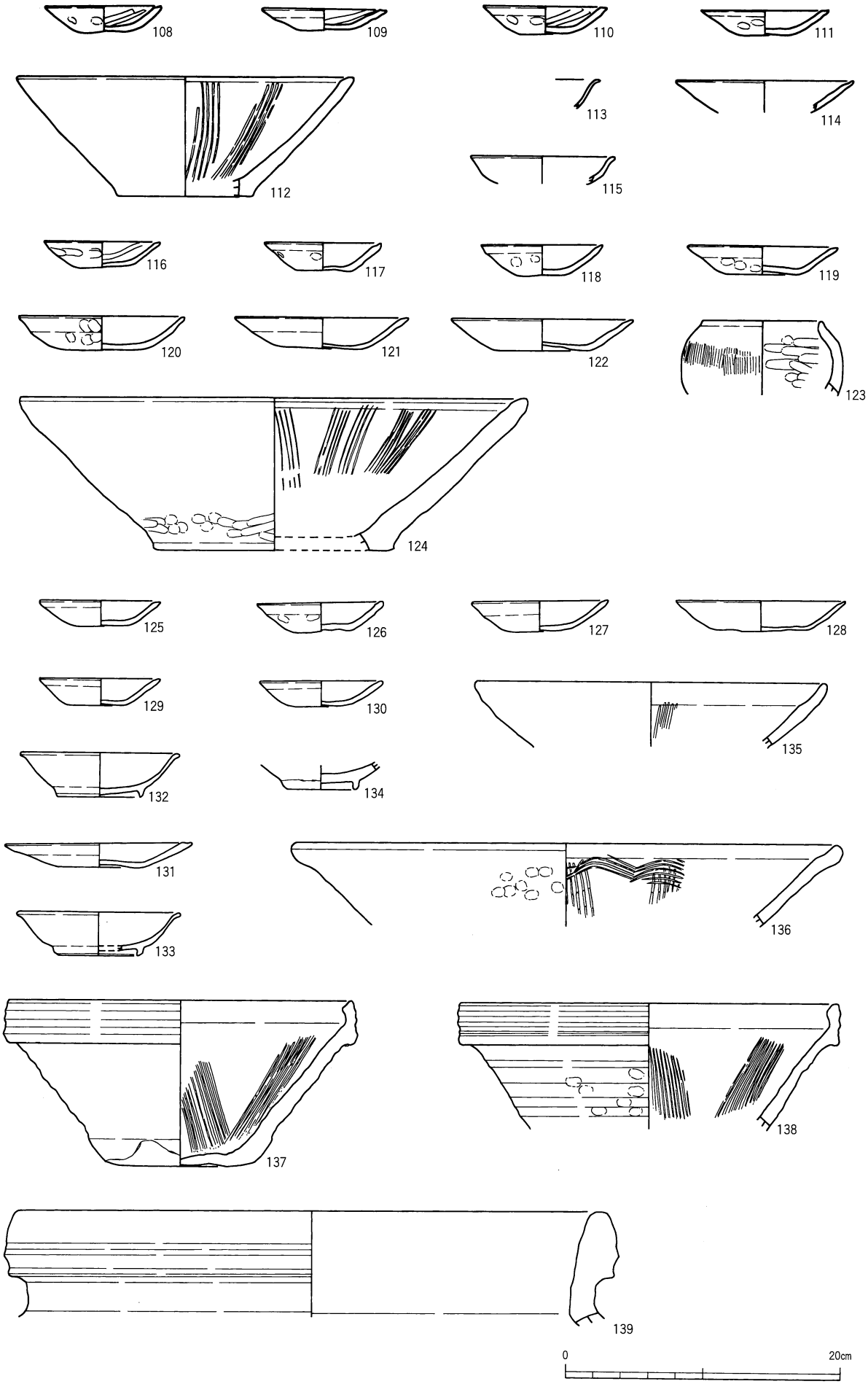
1　灰色　　シルト
2　黒褐色　植物遺体
3　褐灰色　シルト



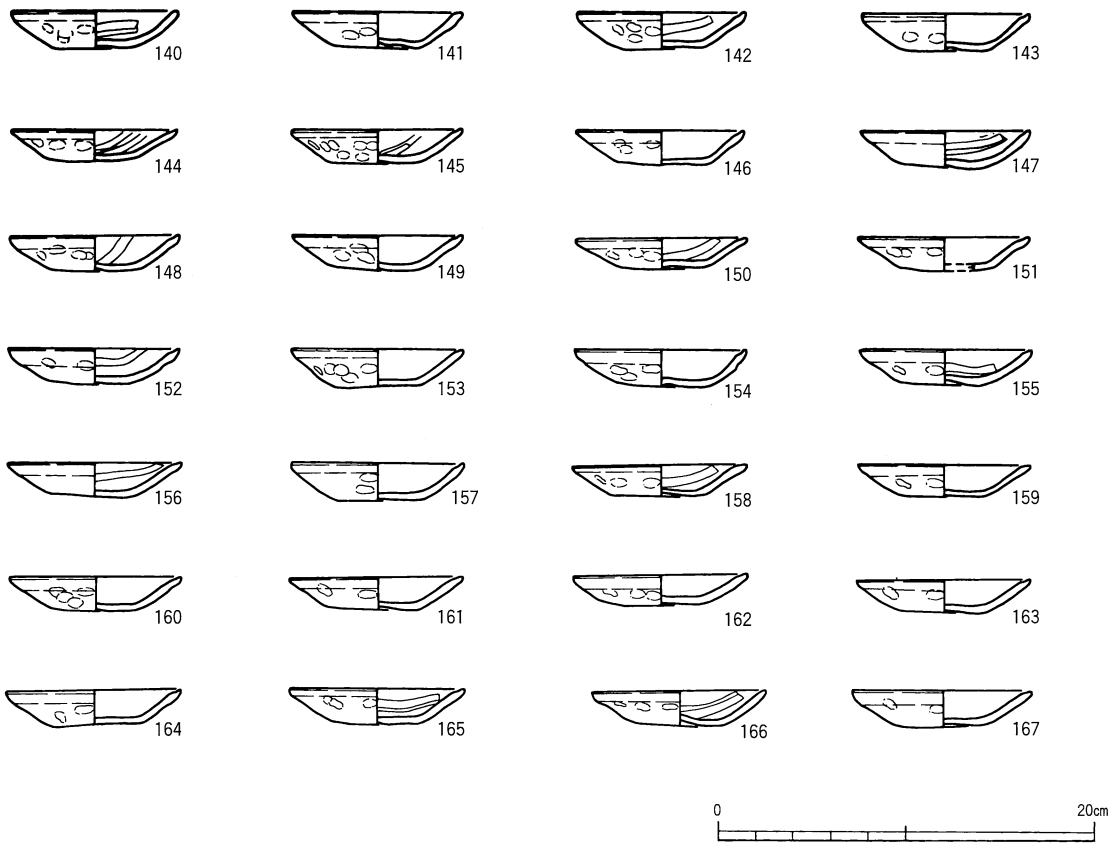
1　オリーブ黒色　極細砂質シルト（粗砂～細礫、木器含む）
2　黒褐色　シルト～極細砂質シルト（粗砂～細礫含む）

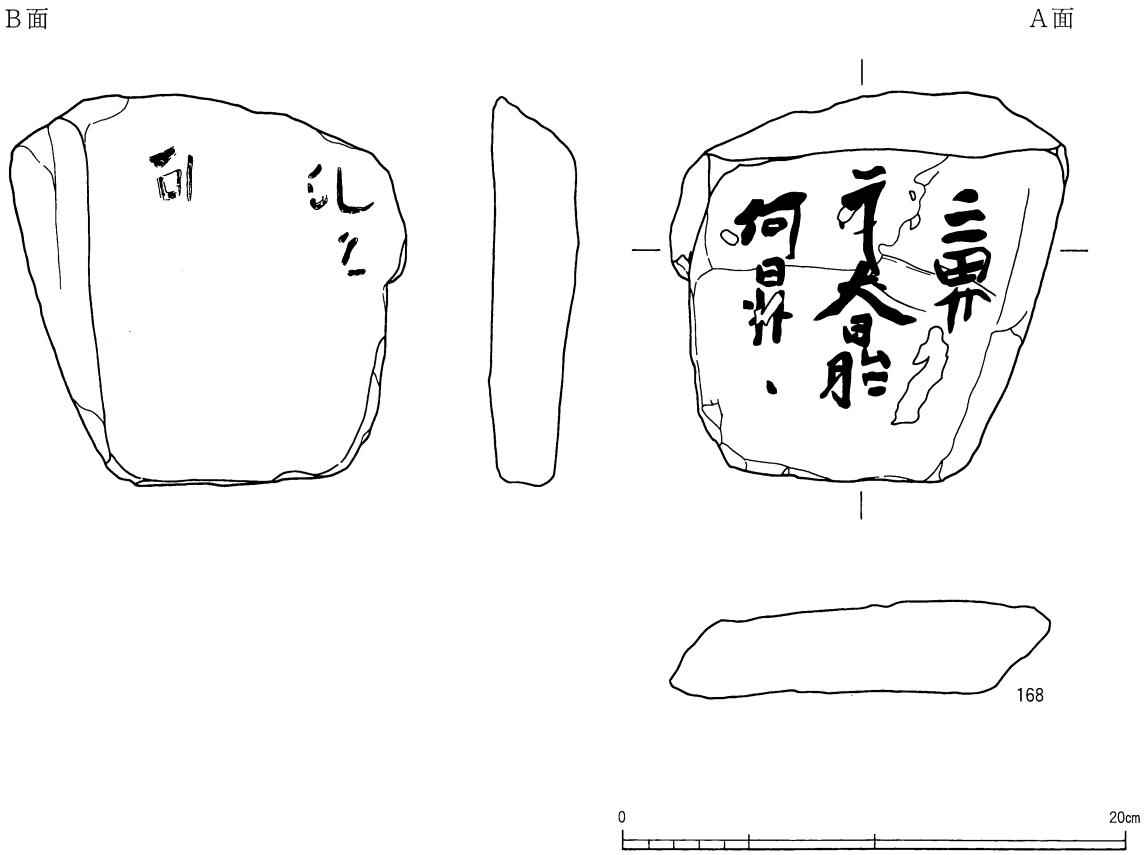
溝　土層断面図（B，F地区）

平成11年度



A，G地区出土　土器・陶磁器

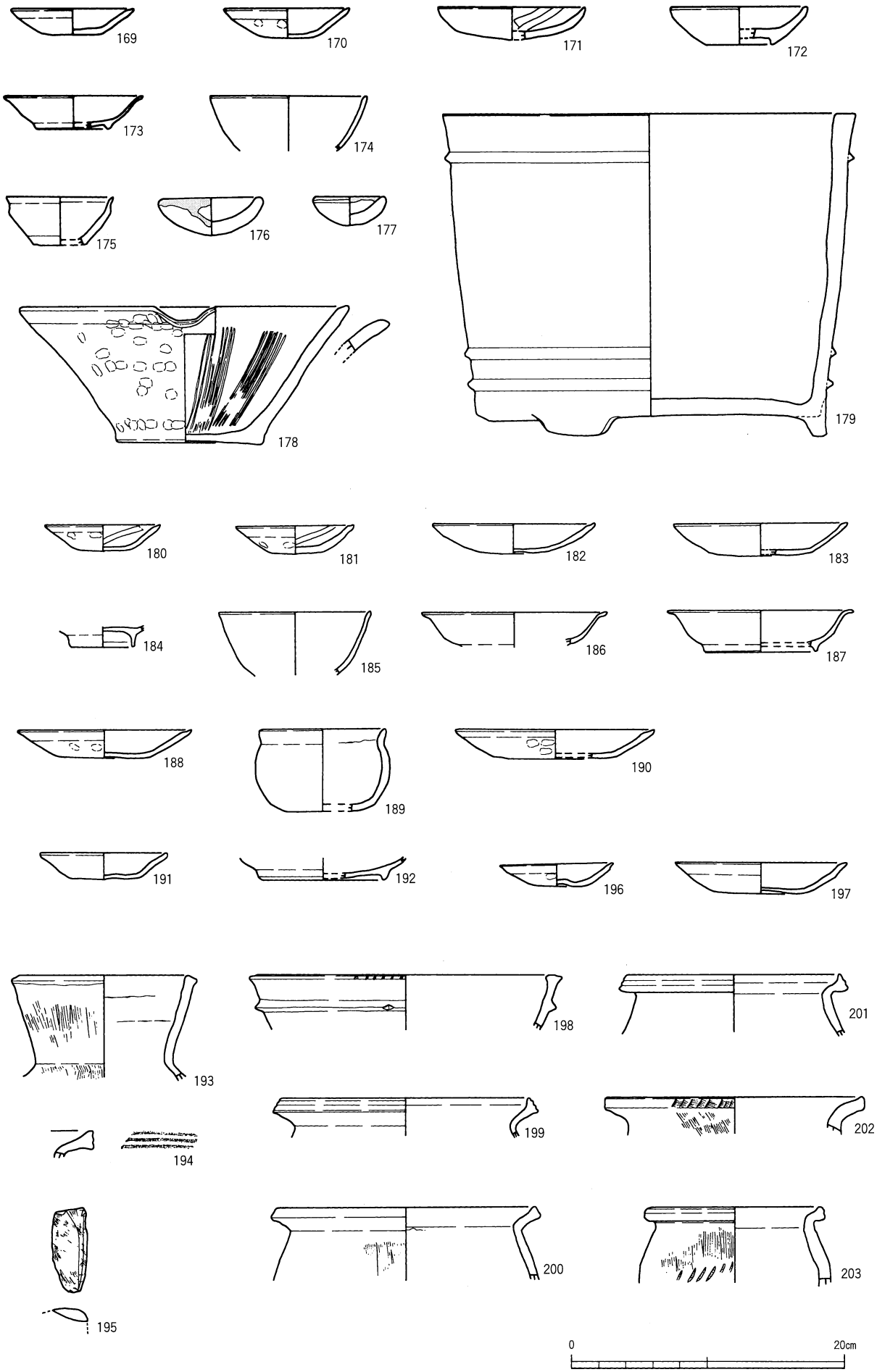




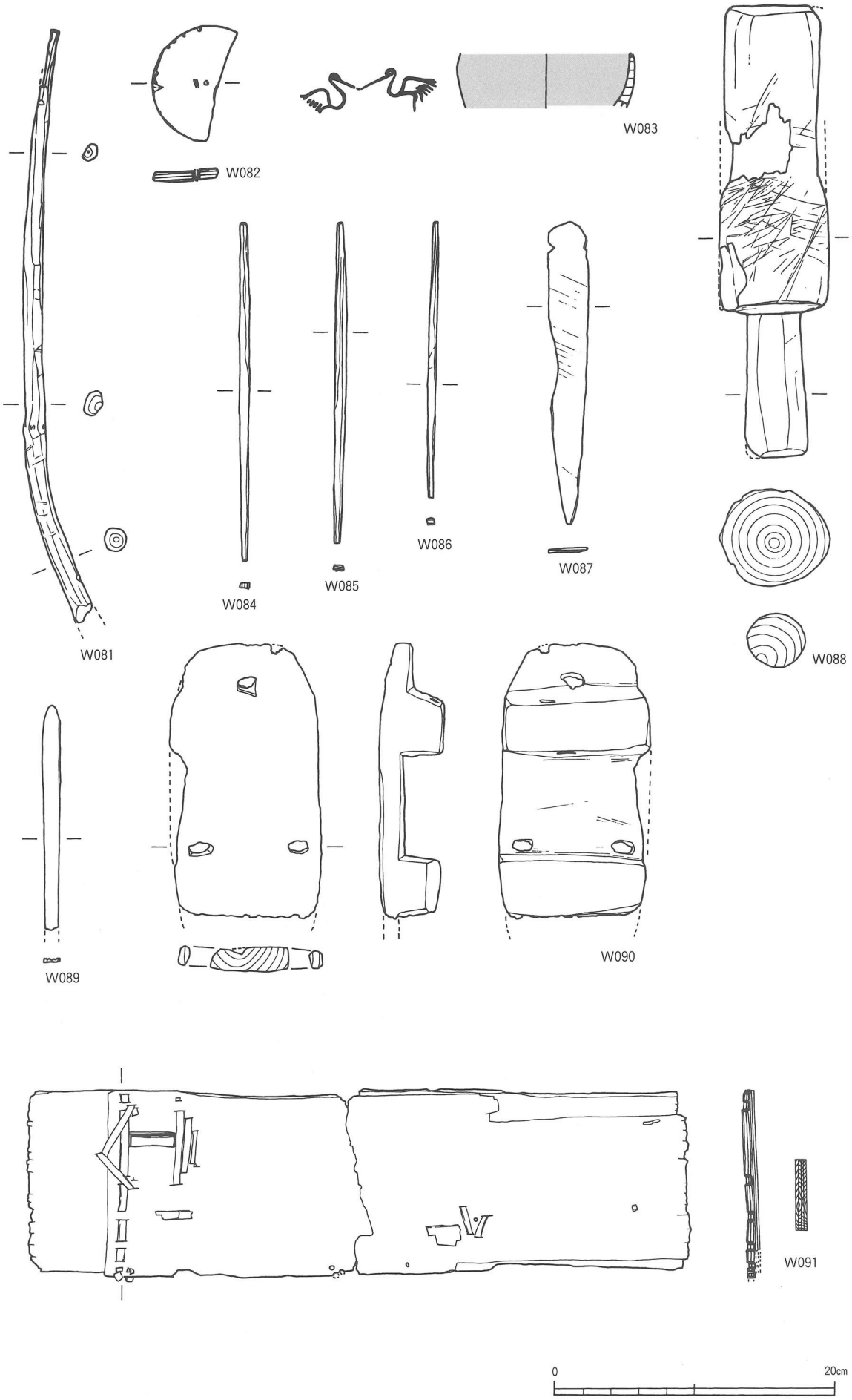
A地区　ＳＸ０１出土　土器・石製品

図版30

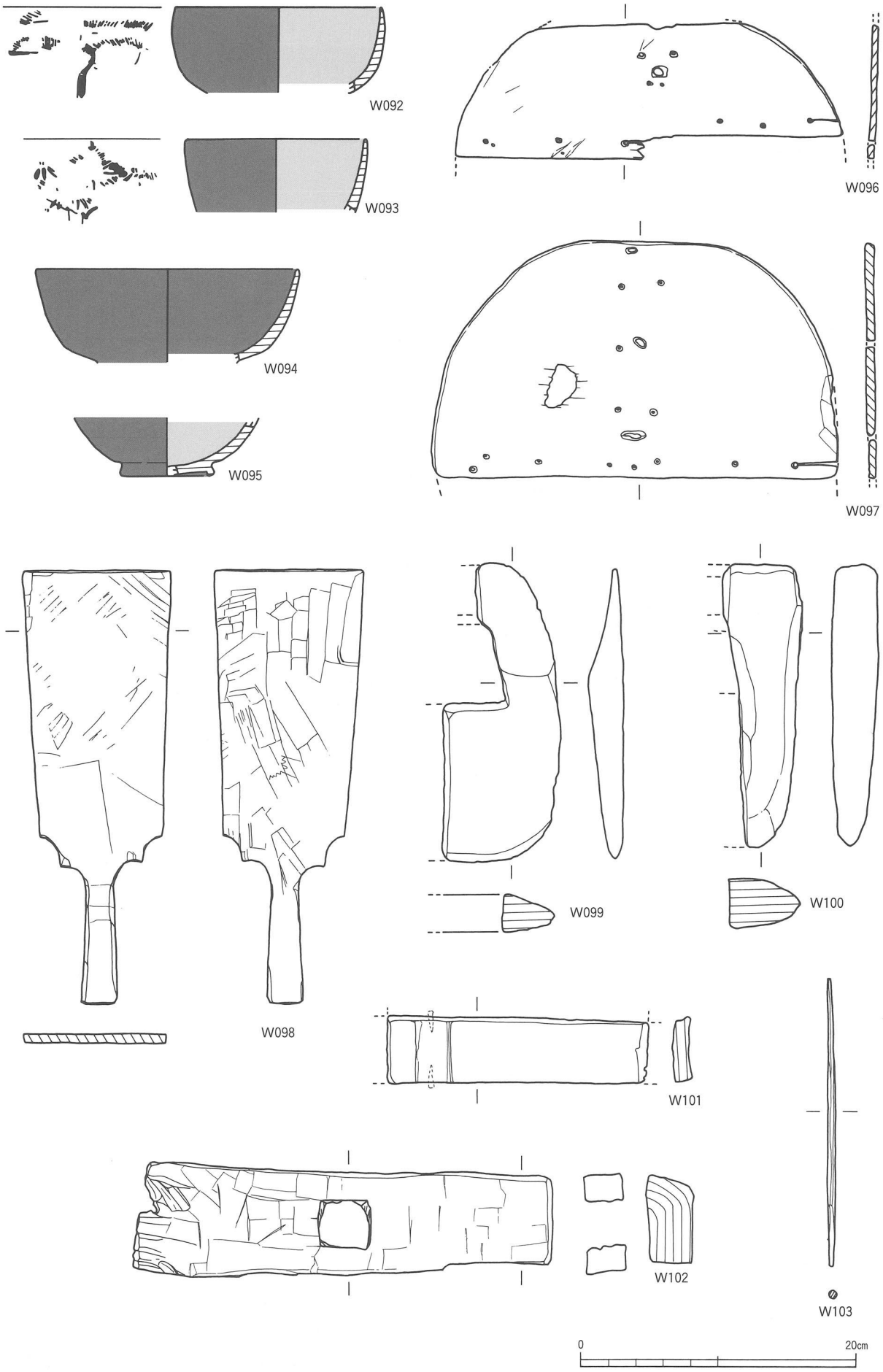
平成11年度



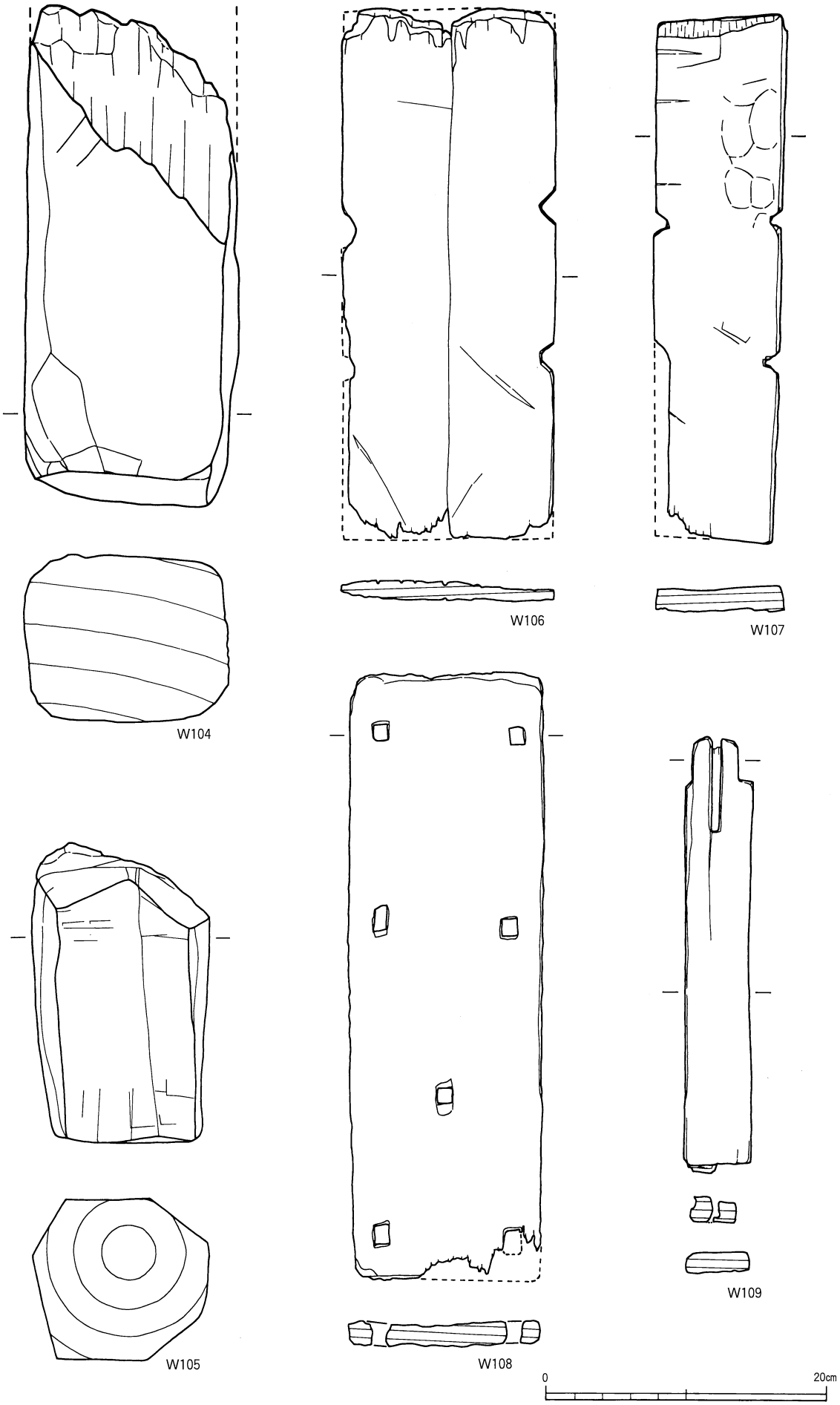
B～F地区出土　土器・陶磁器・石製品



A，G地区　遺構出土木製品



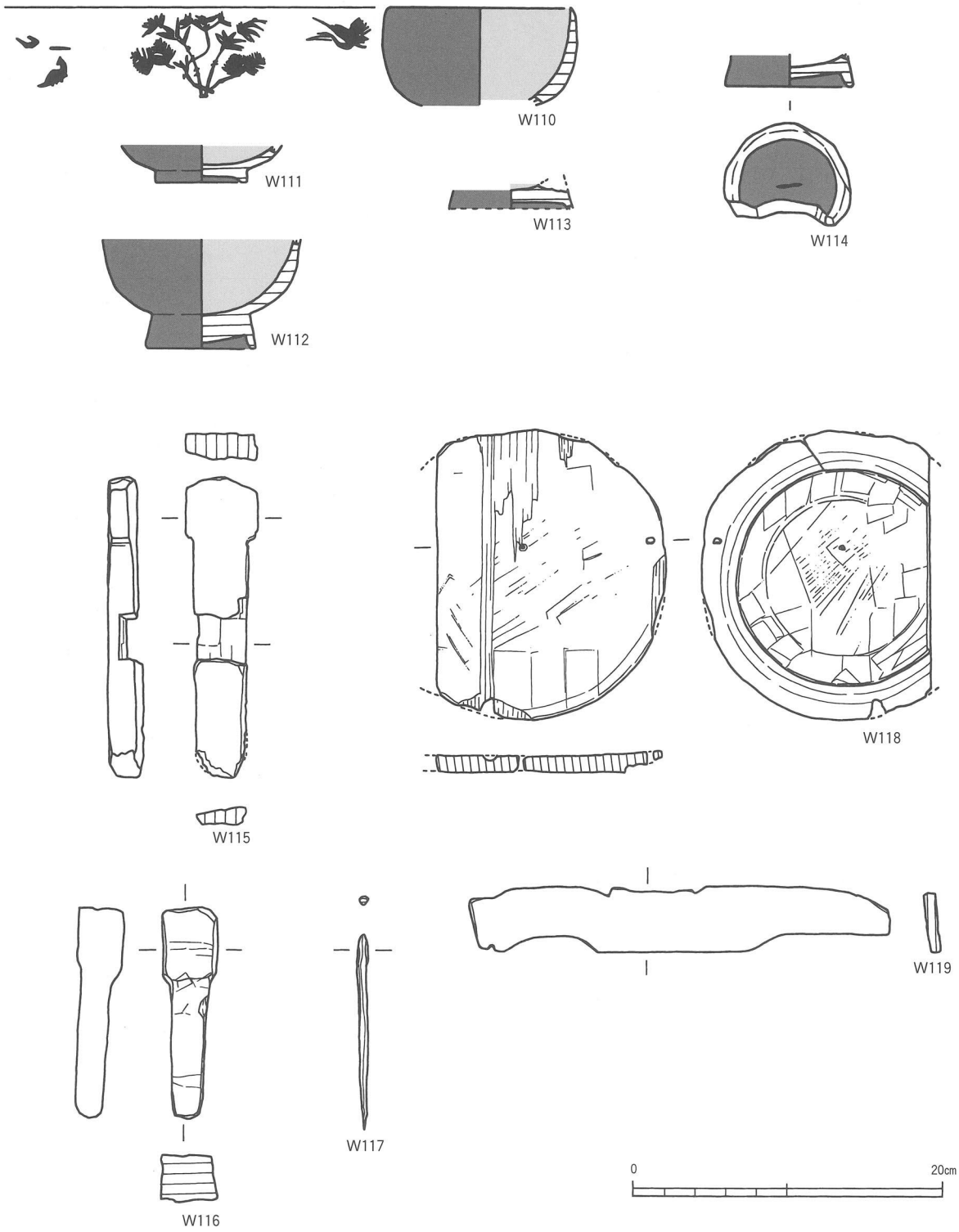
A，G地区　遺構出土木製品



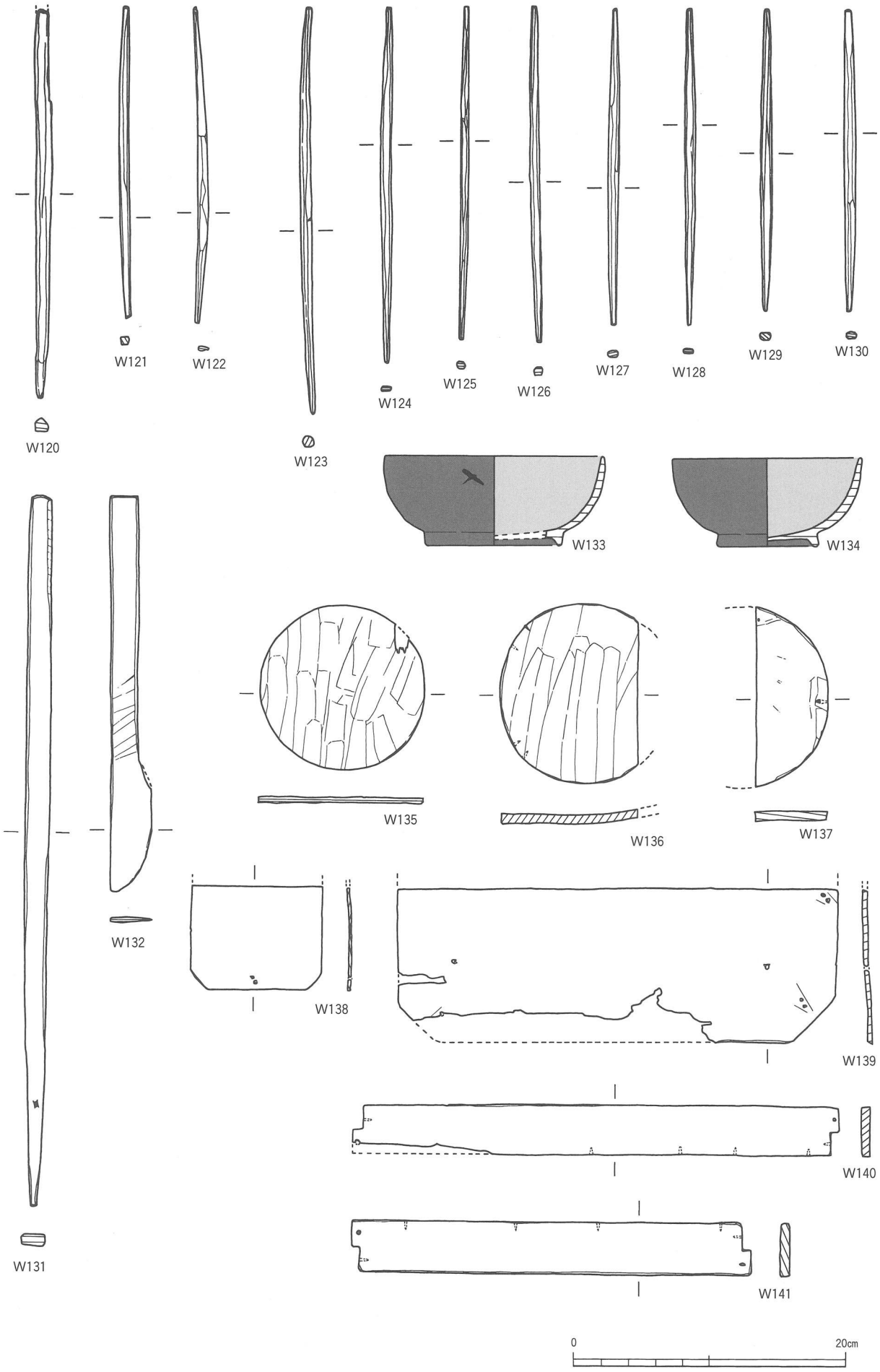
A，G地区　遺構、包含層出土木製品

図版34

平成11年度

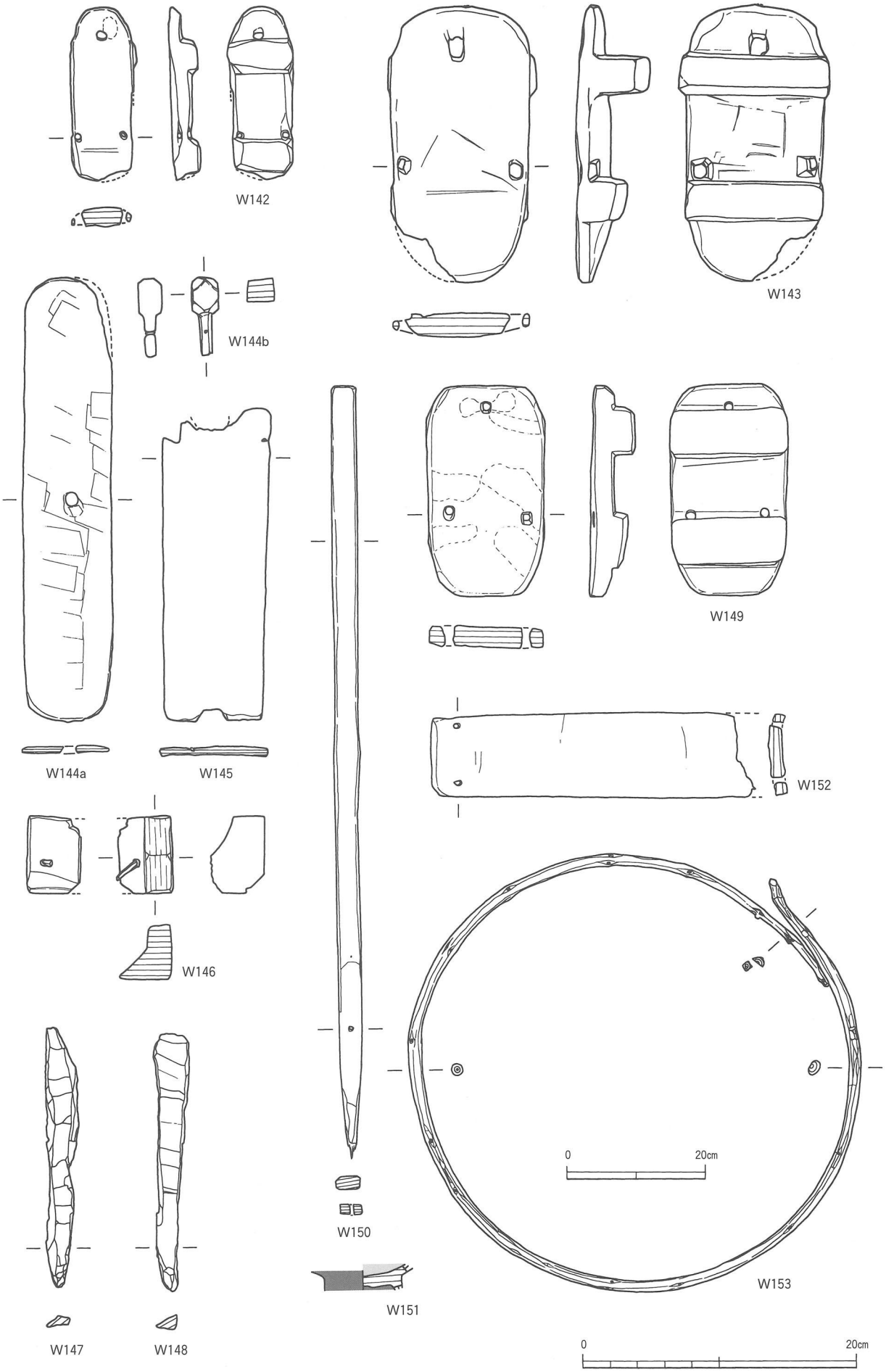


A，G地区　包含層出土木製品

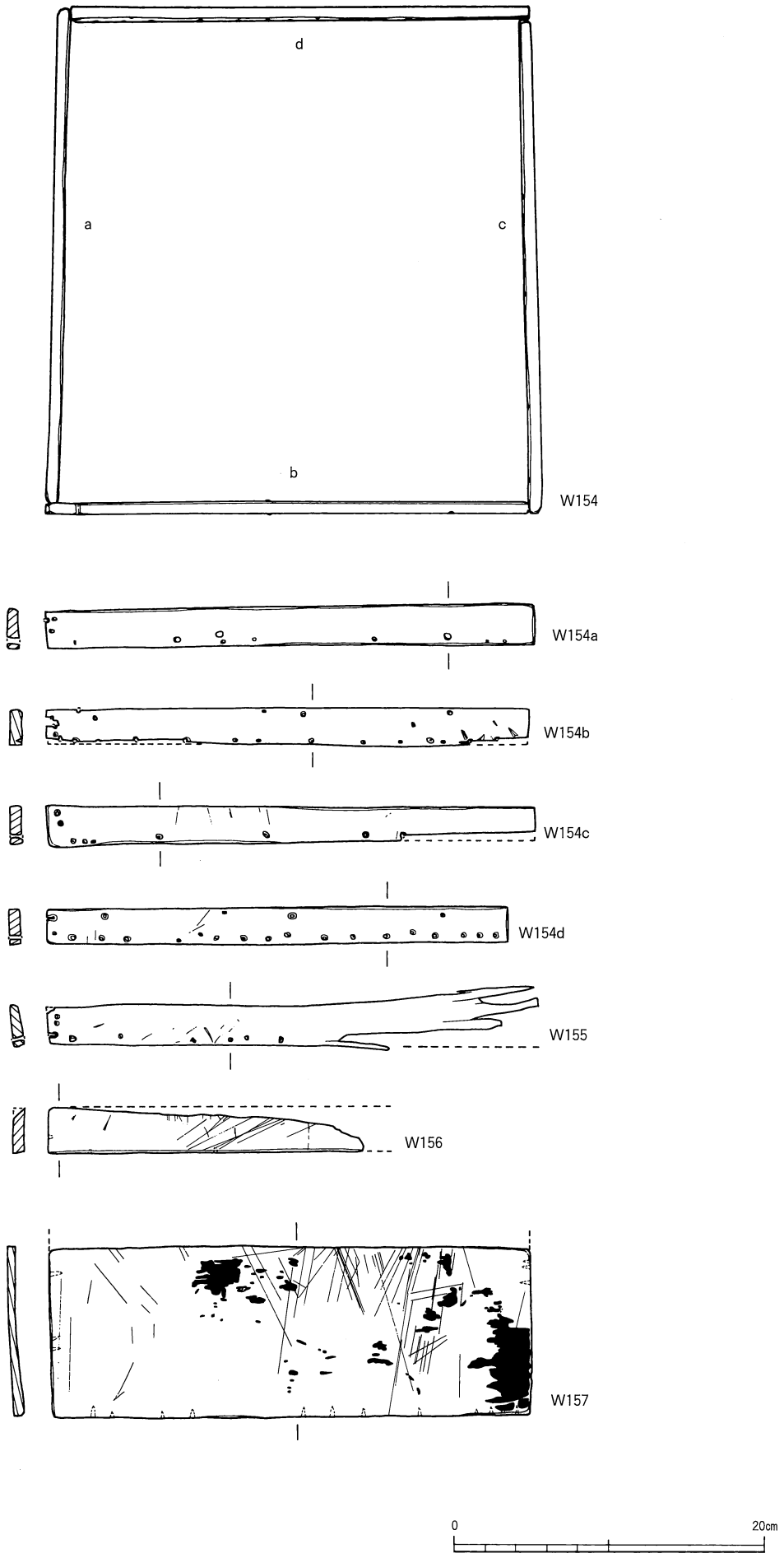

W120
W121
W122
W123
W124
W125
W126
W127
W128
W129
W130
W131
W132
W133
W134
W135
W136
W137
W138
W139
W140
W141
0
20cm

B地区　遺構出土木製品

平成11年度

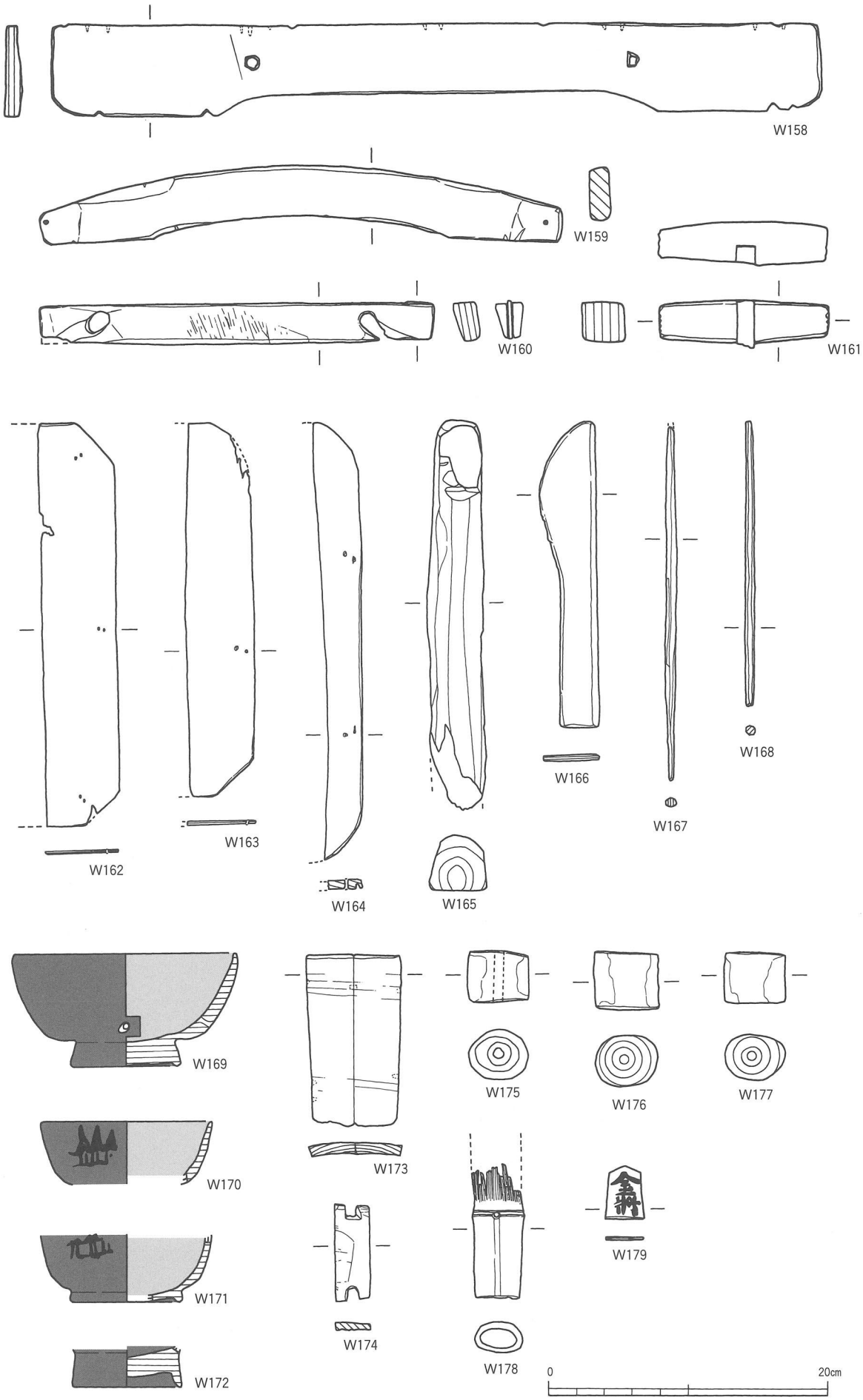


B地区　遺構出土木製品

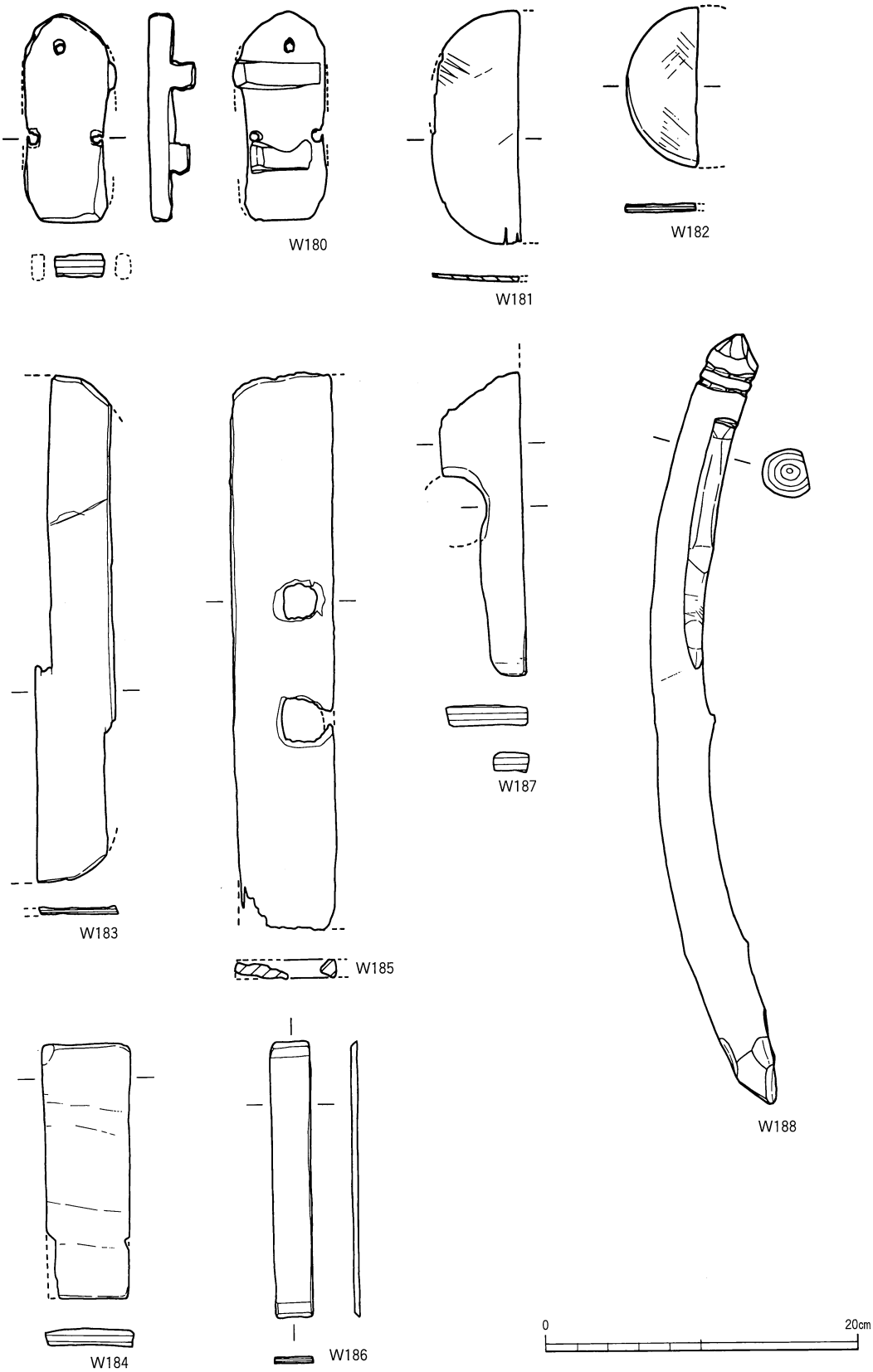


B地区　遺構出土木製品

平成11年度

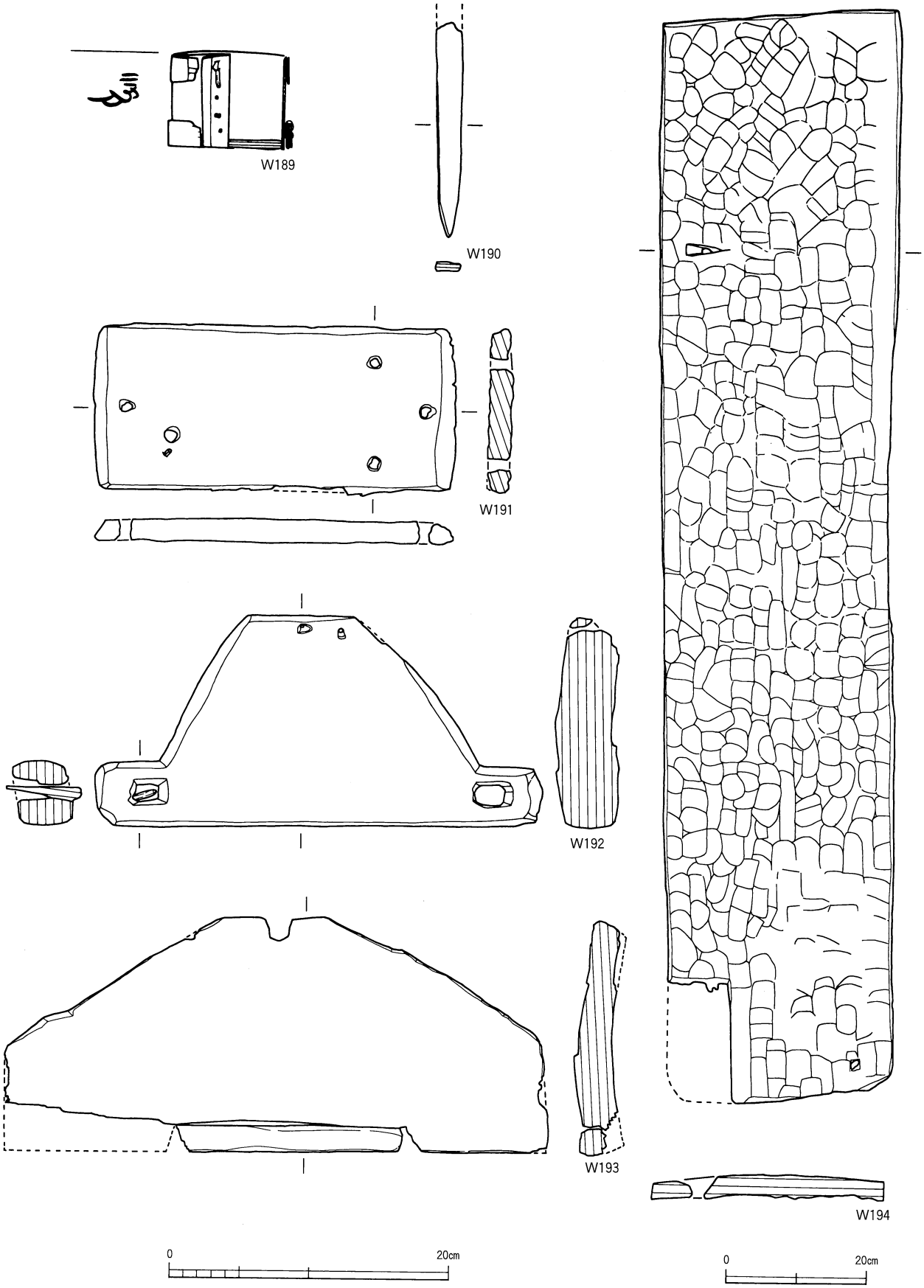


B地区　遺構出土木製品

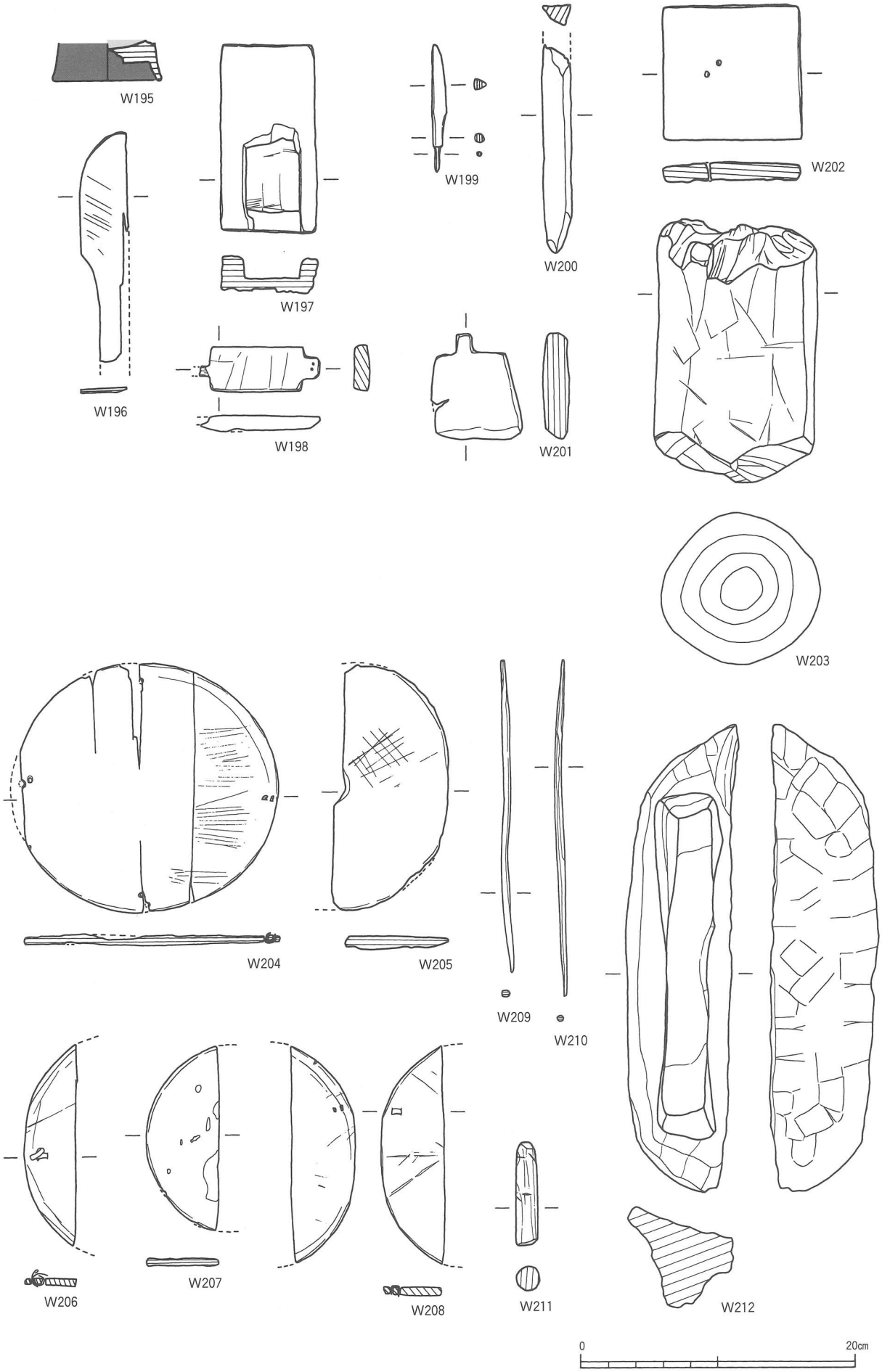


B地区　包含層出土木製品

平成11年度



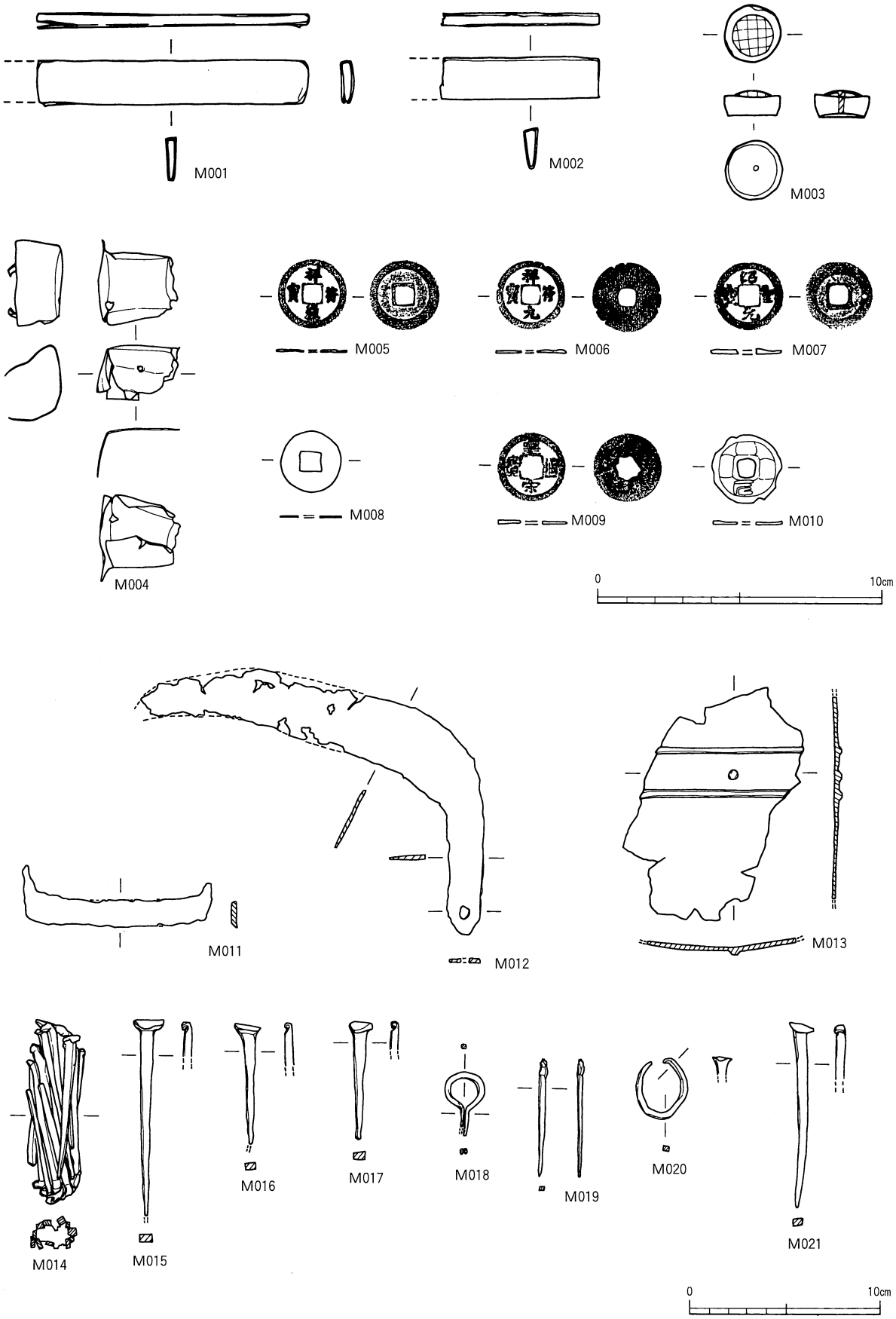
B地区　下層出土木製品


W195
W196
W197
W198
W199
W200
W201
W202
W203
W204
W205
W206
W207
W208
W209
W210
W211
W212
0
20cm

C～F地区　出土木製品

図版42

平成10,11年度

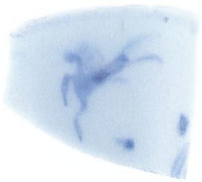


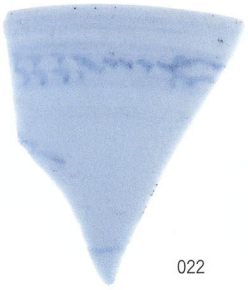
金属器

カラー写真図版

004

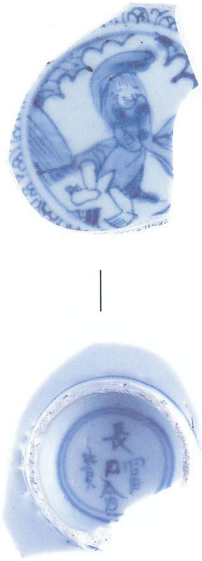
027


034


022

008

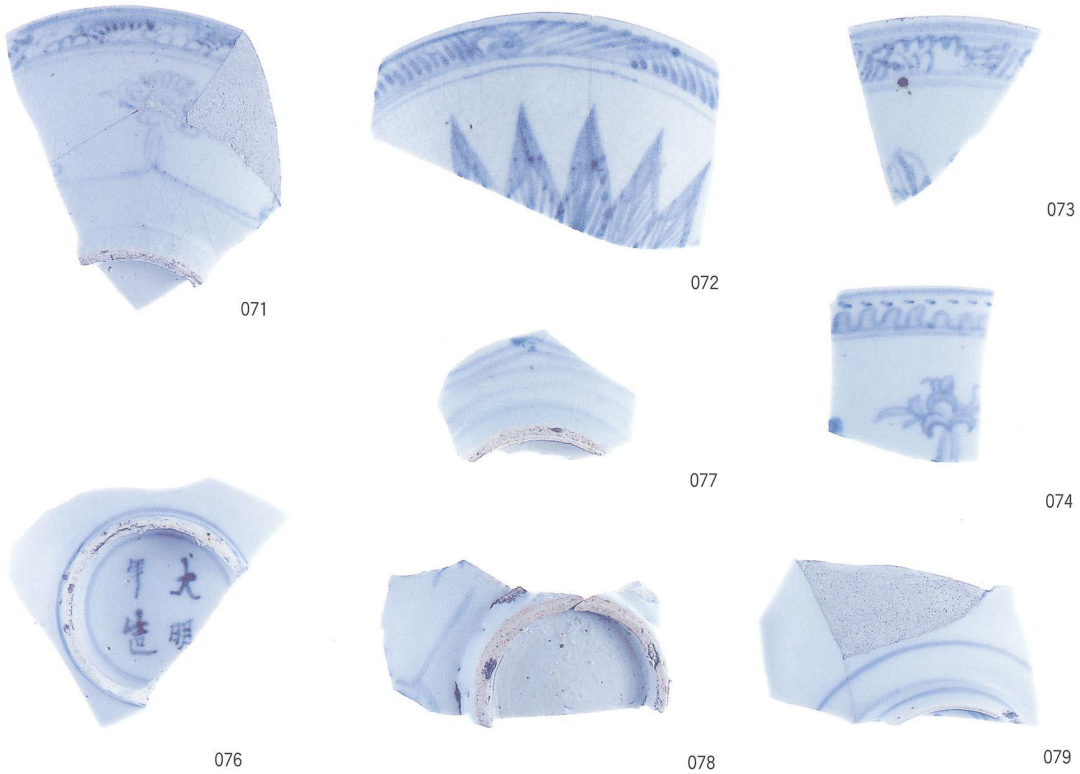
平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器


035

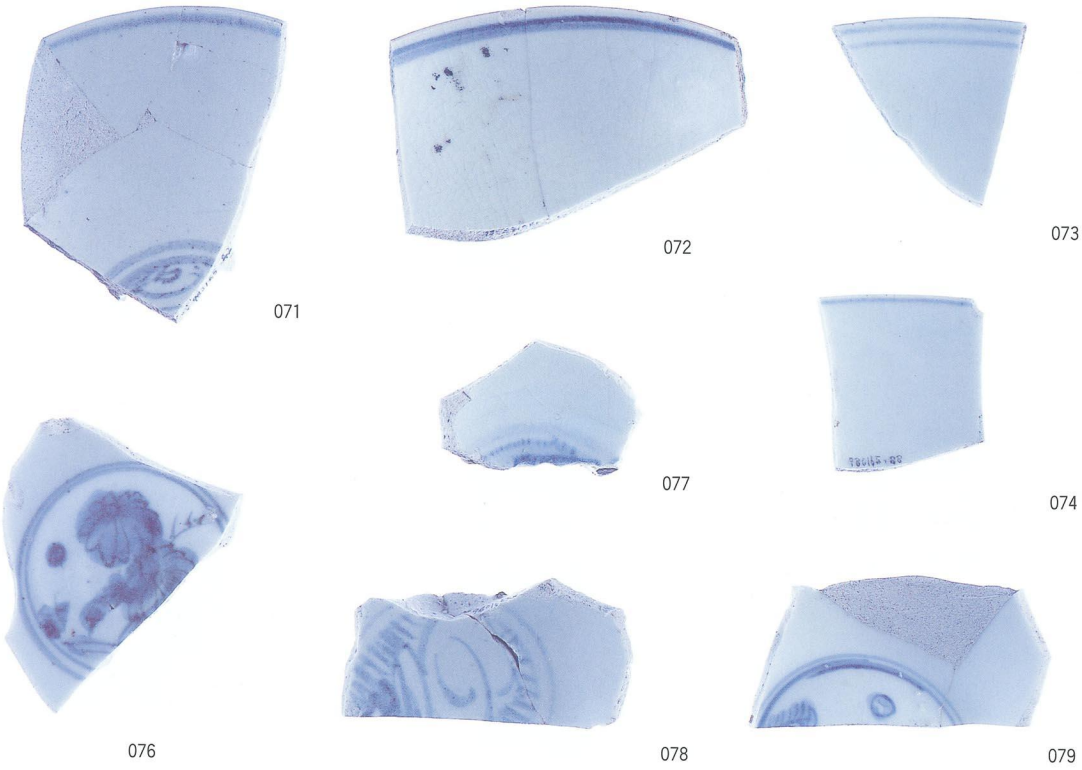
048

075

平成10年度　Ａ地区出土　染付磁器

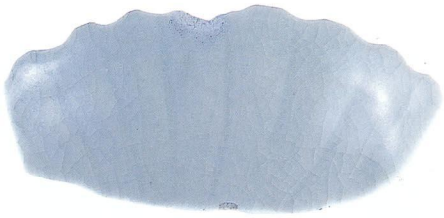


平成10年度　A地区出土　染付磁器（外面）



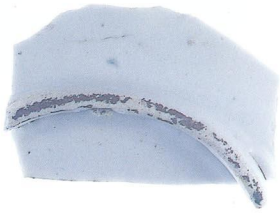
平成10年度　A地区出土　染付磁器（内面）

037



046

025

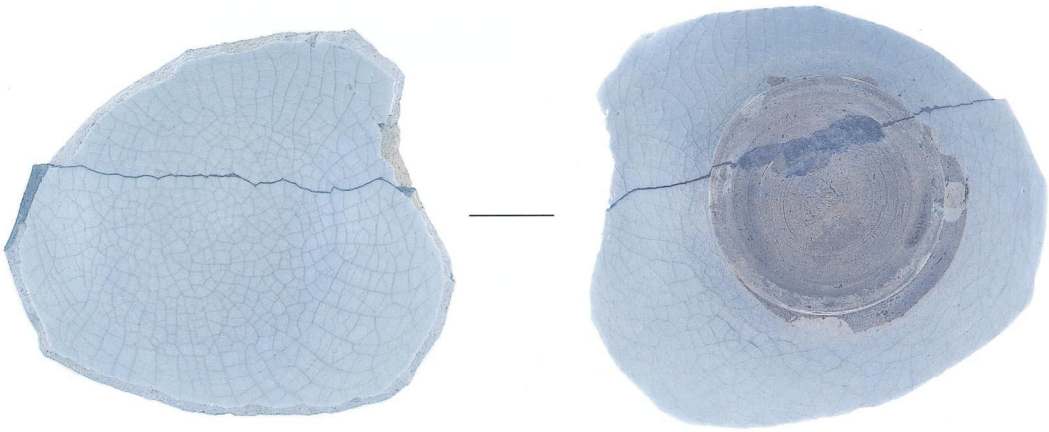


036

066

083

080



082

平成10年度　Ａ地区出土　磁器（青磁、白磁）

W015

W031

W016

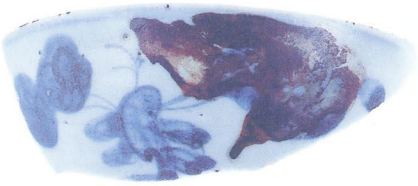
M001

M002

M004

M003

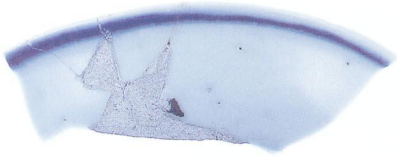
（上）平成10年度　Ａ地区出土　漆　器
（下）平成10年度　Ａ地区出土　金属器



174

185

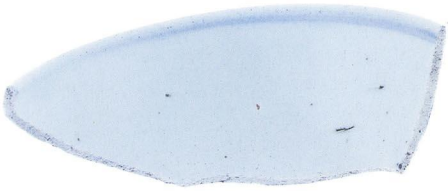
184



186

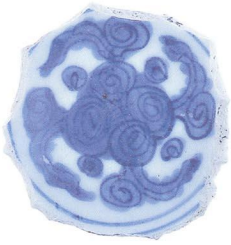
187

平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（外面）

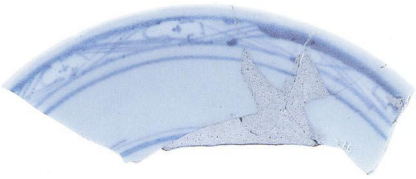


174

185



184

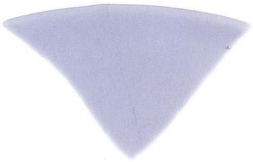


186

187

平成11年度　Ｂ地区出土　染付磁器（内面）

113



204

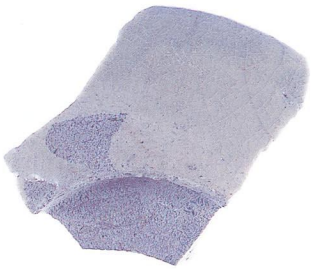
115

133

205

平成11年度　A，G地区出土　陶磁器

173

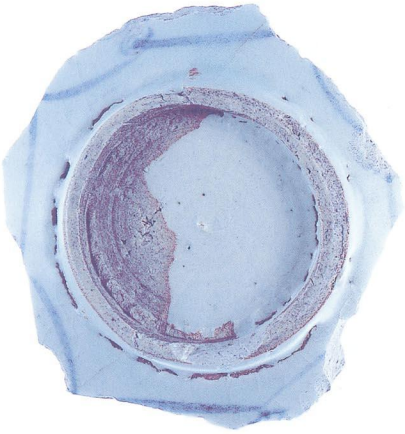


172

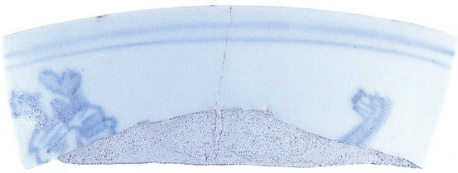
192

206

平成11年度　B，D地区出土　陶磁器



134

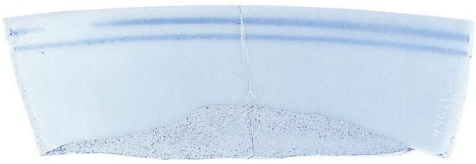


207

208

平成11年度　Ｇ地区出土　染付磁器（外面）

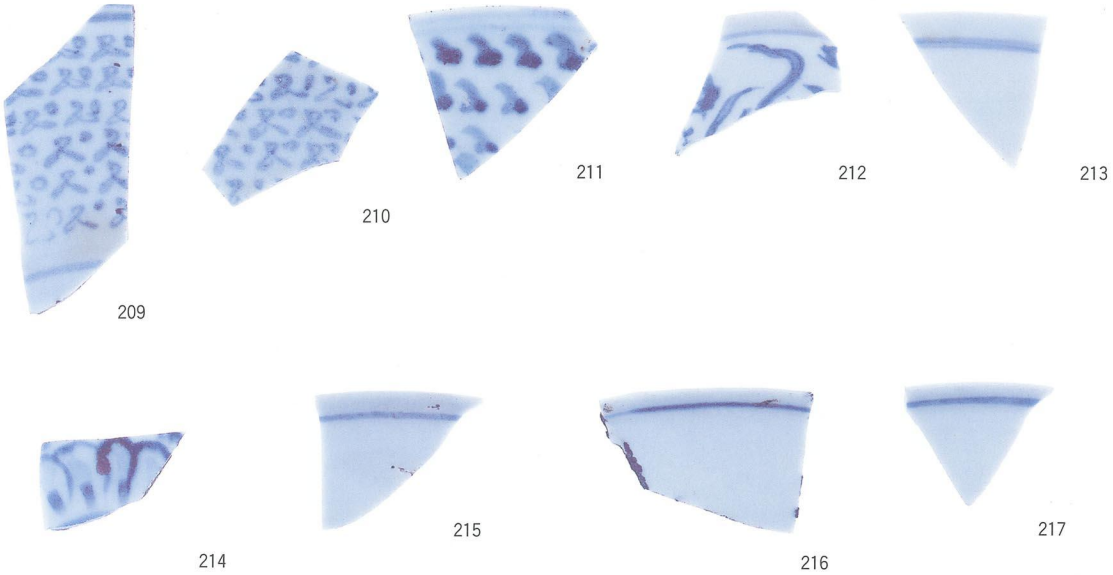
134



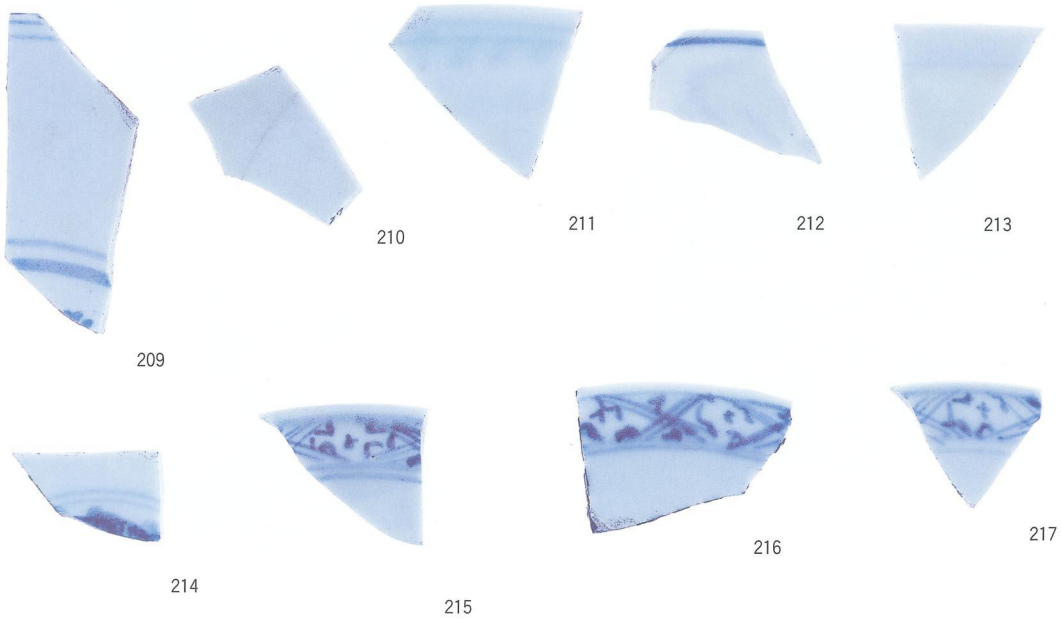
207

208

平成11年度　Ｇ地区出土　染付磁器（内面）



平成11年度　B地区出土　染付磁器（外面）



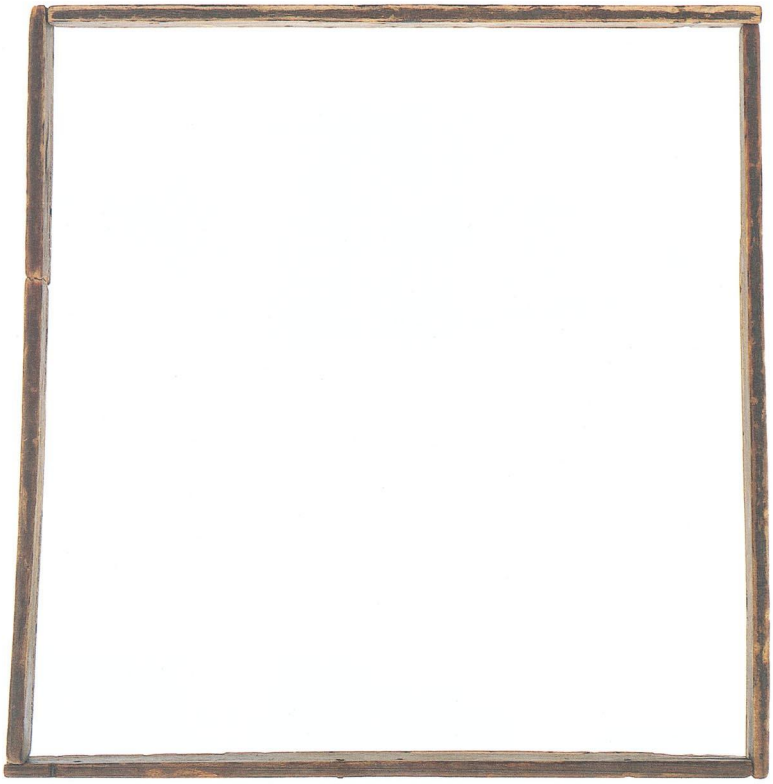
平成11年度　B地区出土　染付磁器（内面）

W083

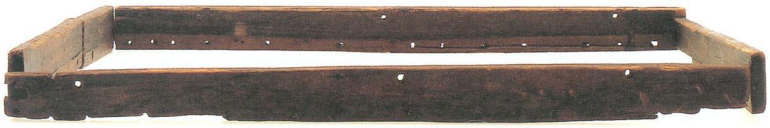
W092

W110

平成11年度　A地区出土　漆器椀



W154



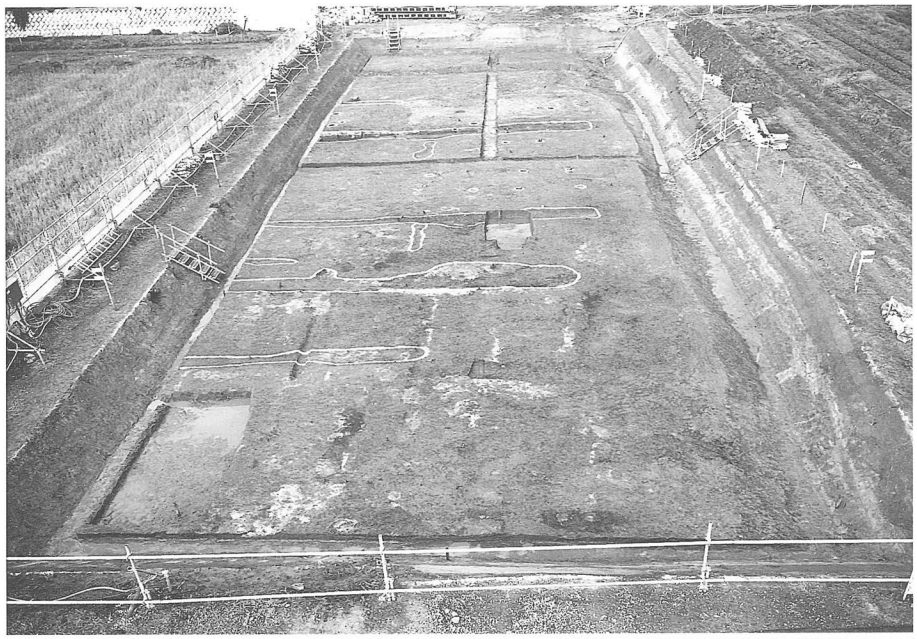
W154

W154

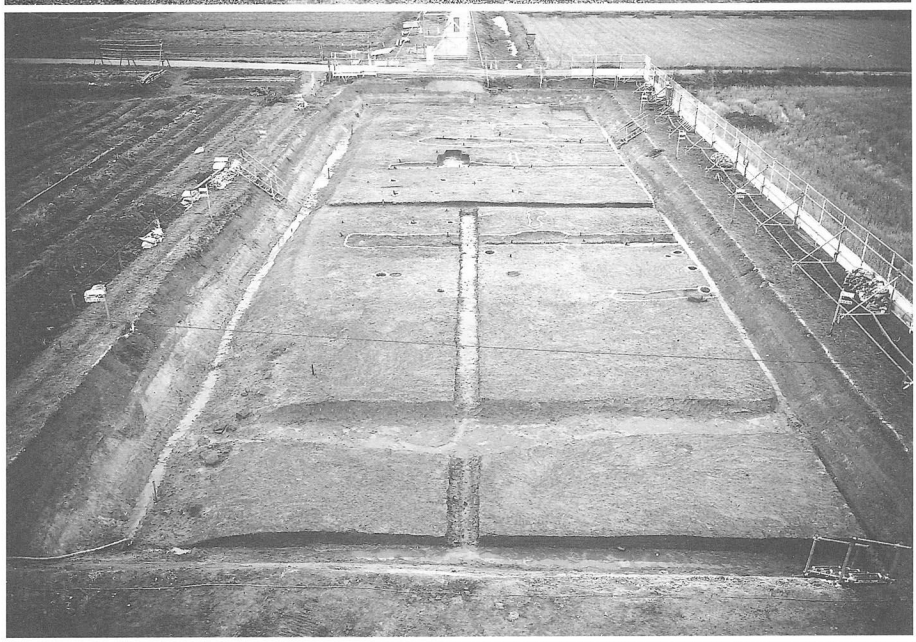
平成11年度　B地区出土　木製箱

写　真　図　版

平成10年度



Ａ地区全景
（南から）

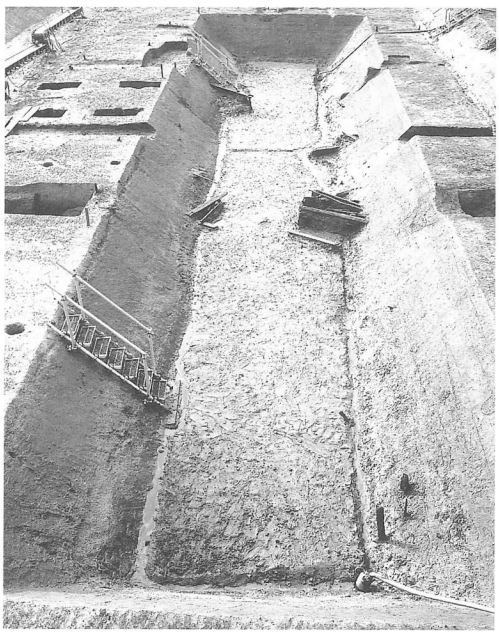


Ａ地区全景
（北から）

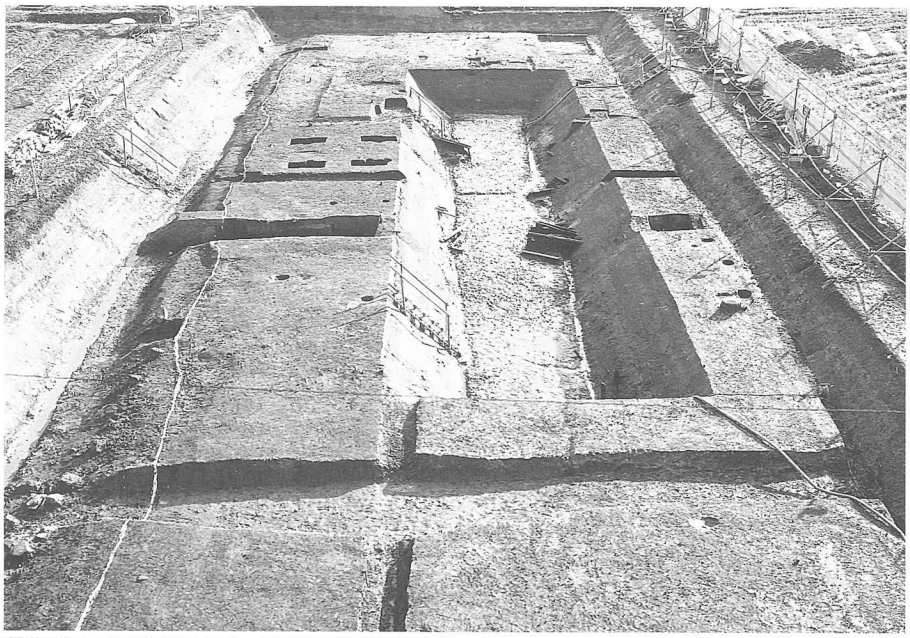
Ａ地区
SD206
（北から）

写真図版 2

平成10年度

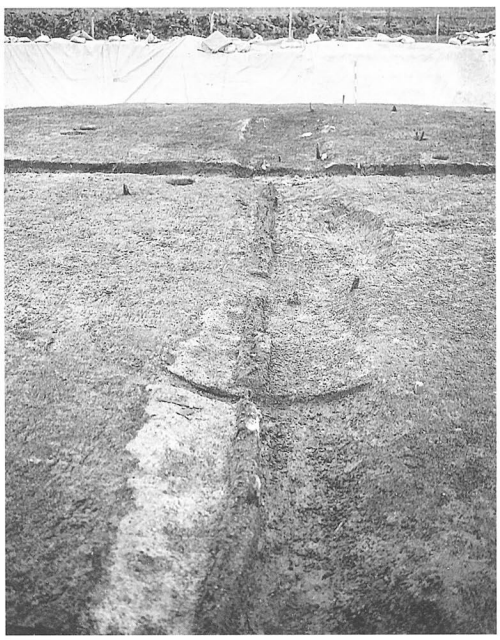


Ａ地区
断ち割り部全景
（北から）

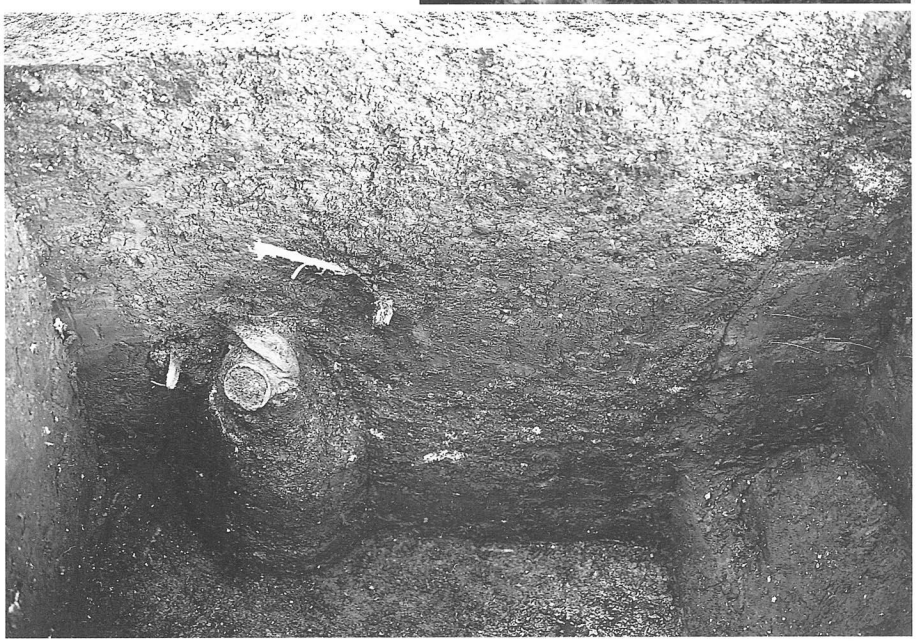


Ａ地区
断ち割り状況
（北から）

Ｂ地区全景
（南から）



A地区
SD206
杭列検出状況
（西から）



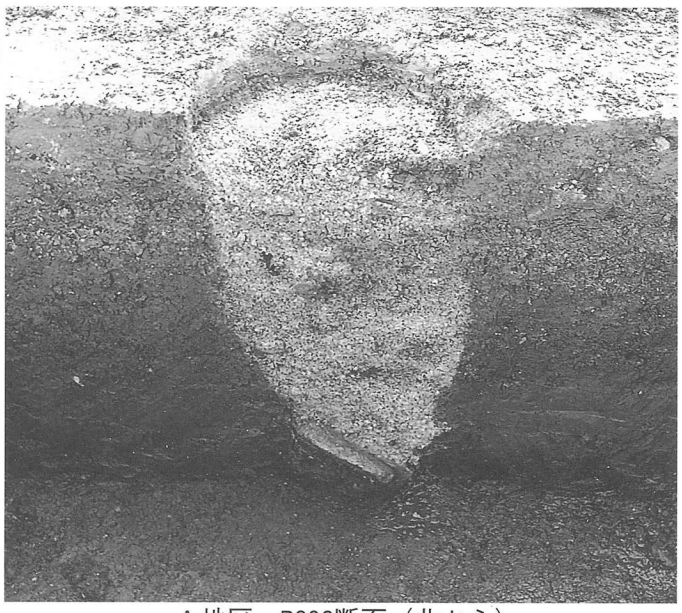
A地区
SD206断面
（西から）

A地区
SD202断面
（西から）

写真図版 4

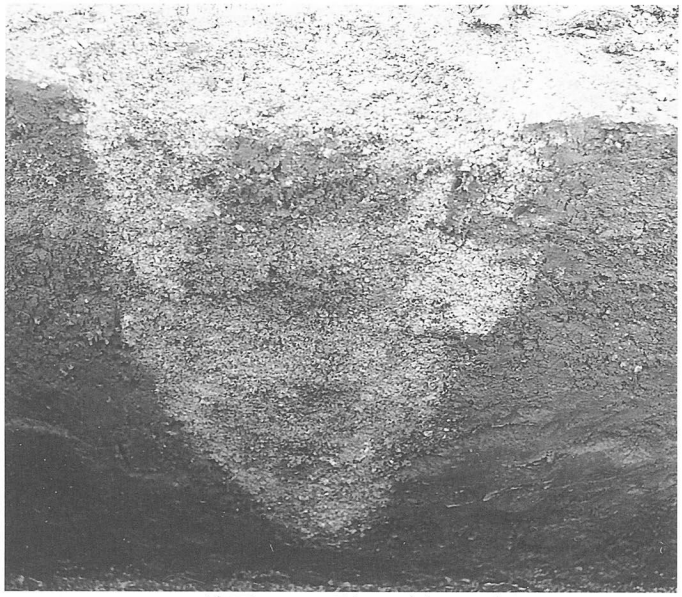
平成10年度

A地区　P201断面（北から）

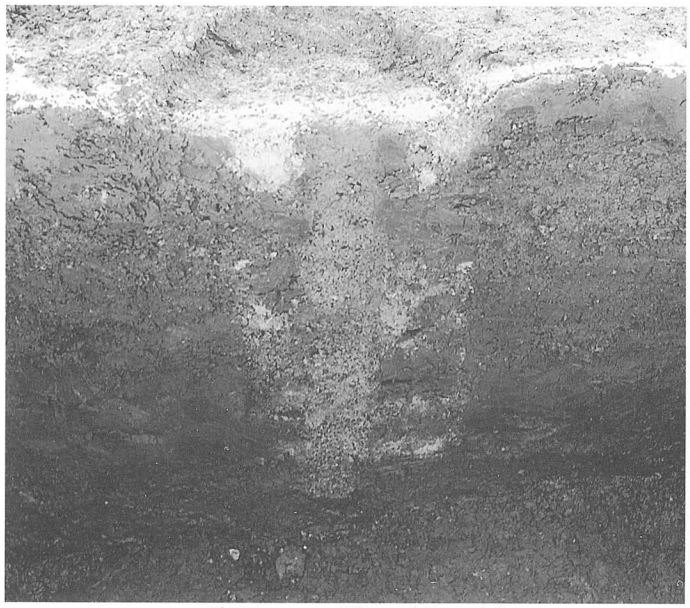


A地区　P202断面（北から）

A地区　P206断面（南から）



A地区　P205断面（南から）

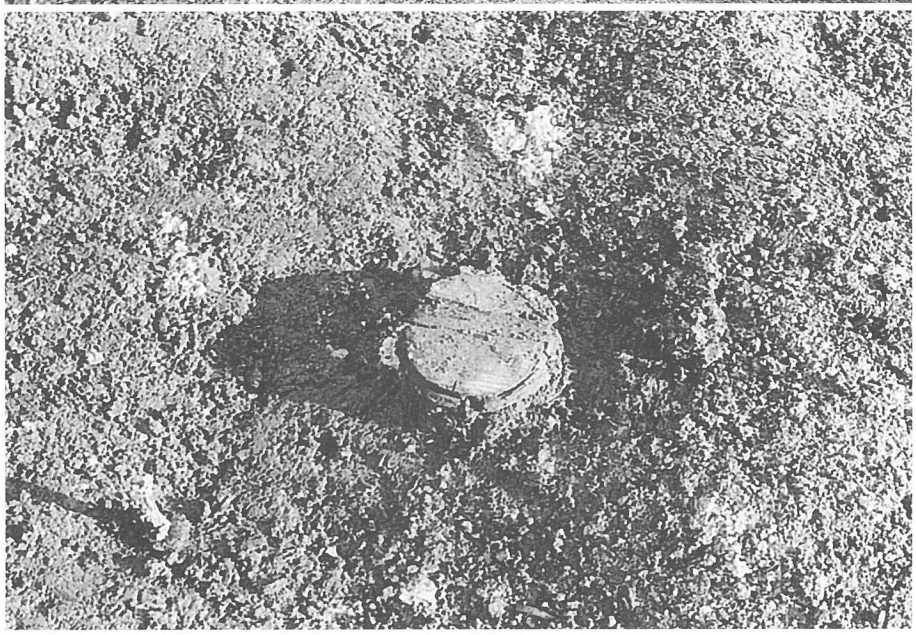


A地区　P204断面（北から）

A地区　P207断面（南から）

A地区
SD201
木製品および
銅製品出土状況
（西から）

A地区
SD204
鎌出土状況
（南から）



A地区
SD204
曲物出土状況
（西から）

写真図版 6

平成10年度

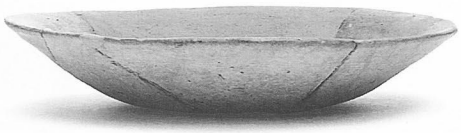
004

011

016

008

013



020

021

022

027

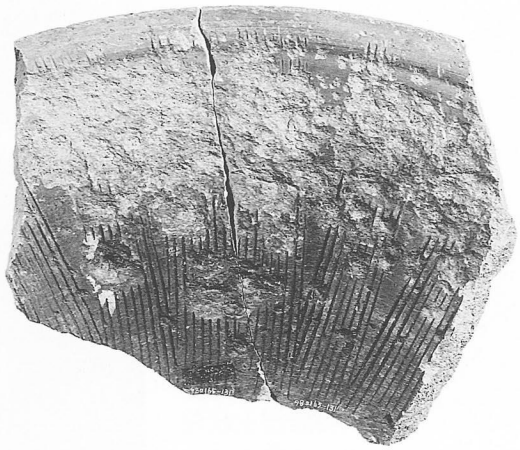
034

028

035

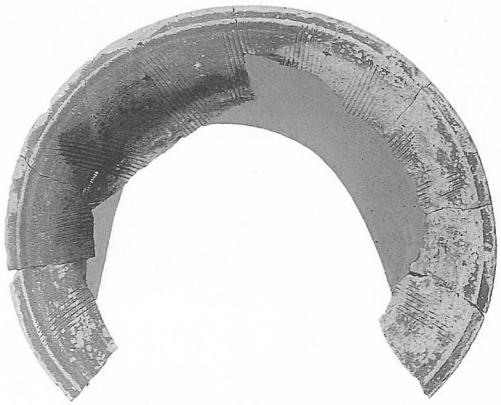
029

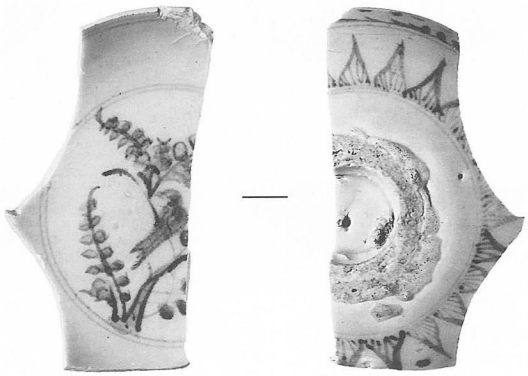
031



040

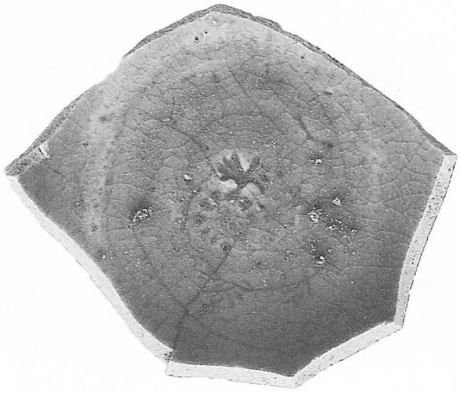
A地区　溝、旧河道出土　土器・陶磁器



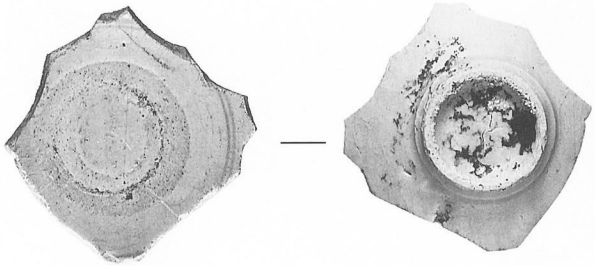


048

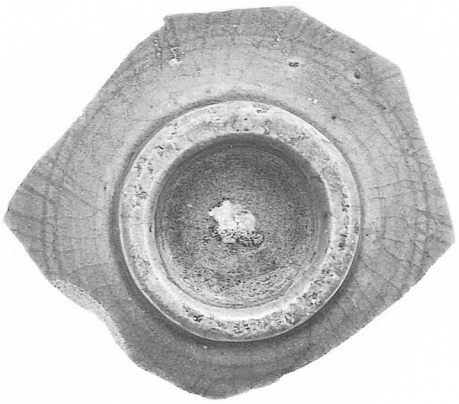
042

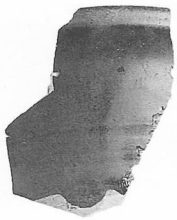


050



052





054

055

056

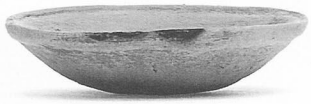
A地区　旧河道、包含層出土　土器・陶磁器

写真図版 8

平成10年度

057

058



059

061

062

063

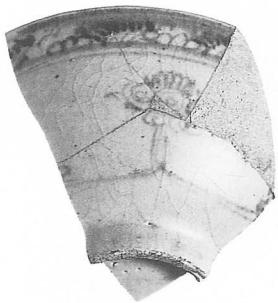
064

065

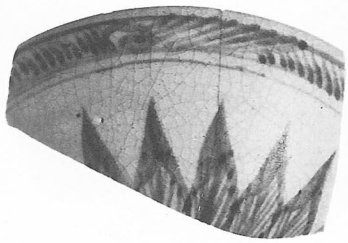
067

068

075



071



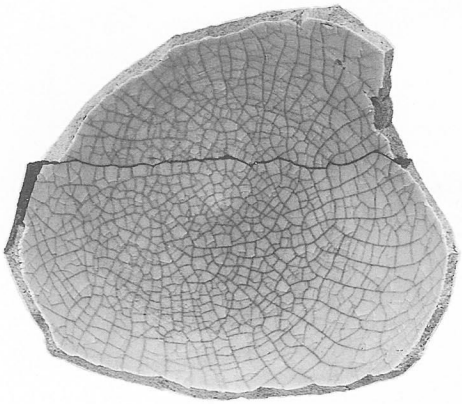
072

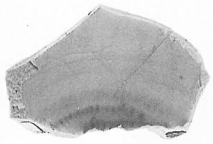
A地区　包含層出土　土器・陶磁器

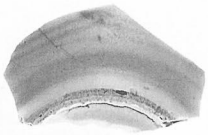
073

074

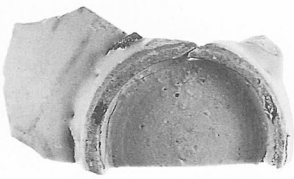
076



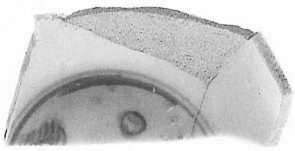


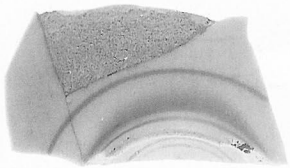


077

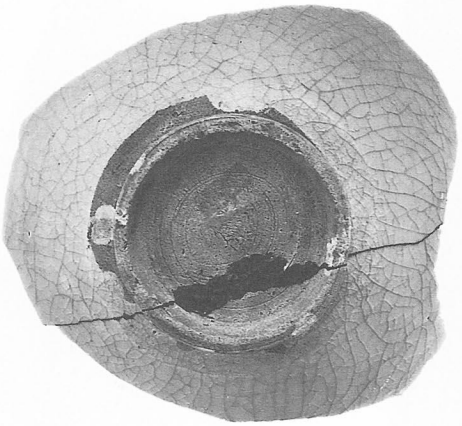


078





079



082

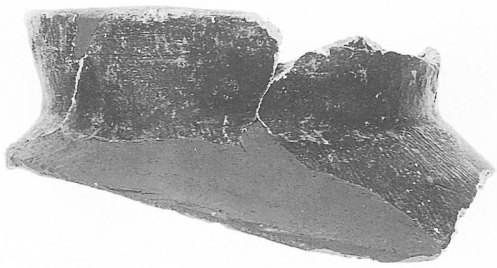
083

084

085

090

A地区　包含層出土　土器・陶磁器

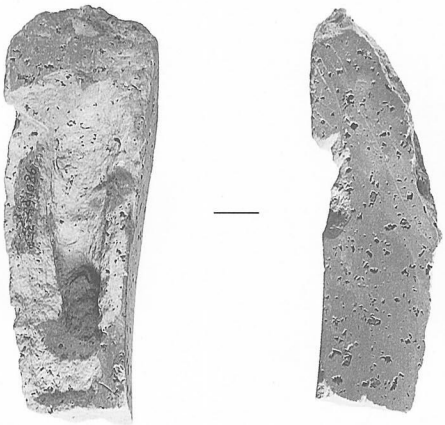


096

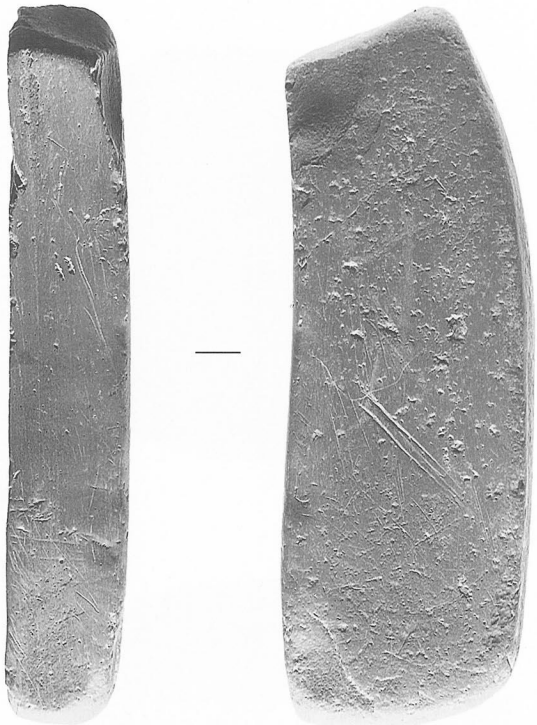
101

102

105

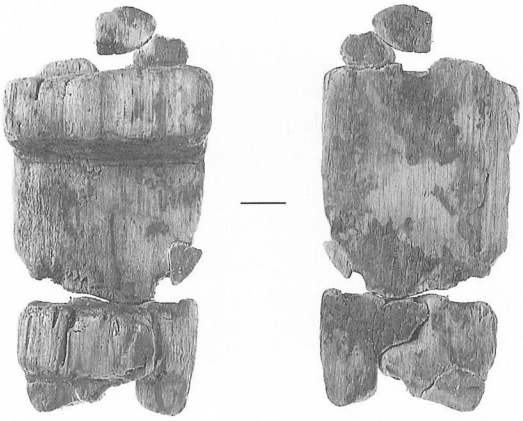


103



104

A，B地区　包含層出土　土器・石製品

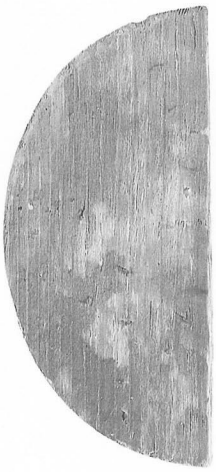


W001

W003

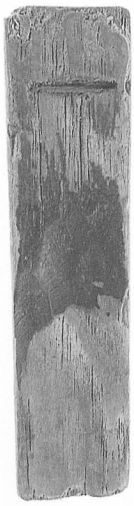
W004

W002



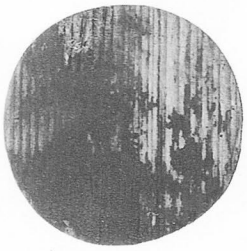
W008

W009

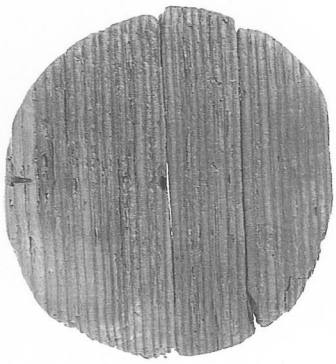


W011

W012



W006

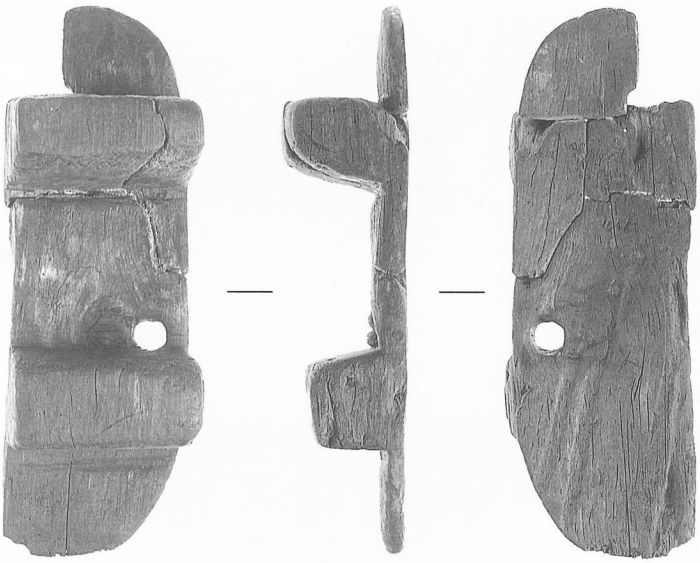


W007

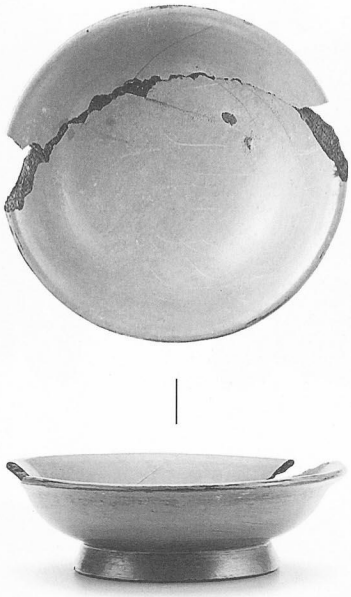
A地区　溝出土　木製品

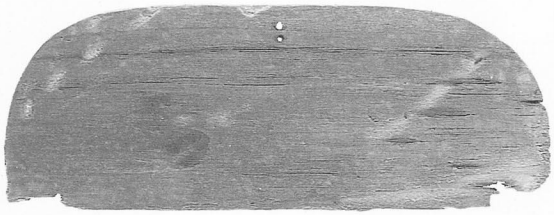
写真図版12

平成10年度



W013

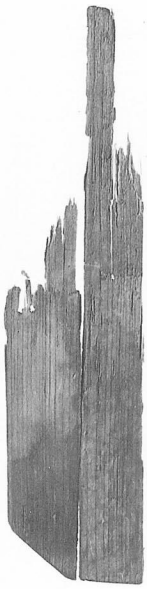




W014

W016

W015

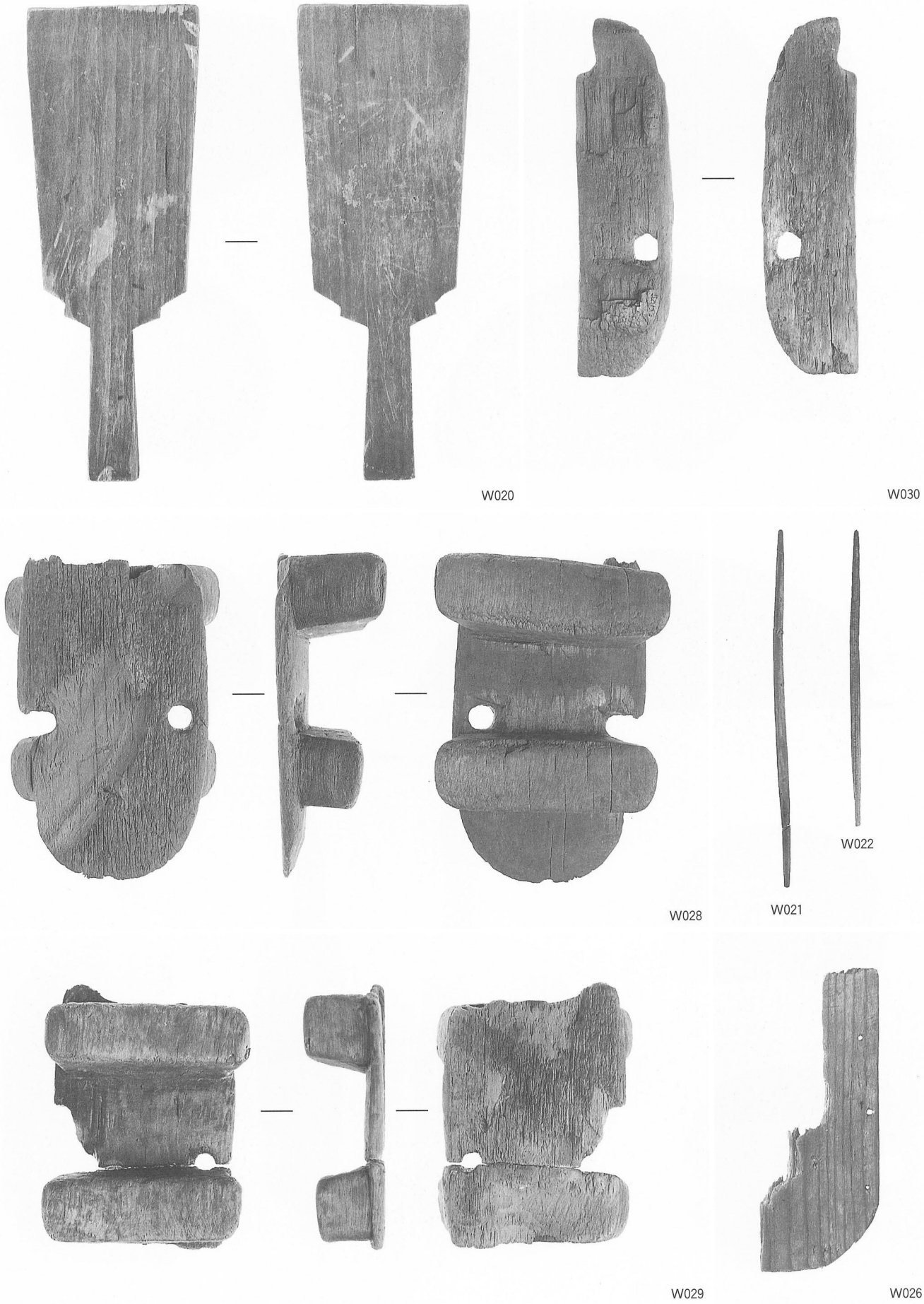


W017

W018

W019

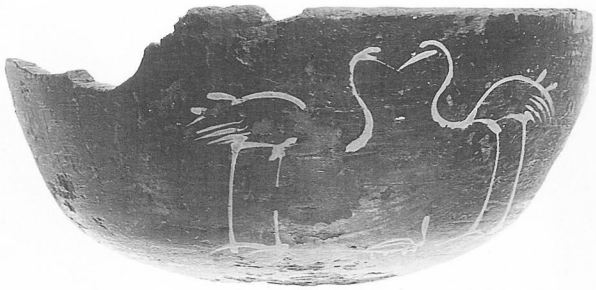
A地区　溝出土　木製品



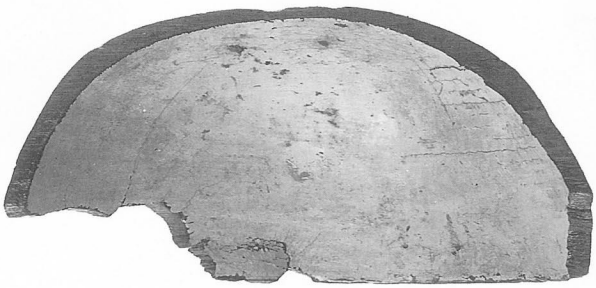
A地区　包含層出土　木製品

写真図版14

平成10年度

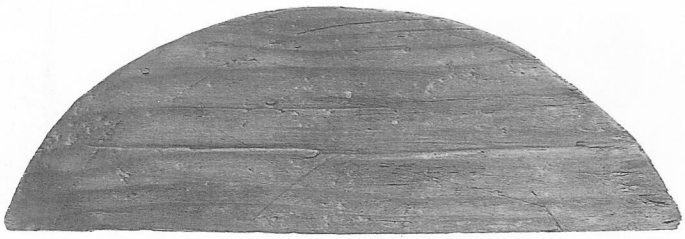


W032

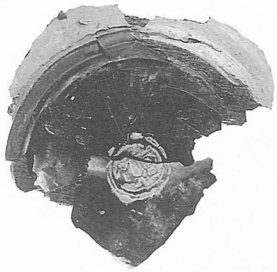


W031

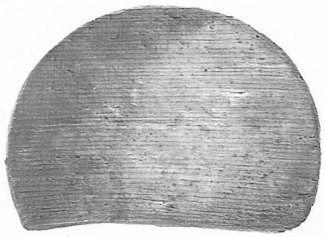
W033



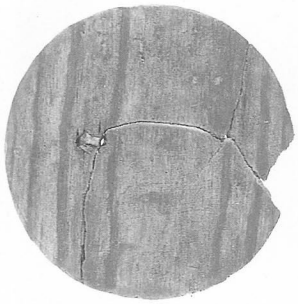
W038



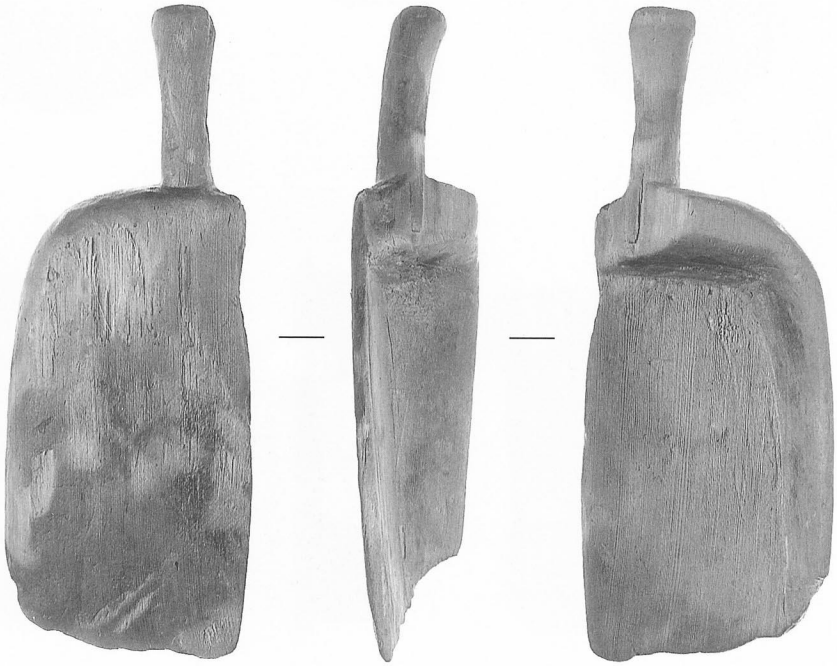
W035



W039

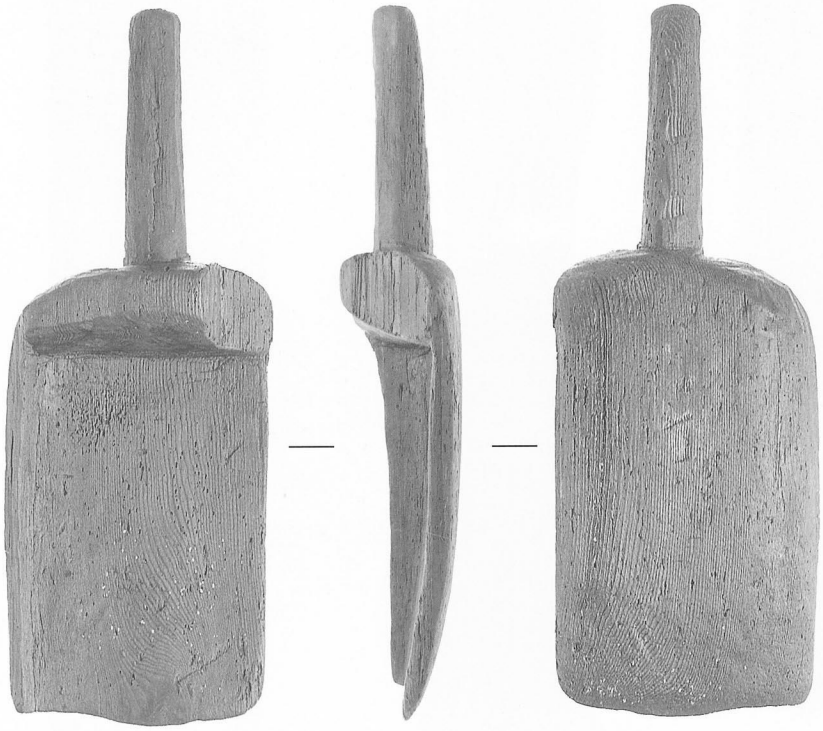


W041

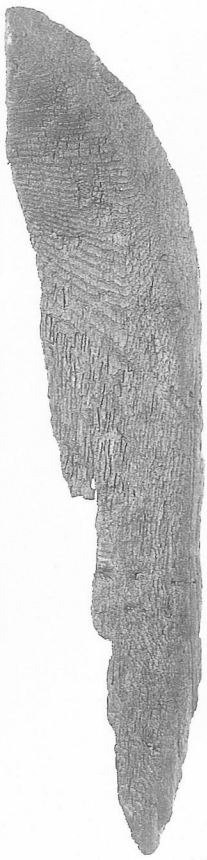


W043

A地区　包含層出土　木製品



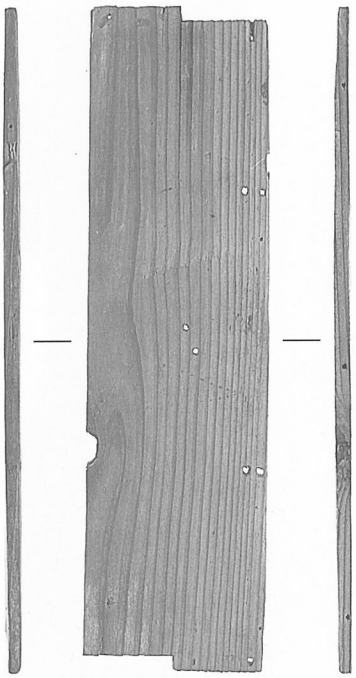
W044



W045

W046

W047



W049

W050

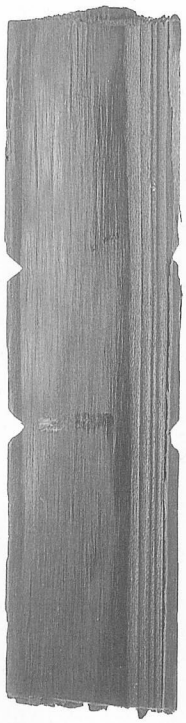
W051

W048

A地区　下層出土　木製品

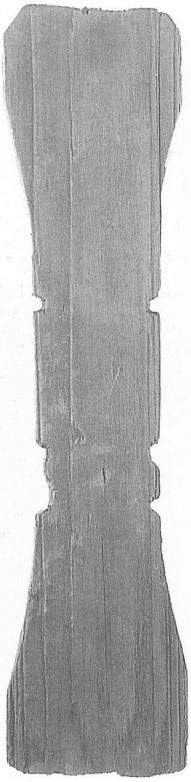
写真図版16

平成10年度

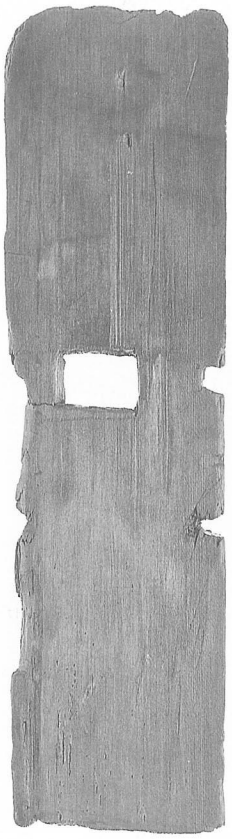


W052

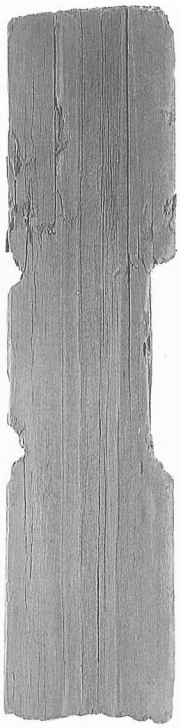
W053



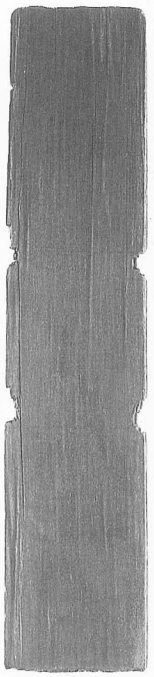
W054



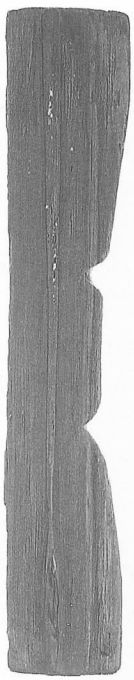
W055



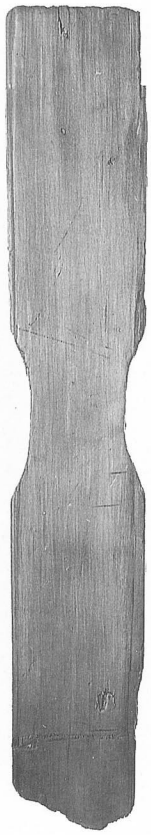
W056



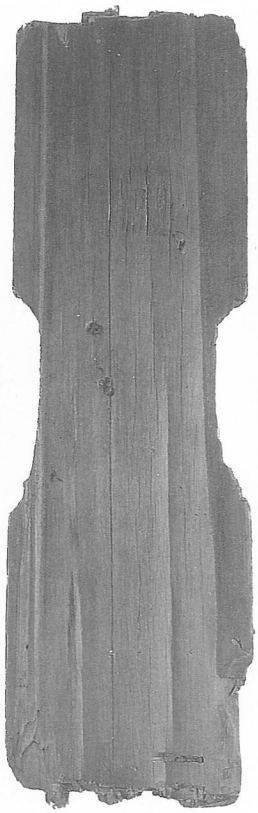
W057



W058

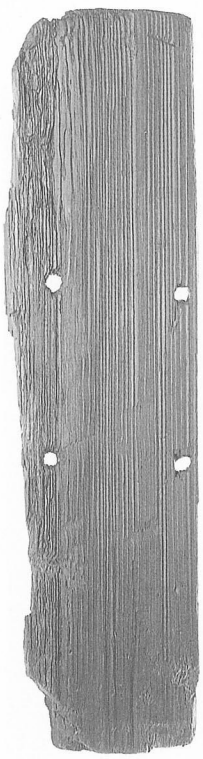


W061

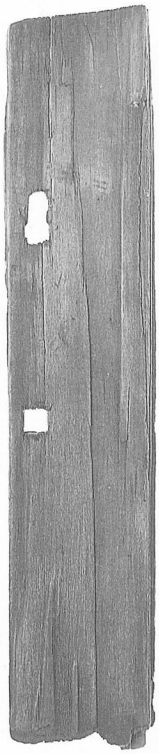


W062

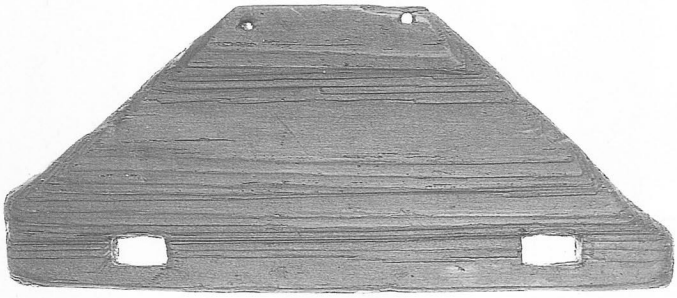
A地区　下層出土　木製品



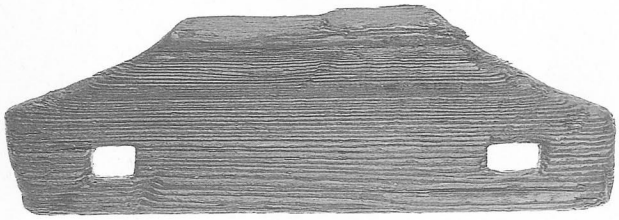
W063



W064



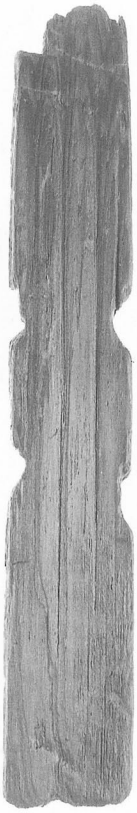
W065



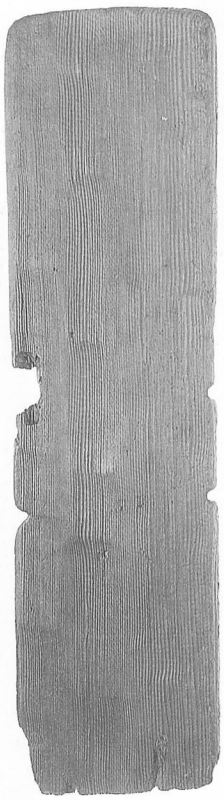
W066

W067

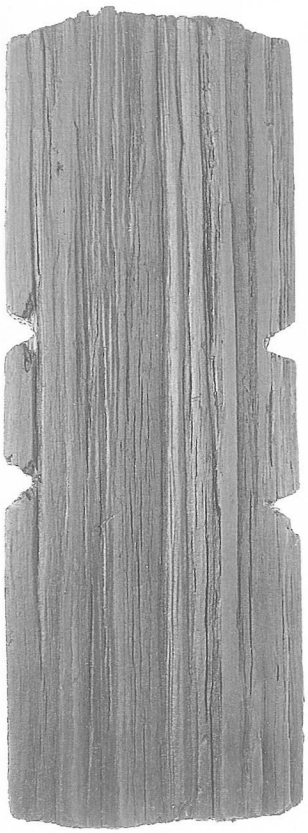
W068



W069



W070



W071

A地区　下層出土　木製品

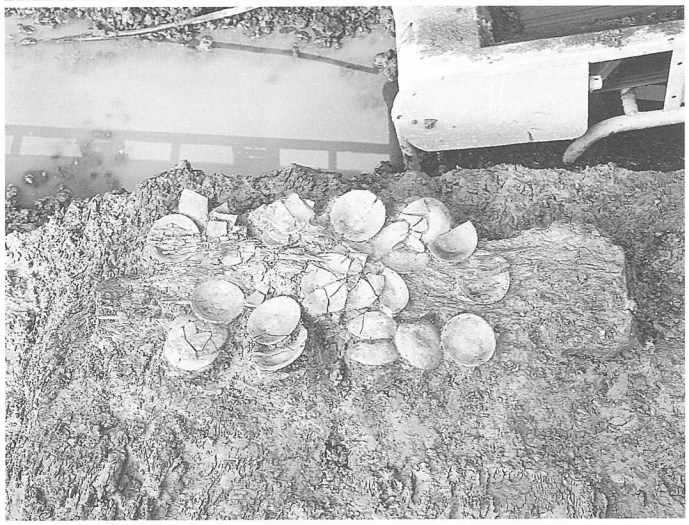
写真図版18

平成10年度

A地区　下層出土　木製品

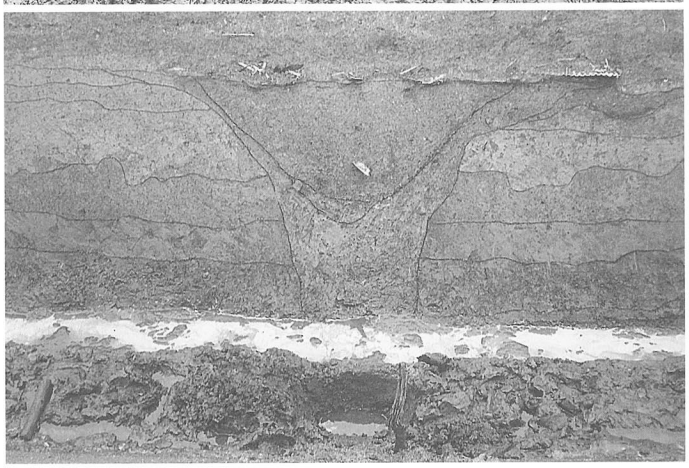
B地区　出土木製品

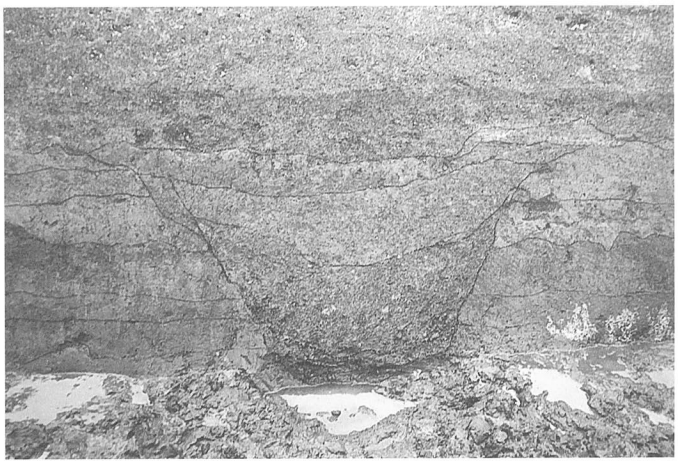
上段左　：Ａ地区　中世面全景（南から）
上段右上：Ａ地区　SD06,07,08（南西から）
上段右下：Ａ地区　SD07（西から）



左：Ａ地区　SX01検出状況（東から）

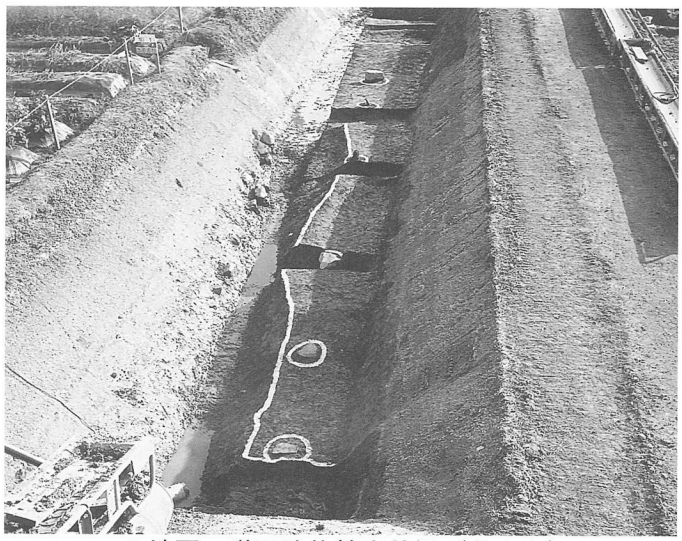
下段左：Ａ地区　SD07断面（東から）
下段右：Ａ地区　SD10断面（東から）





写真図版20

平成11年度



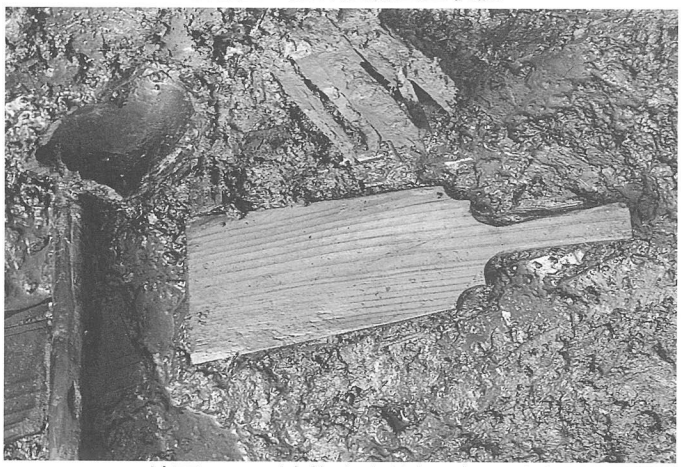
G地区　礎石建物検出状況（北から）

G地区　柱材断割状況①

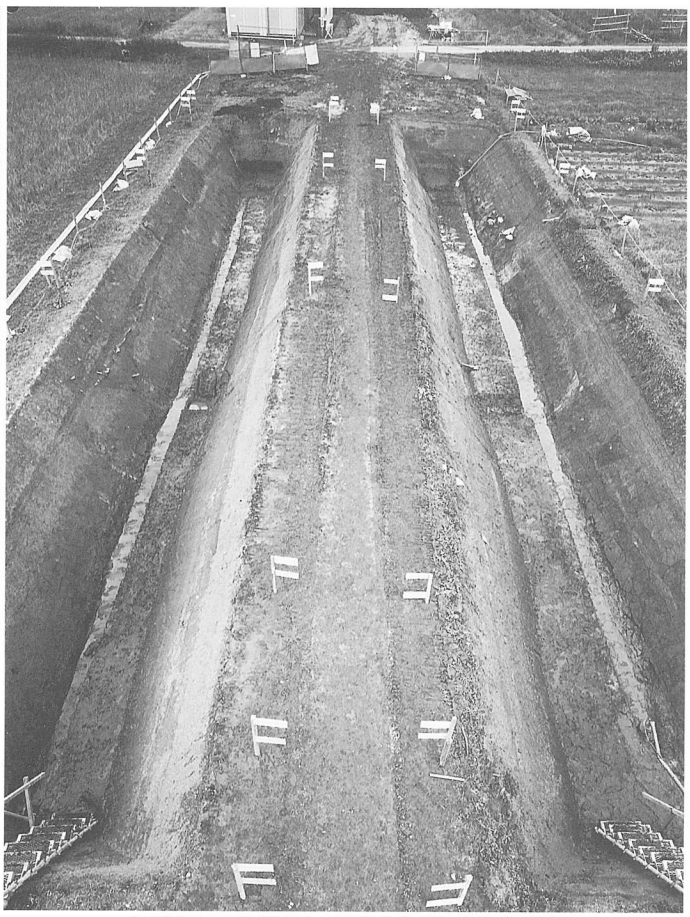
G地区　柱材断割状況②

G地区　中世面全景（南から）

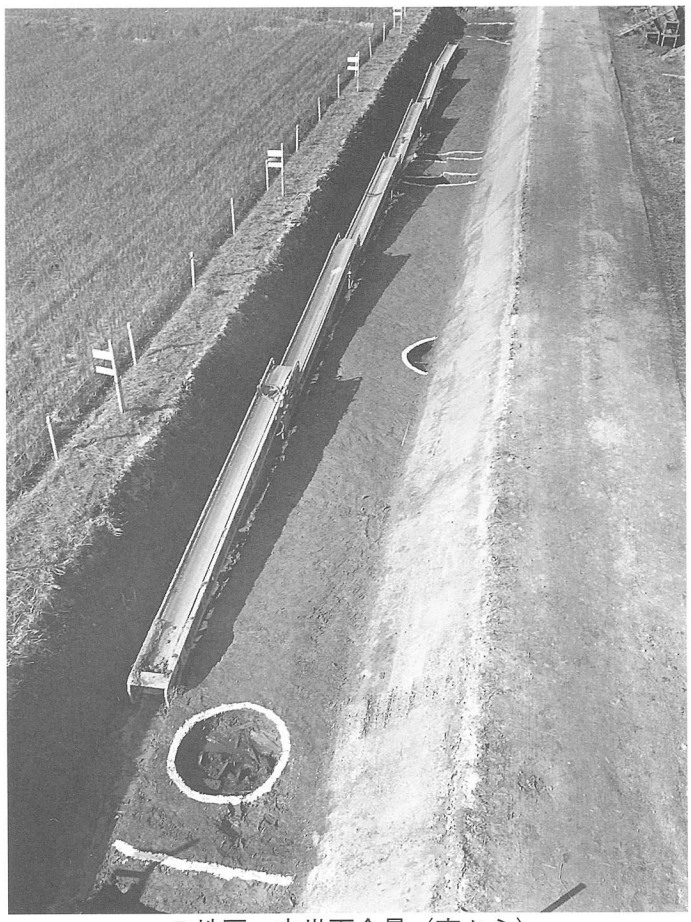
G地区　SD07遺物出土状況



G地区　SD07遺物出土状況（羽子板）



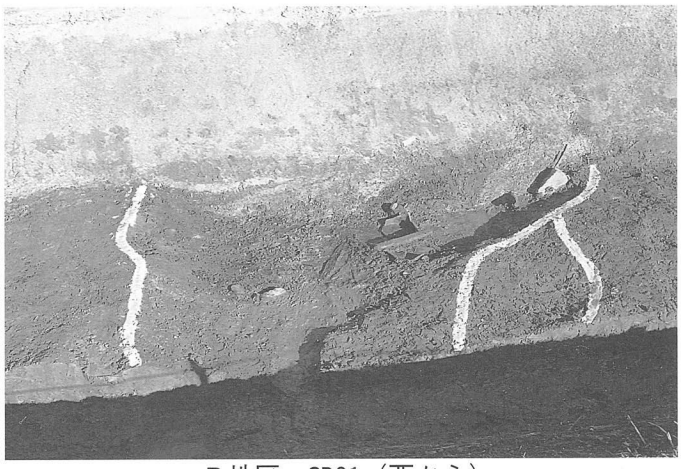
A地区、G地区　下層全景（南から）



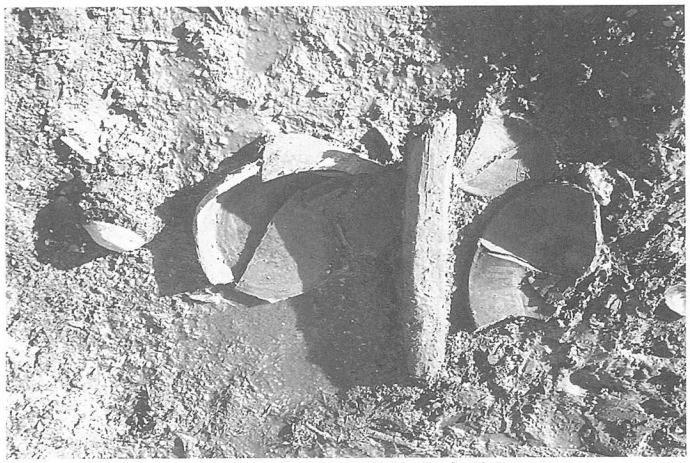
B地区　中世面全景（南から）

B地区　中世面全景（北から）

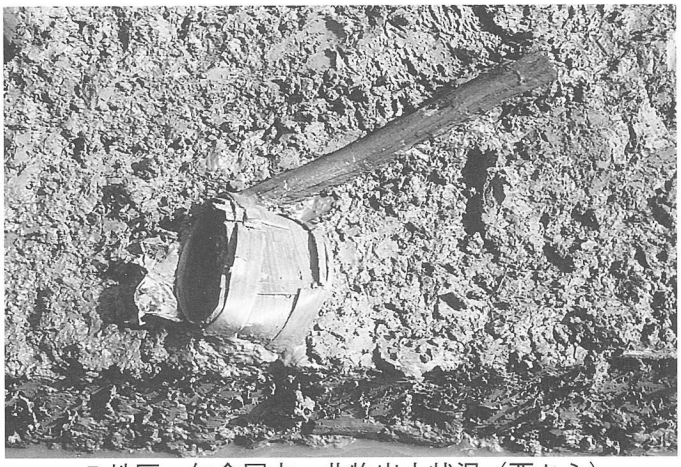
B地区　SK01遺物出土状況（西から）



B地区　SD01（西から）



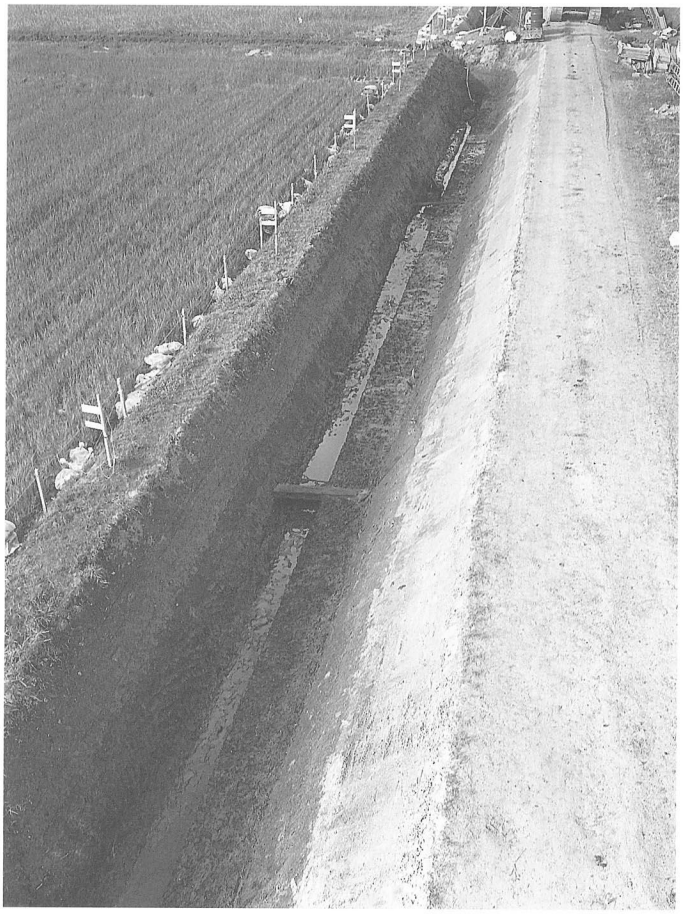
B地区　SD01遺物出土状況

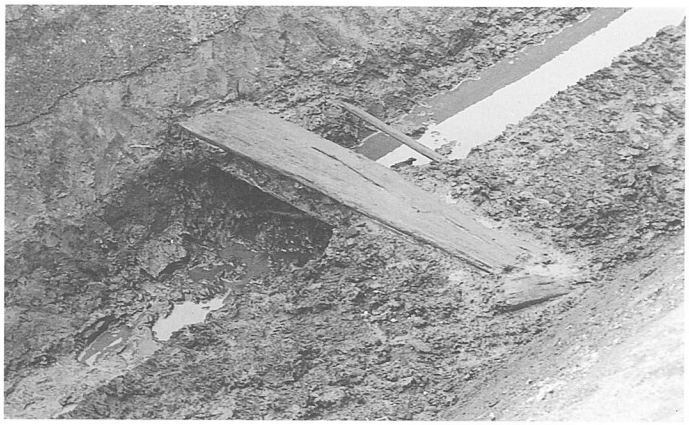


B地区　包含層中　曲物出土状況（西から）

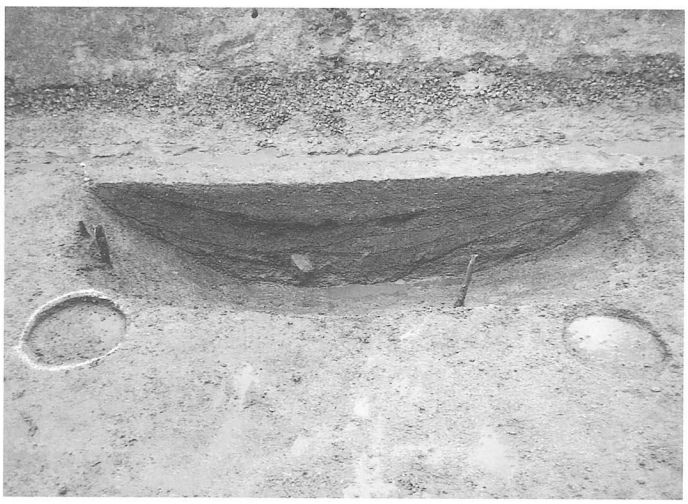
写真図版22

平成11年度

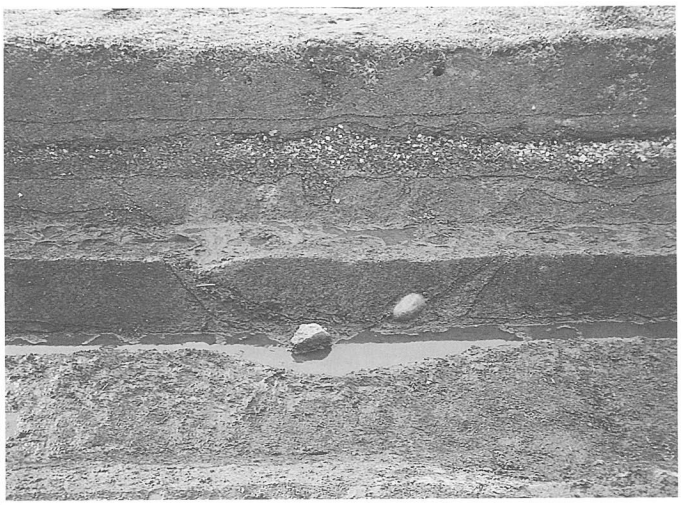




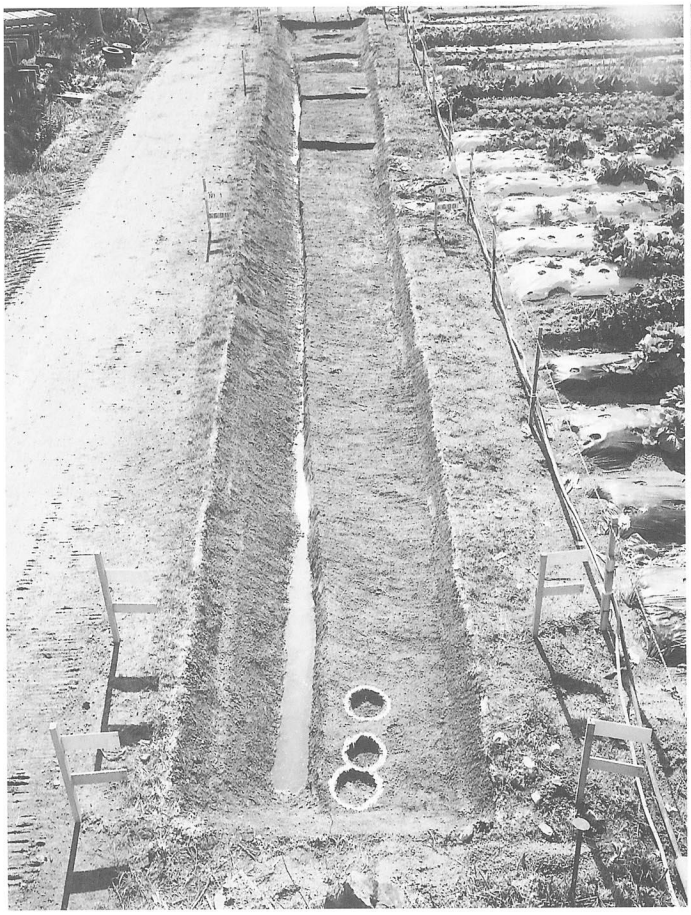
左：Ｂ地区　下層全景（南から）
上：Ｂ地区　板材検出状況（南東から）



左：Ｃ地区　中世面全景（南から）
上：Ｃ地区　SK08断面（東から）



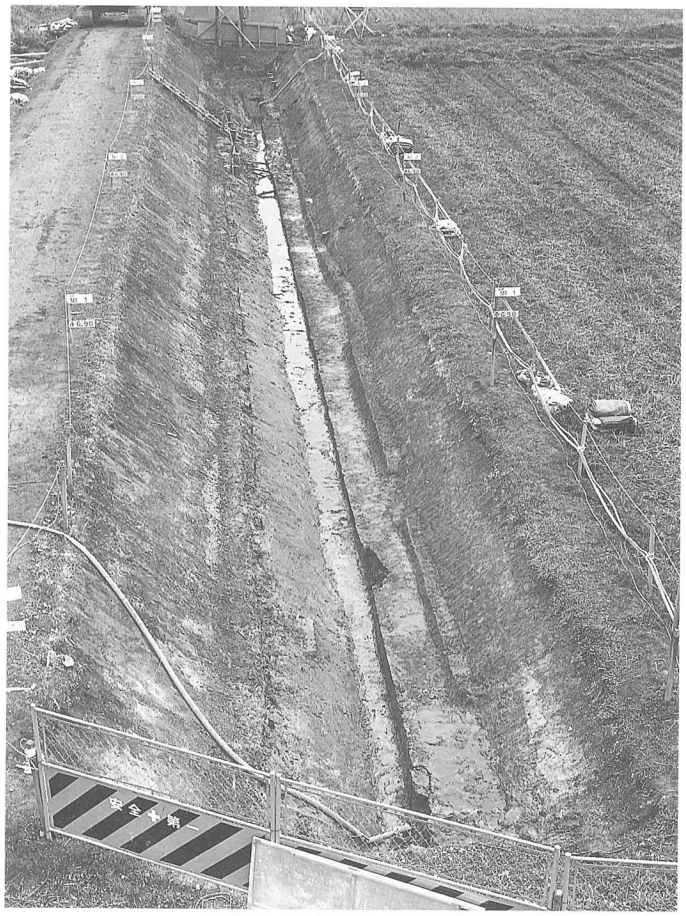
左：Ｃ地区　下層全景（南から）
上：Ｃ地区　SK08付近　壁面断面状況（東から）



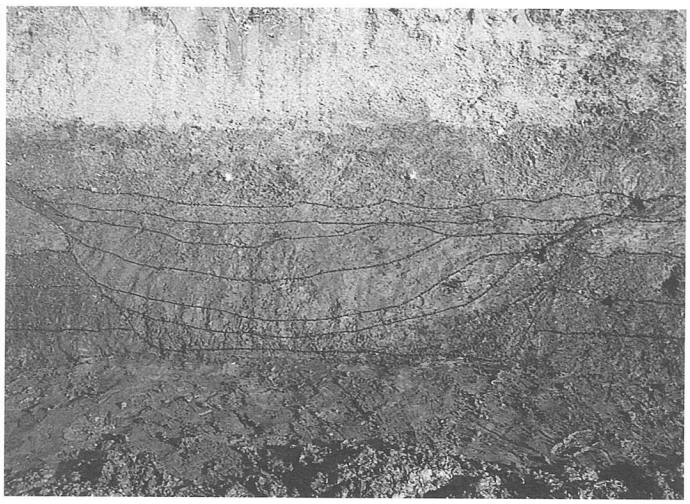
左：Ｄ地区　全景（北から）
上：Ｄ地区　南側断割断面状況（東から）

写真図版24

平成11年度



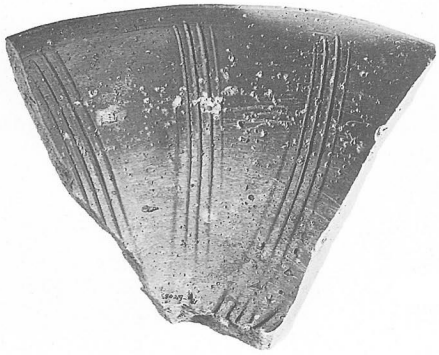
左：E地区全景（北から）

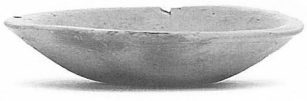


左：F地区全景（北から）
上：F地区　SK13断面（西から）

108

109


112


110

111

116

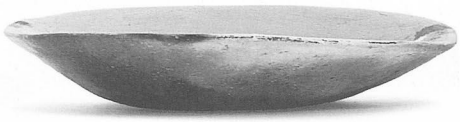
117

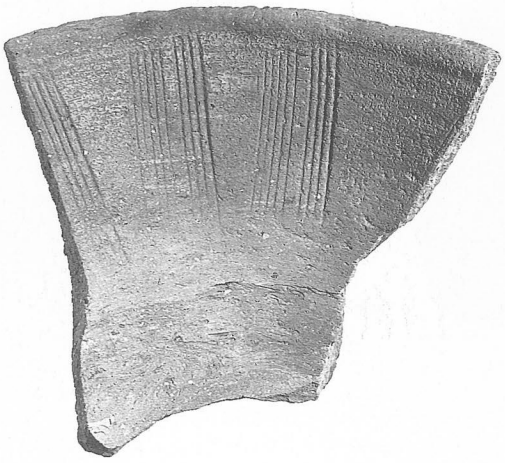
123

118

119

121


122



124

125

126

127

130

129

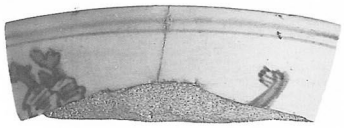
128

A，G地区出土　土器・陶磁器

平成11年度

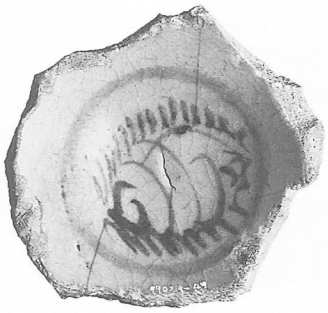
131

132

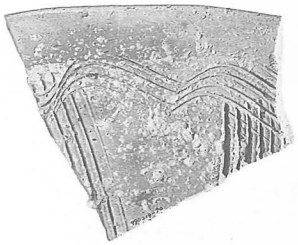


207

208

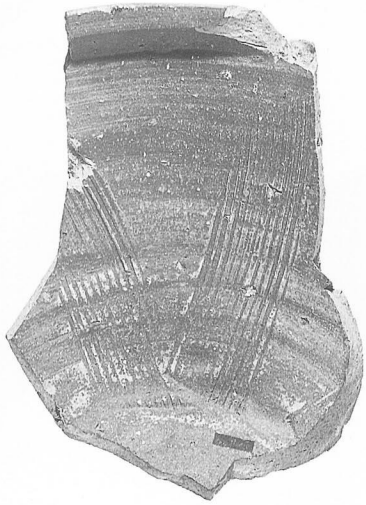


134



136

139



137

138

A，G地区出土　土器・陶磁器

140

141

142

143

144

145

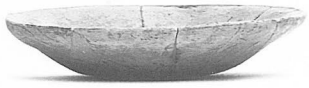
146

147

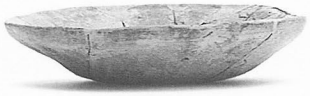
148

149

150


151

152


153

154

155

156

157

158

159

160

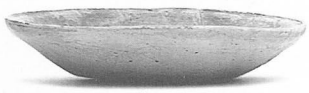
161

162

163

164

165


166

167

A地区　ＳＸ０１出土　土師器皿

168

168アップ

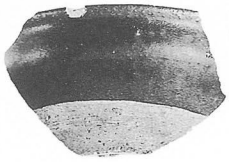
A地区　ＳＸ０１出土　石製品

169

170

171

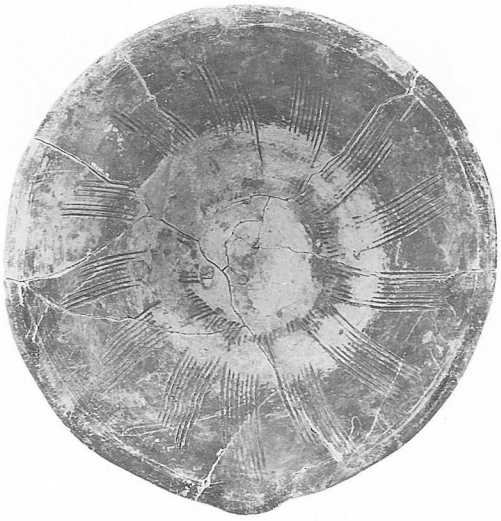
174



175

176

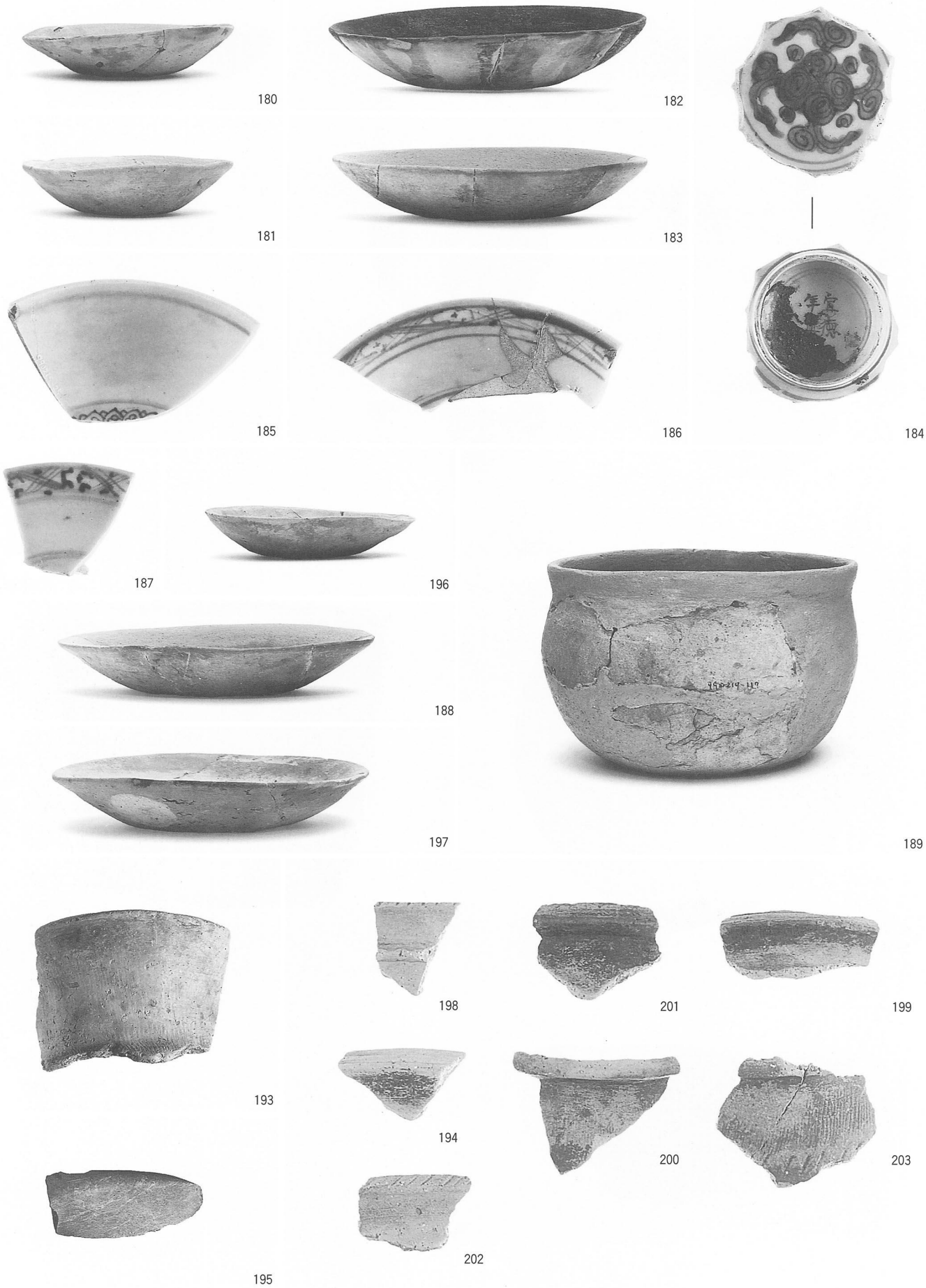
177



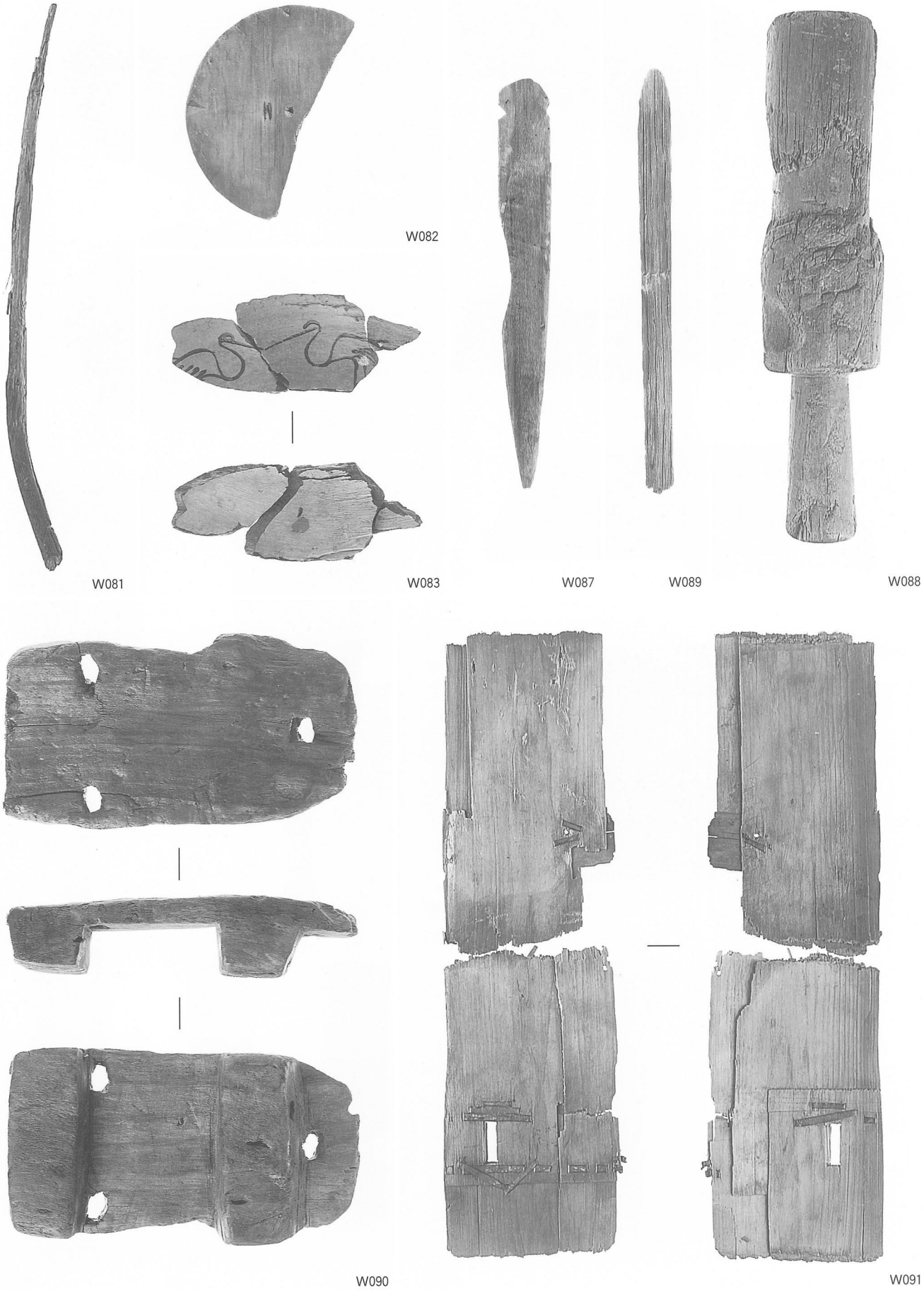
179

178

B地区出土　土器・陶磁器

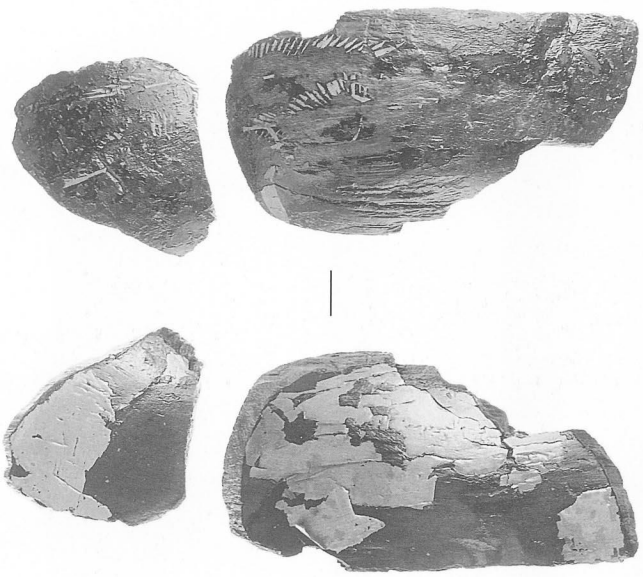


B，C，E，F地区出土　土器・陶磁器・石製品

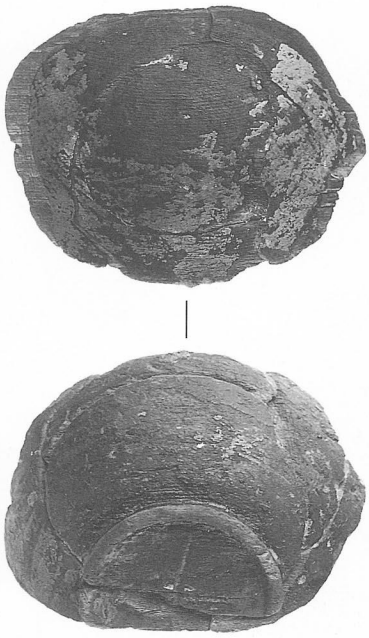


A，G地区出土　木製品

平成11年度

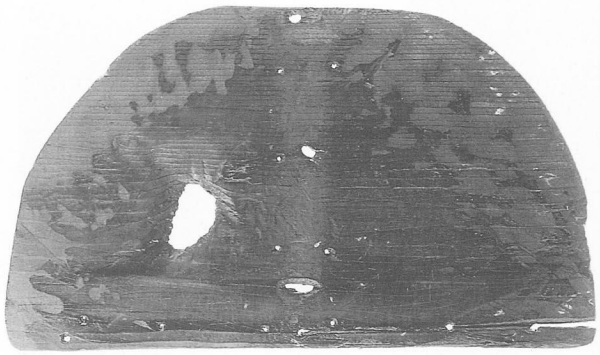


W092

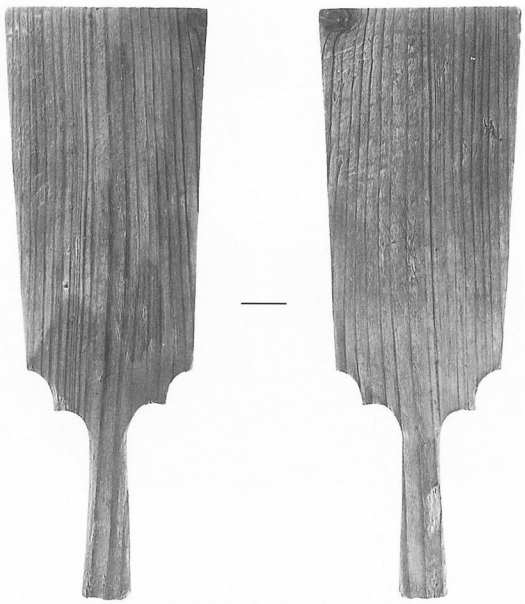


W095

W096

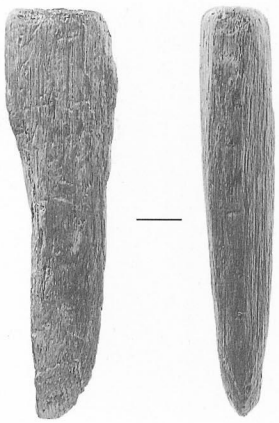


W097

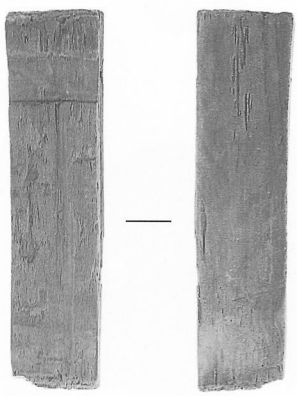


W098

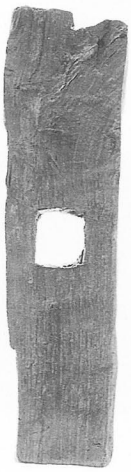
W099



W100



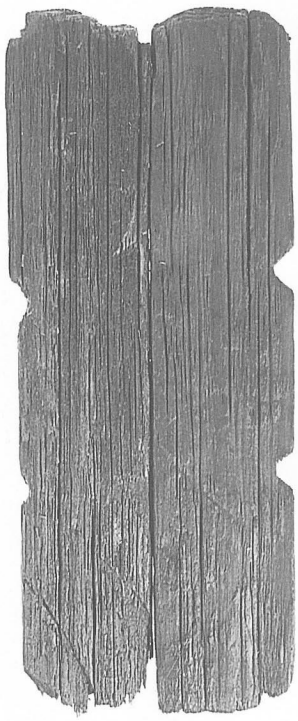
W101



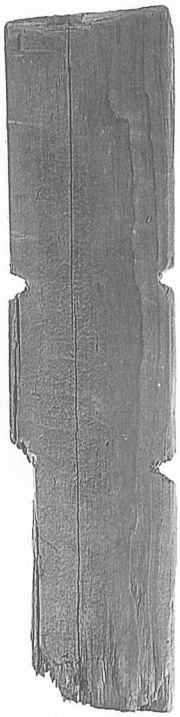
W102

A，G地区出土　木製品

W104



W106



W107

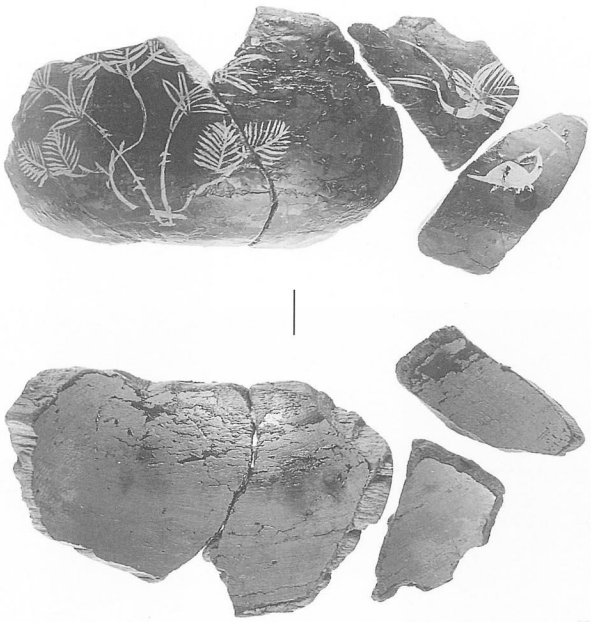
W105

W108

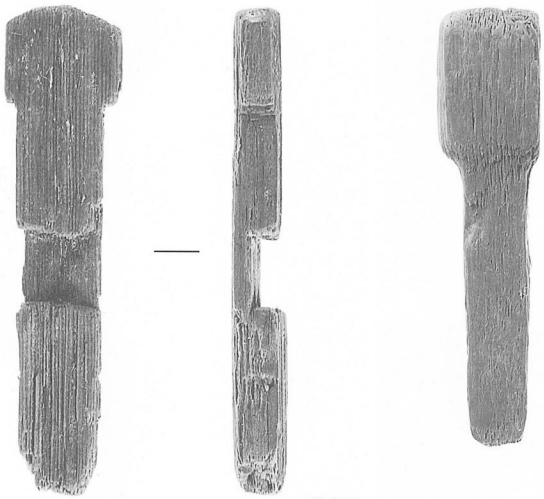
W109

A，G地区出土　木製品

平成11年度

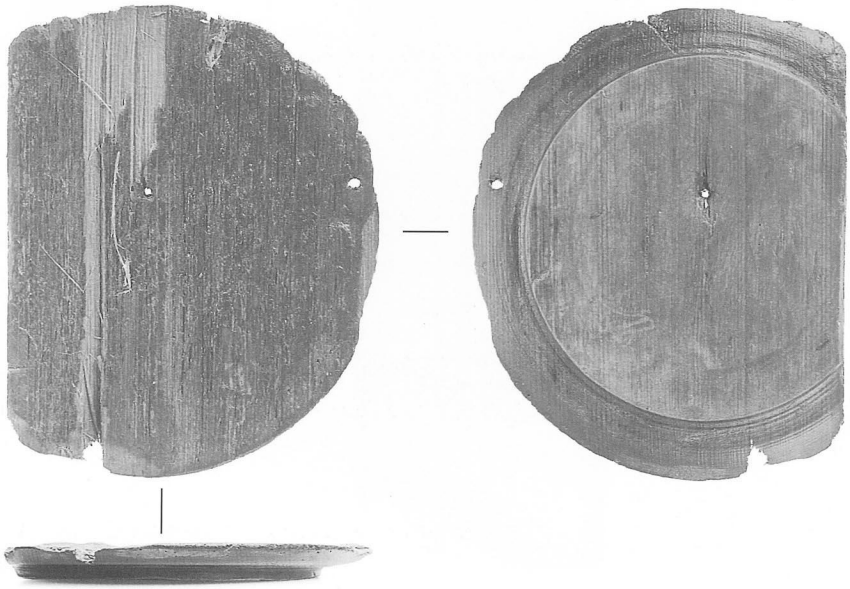


W110



W115　W116

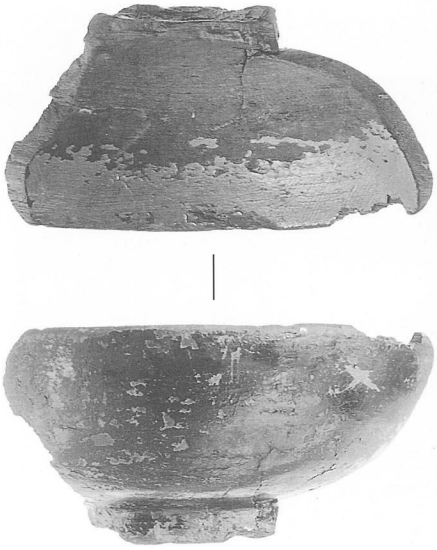
W112



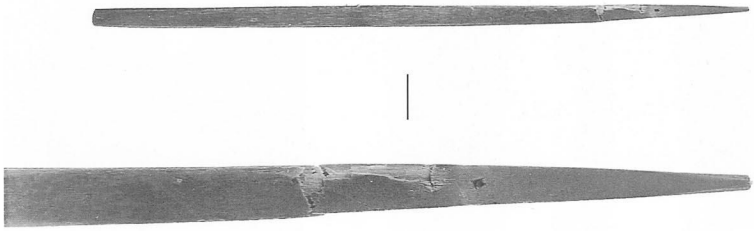
W118

W119

A，G地区出土　木製品

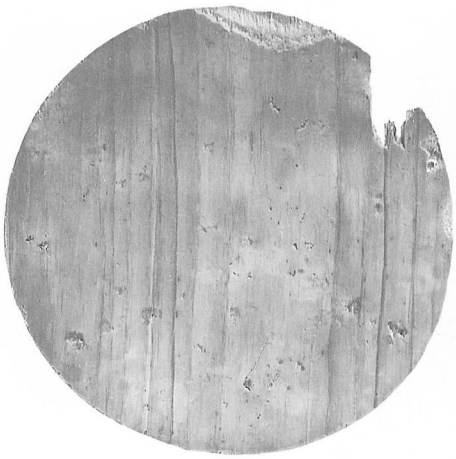


W133

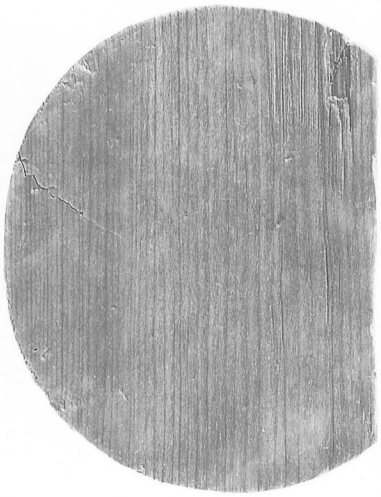


W131

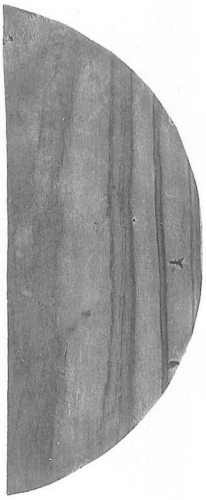
W132



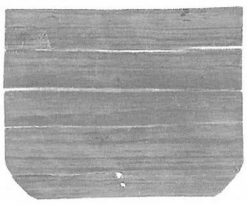
W135



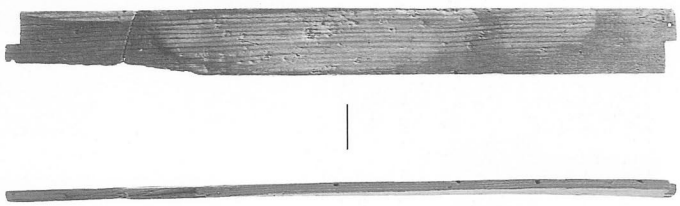
W136



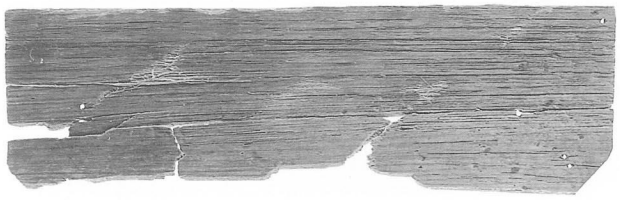
W137



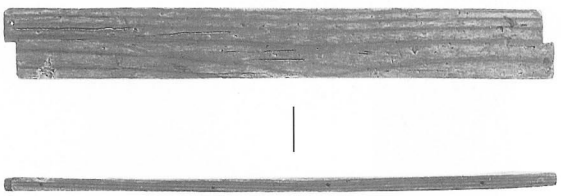
W138



W140



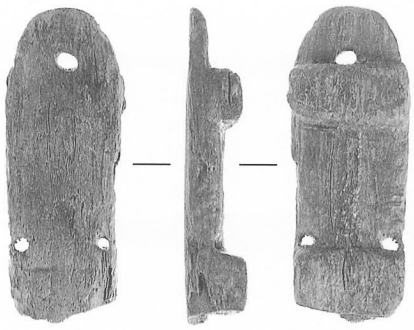
W139



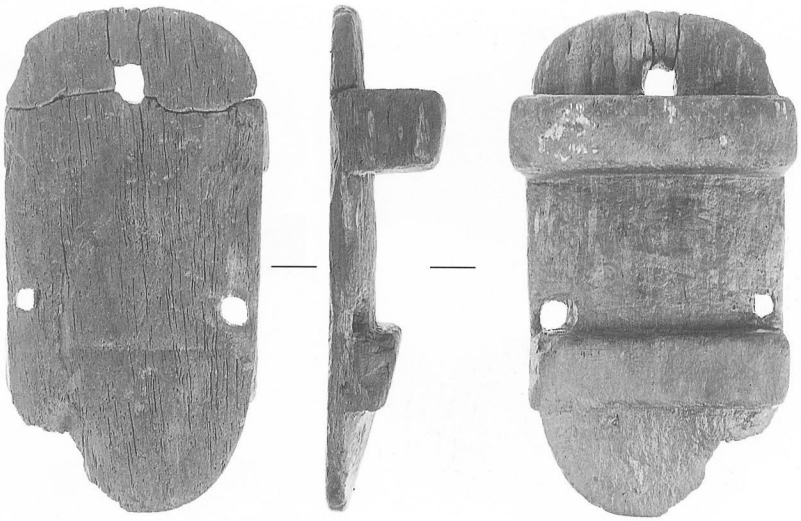
W141

B地区出土　木製品

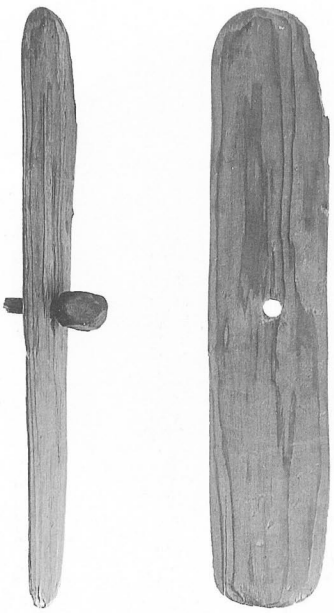
平成11年度



W142

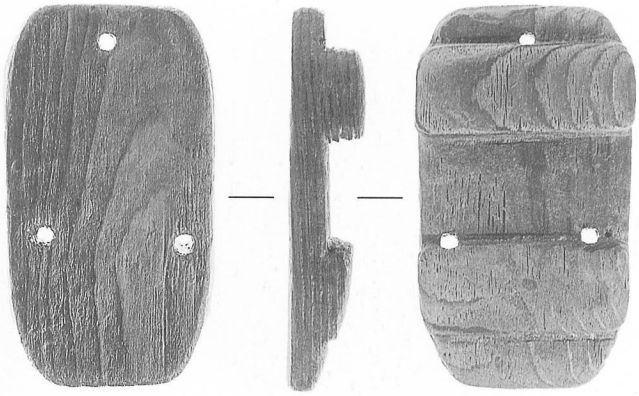


W143



W144 a・b　W144 a

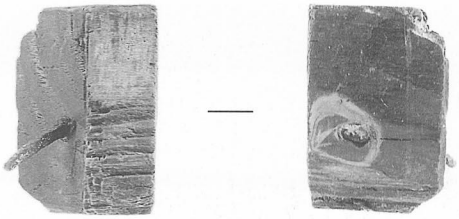
W145



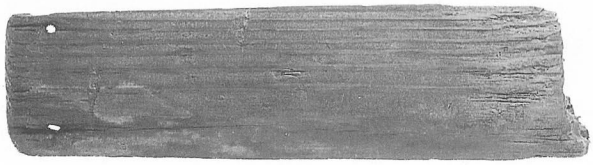
W149

W144 b

W150

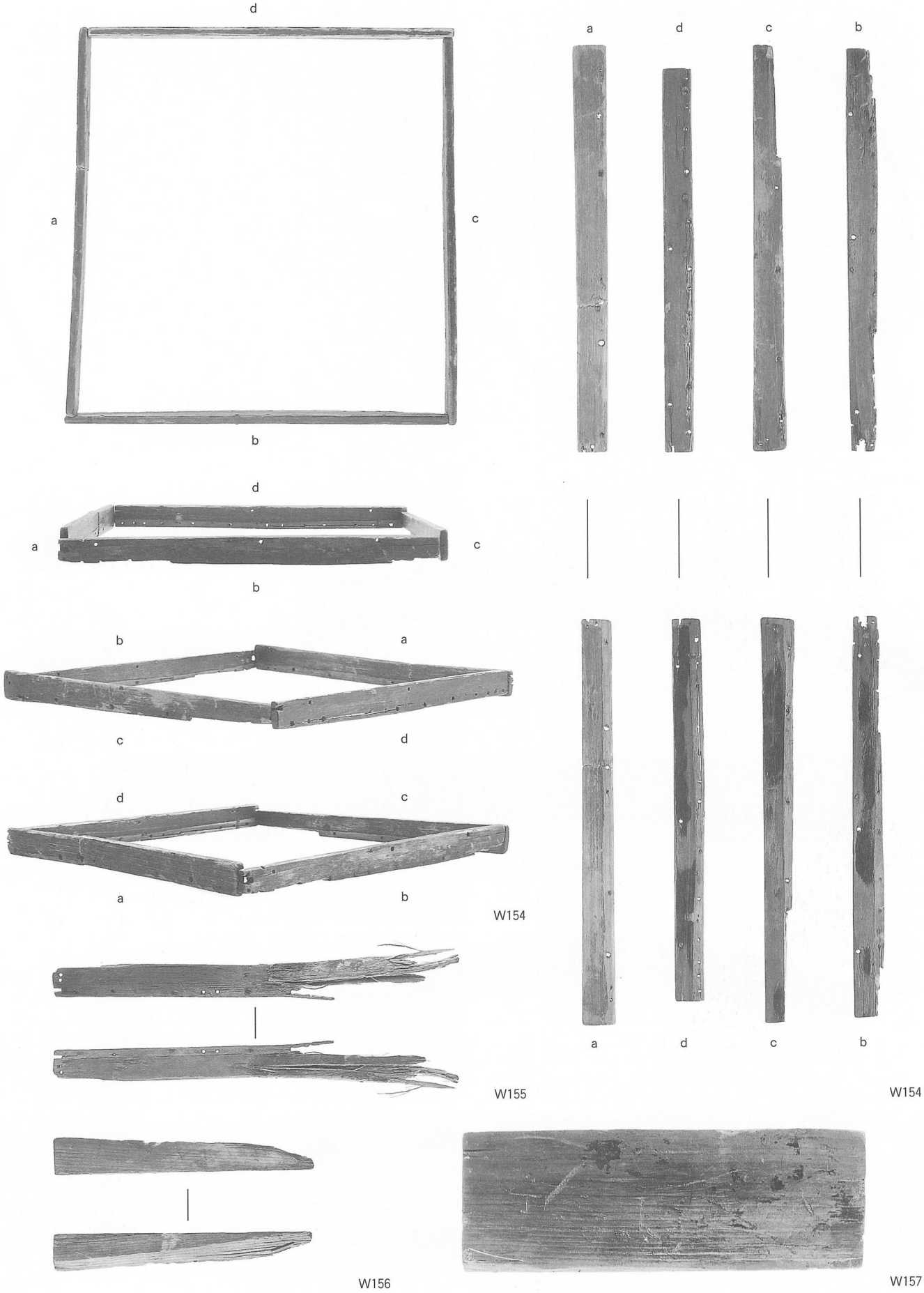


W146



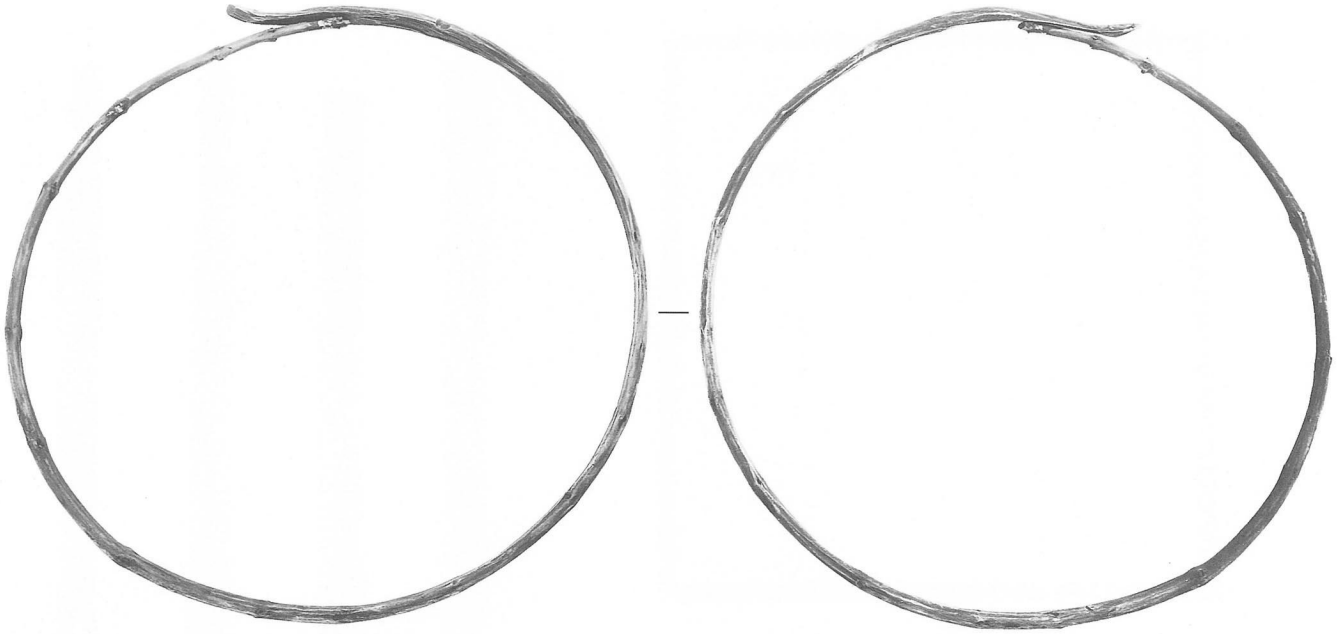
W152

B地区出土　木製品

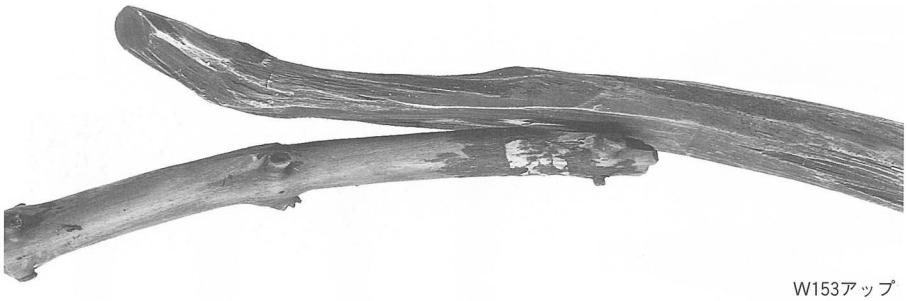


B地区出土　木製品

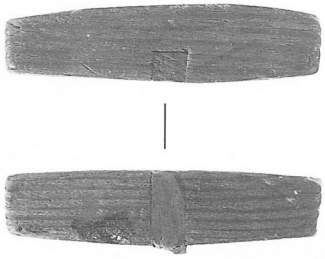
平成11年度



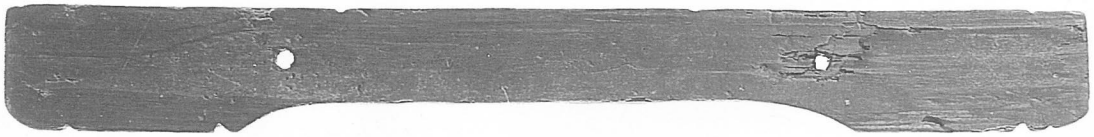
153



W153アップ

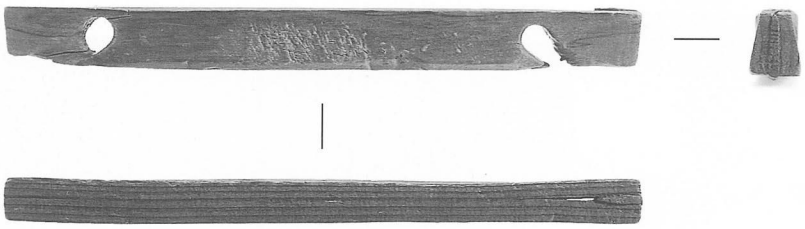


W161



W158

W159

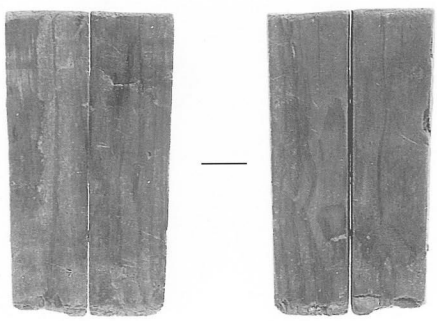


W160

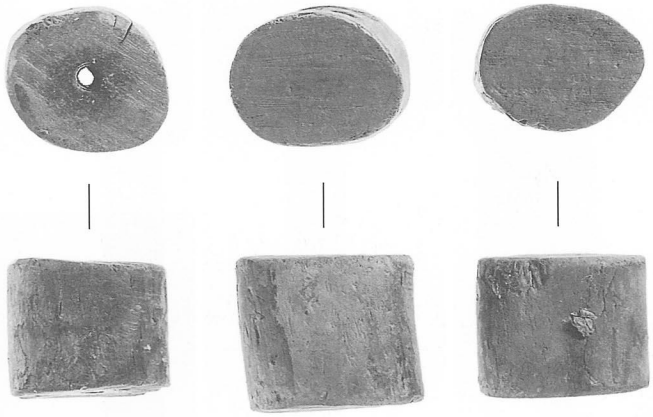
W166

B地区出土　木製品

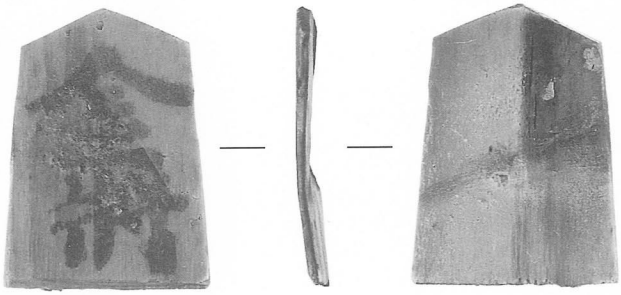
W169



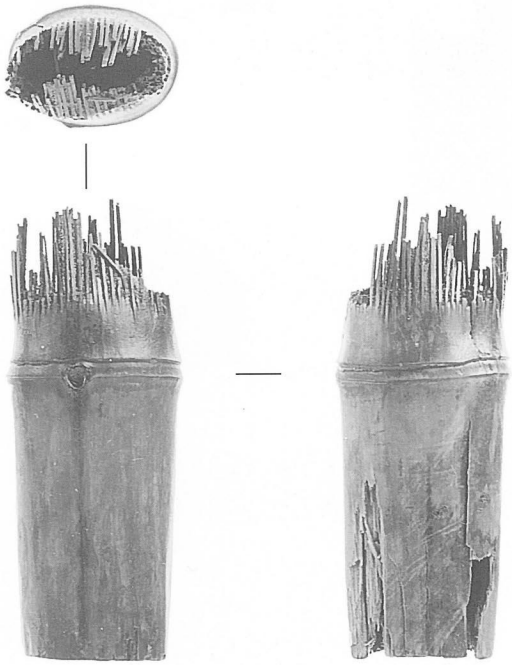
W173　W174



W175　W176　W177



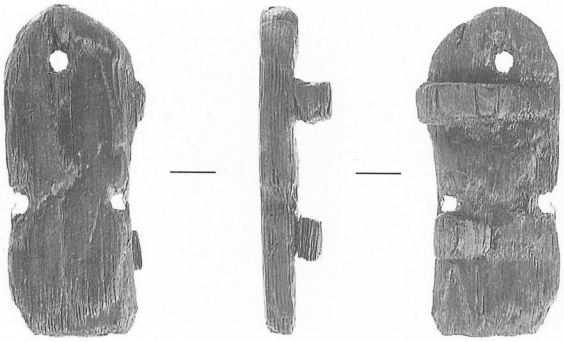
W179



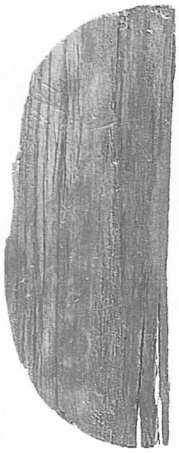
W178

B地区出土　木製品

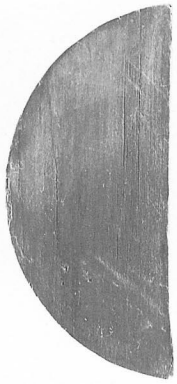
平成11年度



W180



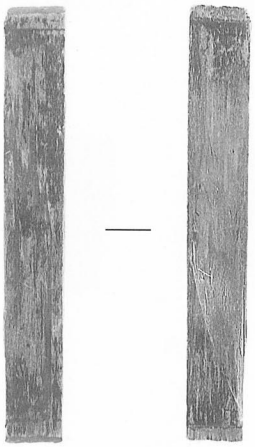
W181



W182

W184

W185



W186

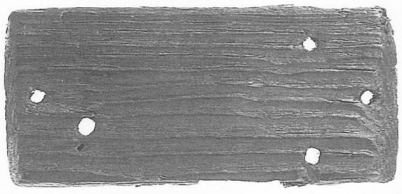
W188アップ

W187

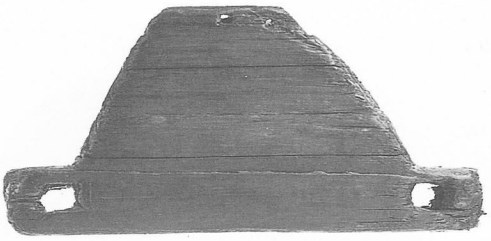
W188

B地区出土　木製品

W193



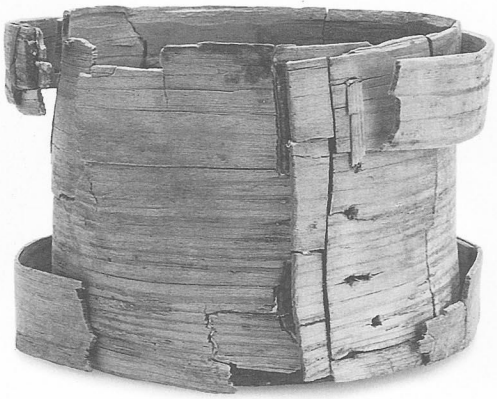
W191



W192

W190

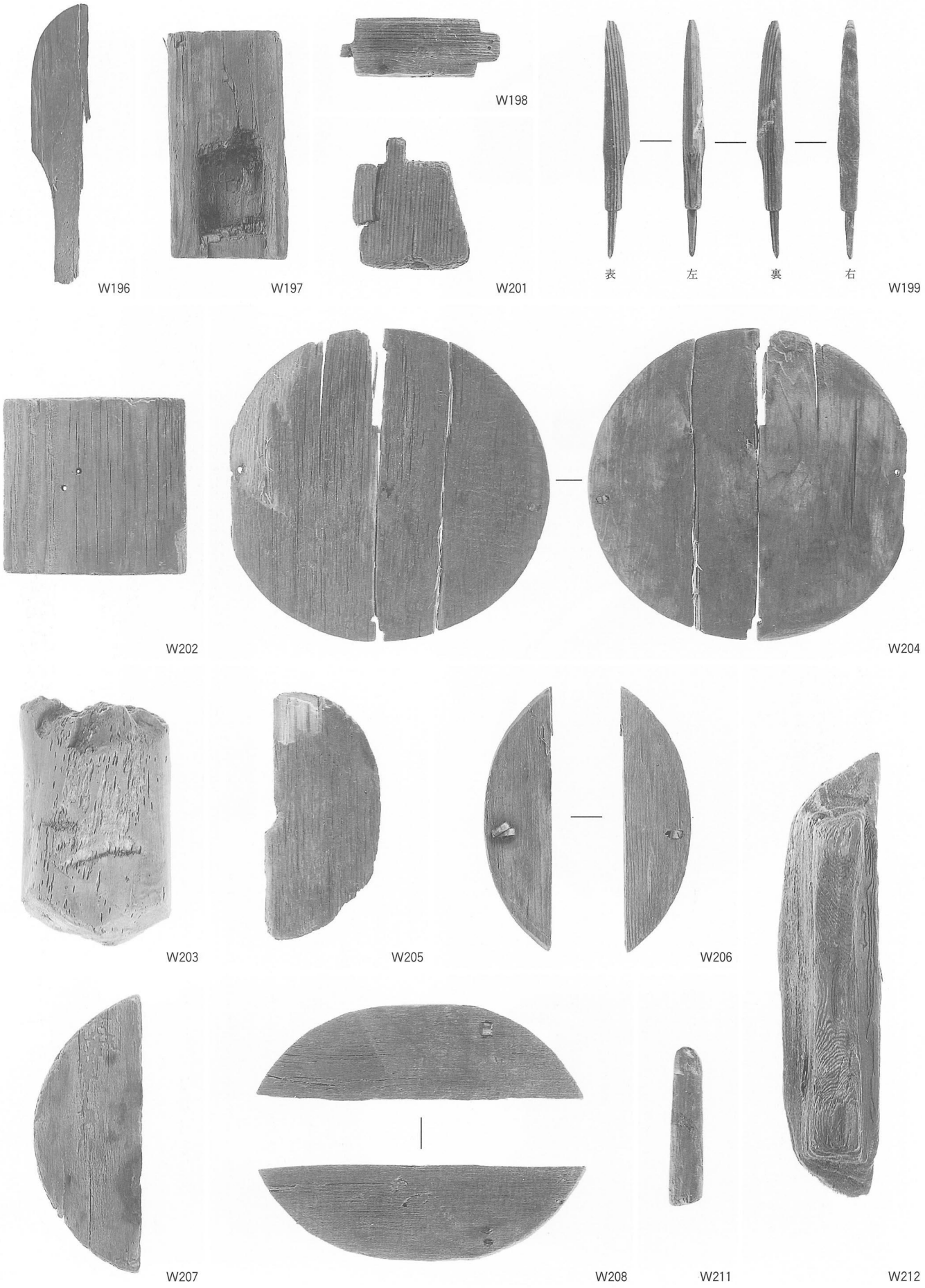
W194



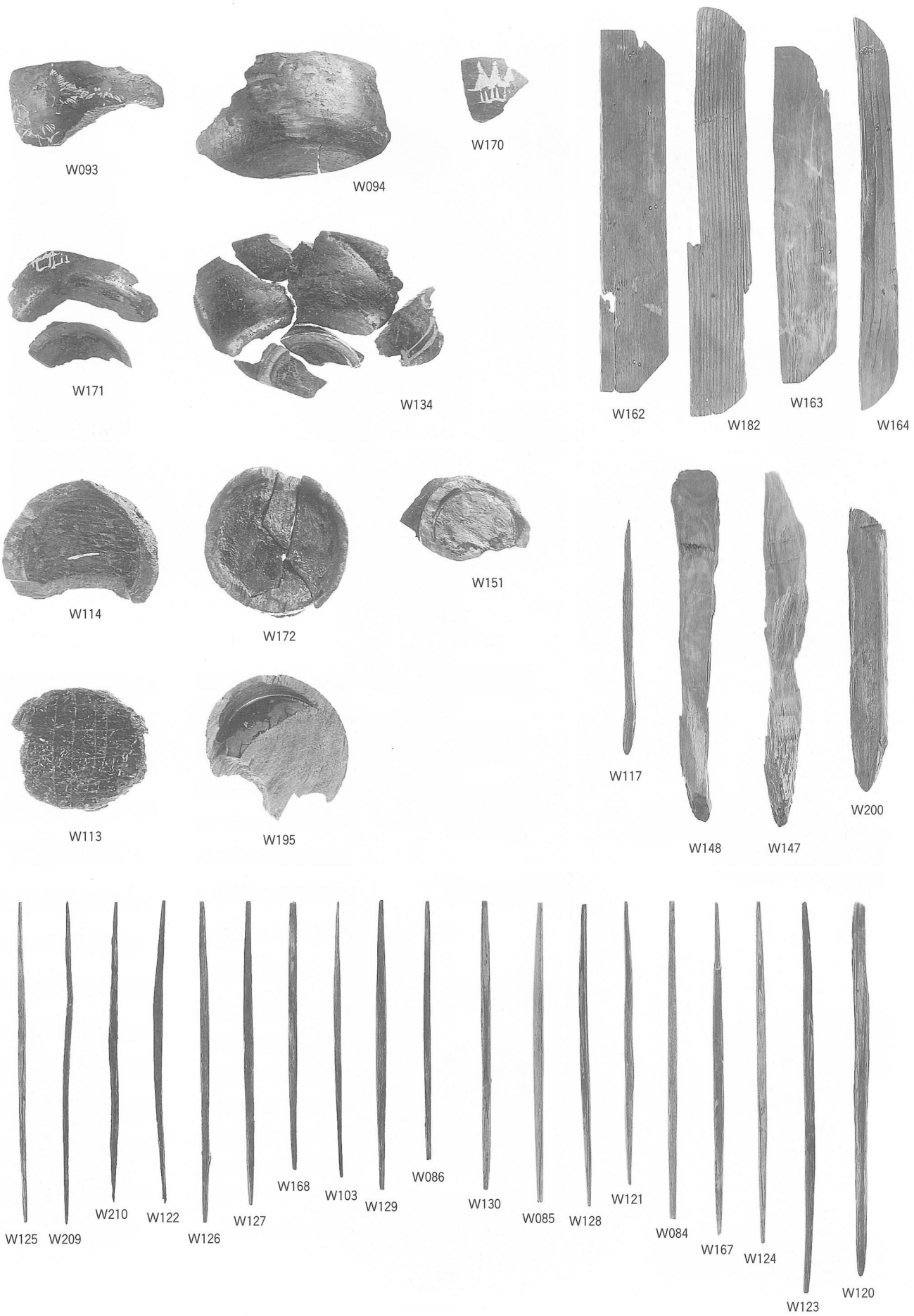
W189

A，B地区出土　木製品

平成11年度

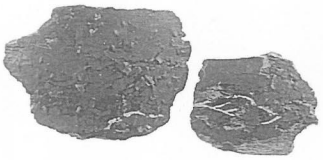


C，E，F地区出土　木製品



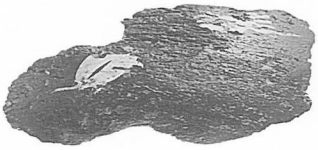
木製品（漆器椀、長方形曲物、付け木、箸）

平成11年度



W213

W214



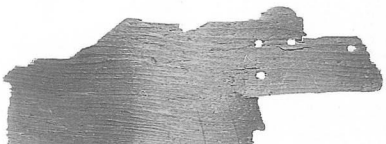
W215

W219

W216

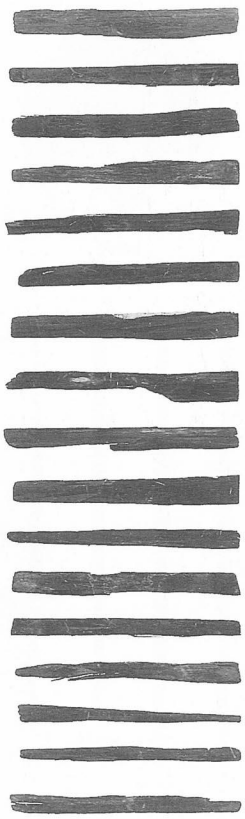
W217

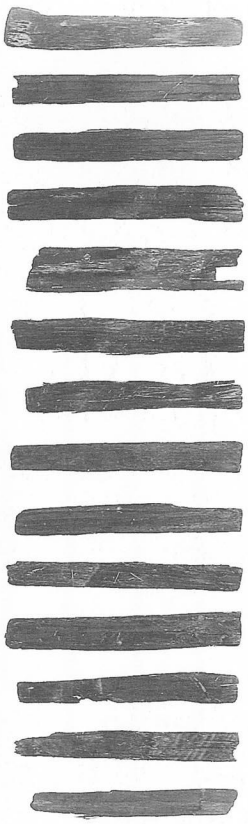
W218



W220外面

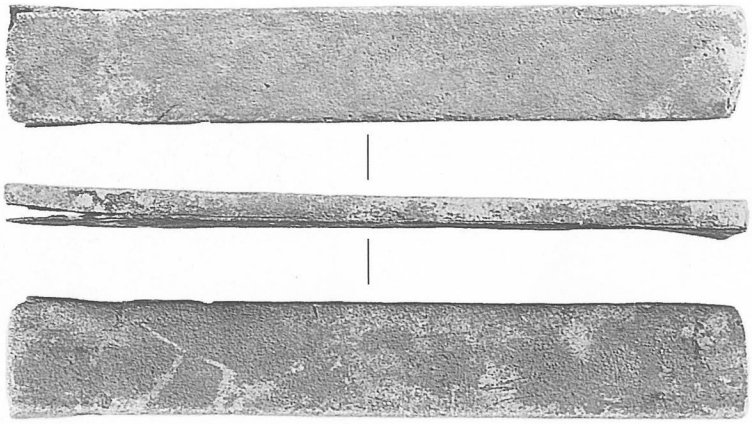
W220内面





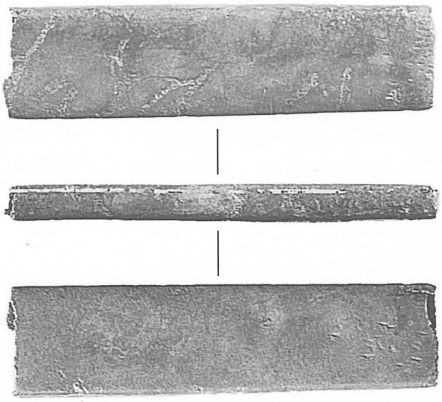
W221

木製品（漆器椀、竪杵、曲物　他）

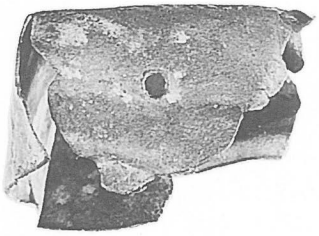


M001

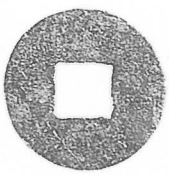
M003



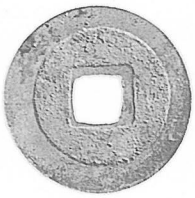
M002



M004



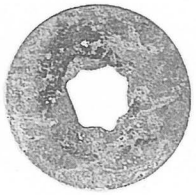
M006



M005

M007

M008



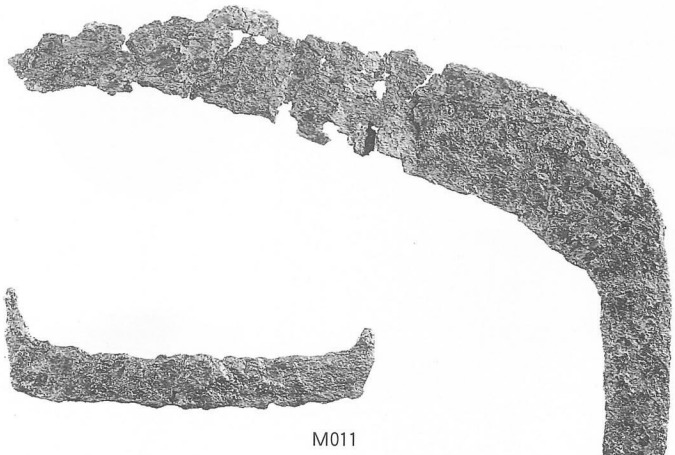
M009

M010

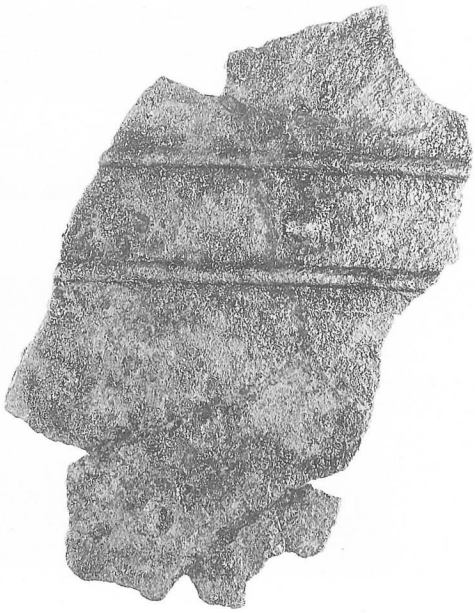
金属器

写真図版46

平成10，11年度



M011



M012

M013

M014

M015

M016

M017

M021

M020

M019

M018

金属器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやうちほりわきいせき
書　　名	宮内堀脇遺跡
副 書 名	(一) 町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻　　次	Ⅱ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第311冊
編 著 者 名	中川 渉、深江 英憲、鈴木 敬二、伊東 隆夫、北野 信彦
編 集 機 関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所 在 地	〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL 078-531-7011
発行年月日	西暦2007（平成19）年３月５日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
宮内堀脇遺跡（みやうちほりわきいせき）	兵庫県豊岡市（とよおかし）出石町（いずしちょう）宮内（みやうち）	28561	940274（確認調査）	35度29分0秒	134度29分0秒	1994/12/12～1994/12/14	176m²	一般県道町分久美浜線道路改良事業に伴う調査
			980165（全面調査）			1998/10/28～1999/03/02	1,104m²	
			990219（全面調査）			1999/10/06～1999/12/22	1,410m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮内堀脇遺跡	集　落	中　世	溝 整地層	土器、陶磁器、木製品 金属器、墨書石製品	但馬守護山名氏が築いた此隅山城城下の遺跡
	水田か？	古　代	溝	土器、木製品	

兵庫県文化財調査報告　第311冊

宮内堀脇遺跡発掘調査報告書Ⅱ

（一）町分久美浜線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007（平成19）年３月５日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
TEL 078－531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　交友印刷株式会社
〒650-0047　神戸市中央区港島南町５丁目４－５